2005年10月31日発行　第10巻第1号　通巻10号　2005年1月7日 学術刊行物 第4種郵便物 認可

日本動物看護学会 会誌

Animal Nursing（アニマル・ナーシング）

Vol.10 No.1（第10巻 第1号）

2005 10 Oct.

動物看護師による多彩な研究報告
小動物看護に関する問題提起
「人と動物の関係学」に関する最新の知見

《意見・提言》
①わが国における獣医療史と動物看護の萌芽
②動物看護師（士）公認化へ向けて

《開催報告》
■特集／誌上再録■
第19回 例会　動物看護師によるティーチ・イン
――私たちの手で育む、これからの動物看護学
第14回 大会・第20回 例会　盛況のうちに終了

《投稿論文》
動物看護〈臨床〉
帝王切開におけるVTの役割
術前準備における動物看護マニュアルの事故防止に対する効果
動物看護〈飼主指導〉
オーナー向けセミナー開催後の効果と実績
動物看護〈スタッフ教育〉
地方都市における動物看護師勉強会の立ち上げと今後の方向性

《海外学会報告》
大切なのは、どこで学ぶかではなく、自分が何を学びとれるか
米国の動物看護師のハイレベルな技術
海外で気付かされた、わが国独自の動物看護の可能性

《特別寄稿》
「第10回 人と動物の絆に関する国際会議」に参加して

動物看護専門学校生による発表

《動物看護師のための特別プログラム》
重要ポイント総整理――院内感染を考える

《連載》
動物福祉はなぜ必要か－動物福祉の理論と実践－
〈人と動物の関係――実験動物、伴侶動物〉　ほか

日本動物看護学会

ライフケア・サポーター

―小動物のいのちを、その成長とともに見守る―

大日本住友製薬の小動物用製品

■疾病の食事管理に……
Hill's PRESCRIPTION DIET®

■健康維持の食事管理に……
Hill's SCIENCE DIET®

■犬用非ステロイド系消炎鎮痛剤
リマダイル®錠/チュアブル
〔動物用医薬品〕劇 要指示

■犬用非ステロイド系消炎鎮痛剤
リマダイル®注射液
〔動物用医薬品〕劇 要指示

■フィラリア予防のスポットタイプ+ノミ駆除
アドバンテージ ハート
〔動物用医薬品〕要指示

■3種混合生ワクチン
犬用ビルバゲン®DA2 Parvo
〔動物用医薬品〕劇 要指示

■3種混合生ワクチン
猫用ビルバゲン®CRP
〔動物用医薬品〕劇 要指示

■遺伝子組換え型 猫白血病ワクチン
リュウコゲン®
〔動物用医薬品〕劇 要指示

■個体識別電子IDチップ
LIFECHIP **ライフチップ®™**

■犬・猫用ニューキノロン製剤
VICTAS'S **ビクタズ®S注射液5%**
〔動物用医薬品〕要指示

■犬・猫用ニューキノロン製剤
VICTAS'S **ビクタズ®S錠10mg・40mg**
〔動物用医薬品〕要指示

■犬・猫用ニューキノロン外耳炎・皮膚感染症治療剤
VICTAS'S **ビクタズ®S MTクリーム**
〔動物用医薬品〕要指示

■犬用慢性心不全改善剤
アピナック®錠12.5mg/25mg
〔動物用医薬品〕要指示

■動物用吸入麻酔剤
イソフル®
〔動物用医薬品〕劇 要指示

■非ステロイド性抗炎症点眼剤
ティアローズ®
〔動物用医薬品〕

■犬老年性初発白内障進行防止剤
ライトクリーン®
〔動物用医薬品〕

■犬・猫角膜障害治療剤
パピテイン®
〔動物用医薬品〕

■犬真菌性外耳炎治療剤
ミミィーナ®
〔動物用医薬品〕

■犬細菌性結膜炎、角膜炎、眼瞼炎、麦粒腫治療剤
ロメワン®
〔動物用医薬品〕要指示

DAINIPPON SUMITOMO PHARMA

大日本住友製薬株式会社 アニマルサイエンス部
〒553-0001 大阪市福島区海老江1-5-51 TEL 06-6454-8823
〈人と動物の素敵な関係〉http://www.ds-pharma.co.jp/animal/

第５回「動物看護師資格認定試験」のお知らせ（主催：日本動物看護学会）

日本動物看護学会では、動物看護学進展のための研究活動と並行して、「動物看護教育の向上」ならびに「動物看護師の社会的地位の確立（公的資格化）」をめざして、2003年より当試験を実施しています。これまでの計４回で、合格者すなわち当学会による「動物看護師」資格認定者は計618名となりました。第５回の実施概要が決まりましたのでお知らせいたします。

受験対象者

受験資格１、受験資格２に該当する者
（下記の「動物看護師資格認定試験 要項」を参照）

会場

札幌　酪農学園大学　北海道江別市文京台緑町582番地
仙台　仙台市シルバーセンター　仙台市青葉区花京院１－３－２
東京　日本獣医畜産大学　東京都武蔵野市境南町１－７－１
大阪　天満研修センター　大阪府大阪市北区錦町２-21
福岡　福岡朝日ビル　福岡市博多区博多駅前２－１－１
※試験会場への交通手段、所用時間等はあらかじめ各自で確認をしてください（願書の募集要項に交通案内は掲載予定）。

試験日

2006年３月12日（日）
受験願書請求　2005年12月12日（月）～
受験願書受付　2006年１月16日（月）～２月28日（火）必着厳守
合格発表　３月30日（木）（予定）

試験時間割（予定）

筆記試験Ⅰ　10時30分～11時50分　（休憩　11時50分～13時00分）
筆記試験Ⅱ　13時00分～14時20分　（休憩　14時20分～15時00分）
実地試験　15時00分～16時00分
※全国５会場同時進行
※受験される方は、願書に同封された試験実施要項にて試験時間などご確認の上、時間厳守にて試験会場にお入りください。

【動物看護師資格認定試験 要項】

資格認定

本会が認定する動物看護師資格は、本会が定める資格認定試験に合格し、所定の手続きを済ませた者に与えるものとする。

受験資格１　新卒者（2006年３月に卒業見込みおよび大学４年次へ進級予定の者を含む）もしくは現職者（既卒者）対象

①文部科学省の定める高等学校を卒業し（または同等以上の学力があると認められ）、動物看護専門教育機関において、２年以上の専門教育課程を修了した者（修了見込の者）。
②その他、①に相当すると日本動物看護学会が認める者。

受験資格２　移行措置のための受験資格

動物看護に関わる実務期間（就業年数）を４年間以上有する者。なお、ここでいう「実務期間4年間」とは、以下の①～④のいずれかであればよい。

①動物看護専門教育期間を卒業していない場合は、実務経験４年間以上。
②動物看護専門教育機関１年制を卒業した場合は、実務経験が３年間以上。
③動物看護専門教育機関２年制を卒業した場合は、実務経験が２年間以上。
④動物看護専門教育機関３年制を卒業した場合は、実務経験が１年間以上。

試験実施および合否

・筆記試験および実地試験を実施する。
・試験の合否については本人に通知するとともに、合格者は本学会ホームページ上に受験番号を掲示する。
・資格登録手続き完了後に動物看護師認定証を公布する。

補習教育講座

・「受験資格２」の者を対象にした補習教育講座（通信教育）を設けている。この講座は、動物看護師として現在、動物病院などで就業中の者を対象とする。したがってその内容は、当試験の筆記試験科目中、現職者が習熟していると思われる科目を除外し、補習教育が必要と思われる科目のみとなる。
・受講者には修了時に記述式問題が出題される。解答が合格点に達した者には修了証が発行され、この者のみ当試験の筆記試験が免除される。
※2005年はすでに開講済（受付〆切済）

試験科目

１．筆記試験科目

日本動物看護学会編集・発行の教科書『動物看護学（総論・各論）』に、準拠・関連した内容を出題範囲とする。以下目次より。
総論●動物看護概論／動物看護における業務と技術／看護の対象動物（イヌ、ネコ、ニワトリ、小鳥、ウシ・ウマ・ブタ、ウサギ、モルモット・ハムスター、マウス・ラット　※フェレット、その他エキゾチックアニマル、野生動物、学校飼育動物も含む）／動物看護学研究法／動物看護師に関わる法律問題
各論●解剖生理学／内科看護学／外科看護学／薬理学／感染病学／繁殖と遺伝／動物心理学・動物行動学／動物栄養学／動物看護公衆衛生学／動物看護師のための輸液学／動物看護師の放射線学

２．実地試験

動物看護法および臨床検査法など動物看護に関わる業務全般について、写真およびビデオ等により出題する。

受験料

筆記および実地試験　15,000円
実地試験のみ　10,000円（補習教育講座の修了者に限る）
※合格者は、資格登録料10,000円が必要となります。
※２年毎の更新時に資格更新料として、学会員10,000円、非会員20,000円が必要となります。

問合せ先

日本動物看護学会 事務局　平日10：00～18：00
〒101-0063　東京都千代田区神田淡路町２-23　アクセス御茶ノ水２F
TEL　03-5298-2922　FAX　03-5298-2851
E-mail　jsan_info@jsan.org　ホームページ　http://www.jsan.org/

当学会主催「動物看護師資格認定試験」の過去問題集が発行されています。当学会は本書の編著者ではありませんが、一部資料（試験問題や受験データなど）を提供しました。
問合せ先：㈱インターズー（tel.0120-80-1906）

第23回 例会(06年2月　池袋) ―― 発表募集のお知らせ

日時

2006年2月18日（土）～19日（日）日本獣医臨床病理学会との共催　発表日は両日のどちらかになります（調整中）。

会場

東京・池袋　サンシャインシティ文化会館

発表募集の概要

発表の種類

学習発表（動物看護専門学校生による）、
一般演題発表（大学生・動物看護師・研究者＜人と動物にかかわる広いテーマを対象＞による）

発表の内容

・動物看護師の場合、発表内容は、日頃の動物看護業務の中から見つけることになります。本学会誌にある「例会報告（p78～79)」「掲載論文」などを参考にして、テーマを自由に見つけてください。「診療を受けてどのような看護をしたか」「看護を振り返っての考察」「動物看護師として日頃工夫していること」等について広く募集します。
・「発表内容レベルに自信がないが、看護報告と感想を述べる程度ならばしてみたい」人は、＜動物看護報告＞という枠で発表していただくことができます。
・発表時間はすべて通常、各7～8分程度です。
・発表者（当日前に出る人）は2名でもかまいません。

発表までの手順

・発表申込み〆切りは05年12月15日（木）です。延長する場合もありますが、時間枠が埋まり次第〆切りとなります。早めにお申込みください。申込用紙は学会ホームページにて入手可能。
・抄録集掲載用として「発表内容の要旨」をA4判1枚以内（文字のみ。1/2～2/3程度の量でも可）で、06年1月10日（火）（予定。発表者には後日連絡）までに当事務局へ提出していただきます。
・発表時の映写資料（パワーポイントによる作成）を、06年2月15日（水）までに当事務局へ提出していただきます（パソコン動作確認のため。ただし修正データの当日持込可)。発表時の映写資料は手書きOHPも可。

その他

・当学会「動物看護師」資格認定者は、発表により学習ポイントを取得できます（＜動物看護報告＞を含む)。筆頭発表者7ポイント、共同研究者3ポイントです。

動物看護師の地位向上・職域拡大のためには、動物看護師自身によるいっそう多くの発表・報告が求められます。発表後の質疑応答や意見交換は互いの学習と交流をもたらし、励みにもなります。ふるって発表されてください。学生や研究者からの申込もお待ちしています。不明点は学会事務局までお問合せください（連絡先p93)。

日本動物看護学会 会誌
Animal Nursing（アニマル・ナーシング） Vol.10 No.1（第10巻 第1号）

CONTENTS

《意見・提言》
①わが国における獣医療史と動物看護の萌芽－いま求められる、動物看護師の結束と職業意識の高まり－
本好茂一（日本獣医畜産大学 名誉教授） 3
②動物看護師（士）公認化へ向けて－各ステークホルダー（利害関係者）の泣きどころ－
牧田登之（NPO法人日本動物看護士協会 代表、福岡動物病院看護士学院 学院長） 8

■特集／誌上再録■ 第19回 例会 動物看護師によるティーチ・イン／10
――私たちの手で育む、これからの動物看護学

《投稿論文》目次には筆頭発表者のみ表記
動物看護〈臨床〉
短報 帝王切開におけるVTの役割 大矢純子（東京都・Pet Clinic アニホス） 19
短報 術前準備における動物看護マニュアルの事故防止に対する効果
深井麗子（埼玉県・フジタ動物病院） 22
動物看護〈飼主指導〉
短報 オーナー向けセミナー開催後の効果と実績 中村ののみ（北海道・前田獣医科医院） 26
動物看護〈スタッフ教育〉
短報 地方都市における動物看護師勉強会の立ち上げと今後の方向性
鈴木加奈子（山梨県・赤池ペットクリニック） 35

《海外学会報告》
大切なのは、どこで学ぶかではなく、自分が何を学びとれるか
中井江梨子（東京都・どうぶつ眼科 Eye Vet） 40
米国の動物看護師のハイレベルな技術 児玉由美子（東京都・Pet Clinic アニホス） 43
海外で気付かされた、わが国独自の動物看護の可能性
白木文恵（東京都・アニマルウェルネスセンター） 44

《特別寄稿》「第10回 人と動物の絆に関する国際会議」に参加して 横山章光（帝京科学大学） 47

《動物看護師のための特別プログラム》
重要ポイント総整理――院内感染を考える 渡辺隆之（エム・ビー・ネットワーク） 55

《連載》 動物福祉はなぜ必要か－動物福祉の理論と実践－
③人と動物の関係 1／実験動物、伴侶動物 上野吉一（京都大学霊長類研究所） 60

《動物看護専門学校生による発表》／66
ウサギの頬骨毛◎浅川真希 "動物の孤児院"◎尾方ひろみ アニマルセラピー◎朝比奈史佳
猫はなぜ涙をながすのか？－感情表現のひとつとして－◎寺﨑裕美 飼育条件における生体内のPとCaの変化◎山口智子

《書評》 乳幼児期に身につける非言語性能力の大切さ――動物から教えられること
森永良子（白百合女子大学 発達臨床センター 顧問） 77
山梨県動物看護師勉強会「Pride & Confidence」1周年記念大会 開催報告
井上五月（山梨県・赤池ペットクリニック） 39

《開催報告》 第14回 大会・第20回 例会 盛況のうちに終了／78
「動物看護師」資格認定者 生涯教育 中級教育講座――受講者の声／80
「平成16年度 動物看護研究助成金事業」に申請・承認の上、行われた研究会／85

学会とは何か／「例会での発表・報告」「学会誌での論文掲載」のご案内／18
今号への投稿を終えて――発表者の声／83
農林水産省「小動物獣医療に関する検討会」の最終報告から／83

ルポ ①心通う対話のために――小動物診療に求められる飼主とのコミュニケーション術
● 動物病院の心がけによって変わり得る、飼主の気持ち● 佐藤忍（文教大学大学院）／84
②社会に強まる"人と動物の共生"／85
BOOKナビ・わが国の古美術に見る、動物たち／86

平成17年度 動物看護研究助成金事業 実施のお知らせ／88
第22回 例会（05年11月）――開催のお知らせ／89
学会規約・役員各委員一覧・投稿規定／90

病院の外でも、見守っています。

充実したラインアップの食事療法食から、予防を考えた食事まで。

ウォルサムは、幅広いサービスで大切なペットを病院の外でも見守ります。

ペットの健康をトータルにケア、ウォルサムはホリスティックケア。

WALTHAM®

ウォルサム®

マスターフーズリミテッド 〒153-0064 東京都目黒区下目黒1-8-1 お客様相談室 TEL：03-5434-3434 ©Master Foods

わが国における獣医療史と動物看護の萌芽

―いま求められる、動物看護師の結束と職業意識の高まり―

日本獣医畜産大学 名誉教授
本好茂一（もとよししげかつ）

1929年生まれ。1951年、日本大学農学部卒業。1975年、農学博士（東京大学）。1977年、日本獣医畜産大学教授（獣医内科学）。同大図書館長、附属家畜病院長などを歴任。1996年、同大名誉教授。2005年4月より帝京科学大学教授。現在、日本ペット栄養学会会長、牛臨床寄生虫研究会会長、国税庁長官認定NPO RDA（障害者のための乗馬）Japan理事長、日本介助犬アカデミー副理事長など。論文訳書多数。

●はじまりは古来～わが国の獣医療史～

わが国における獣医療の始まりは、595（推古3）年に高句麗から来朝した慧慈が聖徳太子の周辺にウマの針治療を持ち込み、これが太子流として存続し伝えられてきたことに由来する。その後、唐や隋で学んだ仏教の修業僧によって針灸術が伝えられ、桑島流などの流派として栄えた。また、橋本道派はこれを仮名書きに直し、朝鮮から持ち帰った版木技術を用いて、『仮名安驥集（かなあんきしゅう）』として1603（慶長8）年に印刷本として出版した。

徳川8代将軍・吉宗は日本馬の改良を目ざして、オランダ船によりアラブ馬の輸入を図った。その際、調馬師としてハンス・ユルゲン・ケイゼルが同行して来て、『オランダ馬療治』と『オランダ本草（ほんぞう）』の2著が献上された。

これらが5年の歳月をかけて、今村源右衛門によって翻訳されたのは1730（享保14）年であったが（解体新書が訳出される44年も前の話である）、結局、表に出されることはなかった。しかし、これは現在でもわが国の国立公文書館に保存されている。

ちなみに獣医師とは高等動物の全体像を知り、生理・解剖・病理に精通するいわば“生物学者”として得がたい存在であると言えるだろう。世界初の獣医学校は、ちょうどこの頃1762（わが国では江戸期・宝暦12）年に、シルクロードの終着点であり、また、絹織物の産地として養蚕業が盛んであったフランスのリヨンに創設されている。

さて、徳川14代将軍・家茂がフランスのナポレオン3世に対して、蚕（かいこ）の病気を防ぐための蚕卵紙（さんらんし）を送ったが、その返礼として、1867（慶応3）年にアラブ馬26頭が贈られてきた。また、この直後には大政奉還が行われて明治時代となったが、1871（明治4）年には陸軍が創設されている。

陸軍創設にあたって、まず問題となったのは軍馬の補充であった。軍務官厩が設けられた後、陸軍はフランスから獣医師アンゴーを招いた。また同時期、岩倉具視の欧米使節団の1人である大久保利通卿は、帰国後、現在の新宿御苑に農事修学場を開校してイギリスから獣医師マック・ブライドを招いた。

この頃、1878（明治11）年には駒場農学校（現在の東京大学農学部）が創立されたが、ここに明治天皇が行幸（ぎょうこう）（天皇の外出）されて「農ハ国ノ本ナリ……」と勅語を賜わった。ほぼ同時期の1876（明治9）年には札幌農学校（現在の北海道大学農学部）も設立されて、それぞれドイツからヤンソン、アメリカからカッターの各獣医師が招かれて教鞭をとった。

その後、日清戦争（1894<明治27>年～1895<明治28>年）では13.1万頭、日露戦争（1904<明治37>年～1905<明治38>年）では47.1万頭、日中戦争（1937年<昭和12>年～1945<昭和20>年）では、60～100万頭という膨大な頭数の馬が中国大陸を中心に送られた。そして、第2次世界大戦を含めて約50年間に及んだ戦争は、1945（昭和20）年8月15日に、わが国の敗戦で終わりを告げた。

時代が前後するが、1885（明治18）年8月22日、太政官布告第28号として獣医制が公布された。すなわち、獣医師に対する家畜の診療が許されたのである。同年には大日本獣医会が結成されたが、1925（大正14）年3月30日に日本獣医学会が勝島仙之助会長の下で社団法人となった。さらに1887（明治20）年には社団法人

大日本獣医会から社団法人中央獣医会となり、その後の獣医師法が制定されたのは、戦後の1949（昭和24）年である。

それから1992（平成４）年に至り大改正があり、その獣医師法第１条には、「獣医師は、飼育動物に関する診療及び保健衛生の指導その他の獣医事をつかさどることによって、動物に関する保健衛生の向上及び畜産業の発達を図り、あわせて公衆衛生の向上に寄与するものとする」と謳われている。また同法第16条２には「…獣医師は、免許を受けた後も、…臨床研修を行うように努めるものとする」とある。

●獣医療の変容と動物看護の概念の発生

戦後のアメリカ軍による占領下、獣医学教育はすべて新制度による４年制大学へ移行したが、単科の大学は認められなかった（すなわち獣医学科だけの単一学科は認められず、複数の学科をおくこととなった――例えば、日本獣医畜産大学のような畜産学科の併設）。戦時下に激増した専門学校は大学への昇格が求められ、獣医科大学が今の計16校（うち私大５校）に定着したのは、1966（昭和41）年であった。

その後、日本学術会議の勧告によって、1978（昭和53）年からは修士課程の活用による修業年限の延長が行われた。そして1983（昭和58）年には、獣医学科は現在の一貫６年制となったが、ちなみにこの時、教員の定員増や設備の充実のための予算が伴わなかった。このように戦後の獣医学教育は、「大学４年制」「積み上げ（修士利用）６年制」の後、「一貫６年制」へと進められた。さらに、４年制の大学院博士課程が設置されている。

現在、形の上では「６年＋４年制」ではあるが、教員の定員が増やされることは少ない。したがって、教授、助教授、講師、助手らは、受け持ちの講義コマ数をこなすことにつぎ込まれ、講義や実習の多忙な状況に追い込まれている。これに加えて臨床教員は、病院での臨床の責務を負う毎日である。

ところで、私は戦後すぐに獣医学を学び始めたが、当時はほとんどが馬中心の学問体系であった。1955（昭和30）年以前、わが国では馬が120～150万頭ほども飼われていた。しかし現在では、わずか10万頭ほどに減少しているのが実情である。

一方でいま、犬12,457,000頭、猫11,636,000頭もの数が家庭で飼われるまでになり（2004<平成16>年現在、ペットフード工業会調べ）、これに伴って小動物臨床は飛躍的に伸展している。現在では獣医療の対象の中心は、家畜と愛玩動物（ペット、コンパニオン・アニマル）であるとさえ言える。

また、ここにおいて、手厚い「動物看護」が重要視されるに至ったことは当然である。そして「動物看護師の教育」においても、人と動物の関係、動物の福祉などのテーマについても幅広く学ばねばならない時代が来ている。

獣医療の発展拡大にとって動物看護師は少なからぬ力であり、欠かせない補助的要素となっている。今後のわが国における、動物看護師の必要性がますます高まることに異存はない。

●動物看護教育の起こり～わが国とアメリカに見る～

アメリカにおけるペット産業台頭の様子を視察し、いち早く、わが国におけるトリマー・グルーマーの必要性を予感した山崎良寿（1919～1990）は、東京大学・越智勇一教授（農学部家畜細菌学教室）の支持も得て、1967（昭和42）年に「シブヤ・スクール・オブ・ドッグ・グルーミング」（現在の学校法人ヤマザキ学園）を創立した。1994（平成６）年に学校法人となった後、その娘である山崎薫は、2004（平成16）年にヤマザキ動物看護短期大学（３年制）を創立するに至った。

一方、日本獣医畜産大学では、2003（平成15）年に開設した動物保健学別科（２年制）を、2005（平成17）年４月に獣医保健看護学科（４年制）として再編した。その教育内容が注目されている。

また、近年一時期設立が相次いだ動物看護専門学校では、自助努力による学校法人化も実現し始めており、その数は全国で35～40校ほどと推定される。すべての動物看護専門学校のうちで、動物看護学科およびこれに準ずるコースを有する学校の数は、調査集計が存在しないため不確かではあるが、およそ200校とも250校とも言われる。

ところで、筆者が日本獣医畜産大学在職中の1992（平成４）年、わが国では得がたいレベルの獣医学の講義や実習を、アメリカの獣医大学で行うことが実現できた。学生、一部開業獣医師に他大学の学生や教員も加わり、充実した講習を実施し実習単位にも組み込

んだ（その有益かつ貴重な体験実習も、2001<平成13>に起きた、あの「9・11世界貿易センタービル炎上」をはじめとする同時多発テロ事件以降、打ち切りとなってしまった）。

ちなみにこの初年度、タフツ大学における実習において、トレードミル（オートランナー）上で疾走中の馬の咽頭を内視鏡で観察し、披裂軟骨の変形や異常を診療する際、馬の扱いが実に上手で手慣れている看護コースの学生がいた。さらに、この学生を実地指導していたのは女性のレジデント（獣医師の研修医）であったが、途中で蹄鉄が外れた際、彼女はトレードミルを止めて、外れた蹄鉄の釘を除去してから蹄負面（蹄鉄を装着する部位）を鑪正（めくれたり欠けたりした接地面をヤスリで平らにし、また尖った面を丸くする）した後、速やかに再開させた。この間平然と馬を御していた。平素からの訓練の積み重ねを感じいった次第である。幼少時からの体験と訓練の賜物と見た。

このアメリカでの試みは、その後、オハイオ州立大学、コーネル大学、パデュー大学などで、1年度に2校を回る形で続けてきたが、パデュー大学では動物看護コース（2年制と4年制）のカリキュラムを受け取り、これを、将来のわが国のためにぜひ考えてほしいと、当時の農林水産省獣医事課長補佐に届けた。しかしこの時は、わが国での実現の可能性はかなり難しいという印象を受けた。

実は最近になって、本学会員で動物看護師の白木文恵さんから、アメリカにおける動物看護師制度の実情について改めて教えていただいた。白木さんは、パデュー大学の準学士課程（2年制）修了後に、RVT（The State of Indiana Registered Veterinary Technician、同大学のあるインディアナ州の認定動物看護師の資格に値する）を取得。後の2002（平成14）年に同大学の学士課程（4年制）も修了されている。その後は1年5か月間のニューヨークの動物病院勤務を経て帰国後、現在はわが国で動物看護師をされている。

それによれば、アメリカにおける大学レベルでの獣医看護師（Veterinary Technician：VT）教育プログラムは、1961（昭和36）年にニューヨーク州立大学で始められた。そして、1970年代後半にはVTの国家試験制度の必要性が叫ばれ始めて、1986（昭和61）年からは、American Veterinary Medical Association（AVMA：アメリカ獣医師会）による本格的なVTの国家試験（National Board）が始まった。

現在では、アメリカ全50州のうちの約40州でVTの資格要件が確立しているようである。その取得方法は州によって多少異なるが、ほとんどの州で国家試験を課している。

白木さんが居住されていたインディアナ州では、AVMAが認可したプログラムを修了後（これが国家試験の受験資格となる）、国家試験と州法規に関する試験に合格するとRVT（Registered Veterinary Technician）としての資格が得られるとのことである。この資格は、州によってはLVT（Licensed Veterinary Technician）、CVT（Certified Veterinary Technician）とも称されるようである。アメリカには、大学ではなく専門学校によるVTプログラムも存在しているが、これらに対する規定はAVMAでは設けていない。

●動物看護師の必要性の高まり
～充実した小動物臨床の条件として～

動物病院において動物に触れない業務は、<受付、会計、薬剤の在宅分の給付>くらいであり、その他は<受診、検査、各種の処置、手術による入院、投薬、食事管理、排便・排尿の確認、運動>など、動物と接触する業務が大部分である。他に、動物病院における毎日の仕事としては、<器材の洗浄と片づけ、診療用各種布類などの洗濯・滅菌、各種機材の整備、診察台の消毒、診療室などの清掃消毒と感染予防>などがある。

2年に1度、年末に義務として行われる農林水産大臣への届出数字（獣医師法の規定による分類）によれば、<小動物臨床に従事する獣医師数／獣医師の総届出数>は、1978（昭和53）年の<3,035人（獣医師の総届出数の約13%）／23,420人>に対して、2002（平成14）年には<9,476人（開設者6,573人、被雇用者2,903人。獣医師の総届出数の約31%）／30,723人>となっている。したがって、「産業動物の臨床に従事する獣医師の減少」と「小動物臨床に従事する獣医師数の激増」が顕著といえる。

一方、動物看護師および病院スタッフ（トリーマー、グルーマーを含める）の数については、桜井・尾崎のデータによると次のとおりである。

小動物獣医療に関する検討会報告書概要　　平成17年7月 消費・安全局

1．経緯

動物を飼育する人や飼育動物を家族の一員と認識している人の増加に伴い、飼育者から求められる獣医療の高度化、多様化等、最近の小動物獣医療をめぐる情勢は大きく変化しており、このような状況を踏まえ、小動物獣医療の課題について検討し、報告書として取りまとめられた。

2．概要

(1)卒後臨床研修について
・大学と連携がとれる等一定の基準を満たす民間の診療施設を、臨床研修施設として指定することにより、臨床研修を充実させることが必要。
・民間の診療施設を指定する際の基準及び臨床研修目標について提案。

(2)獣医核医学について
・獣医療の高度化のため、放射線診断・治療のニーズが増加。
・放射線防護に必要な施設基準、管理体制等について提案。

(3)獣医療における専門医について
・獣医療の高度化のため、各分野における専門医の育成が必要。
・学術団体等が中心となって、専門医の必要性や認定基準の妥当性を評価する仕組み作りについて取り組むことが必要。

(4)獣医療における広告規制について
・飼育者が獣医療に関する情報を適切に入手できるように広告規制の緩和が必要。
・規制緩和に当たっては、
①いずれの診療施設においても実施可能な診療行為であること
②飼育者が感わされるおそれの少ないこと
③飼育者にとっての情報の必要性
などの観点から進めることが必要。
・不適切な誘引や不当な低価格診療による飼育動物の被害を防ぐため、価格広告や比較広告の禁止などの措置を十分に講じることが肝要。

(5)獣医療補助者について
・現在の小動物獣医療において、獣医療補助者が担う役割は重要であること。
・社会的に安定した職業として確立するため、獣医療補助者の各団体及び獣医師団体が中心となって、教育水準、認定基準の平準化に向けた取り組みに着手すべき。

資料1／「小動物獣医療に関する検討会報告書概要」（農林水産省2005年7月発表）より全文を転載（原文のまま）

5．獣医療補助者について

(1)現状

(ｲ)日本獣医師会により実施されたアンケート（平成12年）によれば、小動物診療施設のうち80％以上が、1人以上の非獣医師を雇用している。このアンケート調査結果を基に推計すると、現在の小動物診療施設において雇用されている非獣医師数は、2万人弱と考えられた。これら非獣医師には、経理等の事務処理をしている者も含まれているものと考えられるが、その主体は獣医師による診療業務の補助を実施しているいわゆる獣医療補助者であると考えられる。

獣医療補助者については、現在主として4団体が、それぞれ独自の基準に基づき認定を行っており、4団体から提供された資料によると、これまでの認定総数は約1万3千人となっている。獣医療補助者の教育機関（専門学校、専修学校等）が全国にどの程度存在するかについて、前述の団体に情報提供を依頼したところ、各団体が認定若しくはその教育内容等から適切と判断している施設数の合計は100校前後であった。

なお、諸外国でも獣医療技術者、動物看護師等の名称（Veterinary Technician, Veterinary Nurse）で獣医療補助者の活用が図られているが、その認定は獣医師団体などが行っている。

(2)課題

現在、獣医療補助者は多くの小動物診療施設に雇用されており、小動物獣医療において、重要な役割を果たすようになっていると考えられるが、上述のように複数の認定団体が独自の基準で認定している状況にあり、その知識・技術レベルは必ずしも一定でないことが伺われる。また、このような背景もあり、職業としての社会的な位置づけが明確にされているとはいえず、その雇用状況等も必ずしも明らかでない実情もある。

(3)提言

小動物獣医療における獣医療補助者の重要性に鑑み、社会的にも安定した職業として確立するためには、まずは現在の教育機関、認定団体及び獣医師団体が協調し、早急に教育水準や認定基準などが平準化されるよう取り組んでいくことが必要である。

獣医療補助業務を公的資格とすることが必要ではないかとの意見も出されたが、獣医療補助者の行うことができる業務範囲が明確化されていない現状と上述した状況並びにわが国の経済・社会的情勢が全体として規制緩和の流れにあることも考慮すると現状では困難と考えられる。

将来に向けて獣医療補助者の社会的身分を確立するためには、獣医療補助者の各団体ならびに獣医師団体等が中心となって、教育と資格認定基準の平準化に向けた取り組みに着手すべきである。

資料2／「小動物獣医療に関する検討会報告書」（農林水産省2005年7月29日発表）より「5．獣医療補助者について」の全文を転載（原文のまま）

	小動物臨床に従事する獣医師数	動物看護師および病院スタッフ数
1989年	7,731人	7,236人
1994年	9,265人	11,707人
1999年	10,540人	18,609人

総務庁「サービス業基本調査」、農林水産省「家畜衛生統計」、日本獣医師会「職域別獣医師数の推移」、ジャパンケネルクラブ（JKC）「トリーマー認定資格取得者数」から算出（推計値）。桜井富士朗・尾崎裕子「ペット産業と動物病院の経済動向」（日本動物看護学会　第16回例会 <04.8.8> における発表）より。

このように1989年からの10年で、「小動物臨床に従事する獣医師数」は2,809人増加（約1.3倍）し、「動物看護師および病院スタッフ数」は11,373人増加（約2.6倍）している。増加率は、前者に比べて後者は約2倍である。またこれは、獣医師1人当たりの「動物看護師およびスタッフ数」が0.94人から1.77人に増えていることを意味している。これらによって、クライアントへのサービスが向上したとする考え方は妥当であろう。そしてこのために、動物看護師およびスタッフ数の必要性が、確実にスピードアップしていることが分かる。

●動物看護師の国家資格化への期待

2005年1月25日（火）、農林水産省の消費・安全局が、「小動物獣医療に関する検討会」の第1回を開催した（公開にて）。

同検討会のその後の審議過程では、一貫して、「卒後臨床研修」「獣医核医学」「獣医療における専門医」「獣医療における広告規制」と並んで「獣医療補助者」が課題として採り上げられた。同検討会は、同年7月29日（金）の第6回にて終了した後、報告書を発表した。ここでは、その概要全文と報告書内の「獣医療補助者」に関する記述の全文を紹介する（資料1・2参照）（編注 p83に関連記事）

これを前提として、動物看護教育機関や動物看護にかかわる多くの団体が、力を結集して、行政の動きに対応するときが来たと言えるだろう。動物看護師の資格認定試験を行っている日本小動物獣医師会、社団法人日本動物病院福祉協会、日本動物看護学会の3団体などは互いに連絡をとって、動物看護師の国家資格化の検討などの動きにも対応できることが期待されている。

ちなみに、厚生労働省では国家資格を多く所管しているが、それらを参考までに記す（法律の条項別）。

・保健師、助産師、看護師、歯科衛生士、診療放射線技師、歯科技工士、臨床検査技師、衛生検査技師、

理学療法士、作業療法士、視能訓練士、臨床工学技士、義肢装具士、救急救命士、言語聴覚士――これらは医療関連資格であるので、仮に動物看護師の国家資格を検討する際には参考となる点がありそうである。

・あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師及び柔道整復師
・栄養士、管理栄養士、調理師及び製菓衛生師
・理容師、美容師及びクリーニング師に関すること
・社会福祉士及び介護福祉士に関すること
・精神保健福祉士に関すること――主たる業務が相談援助であるため、いわゆる医療関連資格とは区別されていると思われる。ちなみに臨床心理士、臨床言語師は民間資格である。
・社会保険労務士

以上のとおり。なお、農林水産省が所管する獣医療に関する国家資格は獣医師だけである。

ところで、2005年2月27日（日）、東京・池袋で行われた日本動物看護学会の第19回例会において、「動物看護師によるティーチ・イン／私たちの手で育む、これからの動物看護学」が行われた。私は少し遅れて到着したが、後半には客席からその輪に加わり、愚見を申し述べる機会が与えられた次第である。

このティーチ・インでは、小動物臨床の第一線で働いている動物看護師の生の声を伺い、強いエネルギーの発散を感じた。この日の内容は、2005年3月30日（水）付の東京新聞で記事として取り上げられた。動物看護師の現状とその職務の重要性、動物看護師の職域の拡大と身分保障・社会的認知について詳しく述べられている（編注 p17に記事掲載）。

ちなみに、日本動物看護学会の発足は1995（平成7）年であった。その年は、第25回世界獣医師大会という国際的事業がわが国で開催された、わが国の獣医師にとって記念すべき年であった。その約10年後、獣医師制度が発足して119年の歳月を経た2004（平成16）年には、第1回日本獣医内科学アカデミー総会が、総計26の学会・研究会などの参加を得て旗上げされた。その際に共催して行われた日本動物看護学会の例会の冒頭、私は総会の大会長として挨拶を述べた。

●いま、行うべきこと

動物看護師の国家資格化を望むのであれば、それを最も強く望む者は、当事者である動物看護師自らでなければならない。そのためには、例えば日本動物看護学会にしても、動物看護師自らの手による、よりいっそうプロフェッショナルな集団となる必要があるだろう。

動物看護専門学校に期待するとしても、自力だけでの設備充実、教育レベルのアップなどには投資と企業努力の面で限界がある。一方、動物看護師を使用する側の動物病院からすると、資格の是非や有無よりも、自らの病院の目先の営業成績・事業成績の向上のためには、"動物看護師は、使い勝手のよい人材派遣的なスタッフで事足りる。それ以上の人材は望まない"といった考えが皆無とは言えないであろう。"仕事量を正確にテキパキとこなしてくれる、単なる使用人"であれば好都合だと考える、一部の獣医師（病院経営者）もいるかも知れない。

先に述べたように、AVMA（米国獣医師会）は優れたVTを生み出すために、VTの国家試験を行っている。しかし、1961（昭和36）年に大学レベルのVT教育が始められた後、1986（昭和61）年にこの国家試験を実現させるまでに25年間の努力を要した。日本獣医師会に同じ努力が期待できるだろうか、そして、農林水産省に働きかけるにしても大きなパワーが必要である。そのためには、

1．動物看護教育機関の側（専門学校、大学）
2．動物病院の経営者（獣医師、動物看護師の雇用者）
3．獣医学領域の主要団体

この三者へのアピールに加えて、より強力に結束するためには、動物を家族の一員として共に生活を営む人たち、すなわち一般社会の市民パワーを味方につけた上で、行政に対して立ち向うべきであろうと思われる。現在、動物看護師の認定試験を実施している3団体、すなわち日本小動物獣医師会、日本動物病院福祉協会、日本動物看護学会には、それぞれの理念や高い目標があるが、それを十分に尊重して踏まえた上で、動物看護師の国家資格化などへ向けても結集してほしいと強く期待している。それは、わが国の獣医療の充実・向上のみならず、豊かな平和社会ひいては地球上の生き物の生命尊重などにもつながることなのである。

意見・提言②

動物看護師(士)公認化へ向けて

―各ステークホルダー（利害関係者）の泣きどころ―

東京大学農学部畜産獣医学科を卒業（獣医師免許取得）後、同大学院の修士課程と博士課程を修了して修士号、博士号の学位取得。1966年より1999年まで山口大学農学部獣医学科にて助手、助教授、教授。この間、モントリオール、スコットランド、ニューヨーク（オルバニー）に留学。その後、山口大学農学部長を務めた。退官後、動物看護士教育に参加。現在は福岡動物病院看護士学院長、日本動物看護学会の理事ならびに動物看護師認定試験委員。

NPO 法人 日本動物看護士協会 代表
福岡動物病院看護士学院 学院長
牧田登之（まきたたかし）

ヒトの看護師の場合も公認化までに30年余りもかかったという。また、永らく廃止と言われてきた準看護師の制度もやっと今春から高等看護師への統一に向かうことになったという。いずれの世界でも、制度が変わるためには異常に長い年月がかかるものらしい。それでも看護大学が100校以上も設置されるようになり、大学院も出来ているのはうらやましい限りである。

それに引きかえ動物看護師の方は、動物看護専門学校こそ全国で90校ほどあると思われるものの、いまだに公認化のメドが立っていない。就業者が２万人位では少ないとか、社会の認知度が低いとか、新たに職種を認可するのは職業選択の自由を規制することになるのでなるべく抑制したい、等々の反論があるようだ。

第一に認可を申請する母体が確立されていないし、カリキュラムや教材も整備されているとはいいがたい。多くの学校がすでに10年位の歴史をへて、独自の認定証を発行しているし、新規に参入する認定試験機関も増えている。

このような事態を見すえながら、各関係者のかかえる弱点というか泣きどころを洗い出して考えてみるのも、無駄ではないと思われる。問題が漠然としているので、ステークホルダー（利害関係者）の種別も広範囲にわたるが、ここでは①獣医師、②大学教官などの教育者、③動物看護師、④関連企業の関係者、⑤日本動物看護学会の５者に限定して、順不同で取り上げることにする。

①獣医師

動物看護師を雇用するのが主として開業（小動物）獣医師であるので、その教育カリキュラムや認定証について最も関心があるのは、そうした先生方である。事実、そのような教育を最初に始めたのも、また現在、全国規模で資格試験を行っている機関も小動物獣医師によるものである。

最初は、動物看護師（士）に獣医業の一部を分担させることに抵抗感があったようであるし、現在でも、半年くらい自分の病院で見習をすれば、下手な学校で勉強するよりましだと公言する獣医師もおられる。しかし、時代と共に認識も進化（？）して、そういった先生方は少数派になっているようではある。

しかし、実際に動物看護師の教育のために学院に来ていただくとか、あるいは認定試験の出題をお願いするとなると、なかなか問題が多い。泣きどころは、先生方は日中時間が割けないことである。週１回の休みをとられる先生が多いようだが、そのせっかくの休日をつぶしてもらうのは頼みにくいことである。余程のお支払いが出来ればまだよいのであるが、たいていは90分で１～２万円の薄謝では頼みづらい。また、最近の獣医学の動向にあまり詳しくない先生がおられて、講義や試験の内容に問題があることが少なくない。少なくとも、こういう点を何とかしなければならない。

②大学教官などの教育者

大学にも獣医看護の関連学科を設置する動きがあり、すでに４年制や３年制の学科が出現しているので、大学教官や大学院生が動物看護教育に参加していることがめずらしくない。

しかし、６年制の獣医学科の水準と、主として２年制の動物看護専門学校のレベルの差が大きい。また学生選抜も、獣医学科は困難な入試をくぐり抜けて来て

いるのに対して、動物看護専門学校では、生徒が大学卒や社会人、高校卒などとバラツキが激しいので、その面での対比も差が大きい。正直言って、大学の教官や院生が初めて教えに来ると、とまどってしまうほどである。

動物看護専門学校の施設も大学とは比べものにならず、また学校差も激しい。動物美容学校や訓練犬の学校やペットショップの発展したもの、元はコンピューター学院だったもの等々、獣医学科の中で想像しているだけでは実態がつかめないことが多い。教材もまだ揃っているとはいい難い。従って大学教官がまずこの分野に直接ふみこんでみないと、学科創設も容易なことではないだろう。

③動物看護師

最近は、通信教育のスクーリングで出会った人たちが互いに連絡をしたり、また、学会でパネルディスカッションに参加したりして、動物看護師自身の活動が注目され始めている。しかし、相互に連絡をとることがまだまだ難しいし、雇用の形態からしても、時間を割いて動物看護師の学会や集まりなどに出席することが容易ではない。専門学校の同窓会のようなものでさえ活発には動けないでいる。また、月給が14～15万の範囲であると、講習会への参加やテキストや機関誌などの購読も経済的に制約が大きい。第一、教材なども高価である。

④関連企業の関係者

ペット産業の拡(ひろ)がりに応じて、動物看護専門学校が続々と出現している。出版業でも、獣医学書だけでなく動物看護の学習書発行へと一歩踏み出してきている。また、ペットシッターやアニマルアドバイザーなどといった、様々な呼称の講座なども流行している。

ペット産業関連企業が自前で動物取扱いのできる若者を育成する目的で、附属学校のようなつもりで設立された学校は、充分な投資をしなかったことや動物美容学院・動物しつけ教室などとの差が理解できないために、目標を達成できずに苦戦しているところが多い。

それぞれに認定証を発行している場合があるので、動物看護師の資格公認化のためには、どこでそれらを統一するのかが大きな問題である。小異をすててと言っても、あまりに“ピンキリ”である。どの当事者も、何をもって動物看護師とするのかについて、確信が持てないでいることが泣きどころではないだろうか。

⑤日本動物看護学会

問題が深刻化すると総括とか自己批判が求められるのが常であるが、日本動物看護学会の泣きどころも指摘しないわけにはいかない。まず、農林水産省、文部科学省、獣医師会などから看護師認定機関の代表としての認知を得ていない。養成校の大手からも認知されていない。また、国公立大学からの支援も不十分である。この学会としての歴史は10年を超えているので知る人ぞ知る存在ではあるが、動物看護師公認化の道標としては、一層の努力を必要としている。

順不同で各ステークホルダーの抱える問題点をなぞってみたが、これはひとえに何とかして、拡散している公認化への努力を収斂(しゅうれん)する方策を探りたいという願いによるものである。誰を批判しようというものではない。読者諸兄姉の建設的な御意見をお願いしたい。

特集

第19回 例会（2005年 2 月27日（日） 東京・池袋 サンシャインシティ文化会館）

動物看護師によるティーチ・イン
私たちの手で育む、これからの動物看護学

―現状の課題とその解決方法について、皆で話しましょう！―

誌上再録

この日のティーチ・イン（座談会）は、公開形式としては、ほぼ初めて行われた“現役の動物看護師による意見交換会”とも言うべきものでした。多くのテーマについて休憩を挟むことなく2時間半、パネラーと聴講者が一体となっての大変盛況な話し合いの場となりました。

終了後、聴講者の動物看護師からは、「見ず知らずの動物看護師同士が、本音で話し合うことができて有意義だった。この盛り上がりを一時のお祭りで済ませずに、先々、学習や研究についての意見交換につなげる必要があると思う」という声が挙がっていました。

これらの積み重ねこそが動物看護学の進展をもたらし、また、わが国の獣医臨床にも大きく影響を与えるものと思われます。当学会では今後も、こうした動きを全力で支援し、学会員の“活動の場”を提供したいと考えます。

以下、当日の模様を誌上再録いたします（一部割愛しております。ご了承ください）。

司 会

西谷孝子（広島県・西谷獣医科病院） 当学会「動物看護師」資格認定者、当学会理事

アシスタント 三嶋淳子（日本動物看護学会事務局） 当学会「動物看護師」資格認定者、当学会評議員

パネラー

池田千佳子（元 神奈川県・みなとよこはま動物病院） 当学会「動物看護師」資格認定者、当学会評議員

井上三樹子（愛媛県・くろき動物病院） 当学会「動物看護師」資格認定者

大城朋子（千葉県・四街道動物病院） 当学会「動物看護師」資格認定者、当学会理事

大谷美紀（埼玉県・フジタ動物病院） 当学会「動物看護師」資格認定者

小松千江（東京都・新ゆりがおか動物病院） 当学会「動物看護師」資格認定者、当学会理事

﨑山法子（奈良県・王寺動物病院） 当学会員

鈴木加奈子（山梨県・赤池ペットクリニック） 当学会員

瀬戸晴代（広島県・西谷獣医科病院） 当学会「動物看護師」資格認定者

中井江梨子（東京都・どうぶつ眼科 Eye Vet） 当学会「動物看護師」資格認定者、当学会評議員

中俣由紀子（茨城県・かしま動物病院） 当学会「動物看護師」資格認定者、当学会理事

村尾信義（神奈川県・王禅寺ペットクリニック） 当学会「動物看護師」資格認定者

※以上、五十音順・敬称略、全員が動物看護師

はじめに――ティーチ・インの開催趣旨

司会（西谷、三嶋） 本格的な少子高齢化・核家族化を迎える中、わが国では今、人々のペットに対する接し方も大きく変わりつつあります。「家族の一員のみならず、人生の伴侶としてのペット」という意識の急速な高まりです。加えてペットが、「理想の家族の投影先」ともなっているようです。先日も犬の飼育動向として、室内飼い、小型化、犬の高齢化が顕著であるというデータを目にしました。

こうした変化を受けて、小動物臨床側の早急な対応が求められています。動物病院では、長寿となったペットの難病や重い病気、ペットの日頃の健康管理などに対する、より充実した診療やサービスが強く求められています。“人獣共通感染症対策に関する地域の拠点”としての役割も担う必要があります。

このように高度化・複雑化する小動物診療の最前線で、これを補佐する大きな役割を果たし始めているのが動物看護師です。しかし、その意義と重要性が日々高まる一方で、動物看護師に関する法的根拠はまだ存在しないのも現実です。

●

皆様ご承知のとおり、人の医療における看護師は、保健師助産師看護師法という法律で規定された国家資格です。国家資格を持たないと看護師には就けません。

人の医療における看護師は、雇用主である医師に仕えて下働きをして、見よう見まねで自分でも覚えてという、いわば模倣の中から発展してきました。組織立った教育は1885（明治18）年に始まりましたが（わが国初の看護学校が東京に設立された）、現在につながる本格的な看護教育が始まるのは、戦後のことです。その後、厚生省（当時）内に関係部局が相次いで生まれる中で、看護業務の改革がなされ、看護水準も大きく引き上げられたという歴史があります。

一方、獣医療では、獣医師法や獣医療法に明記されているのは、国家資格である獣医師だけです。動物看護師の地位について、農林水産省や日本獣医師会などにおける“改善の兆し”はあるようですが、まだ具体化には至っていません。農林水産省が2005（平成17）年1月から開いている「小動物獣医療に関する検討会」では、「獣医療補助者について」という項目名によって、動物看護師の職域と地位に関する検討が始められています。その議論の成り行きが注目されます。 ※同検討会の最終報告について→p6・83

●

現在、動物看護師として働く人は、全国で1万人とも1万5千人とも言われています。そして、動物看護師を養成するための専門学校など教育機関は、100校とも200校とも言われています。最近のベストセラー本『13歳のハローワーク』でも動物看護師は、「動物に関する仕事」の章に、獣医師の次の順番に、獣医師とほぼ同じ文字量でくわしく解説されています。このように、動物看護師に対する一般社会からの認知は先行して急速に進み、子どものあこがれの職業ともなっています。

●

日本動物看護学会は、今からちょうど10年前の1995年に発足して以来、3つの大きなテーマを目標に掲げて活動を行ってきました。すなわち「学問としての動物看護学の確立」「動物看護師の職域拡大」「動物看護師の適切な教育カリキュラムの策定と、適格な知識と技術をもつ動物看護師を認定する資格制度の創設」です。

当学会としては本来、看護対象の動物として、ペットやコンパニオンアニマルだけではなく、産業動物、野生動物、実験動物、展示動物まで広くとらえています。また、さらに「人と動物の関係学、すなわち、ヒューマン・アニマル・ボンド研究」と呼ばれる領域への問題提起も、積極的に行っていきたいと考えています。

●

わが国においても、「動物看護に関する研究報告や問題提起」をもっと活発化させ、その結果として、理論と実践が一つになった体系的な学問「動物看護学」を確立させることが急務です。そのためには、“動物看護の主役”である動物看護師の皆さんによる活動が、今後いっそう重要な役割を担うと思われます。

ところがこれまでは、当事者である動物看護師の皆さん同士で意見交換を行う機会が、なかなかありませんでした。当学会においても、獣医師や各大学の先生方を中心に議論・検討を重ねていただき、動物看護師を導いていただくことが、結果として、どうしても多かったように思われます。しかしこれからは、動物看護の当事者である私たち動物看護師同士が、お互いの思いや考え方について、もっとオープンに語るために、まずは、積極的な意見交換を始めるべき時期を迎えたと思います。

獣医師の先生方からは、温かくかつ厳しくご指導をいただきつつ、私たち動物看護師が、動物看護に関するお互いの意見を主体的に述べ合い、それを各自の糧にしていくことが、院内のチーム医療 ひいては わが国の獣医療のいっそうの向上をもたらすのではないでしょうか。

●

本日の「特別企画　動物看護師によるティーチ・イン」では、発言者・聴講者は共に動物看護師の仲間同士ですので、ぜひお気軽にご参加ください。

まずはともあれ、お互いの日頃の想いを率直に述べ合うことから始めましょう。このティーチ・インが、皆様の交流のきっかけになれば幸いです。

動物看護師この10年

司会（西谷、以下同） 日本動物看護学会が発足して、今年は10周年ということです。この10年で、動物看護の現場に変化はあったでしょうか。

中俣 10～15年前は、動物看護師という名称すら、まだはっきりしない時代でした。動物病院でも、単にお手伝いさんや掃除婦さんのような扱いを受けたり。仕事内容も庭の掃除、草むしりや、病院のお子さんの送り迎えまでさせられていました。獣医師も、私たちをどう扱っていいのか分からないというのが顕著でしたね。辞めてしまいたいと思うことも多かったんです。

司会：西谷孝子さん（右）、アシスタント：三嶋淳子（左・当学会事務局）

でも、本当にこの仕事が好きだったので、頑張って続けてきました。

当時は、動物看護師向けの学習セミナーも少なかったんです。もしあっても、奥様セミナーという呼び方でした。動物病院に勤めて、そのまま病院に嫁いだ奥様たち向けの勉強会だったんです。動物看護師向けの学習書もなかったので、獣医師から獣医学書を借りて勉強したり、あるいは、獣医師の診療の様子を観察して学んだりしました。いまの皆さんには信じられないかもしれませんね。そうした積み重ねで、やっと現状まで来た気がします。

小松　学会発足以降のこの10年は本当に早かったと思います。振り返ると私の場合も、獣医学書の必要と思った項目を開いて、そこを自分でどんどん読んで覚えていきました。私は20年前に夫と２人で動物病院を開業したのですが、それまで動物看護について学んだことがなかったので、まったく白紙からのスタートでした。機器の使い方なども、夫から目で見て覚えろと言われて、まるで丁稚奉公みたいな段階から始めました。でも、そうするうちに少しずつ、獣医師とは別の、あくまで動物看護師としての学習の必要性を強く感じるようになりましたね。

最近よく聞くのは、せっかく動物看護師として就職しても、数か月たたずに辞めてしまう人が多いという、そのサイクルの早さです。どの仕事にも言えるのかもしれませんが、動物看護師も３年やって初めておもしろくなるのだと思います。飼主さんが自分を信頼してくださること一つとっても、とても大きなよろこびなのに、なぜ、その充実感を知る前に辞めてしまうのでしょうか。プロの動物看護師としての自覚を持ってほしいですね。特に若い皆さんは、この点にめざめてほしいですし、そのために互いにどんどん交流してほしいと思います。

大城　私は20年以上、小動物看護の現場を見てきましたが、やはりものすごいスピードで様変わりしています。それは動物看護師の給与体系から、やって来る動物や飼主さんの様子など、すべてに関してですね。かつては、動物病院の下働きといった立場で、極端な薄給に甘んじていた時代もありました。でもいまはお給料も、普通の生活が最低限営めるくらいには、徐々に上がってきたのではないでしょうか。

動物についても、いまでは家族の一員として、生まれてからお墓に入るまで、人と同じ様な扱いを受ける時代になってきています。またインターネットの急速な発達もあって、飼主さんが、知識や情報を海外からも含めてどんどん得ておられます。10年前と比べるとこうした傾向は大変顕著で、ものすごい変わり方です。まさに、獣医師や動物看護師の側が置いてきぼりになりそうな感じさえします。飼主さんから日本では未認可の薬について、「例えばこういう薬を米国では使っているようだが、日本では使えないのか」といった質問を受けることも増えていますね。

こうした状況下では、自分ひとりの学習では、いくら寸暇や寝る間を惜しんで勉強しても限界があると思います。ですから例えば、今日こうして集まった皆さん方としっかりネットワークを組んで、知らないこと

左から、井上三樹子さん、大谷美紀さん、崎山法子さん、鈴木加奈子さん

は互いに教え合う、そして大切な知識を動物看護師同士、あるいは動物や飼主さんたちのために還元していく、そうした輪が広がっていったらよいなと思います。これから先の10年で、動物看護師はよりいっそう確固たる職業として定着することでしょう。今後10年で、獣医臨床と動物看護の領域は急進展することでしょう。

司会　まさに、第一線で働く方々の多くの積み重ねがあってこそ、いまやっと、動物看護師の必要性が広く認められた感じがします。私は人の医療の看護師をしていたのですが、動物看護師の仕事を人の医療の看護師の仕事で例えるならば、個体が小さく話ができない、話しても相手が分からないという点で、小児看護との共通性を感じます。人の医療の看護師は国家資格であり、専門性の高いスペシャリストです。私たち動物看護師も、よりいっそうプライドを持って、自分の職域を高めてゆくことが大切と思います。

それから、この10年の当学会活動の中で私が大きく評価しているのは、教科書『動物看護学』の編集・発行です。いまも、獣医臨床の補助業務についての作業マニュアルを述べた本はありますが、看護の歴史や理念に立ち返った上で、この点をきちんと著している動物看護の学習書は見当たりません。

待ち時間短縮の手立てを考える

会場から　今日はすごく楽しみにして来ました（笑）。私は動物看護師として働き始めて５年半から６年です。私の勤務している病院は獣医師２名と動物看護師３名です。実は当院ではいつも、患者さんと飼主さんを、診察まで２時間から３時間くらいお待たせしてしまうのです。何とかしたいのですが、よい解決方法はないでしょうか。

池田　一件一件を丁寧に診察すると、お待たせしてしまうのは、避けられないことではありますね。そこで待っていただいている間、動物と飼主さんが退屈しないように、なるべく声をかけてお話ししたり。あるいは、「もう何番目ですよ」とか「あとどのくらいかかりますよ」といったことを伝えた上で、もし他に用事があるようなら、そちらを先に済ませていただくとか。あるいは携帯電話をお持ちであれば、お出かけしていただいても、「携帯電話でお呼びしますね」という対

処が可能と思います。

私の勤務先は本院と分院がありました。分院は規模が小さいですが、流れがとてもよいのですね。ですから、分院で済む治療はできるだけそちらへ行っていただく、あるいは本院の場合でも、比較的空いている曜日や時間があれば、なるべくその際に来院していただくよう、お伝えしていました。

井上　当院のような地方（愛媛県）では、1時間から2時間かけて来院されるのが当たり前なんですね。ですから、来院後も長くお待たせしていると、飼主さんにとっては一日仕事になってしまい、迷惑されるようなんです。こうした場合は、「予約制」という考え方が最もよいのだと思います。ただしこれについては、もちろん院長先生や経営側の同意が必要となりますね。予約制にすると流れはスムーズになるようです。

ただし当院では完全な予約制は採用していません。ある検査について、かなり遠方からおいでになる場合には、飼主さんのご都合も考慮した上で、日時をあらかじめ指定させていただくという、「半予約制」を採るなどしています。通常の方については、診療時間内に来ていただき、順次診療という方法を採っています。でも、獣医師が診療に集中してしまうと、ものすごく流れが悪くなるというのは、皆さん経験があるのではないかと思います。

そこで、診療の邪魔をしてはいけないのですが、当院ではどうしても流れが滞った場合には、獣医師にメモを渡すことにしています。「お待ちの患者さんが何人おられます」「診療開始後何分たちました」と記したメモを、お話中の飼主さんにはくれぐれも失礼のないような形で、「院長、失礼します」と言ってサッと渡すのです。すると院長はそれを一瞬目にして「はい、わかりました」と言って、その後の診療を少し早めたりするんですね。

でも最も大切なことは、獣医師と動物看護師の分業体制を徹底させて、互いの作業領域をきちんと分けることでしょう。ここまでが獣医師の範ちゅう、ここから後は動物看護師に聞いてくださいという具合に、きちんと分けるのです。こうすると、待ち時間の短縮につながるのではないでしょうか。飼主さんのご都合、病院の事情、緊急性の有無などをつねに考慮することが大切だと思いますね。

左から、瀬戸晴代さん、中井江梨子さん、村尾信義さん

院内教育のよい方法、あるべき姿とは

会場から　当院の動物看護師の知識や技術をもっと向上させたいのですが、毎日の業務に追われるばかりで、学習がおろそかになっています。新人を含めた院内スタッフ教育のよい方法について、ご意見を伺いたいのですが。

大谷　当院ではVTミーティングを定期的に、もっとも時には不定期になってしまうこともあるのですが、昼休みに動物看護師同士で行っています。その場で、今度はこういうことをしよう、という話し合いを持つようにしています。

春に新人が入ってくると、さてこれからどうやって勉強してもらえばよいだろうか、という状況だと思います。当院では「シミュレーション」すなわち、現実のモデル状況を設定した上で試行してみることを行っています。電話応対などでも、先輩が飼主さんの役になった上で、新人に対して「こういった風に話していくといいよ」という感じで練習をします。それから、新人が先輩の後ろに付いていろいろ覚えたり、あるいは、新人スタッフに先輩が付き添って教えたりとか、そういったことを繰り返していきますね。

私の新人時代を思い出してみると…　院長と婦長がいるところに、私だけが入ってきたという感じでした。先輩がいなかったんですね。ですから私は、つねに院長と婦長の作業の後ろに、ひよこのようにくっついて、「いま何やってるんだろう」「どうやってやるんだろう」と思いながら見ていました。

私は人前で話すのがすごく苦手なので、いつも真っ赤になって話せなくなっちゃうんです、手に汗握っちゃって。私がわぁわぁしている時は、いつも婦長が横から、「あせらずに、患者さんにこういう風に言うのよ」という感じで、助け舟でメモを渡してくださったり。そうした時に「あぁ、こうした時にはこういった対応をすればいいんだ」ということが分かりました。あとは、例えば避妊手術の説明だったら、「こういう風に説明するといいんだ」というのを婦長の後ろにくっついて聞いて、何しろ覚えました。

ですから後輩たちにも、先輩の後ろにとにかくくっついて、いま何をやっているのか、どうしてこういうことをしなければならないのか、それをよく汲み取るようにねって言うんですね。でも、押し付けて覚えさせようとするのは絶対によくないと思います。私の経験からすると、そうやっても結局覚えられません。いくら「こういう風にやるのよ」って言っても、聞くそばから抜けちゃうんですね。

私も自分がミスを犯した時には、「あぁ、これではいけないんだ」っていうことを、その場で学習して覚えてきたつもりですが、最低限教えたあとは、新人が自分の中で問題意識に目覚めるように誘導するのが、先輩の役目じゃないかなという気がしています。もっとも新人自身の感性にもよるのでしょうね。

村尾　当院では動物看護師が12名、加えて受付が2名います。当院でもVTミーティングを、いろいろと工夫しながら行ってきました。本当に大変で、なかなか

思うように行かない部分もあると思います。しかし一番大切なのは、「思うようにいかないことを知るのも、大事なことだ」ということではないでしょうか。効果が上がるかどうかは、やってみなければ分からないですよね。様々な試みを試行錯誤しながら行う中で、互いにコミュニケーションをとりながら、一人一人が伸びて行くことがすごく大事だと思っています。

スタッフ育成にあたっての私の心がまえとしては、「やってみせ、言って聞かせて、させてみて、ほめてやらねば、人は動かじ」という山本五十六の言葉がありますが、まさに先ほど大谷さんが言われたように、上から押し付けるのではなくて、どういったものなのかを、まず先に自分が実際にして見せるのですね。そうしながら、言って聞かせるわけです。そして次はやってもらう。その時に出来たらしっかりと褒めてあげる。そうしたことを繰り返すうちに、自ずと信頼関係が生まれてきます。その信頼関係と共に歩めば、必ずよい効果が出てくると思います。知識や技術面での向上はその後から必ず付いてきます。人が人を受け入れるということを、上に立つ人も下にいる人も、互いに尊重し合いながらやって行かねばならないと思います。私はそのように心がけています。

司会　大谷さんの発言の最後に、「感性」という言葉がありました。看護という職業にはまさに感性が必要です。感性とはある程度、その人の生い立ちの中から、そして、周りの人々との関わりの中から育ってくるものですね。ですから、よい人々に囲まれて恵まれて育つと、感性豊かな人になるのでしょう。

しかし感性には、トレーニングして努力して磨くという面もあるのでしょうね。いつも私は当院の動物看護師に、「話す相手の方が自分の鏡だから」と言います。自分の映り方が悪ければ自分がおかしいということになります。そういった感性を育てていくということが、勉強以前に必要なのではないでしょうか。

効果はどこまで期待できる？
——パピーパーティ、しつけ教室

会場から　パピーパーティや犬のしつけ教室にとても興味を持っています。こうしたことを行う時の注意点、行ってみてよかった点、悪かった点などを教えてください。

大城　動物行動学については、ここ数年で、非常に注目を浴びるようになりました。多くの動物病院で、パピーパーティ、しつけ教室、あるいは問題行動の矯正科などが設けられるようになりました。

当院では、しつけ教室を始めて10年になります。かつてに比べると、インターネットや書籍などで、しつけの重要性について多く取り上げられるようになったので、いまでは飼主さんの側も、多くをご存知の場合が増えました。でも、頭では分かるのだけれど、では実際に「どうやってしつけるの？」となった時に、行動が伴わない方がほとんどです。そういった方に、少し手を添えてあげることによって、飼主さんと私たち動物看護師、ひいては動物病院との間につながりや信頼関係が生まれます。

会場からも盛んに意見や質問が出された

一方でパピーパーティに関しては、もちろんすごくよい面もあると思いますが、技術が伴わない段階で行うことによって、非常に臆病な動物が、余計に動物嫌いになったり人嫌いになったりする例を実際に多く聞いています。ですから、獣医師や先輩の動物看護師、行動学の専門家も加わった上で行うのがよいでしょう。なお、動物行動学を学ぶことで、病気の発生を抑えることもできるでしょう。

井上　当院では、あえてパピーパーティはしていません。理由としては、ワクチンを確実に打ってある同じ年齢、同じ月齢くらいの子犬が集まらないからです。年齢や月齢がまちまちですと、発達段階が違いますので、一緒にすると怖がったり、あるいは、けんかになったりしてトラブルが多くなるからです。

しつけ教室は無料でしています。なぜ無料かというと、アフターケアのお約束が中々できないからなんです。興味を持って、最初の1～2回くらいは参加してくださっても、その後、きちんと来てくださらないことが多いからです。

しつけ教室というのは、最初は「この年頃では、こういう発育の仕方ですから、こういう点に気をつけたらいかがですか」ということから始まって、お家の様子を聞きながら、まさにマンツーマンで行うものなんですね。決まった型にはめられないんです。家庭の環境が全部違いますよね。家族構成、あるいはその方の職業、経済的事情まで関係することもあります。しつけは、単純にはできないものです。

しつけに関しては、ノウハウを覚えるというよりも、犬とはどんな動物なのか、あるいは人とはどんな生き物なのか、といった基本的な認識から始まると思います。その上で例えば、家族に子どもがいる場合の対処はどうか。子どもといっても、中学生、小学生、幼稚園児、赤ちゃんでは各々違うようです。また、若い女性が飼う場合であればどのような点を考慮するか、という具合に、あらゆる事柄を考慮しないと失敗します。したがって、パピーパーティやしつけ教室は、ある面では華やかではあるのですが、リスクも含んでいると思います。そこを十分気をつける必要があるでしょう。

スキルアップのための効果的学習の試み

鈴木　私たちは、山梨県の動物病院の動物看護師同士で集まって、毎月１回の勉強会を続けています。東京などで行われる講演や学会などに参加したくても、時間や費用が自己負担だと、参加するのが難しいという現実があります。そういった悩みを何とかして解決するために、地元で勉強会を行えないだろうか、と思ったのがきっかけです。

動物看護師として向上するためには、日々勉強を続けることが大切だと思います。勉強することによって自分に自信がつき、自信がつくことによって、自分の仕事への誇りが持てるのではないかということで、勉強会を「Pride & Confidence（プライド アンド コンフィデンス）」と命名しました。共に自信と誇りを身に付けようという目標を持って、勉強会を続けています。この活動を始めてまもなく１年になります。

（編注：この会の運営詳細について報告された論文がp35に、また、活動１周年記念の報告記事がp39に掲載されています）

会場から赤池久恵様（赤池ペットクリニック）　勉強会の継続に伴って、病院間での横のつながりも出来つつあるようです。こうした点も大切にしながら、技術や知識、そして気持ちの面でも、一歩ずつ向上して行きたいと思っています。

瀬戸　当院では、動物看護師としての専門性を追究することを目標としています。各自がテーマを見つけて、当学会で発表することを励行しています。資格取得についても当院として義務づけていて、当院就職の際に資格を取ることを条件としています。

動物看護師として当院に就職して最初の３か月は研修期間です。その間は課題が出されたり、あるいは１か月単位で段階ごとの目標を設定しておいて、それを一つずつ達成して行きます。当院でのスタッフ教育は、すべてマネージャーがプランを立てる形で指導を行っています。

私も大変でしたが、学会発表にしても、回数を重ねながら少しずつ頑張ってきたという感じですね。その繰り返しで、やっとここまでたどり着いた気がします。マネージャーの指導を受けて少しずつ頑張れたので、すごく有難いと思っています。でも受身だけではなくて、自分でも成長するという意志をしっかり持って歩まねばならないと思います。

動物看護師として成長するための心がまえとは

会場から　私は帝京科学大学アニマルサイエンス学科１年生で、動物看護師志望です。私が在籍する学科では、動物看護師、犬の訓練師、動物園や水族館の飼育係などの志望者が一緒に勉強しています。しかし動物看護師として就職した時には、即戦力では専門学校の卒業生に劣るかもしれません。自分なりの得意分野を持つべきだろうかとも考えるのですが。

大城　専門学校で動物看護を専門に学んできた方だけが、動物看護師として優れているかというと、もちろんそのようなことはありません。大学などで動物行動学や、しつけ、栄養学などについてしっかりと学んできた方を、動物看護師として迎えた場合には、逆に私たちが教えられる部分がたくさんあります。そうした方に、ぜひ動物看護の世界に入っていただきたいと思います。

井上　動物看護の専門学校を出ているかどうかは、関係ないと思います。たしかに、そうした学校でよく勉強されてきた方は、当然知識的にはレベルが高いんですね。しかし、病院に入ってもすぐに即戦力にはならない場合もあります。

どの職業でも同じだと思いますが、就職後、ただちに戦力になることはあり得ないと考える方がよいと思います。就職にあたっては、ゼロからのスタートという気持ちで臨むのがよいかと思います。病院によって、動物看護師に求められているものが異なることもあります。頭でっかちになってしまうと、そこの先生の方針に合わなければさっぱり役に立たないし、かえって害になることさえあります。ですから、最初は真っ白な心で入っていただいた方がよいと思いますね。

それから、動物看護の専門学校で学ばずに、この仕事に就いた方でも、その後、地道に勉強を始めることは可能です。たしかに仕事は多忙になるのですが、何とか自分で時間を作って頑張っていただきたいですね。長く勤めている方の中には、こうした方も多いです。

結局、一番求められるのは、何でも素直にすーっと飲み込んじゃうぞという心意気だと思います。教えてもらうのを待たないでください。「勉強時間がない」と言うのと同様に、「教えてる暇もない」というのが実情です。先輩がいれば、先輩の後にくっ付いて習得しましょう。先輩がいない場合には、これはもう、何としてでも独学で勉強するしかないんですね。いまは学習書籍なども出ていますので必ず出来るはずです。

村尾　井上さんが話されたとおりだと思いますね。当院でも、動物看護師の経歴は様々です。実はここに答えがあるんですね。やりたいと思ったことを真剣にやれば、必ず道は開けます。結局は自分次第です。それだけは間違いないので頑張ってください。

﨑山　学校で学ぶことと実地はまったく別です。切れば血が出るし、出てくるものは出てくるし。自分が見ている前でどんどん状況が悪化して行って、どうにも止められないこともありますし。大切なのは個人のやる気、モチベーションですね。それから一つ私が思うのは、獣医師に教わることはもちろん欠かせませんが、

左から、池田千佳子さん、大城朋子さん、小松千江さん、中俣由紀子さん

それだけというのは、そろそろ卒業すべきではないかなと思います。自分の力で学んで、自立して、動物看護師としてプロ意識を持ってやっていく。それが今後は問われると思います。皆さんに頑張っていただきたいです。

司会　私個人の意見ですが、動物看護師として就職する前、学生時代などに、動物に関する様々なテーマを学ぶなどして、視野を広く持っていただきたいですね。そして就職後は、「自分は動物についてのプロになるんだ」という姿勢で仕事に向かうと、よりいっそう自分の仕事に集中できるのではないでしょうか。

特別な人なんていない！
――動物看護師一人一人の努力が大事

会場から　私はヤマザキ動物看護短大の１年生です。パネラーの皆さんは、とても経験豊富な特別な動物看護師さんでいらっしゃると思います。そこで、ちょっと抽象的な質問なのですが、これまでに、例えば勉強を頑張った、あるいは人との出会いを大切にされたとか、特別に意識してこられた想いを何かお持ちでしょうか。またそうしたことは、動物看護師の仕事にどのように結びついているでしょうか。

村尾　特別な人なんてどこにもいないでしょう。誰もが動物病院に就職してゼロからスタートするわけですが、私もまだゼロなんです。それは、私自身がまだゼロだと思っているからです。せいぜい、やっと走り出したかな、という感じです。そういう気持ちを持っていることが大事なのかなと思います。自分は特別ではないし、むしろ特別な存在じゃないからこそ、やらなければいけないことがたくさんある。そうするうちに、水面下では見えなかったものが確実に見えてくると思います。それを僕は信じています。

中井　いま私は、特に眼科看護の勉強を続けています。それは、動物の医療をもっと詳しく勉強した上で看護に携わりたい、より責任をもった上で動物たちと接したいと思うからです。皆さんも私もきっと同じで、いつも「自分はこのままでよいのか」ということを一人になると考えると思います。自分のしていることはこれでよいのか、他院の実情はどうなっているんだろうとか、さらに大きく言えば、世界的な動物看護のレベルで見た時に自分がしていることはどうなんだろう…または、５年後10年後の自分はどんな仕事をしているんだろう…　ということも考えますよね。大切なのは、そうした中で自分は何を見つけられるか、何に着眼できるかという問題意識の持ち方だと思います。

井上　私も含めて特別な人なんていません。でもそうは言っても、例えば壇上にいるパネラーの皆さんは、自分の中の自信を基にして、いまこの場にいるのだと思います。大切なのは自覚でしょうか。

私自身は、自分のマイナス面をプラスに変えなきゃいけないと思って、日々努力しているつもりです。私は動物看護の専門学校を出ていません。したがって自分で、「私は先に応用から入ってしまった。基礎が弱い、基礎がなっていないな」ということが分かるんです。ですからもっと基礎の勉強をしなければならないけれど、コツコツ学ぶことがなかなかできない、というのは私の欠点ですね。自分の欠点は分かっているつもりです。でも自分の長所も分かっているつもりです。例えば、私は教師をやってきた後にこの仕事に就いた。だからその経験の中で生かせることは、いまの仕事に生かそう、という具合です。

大城　私は子どもの頃からずっと動物が大好きでしたので、動物看護師の仕事に就きました。そこで、誰でもそうだと思うのですが、大好きなことって辞めませんよね。私の場合は、ひたすら“犬オタク”なんです(笑)。だったら例えば、「私は犬について、獣医師さんよりたくさんのことを知っている」でもよいし、または犬のトレーニング方法について、「きっと獣医師さんは知らないだろうけれども、こんなマニアックなことを知っている」でもいいと思うんです。他に例えば「私は鳥についてだったら誰にも負けない」とか。何でもよいので、何か一つについて自信が持てるとよいと思いますね。

例えば爪切りでもいいんですよ。爪切りって難しいですよね。血を出さないように、かつきれいに切ってあげて、加えて、つるっとした仕上がりになるように、上手に切るのって難しいですよね。そこで例えば、入ったきた新人の子が例えば“爪オタク”で（笑)、とても上手に切れるのであれば、それは最高なんです。その病院の宝です。

井上　実践的な面から一つアドバイスしますね。動物看護師として勤め始めたら、忙しいので時間がなくなります。ですから、ぜひ学生時代のうちに、動物以外のことへも広く興味や関心を持ってください。なぜかというと、動物看護師は動物を扱いつつ、飼主さんを相手にする“サービス業”という側面があるんですね。自分がいろいろな趣味を持って、様々なことへの好奇心が旺盛だと、いろいろな飼主さんの持つ趣味とちょっとずつ合ってゆくので、会話がとっても弾むんです。飼主さんとの何気ない会話から、飼い方についての情報を知ることもあります。趣味が同じで話が弾むと、その飼主さんと仲良くなれることもありますよ。

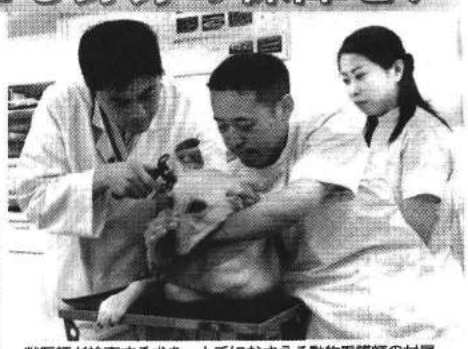
おわりに

会場から本好茂一先生（日本獣医畜産大学名誉教授）

東京新聞

動物看護師にも身分の保障を！

ペット医療の高度化にともない、獣医師を補佐する動物看護師の役割も重要になっている。だが人間の看護師と違って公的資格はなく、病院によって仕事の内容や範囲はさまざまだ。知識と経験を積んだ動物看護師も増え、職域の拡大と身分保障、そして社会的認知を求めている。



獣医師が検査する犬を、上手におさえる動物看護師の村尾さん（中央）ら＝川崎市の「王禅寺ペットクリニック」で

獣医師と連携とれる法的体制づくり急務

7年ほど前。地方の動物病院に勤務していた動物看護師の村尾信義さんは、入院中のシーズー犬の容体が急変したことに気がついた。獣医師を呼んだが、外来の処置で手が離せない。現場経験3年になる村尾さんには葛藤が生じた。

「自分が気管内挿管をして気道を確保すれば助かるかもしれない。自分にはできる…！」

だが、やらなかった。犬は死亡した。

「死んだのは処置が遅れたせいではなく、既に重篤な状態だったからです。でも、現場で同じような葛藤を覚えている動物看護師は多いでしょうね」

＊大学に学科創設

近年、ペットは人間に近い高度な医療を受けるようになった。動物病院も増え、全国に1万近く。その医療現場で獣医師を支えるのが動物看護師で、現在、1万5000人とも2万人ともいわれている。

人の看護師は、保健師助産師看護師法で規定された国家資格で、医師の指示があれば多くの医療行為を行える。だが動物看護師にはまだ公的資格もなく、職域も定義されていない。動物看護師の専門学校などが独自に認定証を発行しているのみ。最近は、帝京科学大や日本獣医畜産大など、大学にも動物看護師教育を行う学科が設立され、ますます人気は高まっている。

こうした中、日本動物看護学会は2年前、「統一基準」としての認定試験を始めた。

同学会副会長の桜井富士朗獣医師は話す。「動物看護師は、村上龍氏の『13歳のハローワーク』でも獣医師の次に詳しく書かれ、青少年からの問い合わせも増えています。しかし、現在では、どこまで獣医療行為をやるかは、病院の院長次第。このままでは、病院で何か事故が起こった場合、動物看護師が訴えられることもありえます」

＊幼児看護に近い

同学会が2月に都内で開いた座談会「ティーチ・イン」では、全国の動物看護師が現場の仕事の多様性を報告した。学会理事で、人の看護師から動物看護師になった西谷孝子さんは、「小さく、口の利けない動物の看護は、幼児や障害児看護に近い。スペシャリストとして誇りを持つべきだ」と話し、「動物看護学の確立のため、的確な知識と技術を持つ動物看護師を認定する資格制度が必要」と訴えた。

日本獣医師会など専門家の間でも、こうした認識は高まっている。農林水産省が1月から始めた「小動物医療に関する検討会」でも、委員から動物看護師の問題に要望が出された。

＊　＊

村尾さんは現在、川崎市の動物病院で、看護主任を務めている。獣医師12人、看護師12人の24時間体制の大規模な病院で、獣医師の指導下で、挿管など重要な処置も行っている。

同病院の川瀬英嗣院長の、「医療の現場にいる者はみな、ある程度の緊急処置ができるべきだ。それが飼い主から求められている」との考えからだ。

だが、今の村尾さんは、医療技術よりも、もっと深いものを目指している。

「医療はチームワークだということです。法的整備だけではなく、獣医師や動物看護師が互いの職を認め合い、いい仕事ができる体制を病院がつくることが大切です」

（文・宮畠子、写真・小河慶一郎）

日本動物看護学会が開いた「ティーチ・イン」＝東京都豊島区で

東京新聞 2005年3月30日夕刊「ハローペット」より　転載許可済

本日、皆さんの話を聞かせていただき、一つ一つのご意見に非常に理念があると感じて驚きました。動物看護師の皆さんお一人お一人が、今後もしっかりと学ばれ、その成果をどんどん発表されることを期待します。当学会のいっそうの隆盛にも期待します。そして同時に、動物看護に関する様々な動きに対する発言力をつけて行かれることを望みます。

そうした努力が結果として、動物看護師の職域の拡大と身分の安定をもたらすものと確信します。またそれに伴って、もし仮に“動物看護師は人材派遣的な使い回しでかまわない”とする獣医師が存在するとすれば、その意識改革も迫られることでしょう。わが国の獣医臨床に対する社会からの必要性は、ますます高まりを見せています。獣医師と動物看護師が力を合わせることによって、これがよい形で進展することを望みます。

司会　貴重なお言葉をいただき、ありがとうございます。本日は、現役の動物看護師の皆さんに、会場とのやりとりも含めて、たくさんの様々なご意見を話していただきました。

私個人の意見としては、動物看護師が獣医療を構成する一員となる上で、獣医師がカルテに診療記録を残すように、動物看護師は自らが行っている動物看護をきちんと記録に残すことが欠かせないことであり、動物看護についての研究はここから始まると思います。

また、当学会の「動物看護師」資格認定者の方は、「看護レポート」の執筆や「例会発表」「学会誌投稿」などを、積極的に行ってくださることをお願いするものです。私たち動物看護師が力を合わせれば、わが国の動物看護の領域はもっと発展して行けますし、日本動物看護学会も力も付けて行くと思います。本日は長い間ありがとうございました。

当日は他にも多くの発言がありましたが、誌面の都合上、すべてを掲載できないことをお詫びいたします。　文責：当学会事務局

■今号の論文（計4報）

◆学会の定義をあらためて確認します。辞典には、「学者（編注：学ぶ人全般の意）相互の連絡、研究の促進、知識や情報の交換、学術の振興をはかる協議などの事業を遂行するために、組織する団体」（広辞苑）とあります。
つまり日本動物看護学会とは、動物看護の発展を願う会員の皆さんが、積極的に交流しあい、お互いの研究成果や意見を交換するための開かれた場です。
その具体的な手段が、＜例会での発表・報告＞＜学会誌での論文掲載＞などです。

◆＜例会での発表・報告＞は、各回開催に先立ち募集を行います。事前審査はありません。
p78～79にて「第20回例会」の発表内容を紹介していますので、ご参照ください。

◆＜学会誌での論文掲載＞は、査読（さどく）（識者２名による、内容審査と疑問点指摘などの指導）後の「投稿者自身による修正・再提出→再審査」を経て掲載されます。
当学会誌の査読は、「落とすため」ではなく「よりよい内容で掲載するため」に行います。
動物看護の現場における「問題意識や工夫事例」「学習や研究の成果」などをまとめた上で、ぜひ投稿されてください。次ページより掲載されている各論文が、執筆方法やまとめ方の手本になると思われます（p92に投稿規定を載せていますが、投稿方法などの詳細は学会事務局までお問合せください）。

◆動物看護研究を互いに発表・報告して、成果を共有し合うこと――その集積こそが、わが国の「動物看護学の確立」「動物看護師の地位向上」ひいては「獣医療の進展」をもたらします。
なお、当学会誌では引き続き、「ヒューマン・アニマル・ボンド（Human Animal Bond：HAB／人と動物の絆）」研究についての、あらゆる学問領域からのご投稿もお待ちしています。

短報

帝王切開におけるVTの役割

大矢純子[1)]、石田美奈子[1)]、岡田かおり[2)]、阪口貴彦[2)]、水野雅夫[2)]、岡田みどり[2)]、山村穂積[3)]（Pet Clinic アニホス）

Role of Veterinary Technician at Cesarean Operation

Junko Ohya, Minako Ishida, Kaori Okada, Takahiko Sakaguchi, Masao Mizuno, Midori Okada, Hozumi Yamamura

はじめに

母犬が短時間の間に数多くの子犬を産むことから、昔から犬は安産の守り神とされていた。しかしながら、最近になって中・大型犬に比べ、一度の出産で数匹しか産まない小型の愛玩犬の飼育頭数が増加している。その結果、この小型化が進んだ母体の子宮内では、少数の胎子が過度に発育し分娩が困難になる場合や、運動不足、肥満、老齢出産などが原因となり子宮収縮力が低下（微弱陣痛）し、難産に陥るケースが増加している[1) 2)]。当院においても、犬の難産、特に帝王切開の適応症例に遭遇する機会が増えており、VTによる迅速な術前準備や胎子の蘇生を行う場合が多くある。

今回われわれは、当院における過去の帝王切開の発生状況および飼主に行った意識調査の結果をもとに、帝王切開におけるVTの役割について検討を行った。その結果、求められるVTの役割についていくつか示唆を得たので報告する。又、同時に当院で行っている蘇生方法もあわせてここに報告する。

❶研究目的

現在の帝王切開の現状を把握し、今後のVTの役割について検討した。

❷研究方法および結果

1）当院での帝王切開の発生および胎子の死亡状況

1995年～2003年7月までに帝王切開を行った症例数は犬66件、猫16件、平均年齢は犬2.7歳（範囲6カ月～8歳）、猫1.5歳（範囲8カ月～4歳）であった。犬種別では（**図1**）、ミニチュア・ダックスフンド33頭、チワワ7頭、マルチーズ4頭、ヨークシャー・テリア4頭、パピヨン4頭など小型犬の比率が高い結果となった。年代別では（**図2**）、1995年～1997年と1998年～2000年を比較すると、ミニチュア・ダックスフンド

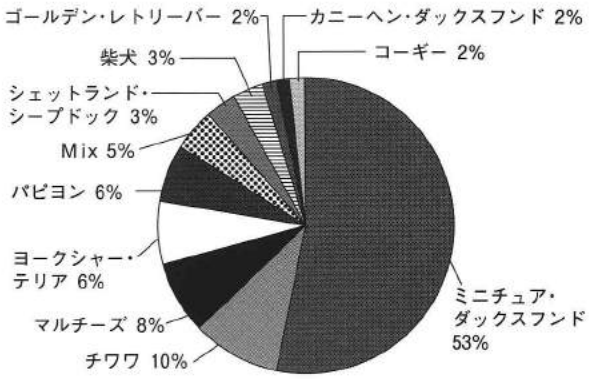


図1　当院における帝王切開の犬種別内訳

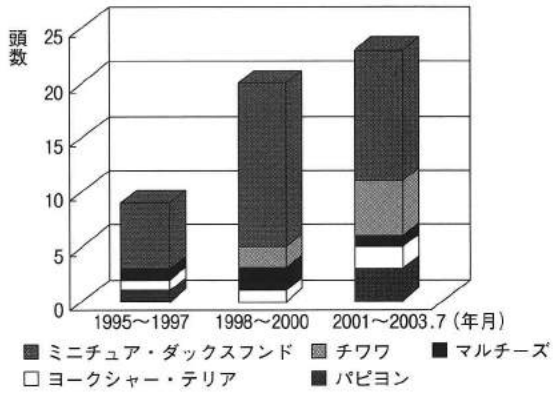


図2　当院における帝王切開の犬種別内訳―年代別比較―

1)Pet Clinic アニホス　動物看護師
2)Pet Clinic アニホス　獣医師
3)Pet Clinic アニホス　獣医師・院長
〒174-0072　東京都板橋区南常盤台1丁目14番11号

が6頭から15頭へ増加しており、1998年～2000年と2001年～2003年7月までを比較すると、チワワが2頭から5頭へ増加していた。帝王切開を行った犬の症例のなかで、胎子や新生子が1匹以上死亡した症例犬は17例（約25%）であった。またその中で2回帝王切開を行った症例犬は4例で、そのうち2回共に胎子、新生子の死亡した症例犬は3例（75%）であった。

2）出産に対する飼主の意識調査

帝王切開を経験した飼主へのアンケート調査の結果を、**表1**にまとめる。

表1　帝王切開を経験した飼主へのアンケート結果

Q.（質問）	A.（回答）
出産させた理由	子供がほしかった。経験させてあげたかった。子孫を絶やしたくなかった。
出産回数	1回→6人　2回→2人　3回→1人 4回→1人
帝王切開数	1回目→7人　2回目→3人
参考図書	読んだ→9人 読んでいない→1人（人から聞いた）
難産犬種	知っている→9人（チワワ、ブルドック、パグなど）　知らない→1人
妊娠診断の検査内容	分かる→8人　分からない→2人
妊娠鑑定時の胎子数	覚えていた→10人　覚えていない→0人
妊娠期間	知っている→9人　知らない→1人
出産前の体温測定の目的	知っている→9人　知らない→1人
出産前の体温下降温度	知っている→6人　知らない→4人
陣痛動作	分かる→8人　分からない→2人
病院連絡理由	分かる→7人　分からない→3人 破水しても胎子が出てこなかった。胎子がつまった。微弱陣痛。陣痛が来なかった（おさまってしまった）。
不安事項	出産後の母犬の経過と子犬の成長（母犬が世話をするか？）。 胎子の生存。胎子の異常。母犬が子犬を踏みつぶさないか？ 麻酔の安全性。癒着の心配。夜間の連絡方法。

3）妊娠中の検診と出産時の指示[1)～3)]

①交配日から20～30日目

超音波検査→妊娠の確認

②交配日から55～60日目

超音波検査→心拍動の確認

レントゲン検査→胎子の頭数、発育状態、大きさ、および母犬の骨盤の変形、狭窄等の確認

③出産に関する注意事項

以下の条件があったら飼主は動物病院に連絡して指示を仰ぐこと。

- 直腸温が37.5℃以下に低下後再度上昇するが、37.5℃以上になって24～36時間経過しても陣痛がない
- 2時間以上つづく微弱かつ回数の少ない陣痛である
- 強い陣痛があっても胎子が娩出されない
- 濃緑色の膣おりものが出た後も子犬が産まれない
- 分娩間隔が4時間以上になる
- 母犬が明らかに衰弱した、または衰弱している
- 出血など膣から異常な排出物がある
- 予定日より6日以上経過しても出産しない
- 陣痛が起きているが体温が38.5～39.1℃以上に上昇した

4）胎子の蘇生方法[2)]

①全身麻酔前準備

- 胎子蘇生用に滅菌タオル（胎子数）、絹糸、鋏、保温マット等を準備する
- 被毛は鎌状軟骨から外陰部付近まで広範囲に刈り、剃毛後ポビドンヨード、エタノールで皮膚消毒する（スリービングベイビーを防止するため、毛刈りから剃毛まではできる限り麻酔前から行い、麻酔時間を短縮させる）

②胎子の蘇生

- VTが術者の取りあげた胎子を滅菌タオルを用い受け取る
- 胎膜を顔の部位からすばやくはがす
- 臍帯を体から1～2cmの遠位部で切紮後胎盤を切除する
- 新生子の頭部を遠位にし丸い形にした手のひらで覆い、腕を上下に振る。そのときの遠心力によって気道内の液体を排除させる
- 液体が口や鼻に残っている場合は、シリンジに5～8Frのカテーテルの先を切ったものなどを付け、口の奥に入れ吸引する
- 気道内に液体が無いことを確認と共に、滅菌タオルで胎子の胸部をマッサージ（優しく圧迫、摩擦）し呼吸を促す
- 自発呼吸（胸郭の動きを見る）を確認しながら、規則正しい呼吸が維持するまで静かにマッサージ

をする

③分娩新生子の管理

・耳、口腔内、手足の指などに奇形がないか、チェックする

・性別の鑑別を行う

・規則正しい呼吸が維持されたら、清潔なタオルが入った箱に移し保温する

・母犬の手術終了後、子犬に授乳させる

・新生子の適切な温度管理を行う

・自ら母乳を吸わない子犬には介助し、授乳を促す

❸考察

当院における過去の帝王切開の発生状況の検討として、海外事情との比較をしてみた。海外の文献によれば、帝王切開の好発犬種はブルドッグ、ラブラドール・レトリーバー、ゴールデン・レトリーバー、ボクサー、ウェルシュ・コーギー、ヨークシャー・テリア、チワワ[4)5)]となっていたが、当院における帝王切開の多い犬種と相異があった。これは欧米と日本との住宅事情の違いなどから小型犬の飼育頭数が多い事が一要因と考えられた。また、JKC（ジャパンケネルクラブ）の登録件数について調べたところ、1996年度では3位だったミニチュア・ダックスフンドが1999年度には1位に上がり、1999年度では5位だったチワワが2002年度には2位に上がっていた。今回の当院の調査結果においても、ミニチュア・ダックスフンド、チワワなどの小型の人気犬種の帝王切開が多い結果となった。ただし、一般に飼育頭数が多い犬種は、相対的に帝王切開の症例数が多くなることもありえるため、当院の帝王切開の上位犬種がそのまま難産の好発犬種とはかぎらないと考えられた。

次に、1回目の帝王切開で胎子、新生子が死亡した母犬は、2回目の帝王切開でも死亡する場合が多かった。よって難産は繰り返す傾向があることを、飼主および動物病院のスタッフ双方が予期して出産に臨む必要があると考えられる。そのためにも、1回目の出産で難産であったかなど、事前に情報収集しておく必要がある。また飼主にも繰り返す傾向があることを1回目の出産の後に伝える必要がある。

帝王切開を経験した犬の飼主に対して、犬の出産および難産についての意識調査を行った結果、初めて出産を経験した飼主は10名中6名と多かった。しかしそのほとんどの飼主は、参考図書などの情報から出産について基本的な知識は得られているようであったが、重要な難産の判断基準については理解不十分な点もあった。

担当の獣医師が妊娠診断の際に、出産準備や難産の目安などについて説明を行っているが、個々の飼主に応じた対応が必要である。そのためにも今後VTに求められる役割として、飼主と同じ立場にたって疑問点を解決し知識不足を補うこと、不安な気持ちをうけとめ励ますことで飼主を精神的にもサポートしていくことなども大切であると考えられる。それには飼主ごとに担当するVTを決め、十分なコミュニケーションをとりながら良い信頼関係を築くことも必要とされる[1)]。また出産について飼主向けの手引きを作成・活用すること、出産前後の進行状況を的確に把握させること[1)~3)]、産後の授乳の介助や食事指導まで行き渡らせることなど、多くの役割を考えることができた[1)~3)]。また、夜間でも速やかに対応できる動物病院側の体制作りの必要性も感じた。

まとめ

帝王切開では、術前準備や胎子の蘇生などでVTが重要な役割を担っていることから、全員が作業手順や注意事項に精通するために、日頃からのVT教育が欠かせない。今後これらの課題をいかし、飼主が安心して出産に臨める病院の体制作りに我々VTも積極的に関わり、1頭でも多くの新しい命を無事に誕生させていきたいと思う。

参考文献・引用文献

1）Shirley Dianne Johnston（1986）『犬の繁殖産科学』（松原哲舟監修），p54～78，LLLセミナー

2）D.R.LANE/B.COOPER編（1999）『獣医看護学　下巻』（山村穂積監訳），p419～426，チクサン出版社

3）Dwight A. Gaudet, Barbara E.Kitchell(1987)『COMPENDIUM』（松原哲舟監修・小林香訳），p132～144，LLLセミナー

4）Moon PF, Erb HN, et al.(1998)213(3)『Perioperative management and mortality rates of dogs undergoing cesarean-section in the United States and Canada』,p365-369, JAVMA, AVMA.

5）Moon PF, Erb HN, et al.（2000）36(4)『Perioperative risk factors for puppies delivered by cesarean section in the United States and Canada』,p359-368,JAVMA,AVMA.

発表者の声（投稿を終えて）をp83に掲載しています

●短報●

術前準備における動物看護マニュアルの事故防止に対する効果

深井麗子[1)]、藤田理恵子[1)]、大谷美紀[1)]、佐藤亜也子[1)]、斉藤亜紀子[1)]、野原宏実[1)]、新井陽子[1)]、木村満知子[1)]、山田幸子[1)]、松沢ふみ[1)]、庄子さとみ[1)]、児矢野早紀[1)]、藤田桂一[2)]（フジタ動物病院）

Effects of animal nursing manual for the preparation of surgery

Reiko Fukai, Rieko Fujita, Miki Otani, Ayako Sato, Akiko Saito, Hiromi Nohara, Yoko Arai, Michiko Kimura, Sachiko Yamada, Fumi Matsuzawa, Satomi Syoji, Saki Koyano, Keiichi Fujita

手術を行うにあたって動物看護師は、さまざまな知識や経験を必要とし、些細なことにも注意を払って、日々変化する患者の状態を一早く把握することが必要である。そして、少しでも患者の健康に対して負に働く因子が存在する場合、できる限りそれらを回避する義務と責任がある。

しかし、複数のスタッフが術前準備を行う際、個々のスタッフ間で多少なりとも準備の手順やその内容が異なり、大きなミスにつながりかねないことがある。そのために当院では、術前準備に対するマニュアルを作成し、また日頃からの手術室の清掃や管理についてチェックリストをもとに、一覧表に示すことによって、周術期の事故や不備な点を未然に防ぐことができるようにした。

そこで今回は、動物看護師が行う術前準備のマニュアルを作成し、その効果を検討した。

❶作成した動物看護マニュアル

1）手術室の日常管理

手術室の日常管理として、日頃から十分な清掃を行い、常にほこりや汚れのない状態に維持する必要がある。無菌操作をしても手術中にほこりが舞うことや落下することにより、術野に細菌汚染を引き起こす可能性がある。

そこで無影灯、手術台、床、オートクレーブ内、および周辺機器の清掃、棚の中の整理整頓などを毎日行うほか、チェックリストをもとに週に一度、曜日を決めて手術室の清掃を行い、日常管理を行えるようにした。

2）手術室掃除リスト（図1）

当院では作成したチェックリストをもとに清掃を行っている。リストには手術台、麻酔器周辺、器具台、いす、無影灯、水道周り、オートクレーブ内、窓、ブラインド、および輸液ポンプの清掃、ならびに薬品庫や手術器具を収納する戸棚の中の整理整頓など各項目に分かれている。清掃を行った箇所にはチェックを入れるようにし、いつどこを清掃したか一目でわかるようにした。このことにより、手術室が常に衛生的に維持できるようになった。

3）手術室の術前準備（図2）

手術室の衛生管理として、手術前に各常設する機器等の清掃を行う。そして、術前2～3時間前から二酸化塩素（ゲル状）を用いて浮遊菌を滅菌し、消毒効果を期待して手術室を可能な限り無菌に近い状態にする。

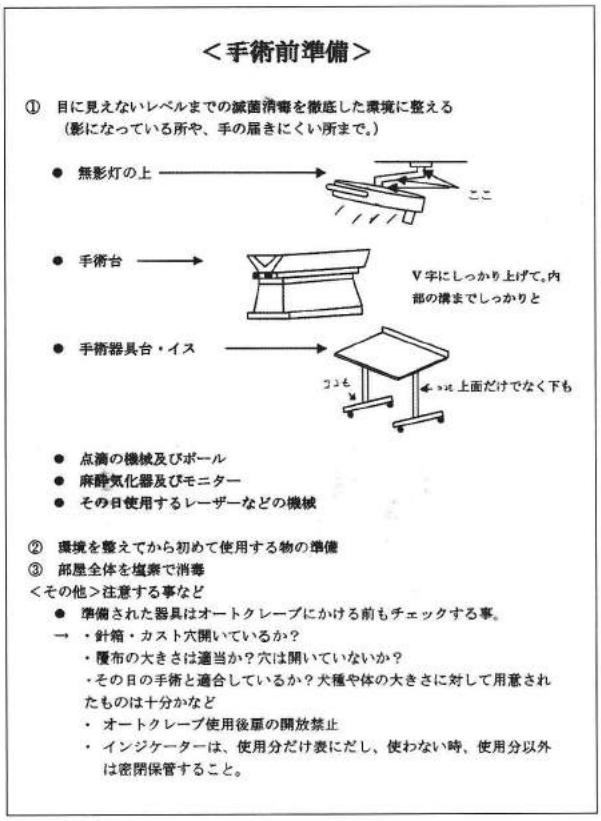
4）一般外科器具の準備（図3）

一般外科器具の準備として、各手術に必要な機器や針、ガーゼ、その他の手術材料を用意するために、獣医師の指示によって事前に作成した一覧表を基に用意する。一覧表には、去勢手術、避妊手術、外傷、膝蓋骨脱臼整復、開腹手術、子宮蓄膿症、および帝王切開

1）フジタ動物病院　動物看護師
2）フジタ動物病院　獣医師・病院長
〒362-0074　埼玉県上尾市春日1丁目2番53号

OPE台																		
床																		
麻酔器周辺																		
器具台																		
椅子																		
無影灯																		
エアコン吹き出し口																		
天井																		
戸棚																		
水道周り																		
蛇口先端（週1）																		
シャーカステン																		
器具棚整理																		
オートクレーブの下																		
オートクレーブ内の清掃																		
オートクレーブ内の水交換																		
窓（隔週）																		
ブラインド																		
自動ドア																		
輸液ポンプ																		
血圧計																		
電気エンジン																		
電気メス																		
吸引器																		

図1　手術室掃除リスト



＜手術前準備＞

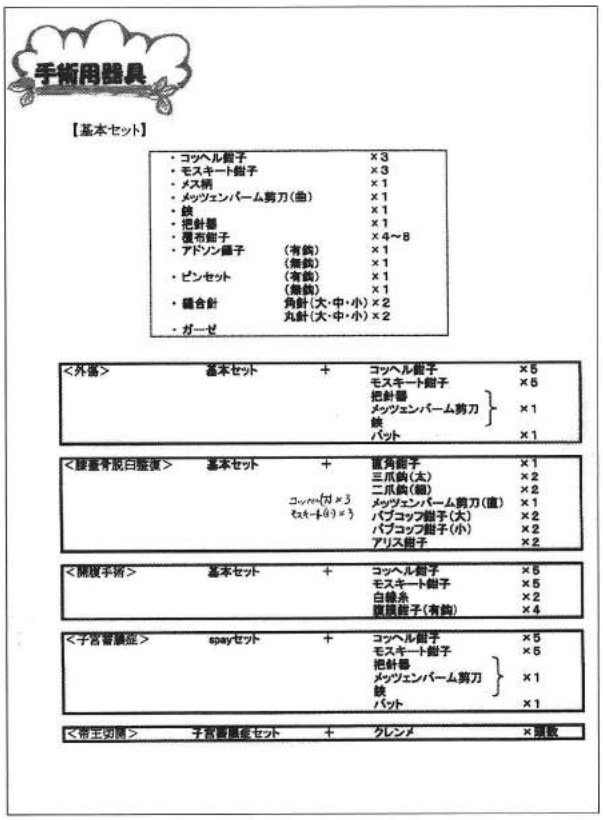
① 目に見えないレベルまでの滅菌消毒を徹底した環境に整える
（影になっている所や、手の届きにくい所まで。）

- 無影灯の上 → ここ
- 手術台 → V字にしっかり上げて。内部の構までしっかりと
- 手術器具台・イス → ここも 上面だけでなく下も
- 点滴の機械及びポール
- 麻酔気化器及びモニター
- その日使用するレーザーなどの機械

② 環境を整えてから初めて使用する物の準備
③ 部屋全体を塩素で消毒
＜その他＞注意する事など
- 準備された器具はオートクレーブにかける前もチェックする事。

→ ・針箱・カスト穴開いているか？
・腰布の大きさは適当か？穴は開いていないか？
・その日の手術と適合しているか？犬種や体の大きさに対して用意されたものは十分かなど
・オートクレーブ使用後扉の開放禁止
・インジケーターは、使用分だけ表にだし、使わない時、使用分以外は密閉保管すること。

図2　手術室の術前準備



手術用器具

【基本セット】

・コッヘル鉗子		×3
・モスキート鉗子		×3
・メス柄		×1
・メッツェンバーム剪刀（曲）		×1
・鋏		×1
・把針器		×1
・腹布鉗子		×4～8
・アドソン鑷子	（有鈎）	×1
	（無鈎）	×1
・ピンセット	（有鈎）	×1
	（無鈎）	×1
・縫合針	角針（大・中・小）	×2
	丸針（大・中・小）	×2
・ガーゼ		

＜外傷＞	基本セット	＋	コッヘル鉗子	×5
			モスキート鉗子	×5
			把針器	
			メッツェンバーム剪刀	×1
			鋏	
			パット	×1

＜膝蓋骨脱臼整復＞	基本セット	＋	直角鉗子	×1
			三爪鈎（太）	×2
			二爪鈎（細）	×2
		コッヘル（大）×3	メッツェンバーム剪刀（直）	×1
		モスキート（小）×3	バブコップ鉗子（大）	×2
			バブコップ鉗子（小）	×2
			アリス鉗子	×2

＜開腹手術＞	基本セット	＋	コッヘル鉗子	×5
			モスキート鉗子	×5
			白線糸	×2
			腹膜鉗子（有鈎）	×4

＜子宮蓄膿症＞	spayセット	＋	コッヘル鉗子	×5
			モスキート鉗子	×5
			把針器	
			メッツェンバーム剪刀	×1
			鋏	
			パット	×1

＜帝王切開＞	子宮蓄膿症セット	＋	クレンメ	×適数

図3　一般外科器具の準備

などに分かれている。それぞれの手術に対し、器具を準備する際の注意事項を記入し、ミスを防ぐようにしている。

そして獣医師の確認後、器具は覆布でまとめ、カストに入れ、オートクレーブにて滅菌を行う。器具はできるだけ前日のうちに用意しておき、当日は患者の体の大きさや状態に合わせて、さらに必要なものがあれば用意する。

5）術衣と覆布・タオルの準備

術衣と覆布の準備として、洗濯を終えた術衣やタオルはクリーナーで表面に付着したゴミを丁寧に取り除き、ガス滅菌を行う。手術で使用するタオルは、診察などで使用するものとは区別し、感染動物あるいは汚物などに触れないようにしている。手術当日はすでに滅菌済みのものを必要な枚数分用意する。

6）手術に必要な備品の準備

手術台付近に、いつでも早急に気管チューブを挿管できるように次のものを準備する。保温マット、タオル、保定用ひも、気管チューブ、キシロカインスプレー、舌鉗子、カフ用の注射筒、開口器、尾を固定するための鉗子など。

7）手術器具台の準備

手術器具台の準備として、アルコールにて放射線状に円を描くように手術器具台の上の消毒を行う。消毒を行った後は、器具台に触れないようにする。手術開始前に、滅菌を終えた器具をカストに入れたまま取り出し、器具台の上に用意し、術者のグローブを中に入れておく。

8）周辺機器の準備

周辺機器の準備として、必要に応じて内視鏡、超音波メス、半導体レーザーなどの用意を行う。それぞれ必要な備品をそろえ、滅菌が必要なものは事前に済ませ、手術の際にすぐに使用できるように準備しておく。次に麻酔器、呼吸器装置、モニター機器、必要であればCO_2レーザーなどを準備する。麻酔薬の量、呼吸器装置の接続、モニター機器のセットが確実にされているかどうかの確認を行う。

続いて輸液ポンプ、シャーカステン、必要であれば吸引器などを準備する。輸液ポンプには必要な輸液をセットしておき、シャーカステンには手術で必要なレントゲンをあらかじめ用意しておく。吸引器を必要とする手術には合わせて、洗浄液を保温するなどその他の備品も用意する。

9）その他の器具の準備

整形外科の手術などで使用するプレートや電気ドリル、その他のドレーンやパンチなど、手術に応じて必要な機械や器具は、すでにガス滅菌済みのものを用意し、手術開始と同時に使用できる状態にしておく。

10）その他の必要備品の準備

その他の必要備品の準備として、術帽、マスク、手拭用のペーパータオル、手術用のグローブ、滅菌縫合糸、メス刃、覆布などを用意する。

11）患者の準備と消毒

＜準備＞

①患者の準備と消毒として、最初に処置室において手術部位をバリカンにて丁寧に剃毛を行う。そして、留置針を挿入するための用意、保定を行い、血管を確保する。患者の状態により、手術前より輸液を行う。

②鎮静麻酔の導入を行い、気管チューブを挿管する。この際、動物看護師は準備と保定を確実に行う。

③固定用のヒモにより患者を手術台で固定する。手術に応じて体勢を変え、必要であればタオルや砂袋を使用する。

④患者に対しモニターのセットを行う。心電図モニター血圧計、体温計、パルスオキシメーターなどをセットする。

＜消毒＞

最初に、術野にチオ硫酸ナトリウムを混合させた70％イソプロピルアルコールによる消毒を行う。切開予定部位を中心として外側に円を描くようにして消毒を行うようにする。次にイソジン®液による消毒を3回繰り返し行う。最後に再び上記のアルコールによる消毒を行う。これは、時間が経過するとイソジン液の色が消失しないため、イソジン液と上記アルコールによる消毒は連結して行う。

12）殺菌装置の準備

殺菌装置の準備として、電源を入れ、手術開始十数分前より殺菌水を流水しておく。合わせて、ヒビテン® 洗浄液や薬用石鹸の補充および確認を行う。

13）術衣・手拭の準備

術衣・手拭の準備として、すでに滅菌済みのものを開封し、取り出しやすいように準備しておき、手指を洗浄後、滅菌タオルにて手指を拭き、すぐにできるように用意する。

14）術者と助手の準備と消毒

術者と助手の準備と消毒として、術帽、マスクの装着を行い、常法に従い手指の消毒を行う。そして、術衣を着用し、滅菌手術用グローブを装着し、手術を開始する。

❷成績と考察

動物看護師の仕事において、手術室の清掃を定期的に適切に行うことは、衛生上、大変重要なことである。週に一度、曜日を決めて清掃を行う際、チェックリストをもとに清掃を行うことにより、手術室を効率的に手際よく、短時間で清掃することができるようになった。リストを見ることで、清掃したか否か一目で分かり、手術が多く予定されている日でも、合間を見て清掃を行いリストに記入しておくことで、清掃の進行状況が確認でき、常に衛生的に維持できるようになった。

一般外科器具を準備する際には、各手術に必要な器具を一覧表を参考にして行うことで、間違いなく用意することができる。この効用として避妊手術の器具を1セットとし、そのセットを基本にして帝王切開や、子宮蓄膿症など手術の内容に応じて、さらに必要な器具を用意するなど、準備に慣れていない者でも手術の内容を理解しながら用意できるようにしている。

器具の本数、大きさ、および種類を確認し、ただちに滅菌を行う。前日のうちにできる限り用意しておき、当日はいつでも手術に入れるように準備しておくことが大切である。手術器具や機材や周辺機器など、手術当日に必要なものを的確に用意できるよう、日頃から整理整頓を心がけると共に、患者に対しても丁寧な処置を施す必要がある。

例えばバリカンを用いて剃毛を行う場合、あらかじめ剃毛する範囲を確認し、皮膚に損傷を与えないように、丁寧に行う必要がある。また、留置針を挿入する際は、患者が動かないように適切に保定し、スムーズに挿入できるよう、一連の流れを把握することが必要である。手術室に移動してからも、気管チューブを挿入し、患者を手術台に固定し、モニターなどをセットする一連の作業を確実に行うことは言うまでもない。

それぞれ必要なものを不備なく準備し、丁寧に術前処置を行い、手術に支障をきたさないよう、細部にわたり注意を払うことが大切である。これらの事を怠ると、患者に対して二次感染や怪我などの危険を及ぼすだけでなく、われわれに対しても危険が及ぶ可能性がある。

そのような状態にならないように当院では、すべての動物看護師が術前準備を確実にできるように可能な限りマニュアルを作成した。しかし、大切なことは全てをマニュアル通りに準備するのではなく、必要に応じて準備する器具の種類を変え、適応させていくこともあるので、経験を十分に積み、場を踏まなければならないこと、スタッフ間の連絡をスムーズにしておくことが大切であると実感している。

今後とも、自分自身がこの手術室で手術してもらいたいかという問いかけに「はい」と言える手術室環境を作るべく努めていきたいと考える。

参考文献

1）石田卓夫・北村和泉 監修(2003)『動物看護士のための 知っておきたい基礎知識』第3巻，p25～86，日本動物病院福祉協会
2）小宮山典寛（1993）『実践 AHT マニュアル講座』p114，インターズー
3）D.R.Lane, B.Cooper 編、山村穂積 監訳（1999）『獣医看護学』下巻，p 563～655

発表者の声（投稿を終えて）を p83に掲載しています

●短報●

オーナー向けセミナー開催後の効果と実績

中村ののみ、山道華奈、旗手恵理、菅野純子、廣中敦子、保坂真希（前田獣医科医院）

Effects and Results after Having Seminars for Pet Owners

Nonomi Nakamura, Kana Yamamichi, Eri Hatate, Junko Kanno, Atsuko Hironaka, Maki Hosaka

はじめに

私たちは日々診療の助手という立場で働いている中で、ここ数年特に感じることがある。ペットオーナーはペットの病気を治療するため、健康を維持するために来院するわけであるが、オーナーによっては、まわりで聞いた情報だけを頼りにしている人も多く、食餌管理を含めた病気の予防等に対する認識が、必ずしもそのペットにとって良いとは言えないということに気付かされる。

また、ペットの飼い方や予防医学は年々進歩しているにもかかわらず、私たちが臨床現場においてオーナーと接し感じる事は、ペットに対する認識が向上していないということである。獣医師やVTは日々の診療時間内で、オーナーの話を聞きながらできるだけ多くの疑問や質問に答え、必要な知識をできるだけ多く持ち帰ってもらいたいと考えている。しかし、限られた時間の中で、すべてのオーナーに十分な理解を得てもらうことは難しく、理解の差というものが生じていると感じてきた。

そこで私たちは、ペットの予防医学、食餌管理、しつけなどあらゆる角度からオーナーの理解を深めてもらい、また、オーナーが抱いている疑問や質問にゆっくり答えるための機会をつくらなければならないと考え、オーナー向けのセミナーを開催することで、ペットへの認識を高める機会を得ることができたので、その概要を報告する。

また、避妊・去勢手術、ワクチン、フィラリア予防、処方食を与えること、定期的な健康診断、犬のしつけについて全国の傾向も調査したのであわせて報告する。

前田獣医科医院　動物看護師
山手医院／〒053-0851　北海道苫小牧市山手町1丁目4番8号
明野医院／〒053-0054　北海道苫小牧市明野新町3丁目5番2号

❶セミナーの概要

2001年5月から2003年の2月まで6回にわたるオーナー向けセミナーを開催した。

各回のテーマについては、VTがオーナーに知ってもらいたいと思った内容や日々の診療での会話などから、オーナーが必要としているのではないかと思った内容をテーマとして設定した。

講師の選定については、ペットの食餌についての話である第1～3回はフードメーカーの獣医師にセミナーを依頼し、しつけの話である第4～5回はドッグトレーナーにセミナーを依頼した。第5回については製薬会社の獣医師にセミナーを依頼し、第6回は大学の外科学教室の助教授にセミナーを依頼した。

セミナー開催の告示方法は主にダイレクトメールによるもので、それぞれのテーマについて、情報を必要としていそうなオーナーや興味がありそうなオーナーを招待した。また、待合室にポスターを掲示し希望する人は全員参加できるようにもした。

参加人数は第1回35名、第2回20名、第3回40名、第4回52名、第5回43名、第6回44名である。

第1回　2001年5月　「ペットの食餌と健康管理・犬編」

人間と比較した犬の必要栄養量や、総合栄養食を与えることの大切さに関する説明、体重から換算する1日に必要とするカロリー量や、与えてはいけない食べ物などについてセミナーを行った（**図1**）。

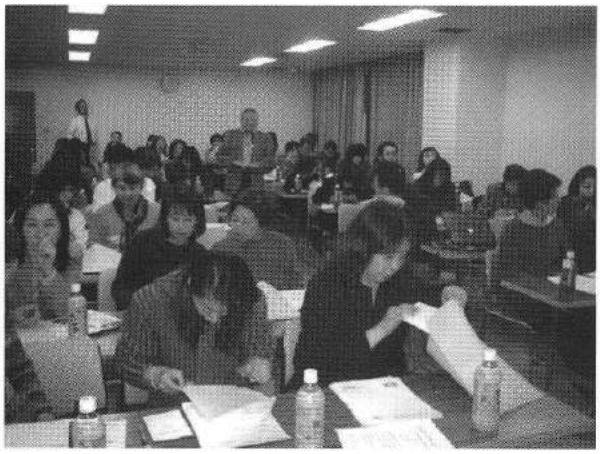


図1

図2

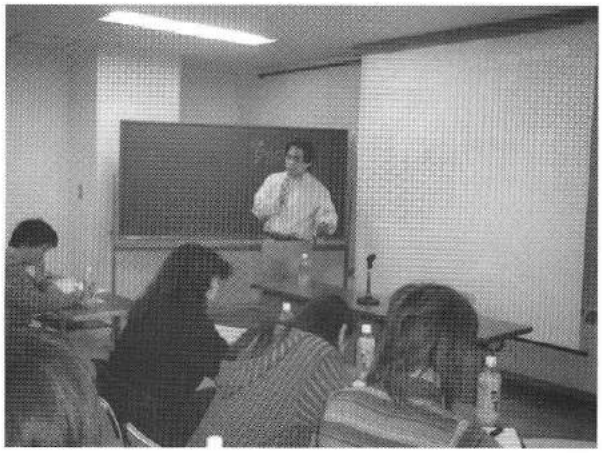


図3

第2回　2001年7月「ペットの食餌と健康管理・猫編」

猫の必要栄養素を犬や人と比較したり、食事が原因で起きやすい下部尿路疾患や腎不全などの猫に多い病気の説明、そのような病気のペットに処方食を与えることの大切さ、また、与えてはいけない食べ物などについてのセミナーを行った。

第3回　2001年12月「ペットの肥満について」

肥満になることで起こりやすい病気や、正しい減量法と間違った減量法について、減量を成功させるためのポイントなどについてのセミナーを行った。

第4回①　2002年3月「犬の問題行動について」

子犬のどの時期からしつけをはじめたらよいのか、問題行動の直し方、間違ったしつけの仕方と正しいしつけの仕方について、また、しつけを成功させるためのポイントについてのセミナーを行った。

第4回②　2002年3月「犬の問題行動について・実技編」

講習をふまえて、病院の駐車場を用い、実際にオーナーに犬を連れてきてもらい、ドッグトレーナーに指導を受けながら、リーダーウォークなどの訓練を行った（**図2**）。

第5回　2002年7月「犬の皮膚病」

犬の皮膚病に悩むオーナーが多い現状を踏まえ、皮膚病の原因やアレルギーはどのようにして起こるのか、処方食の大切さ、シャンプーの選び方や正しい入浴方法についてのセミナーを行った。

第6回　2003年2月「快適なペットライフを送るための予防医学」

ワクチン、フィラリア予防についてそれぞれの病気の説明や、病気の予防という意味で行う避妊・去勢手術の大切さ、定期的な健康診断を行うことの重要性についてのセミナーを行った（**図3**）。

❷セミナーに関するアンケートの実施

セミナー終了後にアンケートを実施し、セミナー参加後のオーナーの認識の変化について調査した。質問項目は以下のとおりである。

＜質問項目＞

①予防医学に関しては、質の良いフードや処方食を与えること、またワクチンや定期的な健康診断の重要

性の認識の有無。

②避妊・去勢手術に関しては、病気を予防するという意味で行う重要性の認識の有無。

③避妊・去勢手術をしていなかったオーナーに対しては、セミナーに参加して、避妊・去勢手術をしようという意識の変化の有無

④フィラリア症の予防について、セミナーに参加してフィラリア予防の重要性を認識、また、今まで予防していなかったオーナーについて、セミナーに参加した結果としての予防しようという意識の変化の有無。

⑤セミナー全体を通して、セミナーに参加する前と比べた場合の、予防医学についての認識の向上の有無。

⑥VTに関するアンケートとして、不安なことがあったら何でもVTに聞くことができるか。

⑦セミナーの感想として、今後このようなセミナーがあればまた参加したいと思ったか。

第6回目のセミナー終了時に質問事項①～⑦のアンケートに記載してもらい、質問事項⑥、⑦については第1～2回目のセミナーでもアンケートした。いずれもセミナー終了時に会場で記載してもらい、オーナーが会場を出るときに回収するという形をとった。参加したほとんどの人がアンケートに回答した。

❸全国の病院に対する調査の実施

上記のアンケート項目について、わが国の動物病院の傾向を調査するために、全国24の病院にアンケートを送付した。

＜アンケート内容＞

処方食、ワクチン、フィラリア症予防、避妊・去勢手術、定期的な健康診断について

＜アンケート実施目的＞

①上記のアンケート内容について全国的な傾向があるか？

②アンケート内容のそれぞれについて、オーナーに対しどのような方法で啓蒙しているのか？

③それぞれの項目に対して、オーナーが実施しないまたは関心を示さない場合、どのような理由が考えられるか？　これらのことについて、他院のVTにアンケートすることにより、当院で行っているセミナーがオーナーに認識を持ってもらうのに有効な手段か否かを調査するため。

＜アンケート回収率＞

79.1％（全国24の病院に送付し、19の病院から回答をいただいた）

＜調査実施期間＞

2003年8～10月

❹結果と考察

＜参加者数＞

セミナー参加者については、第1回の犬のオーナーとほぼ同じ数の猫のオーナーを第2回で招待しているにもかかわらず、第2回の猫のオーナー向けセミナーの参加者は少ない。また、第3回、第6回の犬猫合同セミナーにおいても、〔犬のオーナー：猫のオーナー〕の招待数は〔1：1〕だが、参加者の割合は犬のオーナーに比較して猫のオーナーが少ない（**図4～5**）。よって、猫のオーナーのほうが予防医学に対する認識の低さが認められた。

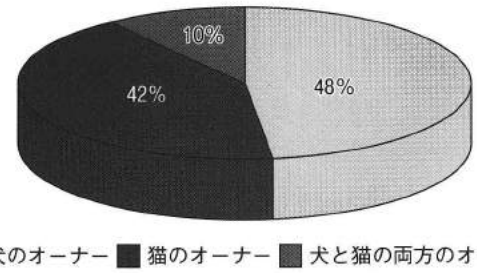


図4　第3回セミナー「ペットの肥満について」の参加比率

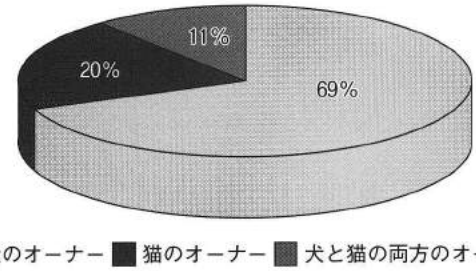


図5　第6回セミナー「快適なペットライフを送るための予防医学」の参加比率

＜処方食＞

処方食については、セミナーに参加して質の良いフードや処方食の重要性を認識したかアンケートを行ったところ、セミナーに参加した9割以上のオーナーがその重要性を認識したという結果が得られた（**図6**）。また、当医院における処方食利用率は、セミナー開催年度の2000年度より2001年度は14％増加、2002年度は21％の増加であった。

アンケート調査の結果をあわせて考えると、処方食の面では、それぞれのペットの疾患に合った処方食の重要性の認識と、獣医師が診察をしＶＴがフードをピックアップし、どのような作用があるのか、また、量・時間などを的確にアドバイスすることによって、オーナーの処方食に対する認識を深めるという今までの方法に加えて、セミナーを開催することは、オーナーが処方食への理解を得る重要な場であると考えられた。

全国的な傾向としては、処方食や総合栄養食を与えることに対するオーナーの関心が「高くなっている」と答えた病院は19病院中42％、過去3年間の処方食利用率が「増えている」と答えた病院は19病院中53％であった（**図7～8**）。処方食の啓蒙のためにＶＴとして何か行っていることはありますか、という質問に対しては、「特にしていない」という答えが一番多く、次いで口頭での説明、サンプルの提供というものであった。

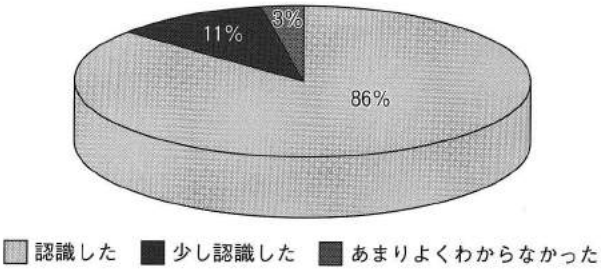
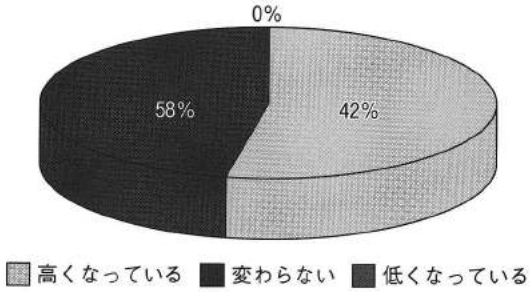


図6　セミナーに参加して質の良いフードや処方食の重要性を認識しましたか？

近年、処方食や総合栄養食を与えることに関するオーナーの関心は高まっていますか？



過去３年間の処方食利用率の増減はありますか？

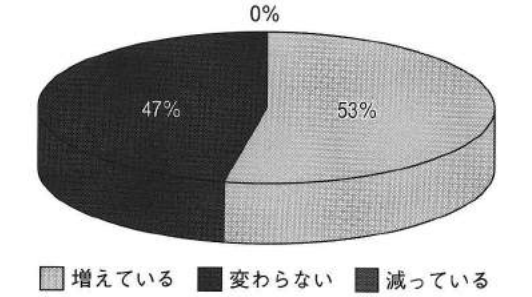


図7（上）・図8（下）
全国の病院に対する処方食や総合栄養食についてのアンケート

＜ワクチン＞

ワクチンについては、セミナーに参加してワクチンの内容や重要性を認識したかについてアンケートを行ったところ、参加したオーナーのほとんどがワクチンで予防できる病気の内容を理解し、その重要性を認識したという結果が得られた（**図9**）。またワクチン接種率のグラフから、セミナー開催年度の2000年度より、2001年度が19％の増加、2002年度が24％の増加であった。

調査の結果をあわせて考えると、ワクチン接種の面では、子犬や子猫を家族の一員として新たに迎え入れるオーナーや、日々診察に来院されるオーナーに対し、獣医師が診察をする際に、ワクチンの重要性を説明するという今までの方法に加えて、セミナーを開催することは、オーナーがワクチン接種への理解を得る重要な場であると考えられた。

全国的な傾向としては、オーナーの関心が「高くなっている」と答えた病院は19病院中79％、ワクチン接種数が「増えている」と答えた病院は19病院中84％と高い率を占める結果となった（**図10～11**）。オーナーがワクチンを接種しない理由については、金銭的なこと、室内飼いならば感染することはないと思っている、病気の恐さを知らないという理由が多かった。

また、ワクチン接種の啓蒙のためにＶＴとして何か行っていることはありますか、という質問に対しては、口頭での説明、リーフレットの配布、DMを送るというものが多かった。

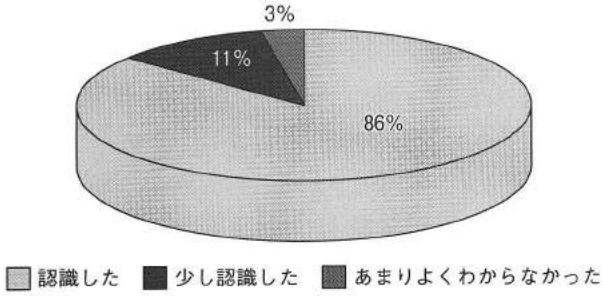
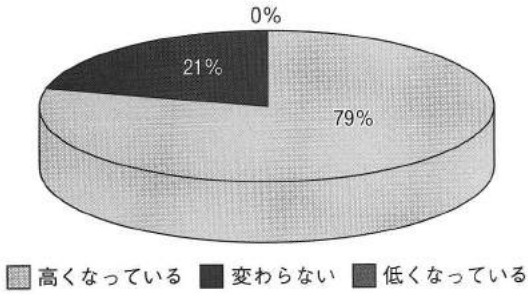


図9　セミナーに参加して、ワクチンの内容や重要性を認識しましたか？

近年、ワクチンに対するオーナーの関心は高まっていますか？



過去3年間のワクチン接種数の増減はありますか？

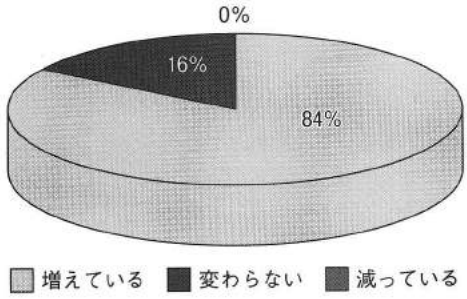


図10(上)・図11(下)
全国の病院に対するワクチンについてのアンケート

<フィラリア予防>

フィラリア予防については、セミナーに参加してフィラリア予防の重要性を認識したかについてアンケートを行ったところ、セミナーの開催によって、すでに予防しているオーナーにとってはさらに認識を向上させる場となった。また、今まで予防していなかった21%のオーナーのうちの8割以上がフィラリア予防をしようと思ったという、意識の変化が見られた（**図12〜13**）。当医院におけるフィラリア予防率はセミナー開催年度の2000年度より、2001年度が15%の増加、2002年度が30%の増加となった。

アンケート調査の結果をあわせて考えると、北海道でも増加傾向にあるフィラリア症の恐ろしさや予防の重要性について、日々の診療現場において獣医師やVTによる予防の啓蒙という今までの方法に加えて、セミナーを開催することは、多くのオーナーへのフィラリア予防への理解を得るために重要であると考えられた。

全国的な傾向としては、フィラリア予防に対するオーナーの関心が「高くなっている」と回答したのは84%、フィラリア予防数が「増えている」と回答したのは79%であった（**図14〜15**）。フィラリア予防を行わない理由としては、金銭的なこと、フィラリア予防自体を知らない、血液検査や月1回の投薬が面倒などという理由が多い。

フィラリア予防の啓蒙のためにVTとして何か行っていることはありますか、という質問に対しては、口頭での説明、リーフレットの配布、DMを送るというものが多かった。

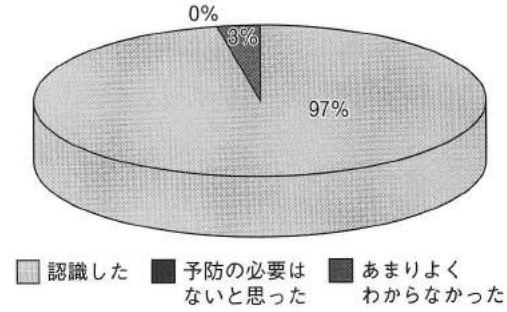
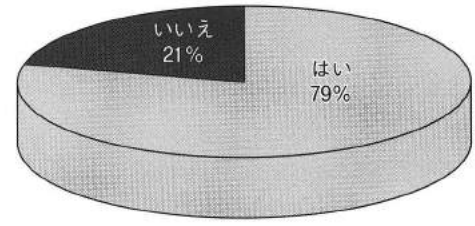


図12　セミナーに参加して、フィラリア予防の重要性を認識しましたか？

あなたのペットはフィラリア予防をしてますか？



(いいえと答えた21%の人に対して)
セミナーに参加してフィラリア予防をしようと思いましたか？

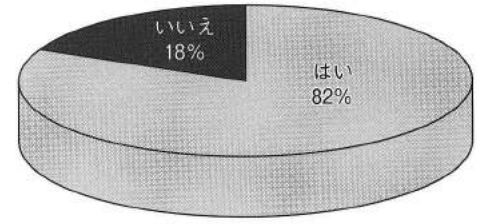
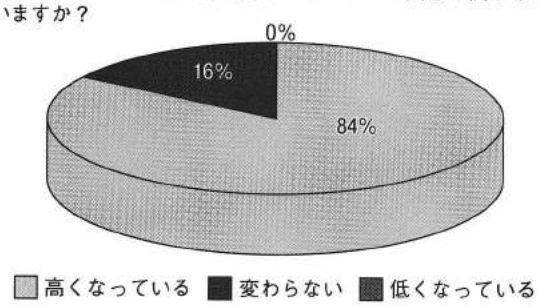


図13

近年、フィラリア症予防に対するオーナーの関心は高まっていますか？



過去3年間のフィラリア症予防数の増減はありますか？

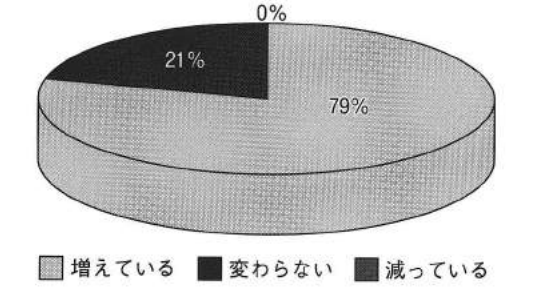


図14(上)・図15(下)
全国の病院に対するフィラリア症予防に関するアンケート

＜避妊・去勢＞

避妊･去勢手術に関しては、セミナーに参加して病気を予防するという意味での避妊・去勢手術の重要性を認識したかについて、アンケートを行ったところ、ほとんどのオーナーがその大切さを理解したと答えた(**図16**)。また、今回セミナーに参加したオーナーのうちの38%が、避妊・去勢手術を行っていなかったが、そのうちの検討すると答えた人も含めて7割以上が、セミナーへの参加をきっかけに認識を変えたと答えた(**図17**)。

避妊･去勢手術を年度別に見ると、セミナー開催年度の2000年度に比べて、2001年度の犬の避妊率は26%の増加、去勢率が5%減少、また2002年度の犬の避妊率は62%の増加、去勢率が26%の増加となった（**図18**)。猫の避妊率は、セミナー開催年度2000年度に比べて2001年度が8%の減少、去勢率が11%の減少となり、2002年度は避妊率は14%の減少、去勢率が12%の増加となった（**図19**)。

アンケート調査の結果をあわせて考えると、犬の避妊・去勢手術に関しては、セミナーにおいて、病気を予防するという意味での認識を高めることができたと考えられた。しかし、猫の避妊手術に関しては、2000年度から市の助成金制度が廃止になったことや、多頭飼育しているオーナーによっては料金的に安上がりな去勢手術だけをすることで、希望しない出産を抑制できると考えている傾向が見られる。このことから、猫の去勢手術に関しては増加傾向が見られた。しかしながら、避妊手術をしていなければ、子宮蓄膿症・乳腺腫瘍の発生の危険性が高くなるという認識が不足していると考えられる。

以上の結果から、猫のオーナーの避妊・去勢手術の認識の低さを痛感し、猫のオーナーへの予防医学の認識をどのような方法で啓蒙していくかが、これからの私たちにとっての課題であると考えている。

全国的な傾向としては、オーナーの関心が「高くなっている」と回答したのは58%、手術数が「増加している」と回答したのは63%だった（**図20〜21**)。

手術を行わない理由としては、差し迫った症状がないのにメスを入れるのがかわいそう、金銭的な理由、病気の予防としての概念がないというものが多い。また、病気の予防としての避妊・去勢手術の啓蒙のためにVTとして行っていることはありますか、という質問に対しては、特にしていないというものが一番多く、次いで口頭での説明であった。

このように、当医院での避妊・去勢手術の実施率とワクチン接種率は、犬と比較して猫のほうが低いことから、全体的に猫のオーナーのほうが予防医学に対する関心が低いのではないかと考え、そのことについても、全国の病院ではどのような傾向にあるかをアンケートしたところ、19件中13件がそのような傾向にあると回答した。考えられる原因として、

①猫のオーナーは犬のオーナーに比較して放任主義的（ノラ猫に食餌だけを与える、自由に外を行き来させる）な傾向にあるため、多頭飼育しているオーナーが多く金銭的に手がまわらない。

②ペットショップで購入するのではなく、外で子猫を拾って飼うというパターンが多いため、買い始める時点で必要なことを教えられないまま飼ってしまう。

③オーナーが散歩に連れて行くことがないため、オーナー同士で情報を交換する機会がほとんどない。

④ワクチン接種をさせているオーナーも、猫が健康であれば、年に1度ワクチン接種のために来院するだけなので、その他の病気の予防のことなどについて獣医師やVTと話す機会が少ない。

という回答があった。当医院でも同様の理由があると

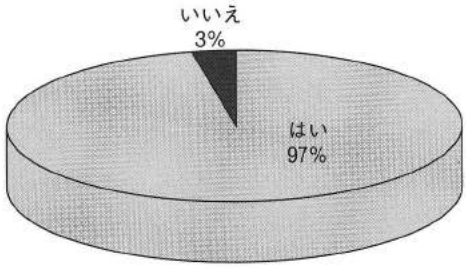
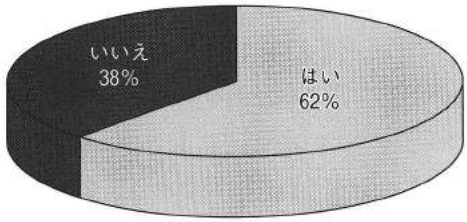
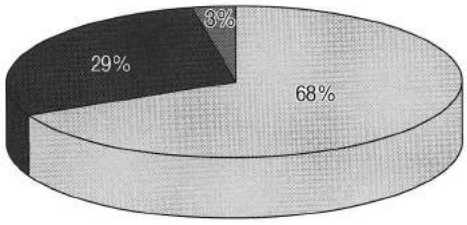


図16　セミナーに参加して、病気の予防としての避妊・去勢手術の重要性を認識しましたか？

あなたのペットは避妊・去勢手術をしていますか？



(いいえと答えた38%の人に対して)
セミナーに参加して避妊・去勢手術をしようと思いましたか？



しようと思う　しようと思わない　検討する

図17

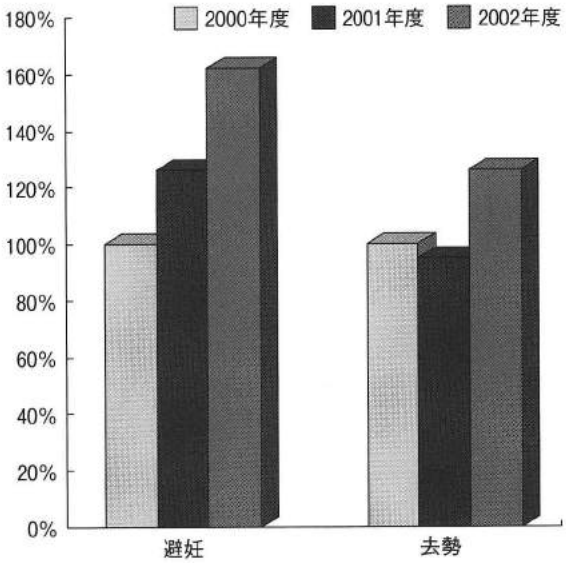


図18　犬の避妊・去勢手術

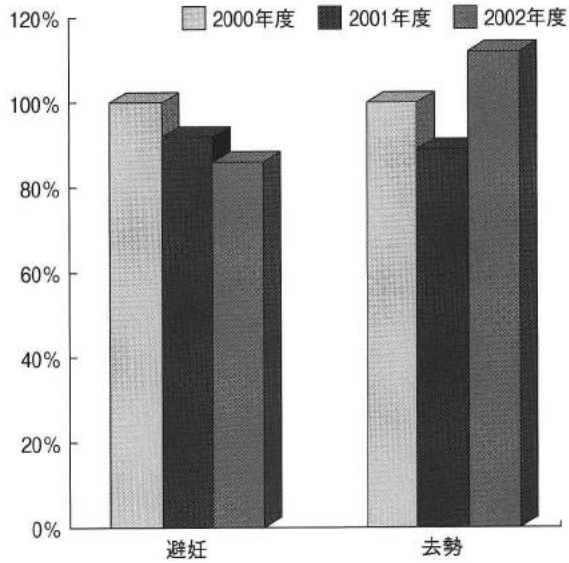
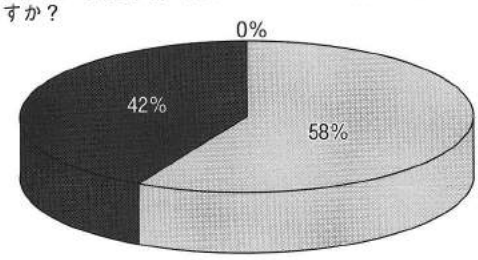


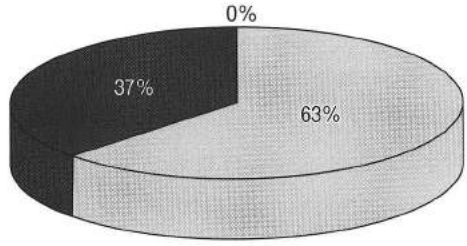
図19　猫の避妊・去勢手術

近年、避妊・去勢手術に対するオーナーの関心は高くなっていますか？



高くなっている　変わらない　低くなっている

過去3年間の避妊・去勢手術数の増減はありますか？



増えている　変わらない　減っている

図20(上)・図21(下)
全国の病院に対する、病気の予防としての避妊・去勢手術についてのアンケート

考えて、ワクチン未接種の猫を連れて来たオーナーに対しては、ワクチンに含まれる病気の恐ろしさや、避妊・去勢手術で予防できる病気について獣医師やVTが細かく説明すること、一方、ワクチン接種で来院されたオーナーに対しては、これを機会に健康診断や避妊・去勢手術を勧めるなど、ワクチンのほかに健康を維持するために必要なことを細かく説明する努力を、今まで以上にしていくことで、避妊・去勢手術、ワクチン実施を広げていくことができるのではないかと考えた。

＜健康診断＞

健康診断については、セミナーに参加して、定期的な健康診断の重要性を認識したかについてアンケートを行ったところ、9割以上のオーナーがその重要性についての認識を深めたと答えた（**図22**）。どのような頻度で、また、どのような検査を受けるべきか疑問に思っているオーナーが多かった。しかしセミナーは、そのような人の疑問に答える場となり、また、健康なときに病院に行きペットに健康診断を受けさせる、という概念がなかったオーナーにとっては、その重要性を知る機会となったことは大きな成果といえた。

全国的な傾向としては、オーナーの関心が「高くなっている」と回答したのは37%、健康診断受診数が「増えている」と回答したのも同じく37%であった（**図23〜24**）。健康診断の啓蒙のために何か行っていることがありますか、という質問に対しては、フィラリア検査と一緒に血液検査を進めるという答えが最も多く、次いで、特にしていないという答えであった。

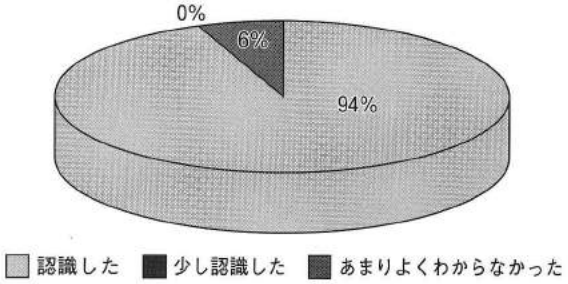
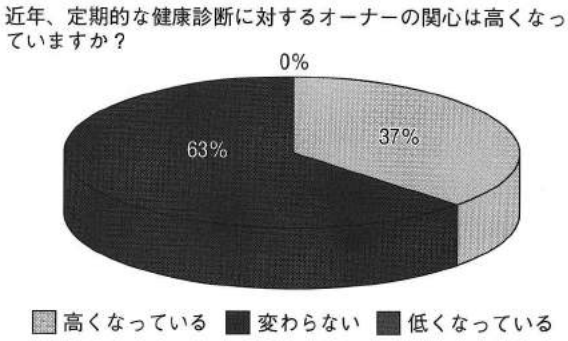


図22　セミナーに参加して、定期的な健康診断の重要性を認識しましたか？



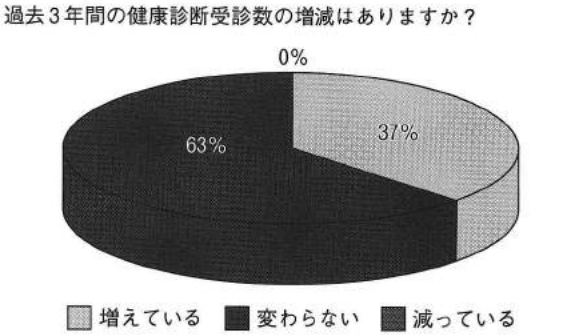


図23(上)・図24(下)
全国の病院に対する定期的な健康診断についてのアンケート

＜セミナー全体を通して＞

セミナー全体を通しては、セミナーに参加する前と比べて、予防医学についての認識の向上があったかについてアンケートを行ったところ、参加したほとんどのオーナーが向上したと答えていることから、6回にわたるセミナーの開催は、オーナーの予防医学に対する意識の向上に非常に有効であることが認められた（**図25**）。

しかし、実際このようなセミナーに参加したオーナーというのは、オーナーの中でも関心が高い人たちであろう。予防医学への関心が比較的低いと考えられるオーナーに対し、どのようにしてセミナー参加への興味を持ってもらい、認識を深めてもらうかということが、今後の大きな課題であると考えている。

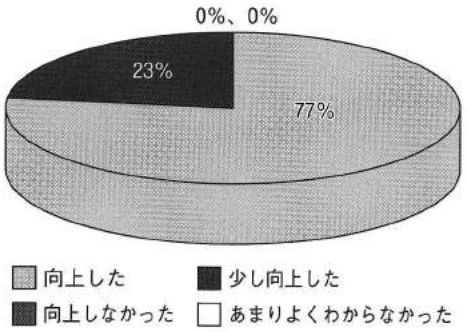


図25　セミナーに参加する前と比べて、予防医学についての認識の向上はありましたか？

＜ＶＴに対する感想＞

オーナーが日頃感じているVTに対する印象というのは、私たちVTが常に心がけておくべきことであり、知っておくべきことでもある。しかし、そのようなオーナーの心の声を聞く機会というものはほとんどなく、またそれは「恐い」と感じることでもある。

今回私たちは、不安なことがあったら何でもVTに聞けますか、という質問をアンケートに組み込むことにした。結果は、約9割のオーナーから「何でも聞ける」という回答が得られた。これはうれしい結果といえるが、逆に考えると約1割のオーナーは、何らかの理由で質問を躊躇してしまうことがあるといえる（**図26**）。

例えば、VTが忙しそうにしていたため、オーナーが質問できる雰囲気を作ることができなかった、ということも考えられる。今後、いつでもオーナーが質問しやすい雰囲気をつくれるように、VT全員で検討していかなければならないと考えている。

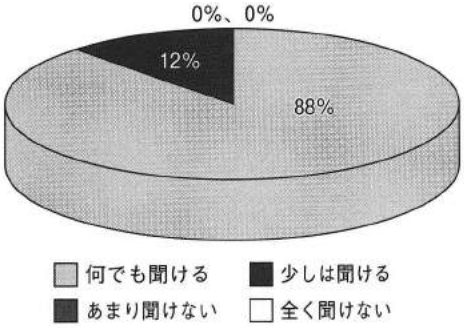


図26　不安な事があったら、何でもＶＴに聞けますか？

＜セミナーに対する感想＞

セミナーの感想としては、参加した全員が「今後もこのようなセミナーに参加したい」という回答だった。セミナーの内容に満足してもらったと確信すると同時に、オーナー自身もこのようなセミナーを望んでいたことを再認識することができた（**図27**）。これからも日々の仕事の中で、オーナーにとって必要であり、また興味をひくセミナー内容を見つけていきたいと考えている。

今後もこのようなセミナーをVTが中心となって行うことで、オーナーとのコミュニケーションを持ちペットへの認識を深めてもらうよう啓蒙することは、私たちの大切な仕事であると考える。

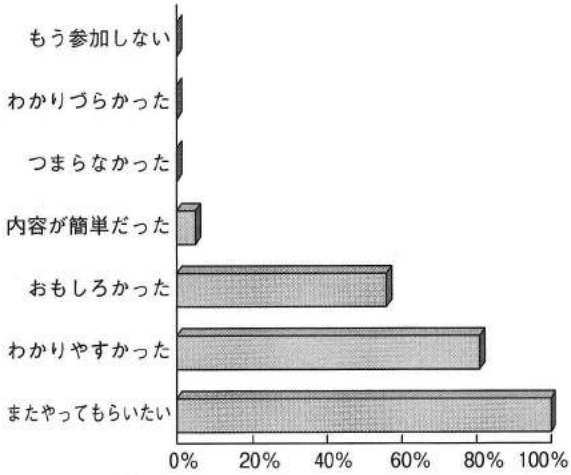


図27　セミナーの感想（複数回答あり）

まとめ

- 6回にわたるセミナーを終えた今、セミナーの開催は、オーナーの予防医学に対する認識の向上に非常に有効であると思われる。
- アンケート結果から、日頃の診療の中でいつでもオーナーが質問しやすい雰囲気をつくることができるように、VT全員で検討していかなければならない。
- このようなセミナーをVTが中心となって行うことで、オーナーとのコミュニケーションを持ち、理解を深めてもらうよう努力することは、私たちの大切な仕事だと認識した。
- 全国19の病院に回答していただいたアンケート結果とあわせて、セミナーの有効性について考えると、アンケートからは、特に処方食の利用、避妊・去勢手術に関して変化がないとの回答が多かったものの、当医院では猫の避妊手術以外の項目については増加傾向である。このような結果からも、より多くのオーナーに予防医学の重要性を知ってもらう手段として、セミナーの開催は有効であると考えられる。

発表者の声（投稿を終えて）をp83に掲載しています

●短報●

地方都市における動物看護師勉強会の立ち上げと今後の方向性

鈴木加奈子[1)]　井上五月[1)]　菊池真以[1)]　久保田雅子[1)]　赤池久恵[2)]

Start-up and Future Directionality of Veterinary Technicians' Seminars held at Local Cities

Kanako Suzuki, Satsuki Inoue, Mai Kikuchi, Masako Kubota, Hisae Akaike

はじめに

現在では、首都圏を中心に様々な内容のセミナーが開かれている。しかし、山梨県内では飼い主を対象とした県主催のしつけ教室などはあるものの、動物看護師対象の大きなセミナーや学会の開催はなく、勉強できる機会はほとんどない。そのため、県外で開催されるセミナーに参加するが、クリアしなければならない問題がいくつもあり、その中でも人員的問題、時間的問題、金銭的問題は、どんな場合でもついてまわる問題点ではないかと考える。

そこで本稿では、こうした問題点を克服するために私達が行なった試みについて紹介する。

❶首都圏におけるセミナーや学会への参加に関わる現状と問題点

山梨県外で開催されるセミナー参加にあたって考えられる問題点として、まず人員的問題点を考えると、県内の多くの病院は1、2名の雇用であるため、休むと残されたスタッフや病院長への仕事負担が大きくなる。また、主なセミナーや学会は土曜日、日曜日の開催が多く、動物病院としても忙しい日でもあるので、時間的問題としても参加が難しい状況である。次に金銭的問題としては、主なセミナーや学会への参加費や受講料は1回約3,000円～20,000円、山梨県甲府市から東京都内までの交通費が約8,000円と高額な費用がかかる。このような事を考えると、動物看護師が自分の休日を削り、自己負担でセミナーや学会へ参加する事や、病院側で複数名の費用全額負担は難しく、これらが県外へのセミナー参加を困難にしている大きな理由であると言える。

❷山梨県動物看護師勉強会の立ち上げ

1）動物病院スタッフ対象のセミナー開催

赤池ペットクリニックでは、平成10年から月に1度様々な企業にお願いして、基礎的な学習を院内セミナーで行っている（**写真1**）。

新人スタッフは特に基礎学習を行う必要があるが、毎年1、2名の新人スタッフのために企業にセミナーを依頼し、講師の先生に来ていただくのは気が引けたため、スタッフ全員が参加する事で、セミナー参加人数を増やしていた。そのため、勤務年数の長いスタッフは、毎年似たような内容の講習を何度も聞き、応用的な内容のセミナーを聞く機会がなかなか作れなかっ

写真1　院内セミナーの様子

1)赤池ペットクリニック　動物看護師・トリマー
2)赤池ペットクリニック　保健師
〒400-0123　山梨県甲斐市島上条746番5号

写真２　４院合同セミナー

写真３　懇親会の様子

た。そこでいくつかの病院が集まり、合同でセミナーを行い人数を増やす事で、新人スタッフに的を絞ったセミナーを企業に依頼することができた。

動物用医薬品から療法食やサプリメントまで全般的に取り扱っているため、色々なセミナーを開く事ができるという理由で、日本全薬工業㈱に依頼し平成15年４月から、「ゼノアック山梨ＡＨＴセミナー」という勉強会を６回開催していただき、延べ33病院参加で平均参加人数は15人だった。

その後、当院と特に懇意にしている４院で合同セミナーと懇親会を開く事になり、バイエルメディカル㈱と共立製薬㈱にセミナーを依頼した（**写真２**）。

２）「PRIDE & CONFIDENCE」

１年間他院との合同セミナーを行った結果、懇親会の席で「知識を得る場として良いきっかけとなり、とても参考になった」という意見が多く出た。そこで、大勢の動物病院スタッフが参加できる勉強会を山梨県内で継続して開く事はできないかと考え、山梨県動物看護師勉強会を平成15年11月に発足した。この会の発足により、時間的問題や金銭的問題もクリアし、また、スタッフが少ないからという理由で、院内セミナーができなかった病院のスタッフも勉強する良い機会となった。また、懇親会等も、今まで交流をもつ機会のなかった動物病院のスタッフ同士が相互の親睦を深めるきっかけにもなると考える（**写真３**）。

動物看護師の知識と技術の向上を図る事により、仕事に対する「自信と誇り」を得る事を目的とし、この会の名称を「PRIDE & CONFIDENCE」とした。この会を立ち上げるにあたって会則を作り、動物病院スタッフを会員とし、その中から会長１名、副会長２名、各病院の院長を相談役とした。また、本会の会計は、加盟病院の院長からの加盟年会費と企業の協力によって運営することとなり、会員会費は無料とした。

３）協力企業への依頼から日程および会場設定

開催日程はスタッフが参加しやすいように、年間を通して毎月第１火曜日の定期開催とし、時間帯は、多くの病院が休診時間としている午後１時から３時に設定した。

会場を設定するにあたり、いくつもの会場を巡り確認したところ、この時間帯で収容人数25名程度の会場費は9,000円～15,000円だった。

県の中心部でどこからでもアクセスのよいホテルを年間予約し、会場費、スクリーンレンタル費、お茶代を含め約12,000円の設定で企業に交渉した結果、快いお返事を頂くことができた（**写真４**）。

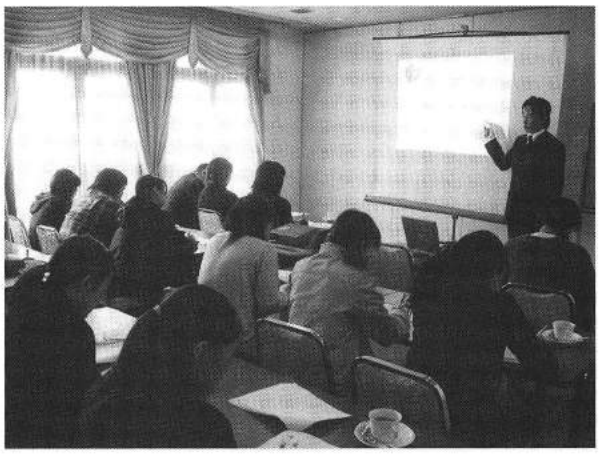


写真4　勉強会の様子

4）参加動物病院募集

参加動物病院の募集については、「ゼノアック山梨ＡＨＴセミナー」と４院合同セミナーに参加した動物病院スタッフを中心に、「PRIDE & CONFIDENCE」への参加を呼びかけた。病院長のご理解とご協力を得るため、当会の役員と相談役で各病院への訪問を行った。中にはスタッフが１人しかいないためと言う理由で、動物看護師勉強会に否定的な院長もいたが、ぜひ参加したいという院長やスタッフが圧倒的に多く、参加希望動物病院は10病院となった。

5）今年度セミナー内容について

これらの計画立案から、参加動物病院募集の準備段階を経て、まず初年度は療法食中心のセミナー内容で決定し、計画完了となった（**表１**）。同じ内容のセミナーが重なっているが、これはひとつの企業だけでなく、いくつかの企業に依頼する事で、疾患と療法食に対する各企業のアプローチの違いを理解し、各飼い主に合った療法食を勧められる事を目的としている。現在 Confidence 8 まで開催し、延べ参加数は67病院・180名で、１回平均6.7病院・18名参加の状況である。

6）次年度以降の計画

来年度の案は、基礎栄養学と予防の柱となる各種伝染病、フィラリア症、ノミ・ダニ予防を毎年開催の内容と決めた。他の月は、血液学や免疫学、薬剤別セミナーなど、どういった内容のセミナーに参加したいかについて会員にアンケートを取り、それをもとに秋に役員会で協議しテーマを決定した（**表２**）。

また、飼い主とのコミュニケーションをより良く進

表１　初年度のセミナー内容

日時	回数	演題・講師	渉外担当	オブザーバー
H16.3.16	プレセミナー	消毒法 バイエルメディカル㈱	バイエルメディカル㈱	Pride&Confidence 会長
H16.4.6	Confidence 1	犬猫の基礎栄養学 マスターフーズリミテッド	共立製薬㈱	赤池ペットクリニック院長
H16.5.11	Confidence 2	犬猫のフィラリア症 メリアル・ジャパン㈱	大日本製薬㈱	石川動物病院院長
H16.6.1	Confidence 3	犬猫のノミ・ダニ メリアル・ジャパン㈱	日本全薬工業㈱	エンゼル動物病院院長
H16.7.6	Confidence 4	アレルギー疾患用療法食 マスターフーズリミテッド	共立製薬㈱	赤池ペットクリニック院長
H16.8.3	納涼会	バーベキュー 共立製薬㈱、日本全薬工業㈱、大日本製薬㈱、森久保薬品㈱参加		
H16.9.7	Confidence 5	アレルギー疾患用療法食 アイムス・ジャパン㈱	日本全薬工業㈱	のざわ動物病院院長
H16.10.5	Confidence 6	アレルギー用療法食 日本ヒルズ・コルゲート㈱	大日本製薬㈱	もろ動物病院院長
H16.11.2	Confidence 7	泌尿器疾患と療法食 日本ヒルズ・コルゲート㈱	大日本製薬㈱	さいとう動物病院院長
H16.12.7	Confidence 8	泌尿器疾患と療法食 アイムス・ジャパン㈱	日本全薬工業㈱	石川動物病院院長
H17.1.11	Confidence 9	泌尿器疾患と療法食 マスターフーズリミテッド	共立製薬㈱	エンゼル動物病院院長
H17.2.1	Confidence10	猫の慢性腎不全 三共ライフテック㈱	三共ライフテック㈱	さいとう動物病院院長
H17.3.1	1周年記念大会	Pride&Confidence 1st Anniversary 狂犬病予防対策について／厚生労働省健康局結核感染症課 犬猫の性成熟と性周期／麻布大学獣医学部 犬の外耳炎管理／日本全薬工業㈱学術部		石川動物病院院長 のざわ動物病院院長

表2　次年度のセミナー内容

日時	回数	演題・講師	オブザーバー
H17.4.5	Confidence11	ワクチン 共立製薬㈱	もろ動物病院院長
H17.5.10	Confidence12	フィラリア予防 三共ライフテック㈱	赤池ペットクリニック院長
H17.6.7	Confidence13	基礎栄養学 日本ヒルズ・コルゲート㈱	石川動物病院院長
H17.7.5	Confidence14	ノミ・ダニ予防 メリアル・ジャパン㈱	エンゼル動物病院院長
H17.8.2	Confidence15	鎮静・麻酔 明治製菓㈱	さいとう動物病院院長
同日	納涼会	焼肉大会	
H17.9.6	Confidence16	血液生化学 富士フイルムメディカル㈱	みどり湖動物病院院長
H17.10.4	Confidence17	ズーノーシスコントロール バイエルメディカル㈱	のざわ動物病院院長
H17.11.1	Confidence18	痛みの管理 ファイザー㈱	もろ動物病院院長
H17.12.6	Confidence19	高齢犬・痴呆の管理 明治製菓㈱	赤池ペットクリニック院長
H18.1.10	Confidence20	眼科疾患 千寿製薬㈱	石川動物病院院長
H18.2.7	Confidence21	肥満用療法食 アイムス・ジャパン㈱	エンゼル動物病院院長
H18.3.7	2周年記念大会 ＜飼い主参加型＞	Pride&Confidence 2st Anniversary 犬の慢性心不全／三共ライフテック㈱ 心疾患用療法食／マスターフーズリミテッド 犬のしつけ方／山梨県動物愛護指導センター	さいとう動物病院院長 みどり湖動物病院院長

めるために必要な、表情美学を学ぶための講師に依頼する事も検討している。

7）おわりに

動物病院で働いていると毎日、動物や飼い主から得るものはたくさんある。私達動物看護師は、そんな動物や飼い主が、快適に共に生活していくために必要な情報を“提供する”という、とても大切な役割を担った職業だと思う。

今回、「PRIDE & CONFIDENCE」を立ち上げるにあたって、講師側から見た動物看護師勉強会について、日本ヒルズ・コルゲート㈱の徳本獣医師から、「知的好奇心の高い集団を作り、良い雰囲気の勉強会を実施する」という主催者として大切な役割を教えていただき、また、アイムス・ジャパン㈱の津田獣医師には、「プロとしての認識と責任感を磨く格好の場所であり、画期的な勉強会だと感じる」と心強いお話を頂いた。

私達が仕事をしていくうえで、常に確実で新しい情報を飼い主に提供できるよう、また1人でも多くの飼い主の疑問に答えられるよう、この「PRIDE & CONFIDENCE」を向上心を持った動物看護師の集まる会にしていきたい。

　発表者の声（投稿を終えて）をp83に掲載しています

会員からの報告―― p35～38の論文に関連して寄稿をいただきました

山梨県動物看護師勉強会「Pride & Confidence」1周年記念大会（平成17年3月1日）開催報告

井上五月
赤池ペットクリニック
動物看護師、当学会員

日本動物看護学会第15回例会（平成16年2月21日）において、動物看護師対象の勉強会「Pride & Confidence」（以下「P＆C」とさせていただきます）の発会と今後の活動計画についての発表をさせていただきました（本誌にも論文として投稿）。活動は計画通り進み1年を記念して、「1周年記念大会」を開催しましたのでご報告いたします。

◆

勉強会立ち上げ当初の年間スケジュールでの1周年記念大会は、「狂犬病について」と漠然と決まっているだけでしたので、記念大会の内容決定の経緯から触れます。

平成16年8月に開催された第1回日本獣医内科学アカデミー総会に参加し、日本動物看護学会の教育講演「動物由来感染症のリスクをいかに抑えるか ―感染症法改正のポイントとサーベランス体制の最新動向―」を聴講した中で、特に狂犬病は日本においても発生の可能性がある身近な問題ですので、この講演を勉強会「P＆C」の皆で聴講することはできないかと考えました。早速、講師であった厚生労働省健康局の中嶋建介先生にお尋ねしたところ、「当局は国の機関なので、県を通しての交渉が動き易い」とお口添えいただいたため、山梨県動物愛護指導センターへ依頼いたしました。山梨県福祉保健部に早々に手配いただき、山梨県動物保護及び管理連絡協議会と共催し記念大会の1時間目を開催することとなりました。

記念大会2時間目は、犬猫の不妊手術を推奨する立場の動物看護師として、その繁殖生理を学ぶ事が大切だと考え、「P＆C」相談役のお力添えで、本県出身の麻布大学獣医学部・川上静夫教授の招聘が決定しました。そして、「P＆C」立ち上げ前の合同セミナーよりお付合いいただいております、日本全薬工業㈱へ3時間目の講演をお願いしました。

◆

1周年記念大会当日は日本動物看護学会の今道友則会長、山梨県獣医師会の百田久光会長を来賓にお迎えしまして開会式を行い、1時間目「狂犬病予防対策について」厚生労働省・滝本浩司獣医師、2時間目「犬猫の性成熟と性周期」麻布大学獣医学部・川上静夫教授、3時間目「犬の外耳炎管理」日本全薬工業㈱・宮崎直美獣医師にご講演いただきました。動物病院12軒、専門学校2校、大学1校参加の総勢52名もの動物看護師やトリマー、学生、獣医師が参加する盛大な大会となりました。

「狂犬病予防対策について」は、狂犬病の歴史や症状について、貴重な映像を見ながらの講演で改めて狂犬病の恐ろしさを感じ、「犬猫の性成熟と性周期」は、川上静夫教授がご専門の繁殖学について、様々な動物と比較しながら犬と猫の性周期の違いなど、とても参考になりました。また、「犬の外耳炎管理」では、外耳炎の発生原因・症状や治療方法について教えていただきました。県内では記念大会のような機会がなければ聴く事ができないような内容ばかりで、とても大きな刺激となりました。

山梨県獣医師会
百田久光会長

日本動物看護学会
今道友則会長

1周年記念大会 参加者の皆さんと共に

「狂犬病予防対策について」受講の様子

◆

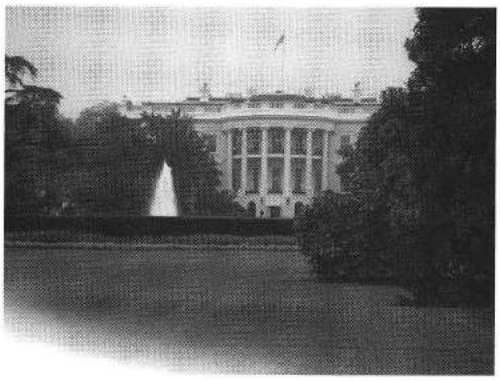
大会終了後は場所を変え懇親会を行い、日本動物看護学会・今道会長をはじめ講師の先生、獣医師、動物看護師、トリマー、学生が参加しお酒も入り皆が快い時間となりました。

立ち上げ当初は出席人数や勉強内容について不安はありましたが、勉強会の開催回数を重ねていく中、参加者や加盟病院も増えていき、現在勉強会開催は第16回を迎えました。勉強会開催履歴は論文内p37の表です。Confidence15までの延べ参加人数は、155病院、486名で、1回平均7.8病院、24.3人参加の状況です。今後は秋に役員会を開き、2周年記念大会開催内容の検討や来年度の勉強内容を決定する予定でいます。また機会があれば経過をご報告させていただきます。

最後となりましたが、1周年記念大会に多大な御寄付をいただきました関係各位に深謝いたします。

海外学会報告

新鮮な体験で広がる見聞



米国は獣医療と動物看護の面でわが国の先を進んでいます。最近では、現地米国で行われる学会に自らすすんで参加して、その様子を実感し、多くを学びとろうとするわが国の動物看護師の皆さんが、いっそう増えています。
今回は3名の方に、米国の学会に参加した感想記を寄せていただきました。

大切なのは、どこで学ぶかではなく、自分が何を学びとれるか

——「2004年 獣医眼科テクニシャン年次大会」に参加して

中井江梨子
（東京都・どうぶつ眼科 Eye Vet
当学会「動物看護師」資格認定者）

2004年10月20日～23日の4日間、ワシントンD.C.にて「獣医眼科テクニシャン年次大会 VOTS（Veterinary Ophthalmic Technician Society） 10th annual meeting」が開催されました。学会最初の年は参加者17人からスタートしたそうですが、10年目になる今年は100名限定ということにもかかわらず、それを超す参加数となりました。

◆

そもそもVOTSとは、獣医眼科専門施設にて1年以上の勤務を経た現役テクニシャン（動物看護師）の集まりで、眼科歴10年以上という方もたくさんいます。中には眼科歴20年以上の方や、または眼科は2年目だがテクニシャン歴20年以上の方などベテラン勢が目立ちます。

VOTS meetingの会場内

メンバー間ではほぼ毎日、E-mailによる情報や意見のやり取りがされています。そういった日々のつながりもあるせいか、年に一度のこの学会は多少の同窓会的雰囲気があります。また、同時に獣医眼科専門医の学会ACVO（American College of Veterinary Ophthalmologists）も同じホテル内の別会場で開催されており、そちらは専門医以外にも一般の獣医師や獣医学生、眼科研修医なども参加しているため、大会中のホテルは大賑わいです。

VOTS初日は、受付を兼ねた夜のウェルカムパーティーで始まります。久々に会う人々と近況報告をしたり、新たなメンバーとの出会いがあったりします。そして眼科に関するクイズや、皆が持ち寄った眼科症例などの写真コンテストもあり、楽しい幕開けです。

2日目からは、7時よりレクチャー会場に朝食ブュッフェが用意され、軽食とコーヒーで目を覚ましたら8時よりレクチャー開始です。正式にはMeetingと言うだけあって学会ではないため、学術発表などはありません。毎年、ACVOメンバーの獣医眼科専門医がそれぞれ得意分野の眼科レクチャーを行ってくれます。眼科に勤務していれば、既におなじみの内容がほとんどですが、日頃接しているからこそ出てくる疑問や意見が、講義中も盛んに展開されます。また、最新情報や地域によっての症例報告もあり、充実した内容になっています。

1講義45分前後で午前中4項目、90分のお昼を挟んで午後も4項目あり、学生時代を思い出すようなスケジュールですが、ディスカッションが盛んなせいか睡魔が寄り付く暇はありません。この日の内容は、①ぶどう膜炎、②猫高血圧、③白内障術後の後嚢混濁、④

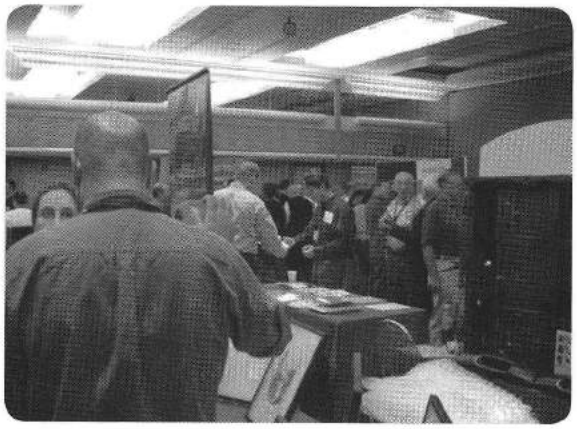
獣医眼科専門医の学会・ACVO の様子

角膜移植、⑤眼病理学、⑥眼科画像診断、⑦スタッフ関係のあり方、⑧最新薬情報でした。

お昼の時間にもホテル内でのランチが付いており、ここでもいろんな交流があります。患者さんのおもしろいエピソードや、時に病院の愚痴を言ったり、家族の話をしたりと、おいしくて楽しい時間です。夜は久々に会うメンバーで食事や飲みに行ったり、また、昼間に話足りないことやお互いの写真を見せるために部屋に行ったりもします。

3日目もスケジュールは同じで、ボリューム満点のレクチャーや食事が詰っています。この日の内容は、①緑内障の外科処置、②猫のヘルペスウイルス、③症例報告、④全身疾患と眼、⑤馬の全身疾患と眼、⑥眼瞼の外科改良型、⑦硝子体手術、⑧エキゾチックアニマルの眼科でした。

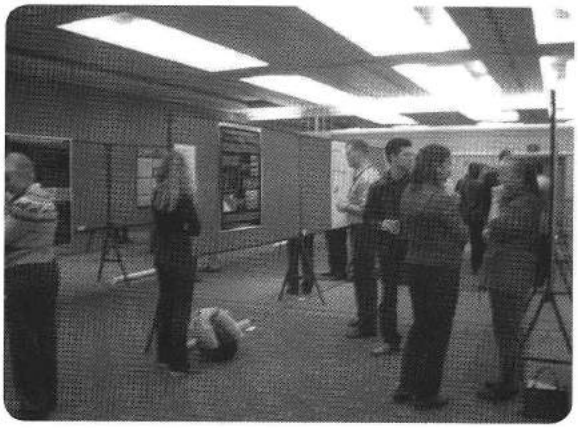
ちなみに朝食やランチや、その他にもいっぱい付いてくる VOTS への特典は、なんと獣医師たちには付いて来ないのです。なぜなら日本と違いスポンサーとなる業者は、薬や機器のメンテナンスを実際に行う動物看護師の方をサポートしてくれるからなのです。お陰で VOTS の大会資料は毎年とても立派なバインダーですし、今年は10周年ということで記念品まで付いてきました。



来場者でにぎわう展示ブース

3日目の夜には ACVO と合同のディナーパーティーがあります。ACVO にはドクターの家族やまたその他の病院スタッフなども同行しているので、数百人にも及ぶ規模になります。ディナーと同時に毎年ステージショーなどがありますが、今年は寂しいことにありませんでした。

4日目です。VOTS Meeting 最終日は半日の予定で、講義ではなく各テーマでのディスカッションが行われます。例えば去年は麻酔科の講師を交えて、各病院の麻酔や鎮静に関して話し合いましたが、今年は誰も招かず、メンバー内で各病院のクライアント・エデュケーションを含めたオーナーへのケアについてや、診察のマネージメントについて話し合いました。全てのスケジュールが終了し、来年の開催地への期待や、また会おうという約束を交わし、今年の Meeting 終了です。



ポスターセッションでも多くの最新報告が見られる

5日目は ACVO の特別コースに出席しました。この特別コースは ACVO とも申し込みが別で、人数限定の先着順で行われる実習などを含むものです。しかし今年は眼病理について、獣医の病理専門医を講師に招き、実習なしの講義が行われました。獣医眼科専門医の方々のための内容な上に、こちらはかなり慣れな

い単語が多くハードではありましたが、とても分かりやすい解説で貴重な講義となりました。これでACVOを含めても全てのスケジュールが終了です。

今回の開催地はアメリカ大統領選挙を間近に控えたワシントンD.C.ということで、滞在費用は普段より大幅に高い上、美術館や空港等のセキュリティは厳戒態勢でした。アメリカ国内といえども、例年は皆、羽伸ばしを兼ねての参加だったりするのですが、今回は早めに帰る人々が目立ちました。私たちも例に漏れず、特別コース終了と同時にワシントンD.C.を発ち、オハイオへ向かいました。当院の小林一郎先生がオハイオ州立大学の獣医眼科に所属していた関係で、そちらのドクターやVOTにはその後もとても良くしていただいています。今回も数日滞在し、研修に伺わせていただきました。

◆

実際の診察内容や学会内容をとってみても、専門分野とすれば特別なことをしている訳ではなく、日本と大きな違いはないと思います。

しかし大きく違うと感じる点は、医療全体のシステムとスタッフの意識ではないかと感じています。システムは1つの病院だけでどうにかできるものではない上に、受入れるオーナーというバックグラウンドが違うので話を置いておくとして、自分次第である「意識」というのは重要だと思います。看護師や獣医師の他にも、各専門分野のスタッフがそれぞれの仕事にプライドと責任を持って常に向上心を持って働いています。

かつての私は、ある程度ひと通り仕事ができるようになると、仕事をこなすことに追われてしまって、分かったつもりになってしまったり、経験に甘んじる傾向にあったのだと、深く気付かされました（今でもそうなりそうな自分に喝を入れていますが）。「自分で」学習をしないと、疑問も持たなくなってしまうんだと気付きました。

VOTSの参加メンバーといっしょに（筆者 左から2人目）

大切なのはどこで学ぶかということではなく、自分が何を学びとれるのかということ。それと、どれだけ「思い込み」にはまり込まないかということではないかと思っています。

アメリカの獣医療には見習うべき点はたくさんありますが、全てがそのまま日本に通用するものでは、もちろんありません。そればかりか、日本が世界に先行する優れた点ももちろんあると思います。今の時代、情報に国境はありません。どこに居たって自分次第でどんな情報だって手に入るのです。どこで学んだとしても、みんなが自分の目指すものをひたすらに追い続けて獣医療や看護に携わっていったら、どんなにか素晴らしい日本独自のものが生まれるのではないでしょうか。

オハイオでの研修風景

米国の動物看護師のハイレベルな技術

——「2004年 ハワイ獣医師会年次大会」に参加して

児玉由美子
（東京都・Pet Clinic アニホス
当学会「動物看護師」資格認定者）

2004年11月12～14日、ハワイにて行われた「第51回ハワイ獣医師会年次大会」に参加しました。私自身、海外のセミナーに参加したのは初めてなので、どのような学会なのかとても緊張しました。かなり大勢の方々が参加していたので、とても大きな学会なのだと実感しました。

私が参加した動物看護師を対象としたセミナーでは、米国では動物看護師の資格を取得するまでに試験や実習参加、その他にも様々な資格を取るなど、規定がいくつもあるということを知りました。

今回講義を行っていただいた先生の病院では、1日に5～10件の手術を行い、麻酔患者の術前から術後のケアまで動物看護師が行うそうです。また、麻酔の前投与から留置、挿管まで1人の動物看護師で行い、麻酔の時間を短くするために各検査機器の場所では動物看護師が待機しており、必要に応じて検査を進め、術後における管理の説明、その間の注意事項、術後のリハビリなどの説明は動物看護師が行うとのことでした。

私のいる病院ではほとんど獣医師の行っている仕事を、ここでは動物看護師が行っているようで感心しました。各場所による分業、その作業の正確さ、その場における状況判断など、米国における動物看護師のレベルの高さにおどろきました。

セミナー終了時に先生から「いろいろなことを勉強して、自身の技術のレベルアップを目指してください。それにより様々なことにチャレンジしてください」という言葉をいただきました。その言葉を聞いて、私自身さらなる学習、技術の向上を目指そうと思いました。今回のセミナーに参加したことにより、他の動物病院の方々とも知り合いになり様々な経験をし、とても有意義な時間を過ごせたと感じています。

講師の先生—中央—を囲んで（筆者 右から2番目）

海外で気付かされた、わが国独自の動物看護の可能性

――「2005年 アメリカ獣医内科学会」に参加して

白木文恵
（東京都・アニマルウェルネスセンター当学会員）

2005年6月1日から4日まで、アメリカ、メリーランド州ボルチモアで開かれた「第23回アメリカ獣医内科学会：ACVIM（American College of Veterinary Internal Medicine）Forum」に参加してきました。ACVIMのデータによると、昨年の参加者は合計で約3000人、うちテクニシャン（動物看護師）は約300人。今年も事前登録をして参加したテクニシャンだけで300人を超え、過去最高だったそうです。この人数からも、ACVIMが大きな学会であることを想像していただけるのではないでしょうか。

アメリカでの生活を終えて早1年ちょっと。とは言うものの、ボルチモアへの乗り換え空港がシカゴ・オヘア空港だったこともあって（アメリカで生活をしていた頃、最も多く利用した空港でした）、「ただいま」という感覚でアメリカ入りしました。

ACVIMでは小動物内科、腫瘍科、神経科など、部屋ごとにテーマが分かれており、基本的に、そこで50分のレクチャーが朝8時から8コマ組まれています。このレクチャーだけでも全部あわせると4日間（初日だけ半日）で340コマ以上あり、その他にワークショップ（基本的に事前登録が必要で追加料金がかかります）もあるので、参加したいものが重なった場合、その選択に迷ってしまうほどです。テクニシャン向けのものはレクチャーが28コマ、ワークショップが6つでしたが、獣医師限定と断り書きがあるものでなければ、獣医師向けのレクチャーに参加することも可能です。

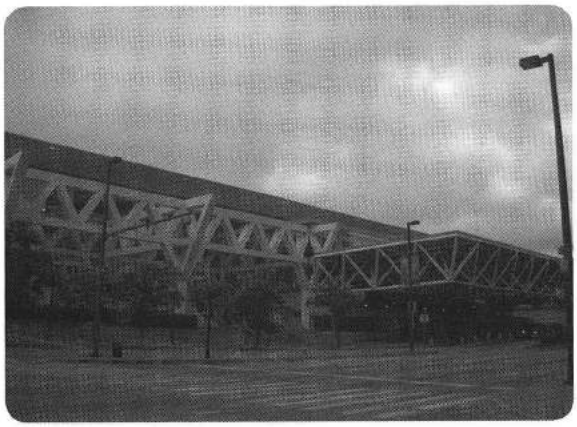
さて、今回の学会参加には、私が持っている、インディアナ州の動物看護師ライセンス更新に必要な生涯学習（Continuing Education：CE）時間を獲得する、という目的もありました。ここで少し、ライセンスとCEについてお話ししたいと思います。ライセンスに関する規定は州によって違うのですが、インディアナ州の場合、2年ごとの更新に際して、16時間のCEが義務付けられています。この16時間というのは1時間を60分とするものではなく、あくまでも、学会のレクチャー1コマに対して1時間という扱いになります（CE hourと呼ばれます）。つまり、28コマのテクニシャンプログラムを持ったACVIMは、これだけで2年間分の生涯学習時間を十分満たすことが可能なのです（全米で行われている学会全てが生涯学習の対象になるとは限らないので、事前の確認は必要です）。ちなみに、インディアナ州のライセンスを持った獣医師は、2年間で40時間の生涯学習が義務付けられています。

◆

テクニシャン向けのレクチャー内容も多岐にわたり、1つ1つのトピックが大変興味深いものでした。ここで一つ強調しておきたい点は、テクニシャンプログラムのスピーカーのほとんどがテクニシャン自身であったことです。「テクニシャンというフィルター」を通して話される内容にはいくつも大きくうなずけるポイントがあり、より親近感を持って聴くことができます。このことは、テクニシャンによるレクチャーも多かった、大学在学中にも感じていました。

今回受けたレクチャーの中で、ある大学のICUで働くテクニシャンによる院内感染に関するものがありました。このトピックは、まさにテクニシャンとしての目線が生きたものでした。いろいろな人の出入りの多い大学内のICUという現場で、複数の重篤な入院動物の看護をし、使用された器具や入院室の管理をするという仕事の中で、いかに院内感染を防ぐか……まさにそれは、私たちテクニシャンの手にかかっているのだということを改めて考えさせられる内容でした。

また、今年のACVIMではテクニシャンによる症例



広大な学会会場の外観

発表が6題ありました。パネラーによる批評があり、その判定で優良な発表を選ぶという形式を取ったこの症例発表はACVIM初の試みだったそうです。このような場で発表することにはあまり慣れていない人がほとんどだったようで、内容についてだけでなく、発表の基本（スライドの構成や話し方）などについてもパネラーからコメントが出され、聴いている側に取っても役に立つものが多かったです。この発表は、診察、診断、看護という3つの観点を柱にして20分にまとめることが条件となっていました。優秀賞をもらった発表では、20分という短い時間の中で、単に症例をうまくまとめたものという域を超え、自分がテクニシャンという立場の中でいかにそのケースに関わっていたのかということがしっかりと語られていて、非常によい発表でした。

テクニシャンは診断や予後を下すことができないというのはアメリカも一緒です。しかし、自分の携わっているケースについて、どのような診察、検査からこの診断が下されたのか。そして、なぜこの治療方法が選ばれたのか。これらをきちんと理解しているのといないのとでは看護の質が全く違ってきます。それらを常に念頭に置いていれば、どういうことを重視して経過観察を行っていけばよいか、自ずと見えてくるのではないでしょうか。そうすれば、異常にいち速く気付き、すばやい対処を取ることができると思います。私自身、フルタイムでは働いていないので、なかなか1つのケースについて経過をきちんと追うことができず、いつも歯がゆい思いをしているのですが、少しでもそのギャップが埋められるよう、努力していかなくてはいけないと考えさせられる発表でした。

展示会場に敷かれた「ACVIM」の巨大なロゴ。大規模な開催の象徴

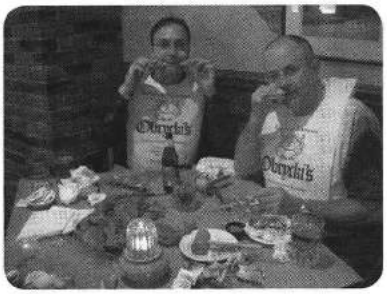
◆

勉強することが第一の目的であることは当たり前なのですが、勉強以外でもしっかり楽しむのがアメリカ流の学会の参加の仕方。主催者側もそれに答えるかのようにいろいろなイベントを用意してくれています。ちょっとしたパーティーや食事会だけでなく、子供連れでも安心して参加できるように、子供達には別に子供用プログラム（ゲームや工作）も用意されていたようでした。また、来年の学会費や他の商品が当たる抽選もあったりと、フェスティバル的な要素も盛り込まれています。

冒頭でこの学会の参加者数がかなりのものであることをお話ししましたが、このことは展示業者にとってもとても重要なこと。格好のマーケティングの機会ですから、気合の入れ方が他の学会とは全く違います。参加する業者数も150社以上でした。朝から夕方までびっちり講義に出て会場にこもりっきりの参加者にとっては、展示会場のブースめぐりも学会中の大きな楽しみの一つです。新しい商品のサンプルやカタログをもらったり、日本にいてはなかなか手にして選ぶことのできない本を買ったり、と、私も休み時間のたびに展示会場へ足を運んでいました。展示会場ではドリンク類だけでなく、何種類ものベーグルやクッキー、ヨーグルトなどが無料で配られており、小腹がすいたときに大助かりでした。

このような学会では懐かしい顔を探すことも楽しみの一つです。会場では、私が大学を卒業してから日本に戻るまで働いていたニューヨークの病院の院長、そして当時一緒に働いていた先生に会うことができました。こんな風に顔をそろえるチャンスはなかなかありませんから、お互いの都合をつけ、夜は一緒にカニの専門店へ（ボルチモアに来たからにはシーフードは外せません）。「もう1年も経ったなんて信じられないね」、とお互いの近況報告をしながらテーブルにじかに盛られるカニの山をビールと共に堪能しました。学会会場で行われたパーティーの席では、偶然にも大学時代にお世話になった先生とテーブルが一緒になり、懐かしい気持ちでいっぱいになりました。また、アメリカ留学前にお世話になった日本人獣医師の先生とも再会したり、と本当にめったに会うことができない人

わが国と同じような展示会場。各社ブースの数々



以前に勤めていたニューヨークの病院の院長（右）、一緒に働いていた先生（左）との懐かしい再会

たちに会うことができ、うれしいこと続きの数日間でした。

◆

文化の全く異なる2つの国で働いてみて考えさせられることはつきません。講義会場で隣り合わせになったあるひとりのテクニシャンから話しかけられたのをきっかけに自己紹介をすると、彼女からこんな質問をされました。「日本で働いてみてどう？　いい？　悪い？」。しかし、この問いに対する答えをいい、悪いといった、一言では言い表すことができない自分がいることに改めて気付かされました。

約5年間、日本を離れることによって得たこと。それは、他国の文化を知るだけでなく、自分の文化を客観的に見る機会を得ることができたということです。これは、自分の人生において、とても重要な経験となったことは言うまでもありません。これまで当たり前だと思っていたことが、実は日本独特のものであり、そして、それは日本のよい面としてアピールできることなのではないか、と気付くことができました。またその逆も経験しました。これは動物看護師としての職場環境においても言うことができます。今現在、日本で働いてみて、将来的にもっとこうなって欲しいと思うこともありますが、ここは逆にアメリカのスタッフに見てもらいたい、と思う点もたくさんあるのです。

海外に出る機会というのは単に海外の情報を得るだけではありません。それによって、日本という国を別な視点で見ることができ、このことも大変重要なことなのです。動物看護師として日本を内側から見る機会を与えられている今、そこから得られることも大切にしつつ、今後も海外との関わりを持ち続け、広い視野を持ってこの仕事に臨んでいきたいと思っています。

筆者：愛猫の空（くう）ちゃんと

特別寄稿

「第10回 人と動物の絆に関する国際会議」に参加して

帝京科学大学理工学部 アニマルサイエンス学科 講師
横山章光（よこやまあきみつ）

HAB

HAB（ハブと呼ばれる／Human Animal Bond：HAB／人と動物の絆）という言葉をご存知と思います。これは、ペットをはじめとする人と動物との関係を、獣医学・動物看護学・心理学・教育学・精神医学などといった様々な観点からのアプローチによって、改めて検証していこうとする学際的研究の総称です。わが国における今後の発展が大いに期待されている、動物介在活動（Animal Assisted Activity：AAA）、動物介在療法（Animal Assisted Therapy：AAT）、動物介在教育（Animal Assisted Education：AAE）などは、この研究の具体例です。

このHABをテーマにした国際会議が、3年ごとに開催されています。2004年に英国のグラスゴーで行われた同会議に参加し、現地で発表もされた横山章光先生に、その印象記を当学会誌に寄稿していただきました。

学会発表に臨まれる一研究者としての期待と緊張感、多くの研究者らとの交流による喜びと充実感が、先生の肉声で率直に伝わってきます。学びに対する真摯なご姿勢に、私たちも学ぶところが多い気がいたします。

<筆者紹介>
1963年広島県生まれ。1990年産業医科大学卒業。神奈川県・大和市立病院精神科、埼玉県・防衛医科大学校病院を経て、2005年4月より現職。わが国におけるアニマルセラピー実践の第一人者。近年、ペット型や人間型のロボットを採り入れたロボットセラピーを行い、注目を集める。著書に『アニマルセラピーとは何か』（NHKブックス）、『あなたがペットと生きる理由―人と動物の共生の科学―』（監修、ペットライフ社）など。

前日から少し嫌な感じはしていた。身体がだるい。しかしその時は、たいしたことと思っていなかった。久しぶりの海外旅行も楽しみだったし、片付けてきた仕事の疲れもあった。飛行機の中では機内食を平らげ、中村禎里先生の『狐の日本史－古代・中世篇－』を読み始めた。イギリスはまだまだ遠い。体調は一眠りしたら良くなるだろう。それにしても、いつもなら機内食を食べても足りないのに今日はそれほどでもない。それになぜかハイテンションになっていない。この時はまだ、今回の旅行が大変なことになるとは予想できなかったが、今考えると何となく予兆はあったのである。

◆

IAHAIO（編注 アイアハイオと呼ばれる／International Association of Human-Animal Interaction Organizations／人と動物との相互作用国際学会）の主催する「人と動物の絆に関する国際会議」は3年に1回開かれる。この分野に関わる様々な研究者が集まる大きな学会で、1998年のプラハ、2001年のリオに続いて、今年はグラスゴーなのである。

この分野に関わるようになってから私は「これが目標だ！」と思う山が2つあった。その1つが『ANTHROZOOS』という雑誌に論文が掲載されることであり、もう1つがこの学会で発表することである。初めて出席したプラハには1つ応募したが落選。しかし、町が無茶苦茶綺麗だったしビールも美味しかった[1]。次に出席したリオには2つ応募したが両方とも落選。おまけにブラジル入り直後に起こった同時多発テロで、帰国が大変だった。しかしこの時はデニス・ターナー先生の勧めがあり、AIBO®（編注 4本足タイプの家庭用ロボット）を使ったセラピーをデモンストレーションできた[2]。

そして今回のグラスゴー。そのターナー先生との共同研究を行なったものと、「日本人の動物観の10年の変遷」というものと2つを応募した。すると前者が審査を通過し、発表できることになった。目標としていた2つの山のうち、1つが現実となった。

現実になったらなったで大変であった。データをまとめてスライドを作り、原稿を作って英語に翻訳し、発音練習をしなくてはならない。いつもこの大会が終わると英語力のなさに痛感し、英語を勉強しなくてはならないと思うのだが、ついついさぼってしまう。それでも今年は1年前から英語教室に通った。英語は上達しなかったが金髪には慣れた。3年も間があったのに、結局はぎりぎりのところで飛行機に滑り込むことになったわけだ。いつものことである。

◆

10月のグラスゴーは寒かった。空港に降り立っても何となく体調の悪さは続いていた。それは翌日になっても変わらなかった。風邪を引いたのだろうかとは思ったが、その日は唯一丸一日自由だったので、グラスゴーの町に出かけた。

天気は曇ったり晴れたり。電車に乗り市内へ。そこから教会まで歩き見学。教会の前にリビングストンの像が

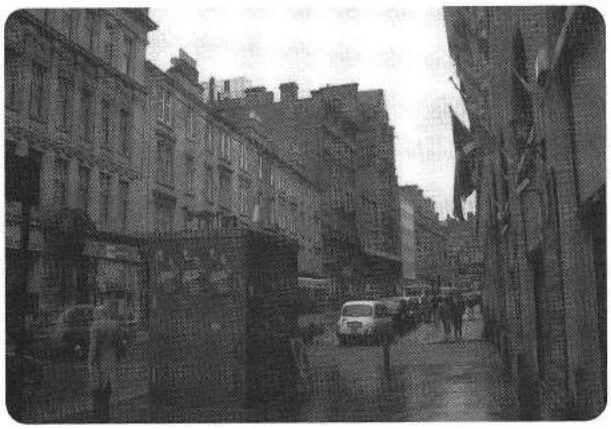


写真1　グラスゴーの街並み。英国らしい風情の石畳と建物。

写真2　盲導犬を多く見かけた（写真中央にも）。

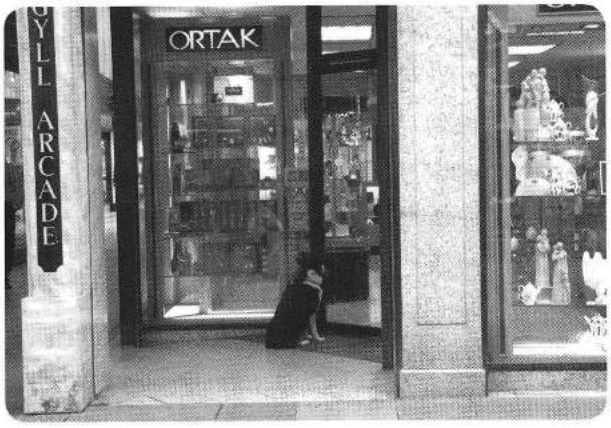


写真3　宝石店の前で主人を待つ犬。リードはつけていない。

写真4　この美しい光景を見ながら、気持ちが悪くなり動けなくなっていた。

あるのを見つける。あの探険家はここの出身なのか？それとも違うリビングストンか？　像の顔からは何も分からず注1。それから市内に歩いて昼食。ホームセンターでキリンのマグカップを見つけ、キリン・コレクターの私は即購入。そのままぶらぶら町を歩く。プラハほどではないが古い町並みは悪くない（**写真1～3**）。しかし歩行者天国の町並みを歩いている時に、ついにへたりこんでしまった。咳が出て体が熱っぽい。とりあえずベンチに座る。目の前では道化師が子供達に風船を配っている。その姿をぼおっと眺める（**写真4**）。

どうにかホテルの部屋に戻ったが、明らかに私は病気であった。「これは大変なことになってきたぞ」とようやく悟った。その日は歓迎パーティーがあったのだが欠席することとし、ターナー先生には伝言を頼んだ。そのままベッドに潜り込んだが、よほど高熱なのだろう、眠れない。おまけに寝ようとすると咳が酷（ひど）くなる。うーうーと唸（うな）りつつ、ほんの少しだけまどろんだ。翌朝から丸々3日間が学会の本番である。私の出番は2日目の午後。

朝起きると少し熱が下がったような感じはしたが、依然として身体はだるく咳き込んでいる。朝食をとってふらふらしながら近くの会場に向かう。様々な発表が続く。だるい中で必死に聞く。つたない英語で質問までする。午後になるにしたがって熱っぽさが再び酷くなってきた。終わって部屋に戻って少し横になる。この日はパーティーがあり、どうにか出席。いろいろな国の人がやってきている。ターナー先生にも挨拶できた。私の横にはクロアチアの美女が座り、いろいろ話していたが、その時だけは少し楽になった気がしたが、それは一時だけ。部屋に戻ると、また咳とだるさと不眠の辛（つら）い夜がやってきた。

◆

私の病気話ばかり話しても仕方がないので、ここで今回の様々な発表の中から、いくつか面白いものを紹介する。

米国・パデュー大学のエドワード先生とベック先生の

発表は、アルツハイマー専門病棟の患者70人（男性18人、女性52人、平均年齢82.2歳）に対して、アニマル・セラピーを行ったという報告だった[10]。このやり方が実にユニーク。魚の入ったアクアリウム（編注：魚の飼育や水草のレイアウトなどにより楽しむ観賞用の水槽のこと）を作り、食事時になるとその前で座って食べていただく。そして毎回の食事量と体重を計測する。ただそれだけ。ところがその効果ははっきりと現れ、8週間後には食事量が27.1%増え、体重も増加した。また、患者たちの身体的攻撃性と破壊的行動も統計的に有意に減少した。

この発表の面白さは、どうしてもアニマル・セラピーとなると、犬や猫や馬が中心で、場合によってはイルカなどまで動員されるが、水槽に入った魚でもきちんとした効果があること。派手なやり方ではなく、無理なくそこでできるやり方をすることが何よりも大切なのである。そしてベックは、この研究でもうひとつのデータを提出した。それは、この研究は結構大変で、職員が毎回食事量や体重を測らなくてはならないのだが、つまり仕事が増えるのだが、それに対する不満が一切職員から出なかったのである。

お見事である。動物とのかかわりが患者の健康面にプラスになるだけでなく、そのかかわりが職員の精神的負担軽減になっている可能性まで全体的に眺めている。後にも触れるが、ベックはこの分野の先駆者であり、彼らの発表した、このある種地味なこつこつした発表に、私は凄みさえ感じて震え上がった。

◆

イスラエルのワッセルマン先生の発表は、PTSD（心的外傷後ストレス障害）の患者に犬を利用する、というものである[6]。PTSDとは、実際のもしくは迫っている死というトラウマティックな出来事にさらされた人が生じ、不安や無力感や恐怖が増強する反応である。米国では同時多発テロなどの大きな事件や、頻発する銃で撃たれた事件などの後に、犬が精神治療的に活躍している話は漏れ聞いていた。

イスラエルでも「爆弾や銃撃といった事件は悲しいかな頻発しており」、そういう事件に巻き込まれて生き残った人たちは、「他者が死んだ時に自分が生き残ったことや、生き残るために自分がしたことに、時に強い罪悪感を持つ」。そのため、セラピストに心を開くことができずに孤立感や疎外感を持つことも少なくなく、そういう時に治療チームの中に犬が入ると、感情表現を非常にしやすくなるのである。ワッセルマン先生は、治療グループとしての「患者」「セラピスト」「犬」の関係を強調した。

さらに、「どうして犬なのか？」ということにも言及しており、犬は「訓練やコントロールできる（猫と違う）」「身体の大きさがちょうどいい（馬と違う）」「数が多い（イルカやサルと違う）」。そして「人間とインタラクションしたり触られたりすることを犬は好む」という特性を持っていることが適している理由だという。

◆

これに関係した発表をしたのがカナダのシュナイダー先生であった[9]。

彼女は、18歳から58歳の85人（男性31人、女性54人）の参加者に1分間のビデオを見せた後、その感想を調査した。そのビデオとは、心理セラピストが腰掛けている様子が映っているものである。ビデオには4種類あり、男性のセラピスト単独もしくは犬と一緒、女性のセラピスト単独もしくは犬と一緒というもの。それをランダムに見せられる。参加者の40%は現在ペットを飼っており、10%はペットを飼ったことがない。

分析の結果分かったことは、参加者が犬に愛着を持っているか持っていないかは関係なく、また参加者の年齢、性別、セラピー経験歴、ペット飼育歴には関係なく、セラピストが犬といた時のほうが、参加者は「より自分のことをセラピストに伝える気持ちになった」のである。そして面白いのは、参加者は犬と一緒にいるセラピストのほうを「より腕がいい」「魅力的である」と思ったのではなくて、「より信頼できる」と感じたのであった注2。

◆

こういったポジティブな発表とともに、今回も「ちょっと待って！」という冷静な発表があった。

イギリスのロバーツ先生たちの研究のきっかけは、「高齢者と動物の関係は今まで様々な研究結果があった。［やる気に有益］［やる気に対して有益でない］［一人暮らしにだけ有益］［抑うつや孤独のようなネガティブ感情の助けになる］などなど。どれが本当なんや！」というものであった。

そこで彼らは2,000人にアンケートを配り、また49人は面接調査を行った[12][13]。そして分かったことは、高齢者の幸福感や健康、抑うつや不安などにもっとも関係した因子は「社会的サポート」であり、ペット飼育は関係しなかった。「これらから、ペットより人間のほうが高

齢者にとっては重要であることが分かった」と発表は締めくくられた。

これを我々は大きく受け止めなくてはならない。高齢者や障害者に対するアニマル・セラピーや介助犬などが大きく取り上げられるが、社会的サポートの大切さを忘れてはいまいか。動物が関わる以外で我々はきちんと関わっているか。動物をあてがうことで自分内の満足が終了していないか。アニマル・セラピーはきっかけや一部でしかなく、社会的サポートがなくしては、それらもほとんど意味を持たないのではないか。

英国のチームは常に冷静にそれらを分析し提示してくる。その中には逆に「動物の効果」への絶大な信頼があり、文化の中に動物との付き合いが根付いている気がして頭が下がる。

◆

さて話は戻り、学会2日目。いよいよ本番当日である。相変わらず咳き込み、熱は下がらない。午前中の発表を聞いたあとホテルに戻り昼食をとり（**写真5**）、部屋に戻って発表の用意をする。本当はグラスゴーに来てから何度も練習しようと思っていたのだが一度もできなかった。危機的状況であるが、どうしようもできない。が、共同研究であるため、私がいい加減なことをしたらターナー先生の顔にまで泥を塗ることになる。がんばれ横山、負けるな。「ロッキー」のテーマが頭に鳴り響くが弱々しい。しかし「よし、がんばるぞ！」と気合を入れて会場に向かう。

言い忘れていたが、私の発表演題は「スイスと日本の子どもたちのAIBOに対する態度の比較」である。

アニマル・セラピーが日本に紹介され、それを導入しようとしたがどうもうまくいかない。それは日本の病院では、動物を院内に入れる許可がなかなか下りないためである。どうしてかというと、日本人の動物観が動物を「汚い」「危険だ」ととらえてきたということにつきる。私としては動物導入は素晴らしいと思うのだが、この活動は「日本人の動物観」を無視しては絶対に「できない」のである。というか、「やってはいけない」のだ。

そこで困り果てた時に、AIBOを代わりに使ってみたらどうだろうというアイディアがわき、実際に今まで5年近くAIBOを持って小児科病棟に通って子どもたちと遊んでいる。初めは半信半疑だったが、なかなか面白い結果が見えてきて、ロボット学者たちも参加した「ロボット・セラピー」の流れも根付いてきた。

ただいろいろな疑問がわく。AIBOへの子どもたちの反応は日本だけなんだろうか？　文化などで変わってくるのだろうか？　そして、実際の犬とAIBOの反応は異なるのだろうか？

リオの後、ターナー先生から持ちかけられて共同研究することにしたのはその2点であった。1つは私が行う発表で、スイスと日本の幼稚園でそれぞれAIBOと遊んでもらい、その反応を比較した。もう1つはターナー先生が行う発表で、スイスの幼稚園でそれぞれ犬とAIBOで遊んでもらい、その反応を比較した。

今回はこの2つの発表以外にもロボット関係で3つの発表があり、3年前には、私がAIBOを連れてデモンストレーションをしたのがせいぜいだったのに、今回は1セッションを組み込むまでに至ったのである。考えてみると、私は先を見通す力があったのである。えへん。ごほん。ごほん。

◆

会場に着くとすでにターナー先生はおられて、私に司会者の人と今日の発表者たちを紹介してくれた。その発表者というのは、さっき触れたベック先生とゲール・メルソン先生であった。

アラン・ベック先生。ビッグ・ネームである。私がこの世界を勉強するようになってから、常にさまざまな論文の中にベック、そしてキャッチャー先生の名前が飛び交っていた。2年前にはなんと先生の本を翻訳して出版することもできた[3]。しかし先生とは一度もお会いしていなかった。野球小僧が長嶋茂雄と握手するぐらいの感激さで私は握手した。

ゲール・メルソン先生は、子どもと動物の関係を研究

写真5　発表直前の筆者。発熱と緊張で顔色が悪すぎる。

写真6　向かって左から順に、レベッカ・ジョンソン先生、ゲール・メルソン先生、筆者、アラン・ベック先生ら。

している第一人者で、この人も名高い女性の先生である。2人はにこやかに私を迎えてくれた。ああ、こんな日が来るとは…（**写真6**）。

というより、驚くべきことは、長年アニマル・セラピーに関わってきた第一人者たちが、ロボットに目をつけたということなのだ。動物と同じ4本足で歩き、生きたように見える機械が登場した時に、動物と比べてみようと思えるのは（私のように、動物が使えないからという理由ではなく）、好奇心旺盛で、しかも患者寄りに立っているからである。動物寄りに立っている人には、今まで山ほど会ってきたが、ほぼ全員が「ロボット？機械でしょ。動物なんかと比べられるわけないでしょ！動物が一番よ！」と、現場も子どもたちの表情も見もしないで断言した注3。

しかし私はこうも思っていた。彼らはおそらく今回は、ロボットのことをこき下ろすためにここに登場したのであろう。「いろいろ実験してみたが、ロボットには動物のような効果なんか期待できまへんわ」と言うであろう、と。

そしていよいよ「ロボット・セラピー」のセッションは始まった。観客は思ったより多くて部屋いっぱいいる。

まずはターナー先生の発表である[7]。実験の前に立てた彼の仮説は、「子どもたちはAIBOより本物の犬のほうを長く撫でたり触ったりし、興味を持ち、よく笑う」というものであったが、実験の結果、「本物の犬のほうをよく撫で、途中でやめてしまうのはAIBOのほうが多かったが、最初に触ろうとするのはAIBOのほうが多く、笑うのもAIBOの時のほうが多かった」「つまり、仮説は一部しか証明できなかった」というものであった。

◆

次が私である[4]。高熱でふらふらしているために緊張感もない。私の発表内容は、以下のようなものであった。

- ●日本の子どものほうが総じてスイスの子どもに比べて、AIBOへの反応がよかった。
- ●しかしよく調べてみると、反応自体が非常に似ている部分がある。それは例えば、初めは話しかけ撫でるが次第に笑いが多くなり、また撫でることが、次第に触るだけのほうが増えてくるなどである。
- ●つまり2カ国の反応は、異なっているところもあるが、似ているところもある。
- ●また、日本の子どものほうが反応が一様であり、スイスの子どもは反応がばらばらである。
- ●結論として、ロボットに馴染みのある文化のほうが、喰いつきはよく一様であるが、途中で飽きてくる。これに対して、ロボットに慣れていない文化では、反応がばらばらで食いつきも悪いが、次第に慣れてきているのではないか。

結局言いたかったことは、これらの反応は環境や文化によって、かなり左右されるのではないかということであった。

その次に発表した米国・コロンビア大学のジョンソン先生は、「19歳から73歳の42人に、自分の飼っている犬、知らない犬、AIBOと遊ばせて、ストレスや抑うつなどを感知する血液中のホルモンを計測して違いを見出す」というものであった[11]。彼女の予測としてはかなり差が出る、つまり自分の犬と遊ぶほうがストレスなどが少ないのではないか、ということであったが、結論としては、3者はほとんど差異がなかったのであった。

続いていよいよ大御所二人の発表である。まずパデュー大学のゲール・メルソン先生は、小学校で子どもたちにAIBOと遊んでもらったあとに、様々な質問をした[8]。例えば、（AIBOは）「お腹が減る？」「病気になる？」「赤ちゃんを産む？」「恥ずかしがる？」「君の気持ちが分かる？」「秘密を話す？」「夜抱きたい？」「友達になれる？」「ゴミ箱に捨てていい？」「魂を持ってる？」などなど…。面白いねえ。結果として、「子どもたちはAIBOと犬をしっかり見分けており、生物ではないということは分かっている。しかし短時間触れ合っ

ただけで、子どもたちはAIBOの心を感じ、交友関係を持ち、道徳的に扱うことが分かった」。

最後はパデュー大学のアラン・ベック先生。彼は13人の孤立した高齢者に6週間AIBOを貸し与え、その感想を調べた[5]。その結果、生活満足度も抑うつ徴候も改善したのである。彼は「社会化、やる気、体の動きなどの改善がAIBOには見込まれるのではないか」と結論付けた。

◆

驚いた。予想していたのと違って、5人の研究者とも「AIBO、なかなかよろしいんとちゃいますか」という結論だった。拍子抜けしてしまった。

セッションが終わり、人がまばらになってから、だるい身体を振り絞り、私は発表者たちに「話がある」と呼び寄せた。おのおの質問を受けていた先生たちは集まってくれ、私はつたない英語で話し出した。実は最近強く感じていることがあり、それに対する感想を聞いてみたかったのである。その感想を聞きたいというのが、今回の私の大きな目的でもあった。

私が感じていること、それは次のとおりである。高齢者にせよ子どもにせよ、集団の中にAIBOや犬を入れたときに働く力には違いがある。犬を入れた時には、その人は犬を見て「犬と」触れ合い、その関係は「犬に対して」大きい。しかし、ロボットを入れた時は、友人やもって来てくれた人など、「周りの人との」関係が強くなる。

もっと言うと、例えば子どもがロボットを叩(たた)くと「痛がってるよ」「怒ってるんじゃない？」と他の子どもが言う。「君のこと好きみたいだよ」「楽しいのかなあ」。それらは全て「ごっこ遊び」の流れである。ところが、犬を叩くと犬は「本当に」痛い。それは「ごっこ」ではなく「現実」である。つまりロボットは、ある種のコミュニケーション・ツールの意味合いが大きく、犬は現実そのものと触れ合うことになる。その「動物と違う」意味合いは、見ていてはっきりと分かるほどの違いなのである **注4**。パンフレットの裏にその図を書き込み（**図1**）、私は最後の力を振り絞って自分の感じていることを説明した。「どう思う？」（**写真7**）。

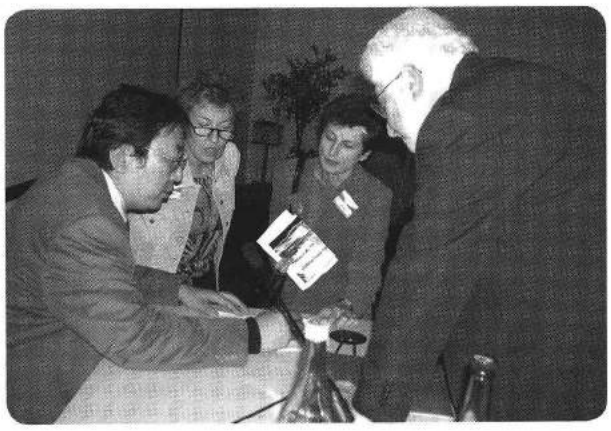


写真7　懸命に自論を説明中の筆者。フラフラだが必死。

私を囲んでいた人たちは黙って図を見ていた。沈黙が漂った…（まずったか？？？）が、ゲール・メルソン先生が口を開いた。「…確かにそうよね。私もそう感じるわ、どう思う？　アラン」「ふむ…面白いね。今まで気がつかなかった…」。

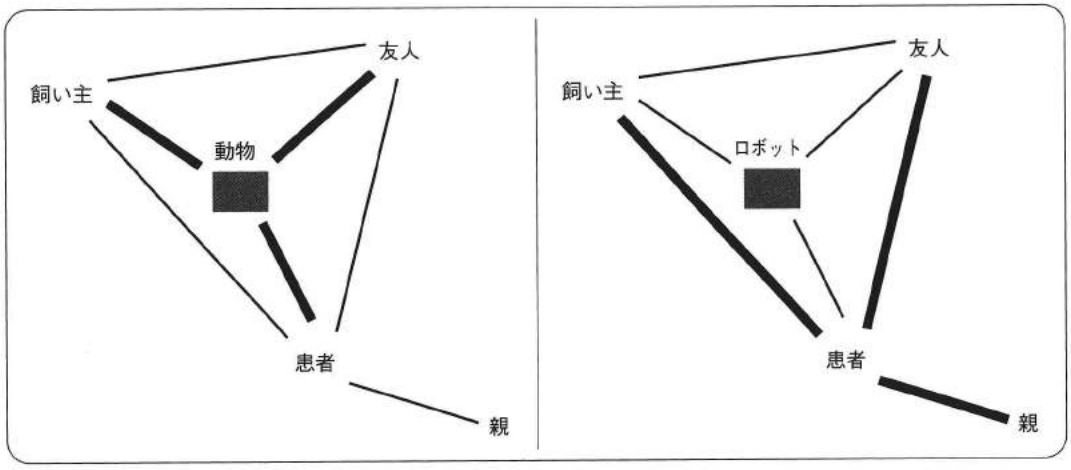


図1　動物が入った時とロボットが入った時の集団の力具合。太い線のほうが、力が強い。

ほっとした。自分ではある種確信していたのだが、「感じ」だったので理解してくれるかどうか分からなかったのだ（英語だし）。ある程度、動物とAIBOの両方をやっている人しかこの感覚は分からないだろう。さらに、この感覚を分かってくれる、というのは、やはりこの人たちは人間の立場に立って物を見ている人たちなんだ、と思った。これさえ伝えれば、私の今回の旅行は満足なのである。これにヒントを得てさらに次の研究をしてくれるかもしれない…　私もしなきゃいけないんだけどね。みんなとは笑顔で握手して別れる。

この日の夜は、この世界に造詣の深い山﨑恵子先生の勉強会を数時間。彼女は知識が深く英語もべらべらなので、毎回勉強会に出させてもらっているが、やはり勉強になった。終わったら夜中近く、部屋に戻って布団に倒れこむ。高熱はまだ続いている。よくなる気配がない！「このままずっと熱が下がらないのでは…」とふと思う。

翌3日目は、もう根性で乗り切った。咳をし出すと止まらない。明らかにものすごい高熱。学会の最後には3年後の次回大会が東京で行われることが宣言される。「ヒトと動物の関係学会（HARS）」と「日本動物病院福祉協会（JAHA）」が中心となる。山﨑先生が日本を紹介して拍手で終わる 注5。

ふらふらしながらホテルに戻ると、ドイツの若手美人研究者のビーツさんがいた。彼女はリオ以来の顔見知りで、熱のことを話すとあらあらと笑っていた。一緒に写真を撮る。パーティーで一緒だったクロアチアの女性たちも一緒のホテルだった。一緒に写真を撮る。双方に「日本で会おうね」と言うと「頑張って行くようにするけど、高いから…」と笑っていた。

◆

ロンドンで一泊して日本に戻る 注6。帰りの機内、高熱と咳とだるさ、発表が終わった安心感、様々な人と出会った高揚感などに支配されていたのだろう、上映された「スパイダーマン2」を見て、感動して嗚咽が出るほどぼろぼろと涙を流す。前作は全く面白くなかったので期待していなかったのに、なんて泣ける映画なんだ…いや、本当に泣ける映画なんだろうか？　私の感性がおかしくなっているのではないだろうか？　いや、やっぱりいい映画だよなあ！！

帰り着いたのが祝日で、すぐに自分の大学病院に行き救急外来にかかる。熱っぽさは少し取れていたが、それでも38.5℃。だるい。採血やレントゲンに行くために研修医が車椅子を押してくれる。「どこ行ってたんですか？」「…イギリス…」

診断名は「マイコプラズマ肺炎」。それから1週間仕事を完全に休んだのであった。おしまい。

注1　帰ってから調べてみると、リビングストン（1813～1873）は確かに、グラスゴーから8マイル南のブランタイア出身だった。

注2　大統領が愛犬を抱いているのを見て国民が感じる感情も、「腕がいい」ではなく「信頼できる」からなのかもしれない（それはそれで問題ありそうだが）。

注3　私が「ロボット大好き先生」と揶揄されていることは知っている。それは間違っている。私は「患者大好き先生」なのだ。

注4　とは言え、これに気づくまでは何年もかかってしまった。

注5　次回はいよいよ日本での開催である。関係者は発表にチャレンジしてほしいし、そうでなくても、ぜひ会場に足を運んでいただきたい。面白いことは保証する。しかし今回参加費が高かった（7万円ぐらいだったと思う！）。もっと安くしてほしい！

注6　せっかくイギリスに行くので何かお土産を買って帰ろうと思っていたが、あまりにだるいので、空港でも免税店にさえ寄らずベンチで伏せていた。結局買ったのは、初日に買ったキリンのマグカップだけであった。イギリスとキリン…。

参考文献

1）横山章光（1998～1999）「ピーちゃんの誰もがいい感じ」『月刊WAN』vol.22～24，ペットライフ社

2）横山章光（2002）「『第9回“人と動物の絆”に関する国際学会』に参加して」『as』第144号，p56～58，インターズー

3）アラン・ベック，アーロン・キャッチャー（2002）『あなたがペットと生きる理由―人と動物の共生の科学―』（横山章光監修、カバナーやよい訳），ペットライフ社

4）～13）は『10th International Conference on Human-Animal Interactions Conference Handbook』より。

4）Akimitsu Yokoyama, Filomena Nina Ribi, Dennis C.Turner: A comparison of Japanese and Swiss children's behavior toward a pet robot.:69, 2004

5）Alan M.Beck, Nancy E.Edwards, Peter Kahn, Batya Friedman: Robotic pets as perceived companions for older adults.:72, 2004

6）Alon Wasserman: Terror attack victims: The rehabilitation process of post traumatic patients with the aid of a therapy dog.:43, 2004

7）Dennis C.Turner, Filomena Nina Ribi, Akimitsu Yokoyama:

A comparison of children's behavior toward a robotic pet and a similar sized, live dog over time.:68, 2004

8) Gail F.Melson, Peter Kahn, Alan Beck, Batya Friedman, Trace Roberts:Children's understanding of robotic and living dogs.:71, 2004

9) Margaret Schneider:The influence of companion animals on how psychotherapists are perceived.:44, 2004

10) Nancy Edwards, Alan M.Beck:Using aquariums in managing Alzheimer's Disease:Influence on resident Nutrition and behaviors and improving staff morale.:50, 2004

11) Rebecca A.Johnson, Richard L.Meadows:Neurohormonal responses to human-robotic dog interaction.:70, 2004

12) Riberts, C.A., Horn, S.A., McBride E.A.:A follow-up study exammining what factors affect the psychological and physical well-being of community-dwelling older adults in the United Kingdom:pets,people or both? An interview study using regression analyses.:49, 2004

13) Riberts, C.A., Horn, S.A., McBride E.A.:A follow-up study exammining what factors affect the psychological and physical well-being of community-dwelling older adults in the United Kingdom:pets,people or both? A questionnaire study using regression analyses.:52, 2004

動物看護師のための特別プログラム

重要ポイント総整理

院内感染を考える

有効的な動物看護を実現するために、私たちは、多くのテーマについて確実な知識や技術を身につける必要があります。今回は、動物病院においても、今後いっそう対策の必要性が求められる院内感染について、基礎的な考え方をしっかり身につけましょう。

《執筆者紹介》
渡辺隆之
北里大学大学院 獣医畜産学研究科修士課程 獣医微生物学専攻修了。獣医師研修に出る。1991（平成3）年、国立小児病院 小児医療研究センター 内分泌代謝研究部、研究助手。1994（平成6）年、動物専門の臨床検査会社である有限会社エム・ビー・ネットワーク（Microbiology Network）を設立。現在にいたる。

はじめに

昨今、マスコミ等で新しいタイプの感染症が大きくクローズアップされており、中でも、動物から人に感染する人獣共通感染症が話題となっています。発展途上国の人口増加にともない、原生林を伐採して宅地や農業地の開拓が急速に広まりました。この原生林の開拓によって、野性動物と人間との距離が狭まりました。野生動物と人間の生活環境との接触が起きたことにより、昔から野生動物が持っていた未知の感染症が人間へと伝播してしまったのです。この新しい感染症により、たくさんの人間の生命が奪われてしまったのは言うまでもありません。

さて、ここで1つの疑問が生まれます。環境こそ大きく違いますが、「自然界という広い環境で感染が起こるのであれば、私たちの仕事の場である動物病院という狭い環境では感染症は起こらないのでしょうか？」。もし、この素朴な疑問が頭の中に生まれてきた動物看護師さんは、周囲の環境に目の行き届く立派な動物看護師さんになれると思います。

病院内で発生した感染症を病院感染（hospital infection）や院内感染（nosocomial infection）と言います。人間の病院の院内感染がマスコミで取りざたされた時に、皆さんが一番耳にしている菌名はMRSA（Methicillin-resistant *Staphylococcus aureus*：メチシリン耐性黄色ブドウ球菌）だと思います。次いで、セラチア菌（*Serratia marcescens*：セラチア・マルセッセンス）、VRE（Vancomycin-resistant *Enterococcus*：バンコマイシン耐性腸球菌）、VRSA（Vancomycin-resistant *Staphylococcus aureus*：バンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌）などの菌名も聞いたことがあると思います。

MRSAは歴史が古くヨーロッパでは1960年に発見されています[1]。日本では1980年代に入り、MRSAの院内感染は大きな問題であると、一躍脚光をあびることとなります。その後は皆さんのご存知の通りで、院内感染が起こるたびに医療事故として、テレビ、ラジオ、新聞、週刊誌、インターネットなどの様々なメディアでこれらの言葉を耳にしていると思います。これらの細菌でたくさんの人間の命が奪われています。人間の病院内では、こういった医療事故が日常茶飯事に起こっているのです。人間と新しい形の感染症の戦いはまだ始まったばかりなのです。

人間の病院での院内感染とはいったいどういうことを意味した言葉なのか、院内感染の定義をくわしく解説していきます。また、その定義を基準として、私たち動物病院の院内感染の定義にもふれてみましょう。

院内感染の定義

院内感染の定義はあくまで人間の病院内における定義であり、動物病院における院内感染の定義ではありません。動物病院における院内感染の定義は、私たち自身で考えなくてはいけません。

さて、人間の院内感染の定義ですが、1990年、日本環境感染学会から、「院内感染防止指針」が出されました[2]。この中で院内感染とは、「病院における入院患者が原疾患とは別に、新たに罹患した感染症、および医療従事者が病院内において罹患した感染症」と定義されています。

簡単に説明しますと、「入院患者が、もともと発症している病気とは別に、病院内でなんらかの感染症に感染してしまい、新たに病気を発症した場合を院内感染という。医師、看護師等の病院で働くスタッフが病院内でなんらかの感染症に感染して病気を発症した場合をいう」ということになります。

その他にも、1991年に文部省（現 文部科学省）から「国立大学病院における院内感染防止対策」[3]、1992年に厚生省（現 厚生労働省）から「院内感染防止マニュアル」が出されています[4]。もっと簡潔にまとめてしまった形では、「病院内で細菌やウイルスなどの病原体に暴露して感染した場合」という定義も存在しています[5]。米国厚生省疾病管理・予防センター（Center for Disease Control and Prevention：CDC）の定義では、「入院して3日目（48時間以上）以降に発症した感染症」となっています[6]。

国によっても異なりますし、いろいろな解釈の問題があり、実際には統一がなされていないのが現状です。しかし、最も参考になるのは、2001年に日本細菌学会が発行した「病原細菌に関するバイオセーフティ指針」です[7]。このガイドブックには、感染症を防止するためのノウハウが詰め込まれています。

院内感染の感染様式と発症様式

院内感染の感染様式（感染経路）ならびに発症様式（発症のメカニズム）の説明をします。感染症を起こす背景には、微生物のいろいろな感染の仕方があります。まず、感染経路から外因性感染（exogenous infection）と内因性感染（endogenous infection）との2つにわかれます。

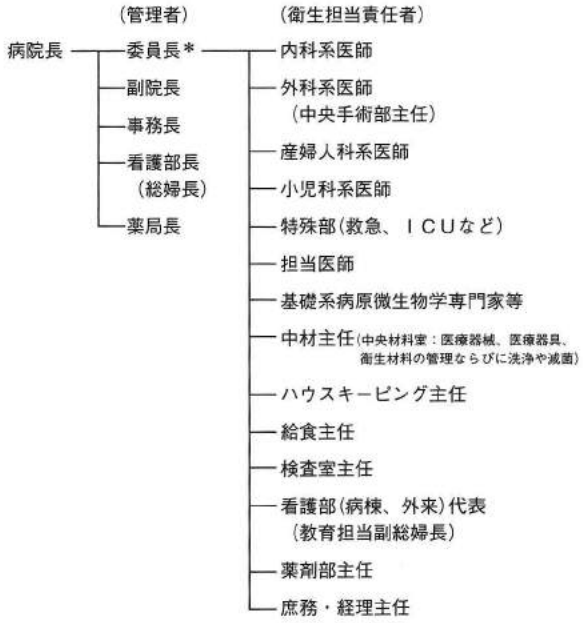
外因性感染とは、外部から微生物が人間に感染を起こすことを言います。接触感染や交差感染や水平感染という言葉がこれにあてはまります。人と人が接触することによって感染症を起こすと言う意味です。これに対して、内因性感染とは、自己の体内に保有する微生物によって感染症を発症することを言います。すなわち日和見（ひよりみ）感染（opportunistic infection）を意味しています。何かの原因で体の調子をくずしてしまい、自己の免疫能が下がった時に、自分の体の中に生活していた微生物が突然増え始めて、特定の感染症を発症することを言います。また、自己感染であるので、妊婦の場合であれば、母親から胎児に感染する垂直感染というのもこれに含まれます。

大昔であれば、院内感染とは、単純に外因性感染の感染経路だけを考えていれば防ぐことができました。現在では医療技術が進歩して、普通であれば死んでしまっている人までが助かるようになってきました。すなわち、病院の中には抵抗力の弱い易感染性患者（compromised host）がたくさん入院しているケースが多くなりました。そのために内因性感染である日和見感染が多発するようになってきたのです。さらに医療現場での抗生物質の乱用により、性質がまったく変わってしまった微生物が生まれてきました。抗生物質をいくら使っても死なない不死身の微生物、すなわち多剤耐性菌とか薬剤耐性菌といわれる微生物が増えてしまったのです。これこそが、MRSA、VRE、VRSAといった恐ろしい細菌です。これはなんとかしなければならないということで、人間の病院では感染経路の遮断も含めて、院内感染防止の様々な取り組みが始まりました。そして、様々なガイドラインが生まれてきたということは、先に述べたとおりです。

院内感染防止対策委員会（院内感染対策委員会）とは[1)6)]

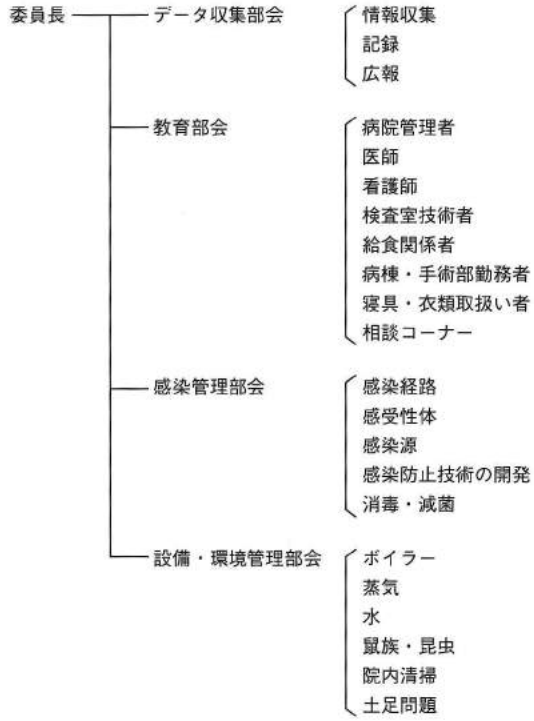
人間の病院では、院内感染防止の取り組みで最も重要な役割を果している人たちがいます。その人たちを院内感染対策委員と言います。どんな人たちで作られているかというと、**図1**のような組織委員で作られています。そして**図2**のような部会にそれぞれの委員が属しており、いろいろな仕事をしています。

図2にはありませんが、これらの委員の中で最も重要な役割を果たすのが、婦長クラスの看護師で、感染対策を専門業務とするインフェクション・コントロール・ナース（infection control nurse：ICN）です。100床のベッド数に1人の割合で選ばれます。病院内では絶大の権威を与えられます。ともかく、このICNの言うことは、担当の医師の指示よりも強いのです。ICNが「ノー」と言えば治療をすることすら許されません。そのかわり感染症に関して、ものすごく豊富な知識を要求されます。日本ではICNの資格制度はありませんが、アメリカではICNの資格制度があります。



＊この委員長が、疫学担当の専任看護師の任命（100床に１人の割合）を行う。副院長が委員長を兼務する場合が多い。ただし院内感染防止に熱心な医療従事者（それがたとえ管理責任者の地位にない細菌検査担当の検査技師であっても）を補佐役に任命すると効果的である。

図１　院内感染防止対策委員会（院内感染対策委員会）の組織と構成



（注）委員は必ず各部会に所属し、業務を分担する。

図２　院内感染防止対策委員会（院内感染対策委員会）の業務分担

さて、これらの委員の職務ですが、まず、いちばん重要なのが院内感染のサーベイランス（監視）です。病院内の疾病の監視をすることで、感染発生の認知（患者発生の報告）、疫学調査（起因菌検査、モニタリング検査）ならびに現状分析、報告書の作成を職務とします。これらの職務を遂行し、病院職員の教育、衛生観念の徹底をはかり、院内感染の防止に努めているのです。また、病院では院内感染対策のために予算がつきます。その予算でアメニティ（快適で衛生的な環境）の向上をはかり、より円滑な委員会活動を行っているのです。さらに、その予算を使って病院内のモニタリング検査が実施されます。これは病院内の環境検査です。第三者の業者に依頼して、ふき取り検査や落下菌検査を実施して病院内の環境中の細菌や真菌の汚染度を調べるのです。こういった取り組みをすることで、院内感染を少しでも防ごうと日夜努力をしているのです。

院内感染の範囲

いろいろとガイドラインに書かれている蘊蓄（うんちく）を紹介してきましたが、もう一歩踏み込んでわかりやすく解説してみたいと思います。院内感染とはどこからどこまでの範囲のことを言うのでしょうか？　私たちは自然の中に暮らしています。自然があり、そこには生活のための家があり、病気になったらかかる病院があります（**図３**）。

これらの自然の中で感染症にかかることがあります。自然環境から病気の感染をうけた場合、動物から病気の感染をうけた場合、すれちがった人から病気や風邪をうつされた場合、家の中で家族に病気や風邪をうつされた場合などを自然感染といいます（**図４**）。

人間の病院内では、外来で感染症を起こした場合は自然感染といい、入院していて感染症を起こした場合を院内感染と定義しているそうです（**図５**）。

以上のことから、どこからどこまでの範囲が院内感染というのか理解ができたものと思います。

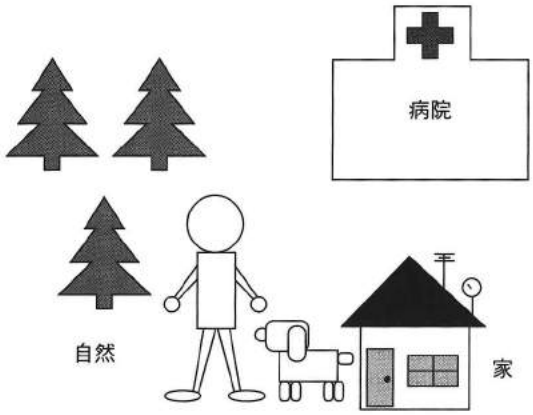


図3　自然界の模式図

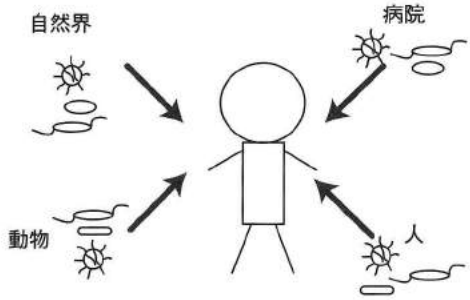


図4　自然感染の模式図

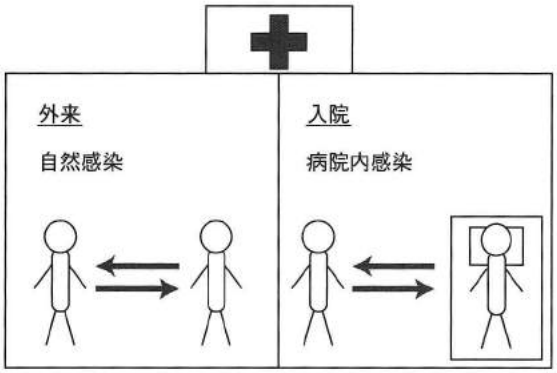
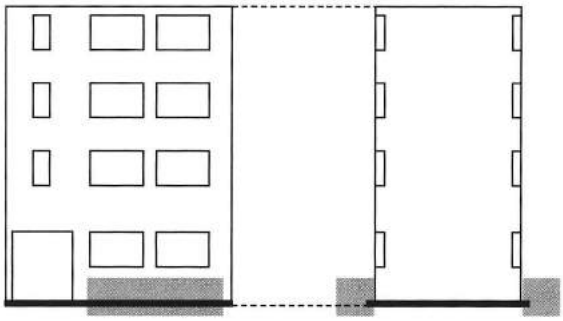


図5　病院内での感染



病院側がひた隠しにするデータ。病院の外の「犬走り」の部分、特に窓の下側で落下細菌は最も多く検出される。図の▒▒の部分。

図6　病院で落下細菌のいちばん多い場所

院内感染の定義の疑問点

疑問点をあげはじめるときりがありませんが、私たちの動物病院内で院内感染の定義を作り出すためには、どうしてもさけては通れない問題があるのです。図5の院内で入院している場合のみを院内感染というのに、なぜ、外来は含めないのか？　まるで喉にひっかかった魚の骨のように、気になって仕方がありません。病院内という院内という言葉で区切りをつけるのなら外来も含むべきではないのか？　皆さんは、この疑問をどうお考えでしょうか？

実は、病院という組織は人には言えないタブーをいっぱいかかえているのです。院内感染は医療事故です。セラチア・マルセッセンスという無毒の細菌に感染して死んだ人が出たケースでも、病院側は裁判で負けてしまいます。そうなると、外来で風邪をうつされたということまで保障しなくてはならなくなると、病院経営は成り立たなくなります。だから外来は自然感染であって院内感染ではないと、都合のいい解釈を考え出したのです。ではここで、病院が闇から闇に葬っている真実をご紹介します。これこそ病院のタブーです。「病院で、いちばん落下細菌が多い場所はどこか？」という問いに対して、某病院の臨床検査技師の方が「一階部分の窓の下だよ」と教えてくれました（**図6**）。

病院の窓の外が、いちばん落下細菌が多いのです。頭の上からMRSAが降ってくるという事実を、病院はひた隠しにしているのです。この事実を発表したくても、病院側は力づくでもみ消してきます。この事実から考えれば、「外来は自然感染」と逃げる姿勢をとり続けるのは、これはいかがなものかと強く憤りさえ感じます。

動物病院の院内感染の定義ならびに考察

私なりに定義を考えてみました。人間の病院のタブーの問題点をも乗り越えた、重たい定義にしてみました。

「動物病院に通院または入院している患畜が、原疾患とは別に新たに罹患した感染症、および動物医療従事者や飼い主が、動物病院またはその敷地周辺において罹患した感染症（動物医療従事者や飼い主が患畜の持つ微生物に罹患して発症した感染症をも含む）」

難しい言葉で表現しましたが、今までの話の流れから、なんとなく意味はわかっていただけるのではないかと思います。動物病院の場合は、「人から人」「人や動物から環境」「環境から人や動物」「人から動物」「動物から人」「動物から動物」という複雑な感染経路を想定しなくてはなりません。これらを全て含みますと上記のような定義となります。

外因性感染では、人獣共通感染症は、動物病院の中では、最も重要な感染症に位置づけされます。「知らず知らずのうちに、動物から感染してしまいました」では、泣くに泣けません。獣医医療が複雑化してくるに従って、人間の病院と同じで、内因性感染の院内感染の経路も増えています。

動物病院内でも知らず知らずのうちに、様々な院内感染が多発していることと思います。院内感染は医療事故ですので、少しでもなくすように、動物病院の医療従事者は普段から気をつけていかなくてはなりません。そのためには、動物病院にも院内感染対策委員の制度を設けて、しかも、当学会でICNの資格制度を設けて、感染症専門の看護師を早急に、世に送り出す必要があると思います。人間の病院よりも、動物病院では感染症と接する機会は多いと感じています。ICNの制度を早く作り、より、動物看護が充実したものになっていくことを願っています。

参考文献

1）新太喜治・鈴木朝勝・永井勲（1993）『滅菌・消毒ハンドブック－院内感染の防止をめざして－ 改定新版』メディカ出版
2）日本環境感染学会編（1990）『病院感染防止指針』南山堂
3）国立大学病院における院内感染予防対策等の検討委員会（1991）国立大学病院における院内感染予防対策（案），文部省通達
4）国立病院・国立療養所院内感染防止マニュアル作成委員会（1992）院内感染防止マニュアル－MRSAに注目して－，厚生省通達
5）片岡康（2004）「院内感染」『平成15年度 学会年次大会（横浜）プログラム』，p194～197，日本獣医師会
6）米国厚生省 疾病管理・予防センターのホームページ http://www.cdc.gov/
7）日本細菌学会編（2001）『病原細菌に関するバイオセーフティ指針』日本細菌学会

動物福祉はなぜ必要か ―動物福祉の理論と実践―

③人と動物の関係　1／実験動物、伴侶動物

上野吉一（うえの・よしかず）

1960年、岩手県生まれ。北海道大学農学部卒業後、同大学大学院博士課程文学研究科（行動科学）修了。現在、京都大学霊長類研究所 人類進化モデル研究センター 助教授（生命倫理研究領域）。専門は、霊長類の味覚・嗅覚の知覚・認知。主な論文に「"グルメ"の生物学的起源」（『科学』1999年4月号、岩波書店）、「味覚からみた霊長類の採食戦略」（『日本味と匂学会誌』1999年8月号、日本味と匂学会）などがある。著書には『グルメなサル 香水をつけるサル－ヒトの進化戦略－』（講談社選書メチエ）がある。

人と動物の関係による動物の分類

私たち人（ヒト）は、さまざまな目的のために動物とかかわりを持たなければならない。食べるために動物を殺し、また反対に、心に安らぎを得るために友達あるいは家族の一員として動物と生涯を共にする（多くの場合は、動物の方が先に生涯を閉じるのだが）。さらに、私たちと直接的なかかわりはないとしても、私たちの健康を守り維持するための医薬品や医療技術といったものをはじめ、さまざまなものの開発・研究のために用いられる動物も少なくない。

こうした人と動物の関係は、次のように3つの視点から整理することができる（**表1**）。

1つめの視点は、動物を利用する目的による分類である。これは以下の4つに分けることができる。

①日常生活の中で人と共に暮らしていく動物としての「伴侶動物ないし愛玩動物」
②私たちの憩いの場あるいは教育・研究の場としての展示施設、すなわち動物園・水族館で飼育される「展示動物」
③医療に関する技術開発、化粧品や食品の安全性試験、生物学といった、科学・技術研究における動物実験に用いられる「実験動物」
④乳や肉といった食物、毛や皮革といった材料すなわち資源、あるいは荷物の運搬や橇（そり）の牽引といった労働力として用いられる「産業動物」

2つめの視点は、飼育期間すなわち生涯を全うするまで飼育されるのか、目的にしたがい途中で利用されるのかによる分類である。伴侶動物や展示動物は、原則として飼育すること自体が1つの目的であるので、前者すなわち「終生飼育動物」と捉えることができる。一方、実験動物や産業動物の多くは生涯を終える前に利用されるので、そうした動物は「非終生飼育動物」と捉えることができる。

3つめの視点は、動物の出自（しゅつじ）による分類である。野生から直接連れてこられた、あるいは数世代さかのぼれば野生だった動物は、本質的には人の目的に合わせた改変が加えられていない動物、すなわち「野生動物」と考えられる。しかし、特に哺乳類や鳥類では、生育環境による影響が非常に大きいので、野生の同種とまったく同じと捉えることは、問題となる場合があることには注意が必要である。一方、人の目的に合わせて改変された動物は「品種改良動物」と言える。「品種改良動物」は、人の手により祖先種（野生種）からあらゆる面においてかけ離れた存在にされたわけではない（Anonymous, 2001）。こうした動物への福祉を考える場合、改変にともなう特殊性への配慮も必要だが、そうした面は祖先種と比較すると"一部"であり、祖先種（イヌのように祖先種が存在しない場合は野生の近縁種であるオオカミ）との共通部分への配慮も不可欠である。

表1　人との関係による動物の分類

1）目的による分類：伴侶動物ないし愛玩動物、展示動物、実験動物、産業動物
2）飼育期間による分類：終生飼育動物、非終生飼育動物
3）出自による分類：野生動物、品種改良動物

表2　わが国において2001年に使用された実験動物

動物の種類	利用頭数
マウス	2,808,712
ラット	1,236,897
ハムスター	32,177
モルモット	67,416
ウサギ	46,683
イヌ	12,569
ネコ	4,630
サル	5,606
トリ	55,326

日本実験動物学会によるアンケートを一部改変

表3　イギリスにおいて1989年に行われた動物実験の目的

基礎研究	19.4%
開発研究	44.6%
生産	17.4%
安全試験	6.5%
その他(診断など)	12.1%

Smith & Boyd, 1991を改変

これまでの2回の連載で、動物福祉についてどのように考えればよいのかを、基礎的ないしは一般論的な観点から検討してきた。しかし、実際に人が動物を飼育し関係を持つ上では、考慮すべきあるいはそれに対処すべき方法を、一様なものとして捉えることは難しい。そこで、先に見た人と動物の関係による動物の分類にもとづき、現在具体的に行われている福祉向上のための工夫や、あるいはそうしたことにおける実際的な問題点を考えてみることは重要だ。今回は、実験動物と伴侶動物に焦点を当てて検討したい。

実験動物における動物福祉

私たちが利用する動物のほとんどは、マウスやラットで占められる。**表2**は、2001年の国内における各実験用動物の利用頭数である。こうした動物を利用した実験が、どのような目的の研究に用いられているかの例としては、イギリスでの場合の資料を挙げておく(**表3**)。これで見ると、動物実験の約半分は創薬をはじめとする医療技術の開発に関するもので、約20%が基礎研究となる。私たちや動物の健康を保ち、私たちの知識を高めるために、こうした研究は有効であり不可欠なものである。しかし、この場合においても、実験に用いられる動物は生命ある存在であり、決して物(生きた試薬)では有り得ない。研究者はつねに、自らが扱う動物に対する福祉的配慮を忘れてはならないのである。

動物実験における福祉的配慮としては前回示したように、ラッセルとバーチにより1959年に提唱された「3Rs」という考え方がある。3Rsとは、

●「Replacement：代替」すなわち、生きた動物を用いずに実験をおこなう代替法の利用や開発
●「Reduction：削減」すなわち、実験技術の向上や統計解析法の発達による、実験に用いる動物の数の削減
●「Refinement：洗練」すなわち、麻酔法や鎮痛法の向上・開発による、動物に与える苦痛の軽減

の3つの目標を指す。動物実験を行う上で、利用する動物の数や与える苦痛を減らすことは、動物への福祉配慮として非常に重要なものである。

しかし残念ながら、「3Rs」には動物の視点が不足している。つまり、これは基本的に、動物実験を進める方法上の福祉的配慮だと見なすことができる。それ自体はきわめて重要なものだが、実験動物に対する福祉的配慮としては一面的でしかない。実験動物は生命ある存在であり、日常の生活がある。私たちはこの面にも十分な配慮を持たなければならない。

こうした認識から、最近では「Refinement」の中に「飼育管理の手法の洗練・向上」という観点が含まれて考えられる傾向にある(Bekoff and Meaney, 1998)。動物福祉を考える以上、こうした変化は自然な流れだろう。とはいえ、実験動物に対し環境エンリッチメントを施すことは、非常に手間のかかる作業であり、また、生活環境を豊かにすることによって得られる実験結果が不安定になるという問題が指摘されているのも事実である。研究を進めることを考えるならば、効率性や利便性は非常に重要な問題となる。しかし、環境問題がまさしく良い例のように、私たちは、効率性や利便性の向上を絶対的なものと見なす価値観を幾分か捨て去ることも、動物の福祉を確立するためには重要な姿勢となるだろう。

動物の日常の生活、そして実験手技における動物への福祉的配慮を持つことで、実験動物に対するあるいは動物実験における、福祉的ないし倫理的問題はなく

なると言えるだろうか。現実には、まださまざまな問題がある。

大きな問題は、実験動物の供給に関してである。実験動物の大半を占めるラットやマウスは、実験動物として、業者や研究施設といった生産施設によって繁殖し供給される。イヌやネコあるいはサルといった動物の中にも、そうした施設から供給されるものもいる。しかし現実には、遺棄されたイヌ・ネコや獣害駆除として捕獲されたサルが研究用として譲渡される場合も少なくない。

現在は、愛護団体からの反対運動もあり、ほとんどの自治体がこうした譲渡は行わない方向に進んでいる。保健所や動物愛護センターといった施設に保護された場合でも、そのほとんどは殺処分される。殺処分されるのなら、その命をより役に立つように利用することの方が、その動物にとり“供養になる”という考え方がある。また、その動物を使わないとするならば、別の動物を用いることになり、結果として倍の命が消費されることになるという考え方もある。たしかに命の数で考えれば、こうした考え方は正しいと言える。

しかし、動物に対する福祉あるいは倫理という観点から考えた場合、少なくとも2つの点で問題がある。第1に、そうした動物がそもそも存在するということが問題である。第2に、遺棄した動物が何らかの役に立つということが、動物を遺棄することの“免罪符”となる可能性がある。これは野生ザルの駆除の場合にも関連するもので、捕獲を過度に促進させてしまう危険性がある。

第1の問題は、利用する研究者にのみ起因するのではなく、そうした動物を生じさせてしまうところに問題がある。遺棄されたイヌ・ネコに関して言えば、飼主の責任が根本の問題と言えるだろう。また、野生動物（野生のニホンザル）の問題は、野生動物管理や環境保全の問題と切り離しては考えることができない。特に動物福祉という観点からは、飼主の責任という問題を考えることが重要だ。これは、以下の伴侶動物に関する議論の中で扱いたい。

第2の問題も、遺棄する側あるいは捕獲する側の責任という問題が大きいだろう。しかし、そうした動物を利用する側である研究者にも、動物の遺棄あるいは捕獲に対し、ある種の存在意義を与えてしまうという可能性がある。目の前にある問題だけを考えるなら、先に述べたように、遺棄されたイヌ・ネコを利用することは妥当性があるように思える。しかし、そうした態度が、遺棄という行為にある種の拍車を掛けることになっていると捉え、動物への福祉的配慮という観点から、その態度を改めることが必要だと私は考える。社団法人日本実験動物協会では、動物実験に携わる者たちのこうした問題に対する姿勢を示すものとして、『実験動物福祉憲章』を掲げている。

『実験動物福祉憲章』

①私たちは、人々の健康増進に寄与し、生命科学の発展のために動物実験が不可欠であるとの認識に立って実験動物の生命を尊び、慈しむ念をもって動物に接し、高品質の動物を提供します。

②私たちは、実験動物に関する知識を深め、動物の特性を理解し、動物福祉に努めます。

③私たちは、かけがえのない地球環境の保全に配慮して、適正な実験動物の供給体制を整えます。

④私たちは、法規や指針を順守、尊重し、幸せで豊かな社会の発展に尽力します。

なお、ニホンザルの実験利用に関しては、野生から直接サルを実験用に導入するのではなく、繁殖母群を維持し、研究に必要なサルを産出していこうという国

の計画（文部科学省新世紀重点研究創生プラン／ナショナル バイオリソース プロジェクト「ニホンザル」http://www.macaque.nips.ac.jp/）が2002年より開始されている。あるいは、サガ（SAGA：Support for African／Asian Great Apes http://saga-jp.org/indexj.jhtml）と名付けられた、研究者、動物園関係者、その他の関心のある人々による、大型類人猿の福祉と保護を考える集いが1998年に始められ、今年で8年目を迎える。サガは大型類人猿を用いた動物実験に対する項目も含めて、次の3つの提言を行っている。

①野生の大型類人猿とその生息域を保全する。
②飼育下の大型類人猿の「生活の質（QOL：Quarity of Life）」を向上させる。
③大型類人猿を侵襲的※な研究の対象にせず、非侵襲的な方法によって人間理解を深める研究を推進する。

伴侶動物 および 愛玩動物における動物福祉

2003年に総理府により実施された「動物愛護法に関する世論調査」の結果をもとに、全世帯数を4900万として概算すると、40％近くに当たる約1800万世帯が何らの愛玩動物を飼育している。そのうち約62％の1100万世帯がイヌを、約30％の520万世帯がネコを飼育していると見積もられる。また、別の調査では国内の総ペット飼育頭数は約3900万頭という試算もあり、その数は増加を続けている。現在の日本においては非常に多くの人々が動物を飼育し、中でもイヌやネコといった動物は“家族の一員”すなわち伴侶動物として扱われる傾向にある。伴侶動物あるいは愛玩動物は基本として、非常に手厚く扱われ、生活の質は非常に高いものに保たれていると言えるだろう。

単にイヌやネコなどが家の中でかわいがられているというだけではない。イヌやネコに対して、“おしゃぶり”をはじめとする実に多様な欲求に応えるために、さまざまな玩具が開発されており、個体による嗜好性にもかなり対応できるようになっている。

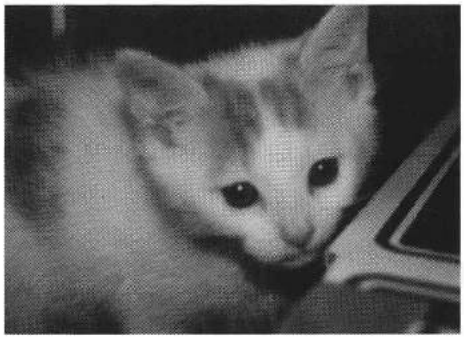
また、イヌ・ネコ以外でも、たとえば「ハムスターのアパート」などといわれる、地中に穴を掘り生活する性質を少しでも満たすための、プラスチック・チューブによるトンネルやさまざまな巣箱などが商品として売り出されている。こうした玩具や飼育環境の工夫は、まさしく環境エンリッチメントの発想に立ったものであり、心理的幸福を確保し向上させるためには適切な工夫である。

伴侶動物あるいは愛玩動物においては、生活の質は高められ、とりたてて彼らの生活には問題はないかのように思える。しかし、実際には問題がある。

1つには、飼育者の知識不足あるいは“過剰な”愛情による不適切な飼育やかかわりによる問題行動、あるいは人の場合の生活習慣病に相当する肥満などがある。こうしたことは、伴侶動物あるいは愛玩動物といった目的を考えるならば、動物福祉という観点から見る場合、必ずしも否定的に捉える必要はないかもしれない。飼育者が自分の動物を大事にしたいという思いを基本とする態度の結果であり、どういったことに注意すればより良いかを知る機会があれば、そうした問題は改善ないし解決されていくだろう。

もう1つの問題は、前述の実験動物の項で触れたように、伴侶動物や愛玩動物の遺棄である。これは、動物は目的を持って飼育される必要があるという、動物福祉の基本的な考え方から外れる。動物も、その目的の中で本来与えられるはずの生活の質が確保できないことになる。昨今では、遺棄された動物が、移入動物として在来の動物種を駆逐していく危険性も報告されており、「種の保全」という観点からも大きな社会問

※侵襲的：身体に不可逆的な損害・痛手を与えるもの



題となっている。こうした問題に対応するため、「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」が2004年6月2日に公布された（2005年6月1日施行）。遺棄の問題の根本的な原因は、飼育者の責任のなさにあるのは間違いない。

■ ■

しかしそこには、動物への配慮の向け方に関する文化の違いも大きく影響しているようだ。わが国では、「生命、すなわち生きているということ」に目を向ける傾向にある。一方、欧米では「感覚をもって存在、すなわち生活ということ」に目を向ける傾向にある。したがって“不用”な動物に対しては、動物の生活を重んずる（たとえば生活の質の向上あるいは苦痛の低減）欧米であれば、安楽殺※を考える場合が少なくない。一方、生命を重んずるわが国では、何より生きていることが重要となる。そのため、どのような形であれ、積極的に命を奪うという行為に対し抵抗を強く感じ、またその生命に対する思いを強く持ち、その結果として、自らの手で処分するのではなく“成り行き”に任せるという選択をしがちである。

生命に対するこうした思いの表れとして、わが国では古くから生命を奪った動物に対し（動物のみならず、その他のさまざまなものに対しても）、慰霊碑を建てたり供養を行うことは広く見られるが、欧米ではこうしたことはほとんど見られない。老齢動物に対しても、わが国ではたとえば、がんの末期状態にあったとしても自然死を願うのに対し、欧米では、ある程度の段階で苦痛を取り除くという意味もあっての安楽殺を選択することが多いという。こうした意識の違いが大きな理由の1つとなり、飼育者としての責任にもとづいて生命を奪うという選択を取りづらく、遺棄という選択に至ってしまうことは十分に考えられる。

伴侶動物や愛玩動物の福祉を考える場合、遺棄あるいは老齢動物の扱いで象徴されるように、生命の扱い方は非常に重要な問題である。そこには安楽殺という最終的な処分方法だけではなく、無責任なあるいは無計画な繁殖すなわち生み増やすという点も含まれる。

実験動物、産業動物、展示動物のいずれの場合も、それぞれの目的に合せた計画繁殖が原則である。伴侶動物や愛玩動物には、必ずしもこれは当てはまらない。かわいがっている動物に子供を生ませたいと思う気持ちは、人にとって自然な感覚と言えるのかもしれない。しかし、そうした素朴な思いの結果が、動物の遺棄やノラネコなどの問題を引き起こしていることも事実である。

動物たちは私たちに安らぎや癒しを与えてくれる。しかし、私たちがそうした思いを一時得るためだけに、動物を利用するのは適切ではない。伴侶動物や愛玩動物は他の動物と異なり、きわめて個人的な目的で飼育される。ほとんどの場合は、動物への福祉的配慮は高いものと言えるだろう。しかし、生命の扱いに関しては先に考えたように問題がある。一義的にどうすれば良いかが結論づけられる問題ではない。飼育者が責任を持って、“不用”な動物を生み出さないようにし、さらには管理していくことがますます重要になっていくことは間違いない。

※一般には、動物にできる限り苦痛を与えずに処分することを「安楽死」と呼んでいる。しかし、人における安楽死（Euthanasia）の議論には、「尊厳死（Good Death）」か「慈悲殺（Mercy Killing）」という問題がある。人が動物に行うのは、動物が望む死への思いを助けるのではなく、動物を“苦痛”から解放するために殺処置を施すことである。したがって、本稿では殺処置であることを明確にするために、あえて「安楽殺」という表現を用いている。この表現は、京都大学霊長類研究所のサルの飼育・取扱のガイドライン（http://www.pri.kyoto-u.ac.jp/research/sisin/sisin.html）でも使用されている。

参考文献

Anonymous.(2001) Scientists' Assessment of the Impact of Housing and Management on Animal Welfare. *Journal of Applied Animal Welfare Science*, Vol.4 No.1,p3-52

Bekoff, M. and Meaney,C. A. ed. (1998) Encyclopedia of animal rights and animal welfare. Greenwood Press. Westport.

Smith, J. A. and Boyd, K. M.(1991) *Lives in the Balance: The Ethics of Using Animals in Biomedical Research*. Oxford Univ. Press. Oxford.

動物取扱業者の規制強化へ法改正

改正動物愛護法が15日、参院本会議で成立した。ペットショップなどの動物取扱業者を届け出制から登録制とするなど、いくつかの点が改正された。1年以内に施行される見通しだ。

動物取扱業者の規制強化については、5年前の同法スタート時から愛護団体や専門家が指摘してきた。

今回、届け出制を登録制に改正し、施設や飼育方法が環境省の定めた基準を満たさない場合、都道府県知事が登録取り消しや登録拒否をするとした。インターネット販売など施設を持たない業者や、「動物触れ合い施設」も新たに動物取扱業に含むことになった。

他の主な改正点は、

・動物にえさをやらないなどの虐待や、捨てた（遺棄）際の罰金を30万円以下から50万円以下に引き上げ

・実験動物福祉の原則といわれる「3R」（動物の苦痛の軽減、使用数の削減、代替実験法への転換）を盛り込んだ。ただし、義務なのは「苦痛の軽減」のみで、「数の削減、代替法への転換」は、「配慮」事項

・危険動物の個体識別措置（マイクロチップなど）の義務化　など。

今回の改正について、長く働きかけをしてきた「自然と動物を考える市民会議」は、「悪質な動物取扱業を営業停止にできる点や、『3R』が盛り込まれたことは、一歩前進といえる」と評価しながらも、「不正なネット業者を現実的にどこまで規制できるかなど課題は多い。愛護法の社会的認知をもっと高めることも必要」としている。

資料／東京新聞 2005年6月29日 夕刊より　転載許可済

動物看護専門学校生による発表

今号では5編をご紹介いたします。獣医学、動物看護学、人と動物の関係学の各テーマに対する、学生ならではの“意欲的な視点”が注目されます。発表者の皆さんが、今後いっそう研究を進められることを期待するものです。

※査読は経ておりません。

ウサギの頬骨毛

浅川真希
（日本動物病院看護師学院 第8期生）

●要約

ウサギの頬を撫でている時に、塊のようなものが指に触れた。掻き分けてみると数本の毛が毛根部で固まっていて、黄色または黒色の付着物がついていた。引っ張ってみると、簡単に抜けるものと少し力を加えれば抜けるものとがあり、簡単に抜ける方は痛がっている様子を見せなかった。数か月経つとまた同じような場所に出来ている。何度か出来ては抜いてを繰り返しているうちに、一部の付着物の隣が2～3㎜程度毛が生えていないことに気づいた。

このような被毛について、これまでの成書には記載されてないので、自宅・学院・ペットショップなどの家兎で調べてみた。その結果、このような頬骨毛は新生ウサギでは見られなかったが、1歳前後から認められるようになり、加齢とともに目立つようになった。性差は特になく、オス・メス共に両頬に見られた。これらの毛の形状は、隣接する顔面の被毛と比べて特に差はなく、白色種と有色種のいずれにも認められた。短毛・長毛では長毛種は見分けがたいが、両者にこのような毛があることが確認された。毛根に付着する脂質様物質は、アルコールと除光液に常温で数日間浸してみたが溶解しなかった。

以上のような頬骨毛の機能は明らかではないが、比較解剖学的に見て、ウサギに近いモルモット、ハムスター、ラット、チンチラなどのげっ歯類やフェレットなどにも、このような頬骨毛が存在するかどうかについて、今後検討したい。

●材料と方法

家兎（ミニウサギ・アンゴラ・ミニレッキスなど）のオス・メス、仔兎・成兎の計12羽についてサンプルを採り、これを顕微鏡下で観察するとともに、毛根の皮脂と思われる付着物を洗剤・アルコール・除光液・ベンジン・キシロール・灯油などの化学物質で溶解するかどうかを試みた。

●結果

1．品種との比較

1)短毛種

①MIX

・ミニウサギ（♂）：毛の量はそれほど多くはないが、しっかりまとまっているので見つけるのは容易。毛の1本1本を簡単に分けることができる。付着物の色はすべて黄色い。

・ミニウサギ（♀）2歳：②同様、毛の量はそれほど多くはないが、しっかりまとまっていて、見つけるのは容易。簡単に分けることが可能。付着物の色は黄色い。

・ミニウサギ（♀）2歳：付着物でまとまった部分の毛量が一番多いと思われたウサギ。付着物自体も大きく色は黄色。しっかりまとまっている。

・ミニウサギ（♂）：先天的な不正咬合をもつウサギ。時間をかけてやっと見つけることができた。束になった部分の毛量がほとんどなく、付着物もほとんどない。毛の1本1本を簡単に分けることができる。

②ミニレッキス

毛量が多いためか、見つけるのが困難だった。それらしいものとしていくつか触れることができた。

2)長毛種

①ライオン系MIX（♂）3歳5か月：頻繁に触り、見つけては抜いてを繰り返したウサギ。束は比較的小さいがしっかりしていて、付着物は黄色いものから黒いものが多かった。黒いほうが比較的簡単に抜ける。耳下の辺りから下顎の辺りに存在。

②アンゴラ：頬に触れているうちに毛が絡まってしまうため、見つけるのが困難。

③アメリカンファジーロップ：毛量があるため、見つけるのが困難だったが確認することはできた。付着物はあまり大きくなく、色は黄色。

④ライオンロップ（♀）1歳2か月：何度か頬に触れていたが、今のところ見つかったことはない。

2．年齢との比較

1)仔ウサギ

生後1か月のウサギから性成熟前までのウサギ（♂・♀）で、ミニウサギ・ネザーランドドワーフ、ミニレッキス、ドワーフロップ、ライオンロップを調べてみたが、確認できたウサギはいなかった。性成熟直後のメスのウサギにもまだ確認できてはいない。

2)成兎

1歳以上のウサギで確認したもののうち、ほとんどに存在が認められた。ただし今回、老齢については調べることはできなかった。

3．性別での比較

成兎であれば、オス・メス共にほぼ確認することができる。比較的オスよりもメスのほうが付着物は大きい気がするが、毛の長さや密度にも関係があると思うので、はっきりとは言い難い。

4．化学物質との反応

1)エタノール

・成分：発酵エタノール、クエン酸、精製水。

・結果：付着部分は白く変色したが、毛が束状になっているため分離はしていない。

2)除光液

・成分：アセトン、水、オリーブ油、イソステアリルアルコール、テトラオレイン酸ソルベス-60、PPG-12-PEG-65液状ラノリン、オキシベンゾン-3

・結果：付着部は黄色く残っている。毛にも変化はなく束状。

3)液状石鹸

・成分：イソプロピルメチルフェノール、エデト酸塩、緑色201号、緑色204号。

・結果：毛が分離していることから、溶解したと考えられる。

4)中性洗剤

・成分：界面活性剤（16%）、陰イオン界面活性剤。

・結果：数日かけて除々に溶解。

5)弱アルカリ性洗剤

・成分：界面活性剤（41%　アルキルエーテル硫酸エステルナトリウム、アルキルアミンオキシド）、安定化剤、粘度調整剤、酵素。

・結果：付着部分のみ溶解。振動を与えたら毛が分離したため、完全に溶解したと言える。

6)アルカリ性洗剤（漂白剤）

・成分：次亜塩素酸ナトリウム、界面活性剤（アルキルアミンオキシド）、アルカリ剤

・結果：浸けて数分後に毛が溶解。付着部分のみかすかに残ったので、すぐにスライドグラスに置き観察。

●考察

頬骨毛の付着物を調べた結果、成兎にはほとんど確認できたことから、種類に関係なく、かなりの確率で存在するものだと考えられる。仔ウサギには認められず、発情期を迎えた生後4～5か月以降から1歳頃に確認できるようになると思われる。

付着物の大きさはまちまちであるが、短毛種のほうが固まり方は大きく、束になった毛の量も多かった。逆に長毛種になると、毛の長さにより確認が難しくなり、見つけることが出来ても、あまり大きい付着物を持ったものはいなかった。

雌雄の差についてもあまりなく、どちらにも存在するため、男性ホルモンであるアンドロゲンや女性ホルモンであるエストロゲン・プロゲステロンとの関係はないと言えるが、発情期後に出てくることを考えると、成長ホルモンとの関係はあることも考えられる。臭腺との関係も考えてはみたが、ウサギの臭腺は下顎・肛門部・鼠頸部にあることから、頬部のみに現れる付着物の関係とはないに等しい。

化学物質の反応については、意外にも普段近くにおいてあるような物で溶解することがわかった。弱アルカリ性の台所用洗剤内に浸したところ、徐々に溶解していったため、phの違う家庭内で使われている洗剤や、業務用に使われている洗剤などでいくつか試してみた。それによると、洗剤や石鹸には溶解することが分かり、特にアルカリ性の洗剤には早く反応を示し、付着物が完全になくなるまで溶解した。アルコールや除光液、ベンジンでは溶解することはなく、振動を与えても分離しなかった。

なぜ頬部のみに存在するのかはこの研究だけでは明らかではないが、洗剤で付着物がなくなることから、犬などでシャンプーをあまり行っていない動物にも存在するのではないだろうか。また、ウサギは自らグルーミングを行うのでシャンプーは必要ないが、顔自体は口で舐めることができず前肢のみでのグルーミングとなり、頭部よりも頬部のほうが、食べ物や床などにより汚れる割合が高いと思われるため、このような付着物が存在してくるのではないだろうか。不正咬合のウサギにほとんど見られなかったのは、歯からの痛みにより頬部を汚すことがほとんどないからとも考えられる。

謝辞

本稿執筆にあたり、うさぎ専門店『空とぶうさぎ』の皆様にご協力いただきました。謹んで御礼申し上げます。

参考文献

1) R.Barone・C.Pavaux・P.C.Blin・P.Cuq（1977）『兎の解剖図譜』（望月公子訳）p185　学窓社
2) Lieve Okerman（1988）『うさぎの臨床』（斉藤久美子訳）p117　インターズー
3) 斉藤久美子（1994）『うさぎ学入門』p56　インターズー
4) 大野瑞絵・加納泰雄（2001）『わが家の動物・完全マニュアル　ウサギ』p50～73　スタジオ・エス

“動物の孤児院”

尾方ひろみ

（日本動物病院看護師学院 第8期生）

道の片隅で寒さと飢えに震える犬も、人と同じ命を持っている“孤児”です。彼らの大半は、孤独と飢えに苦しみ、保健所で殺処分されています。この悲しい現実に、私たちは慣れてしまったのでしょうか？　そうではありません。

私は、動物の保護施設である「NPO（特定非営利活動法人）アニマルレフュージ関西（Animal Refuge Kansai：ARK）」と「三宅島噴火災害動物救援センター」の活動に、ボランティアとして参加させていただきました。スタッフの皆さんが一生懸命に、一匹でも多くの動物を救おうとしている姿が、私に「命の尊さ」を教えてくれました。一人の人間の手は小さいけれども、みんなの手が集まれば何かができるはずです。人間が力を合わせて動くには「大きなきっかけ」が必要だったのです。

今回取材させていただいた、大阪府豊能郡にあるARKが“大きく成長したきっかけ”は、1995年に起きた阪神大震災でした。一方、まだ記憶に新しい、2000年に起きた三宅島火山噴火では、震災下で飼主とはぐれて迷子になった動物たちを救うために、「三宅島噴火災害動物救援センター」が設立されました。

災害によりたくさんの動物の命が失われることと、私たちが気づかない場所でオブラートに包まれたまま、年間70万頭近くの犬や猫が殺処分されることは、結果的には同じことではないでしょうか？　動物の保護施設、すなわち“動物の孤児院”は、今すぐに社会に必要とされていると思います。

人間が動物を助けようとして一生懸命に働いている姿は、とても美しく素晴しかったです。人間が力を合わせて知恵を出し合うと、限りなくたくさんの動物が救えるのだと希望を感じました。今回の報告が、動物の孤児院設立に向けての小さなきっかけになったらよいな、と願っています。

まず最初に、ARKの実状について以下の4つの観点から記します。

①労働力の確保

ARKから公表されている会計報告（2002年4月1日～2003年3月31日分）によると、年間支出のうち「給料・スタッフ諸費」が44,910,482円と、支出の中で最も大きな割合を占めています。人件費を抑える上で一番効果的な方法は、少しでも多くの人々に施設の存在を知ってもらい、ボランティア支援の輪を広げてゆくことだと思います。

そのためには、テレビ・ラジオ・雑誌などのマスメディアやインターネットを使って、ボランティア募集の広報活動を積極的に行うのが効果的です。ボランティア募集はマスメディア使用の他には、獣医師会、動物愛護団体、獣医系大学、動物看護専門学校、一般の学校などへ向けて、ポスターやチラシなどにより積極的に行うと効果的です。

ちなみに、三宅島噴火災害動物救援センターの資料によると、ボランティア応募のきっかけは「インターネットで見て」が特に多かったようです。

②動物の食費

ARKから公表されている会計報告（2002年4月1日～2003年3月31日分）を見ると、この1年間に必要とされた動物用食費は48,583円でした。ARKにいる動物は約500匹なので、この数字は驚くほど安いものです。その理由は、マスメディアなどによるARKの宣伝効果のため、全国各地からペットフードの寄付があるからです。

寄付の中には、様々なペットフード（サンプル品・包装ミスやパッケージの印刷ミスのもの）があります。ARK内には、入りきらないほどのペットフードの在庫があり、寄付の要請をお断りするほどです。もし新たに動物の孤児院を設立するとしても、こうした例を見る限り、食費の面で問題はないと思われます。

③糞便の処理

ARKでは、朝と夕の散歩時などに、ビニールに入れた便をペットフードの空袋に入れます。それをさらにビニールで包み、口を強くしばって悪臭を防ぎます。集めたビニール袋を糞便処理専用倉庫に1週間保存します。業者がトラックで運びに訪れていました。糞便1トンにつき20,000円の処理費がかかります。ARKのような山中にある施設でも、この輸送方法で解決できます。

④近隣対策と防臭、防音

三宅島噴火災害動物救援センターでは、動物舎の床や壁はベニヤのみであったので、それぞれリノリウムを張り、尿による汚染と臭気を防止していました。猫舎には開放室を設けて“遊びスペース”の確保をしていました。暑さ対策としては、2階に断熱材を配した天井張り、屋根に散水装置、パドックに日よけ幕の設置、犬の散歩コースの時間変更をしていました。また、寒さ対策としては、隙間風防止、犬に日当たりの良い場所へパドック式運動場を設置すること、などをしていました。

犬による騒音（吠え声）については、ARKのように人里離れた山の中に建設すること、あるいは、アボアストップ（商品名）などの首輪で防げます。

私がARKを訪れた時、ここでは犬を約250匹、猫を約220匹、他に鶏、豚、兎、チャボ、銀狐を保護していました。約30名の専従スタッフがいますが、その補助はボランティアの協力に頼っています。ARKでは保護された迷い動物の治療、不妊手術の実施、里親探しを行っています。また、ARKは1年を通じて広報活動や、多くの小学校や中学校などでの講演会、動物福祉に関するセミナーを開催しています。加えて、季刊誌『A voice for Animals』やプロモーション用パンフレット、オリジナルカレンダーも製作販売しています。これらはダイレクトメールで会員や支持者など約8,000人に届けられています。

なお、ARKの基本的な1日のスケジュールは以下の通りです。

8：30　始業
8：40　スタッフ&ボランティアミーティング
8：50　始業（犬舎・猫舎の清掃、散歩、給餌）
14：00　スタッフが交代で食事と休憩をとる
14：30　業務再開（犬の散歩）
16：00　スタッフとボランティアによるミーティング
16：20　業務再開（犬舎・猫舎の清掃、散歩、給餌）
18：00　終業

ARKは動物保護施設のモデルケースとして活発に事業を進めています。このような施設が日本中にできることを心から願っています。なお、三宅島噴火災害動物救援センターで収容されていた動物は、すべて里親にひきとられました。同センターは現在はすでに閉鎖されています。

私たち人間も、たくさんの捨て犬や捨て猫が生まれているような社会で、どこか暗い気持ちを抱えながら生きるよりも、動物の孤児院があり、そこで犬や猫が救われて、人間も癒されるような社会の方が、明るく幸せに希望を持って生きていけると思います。私は、経済・地域・人員など様々な面での問題は多々ありますが、わが国に動物の孤児院“RAINBOWシェルター（私案、下記を参照）”の設立・運営は可能であると確信します。

“RAINBOWシェルター”（私の理想とする動物の孤児院）

RAINBOWは、悲しい雨の空へ訪れる七色の希望の光…を意味しています。
①終生飼育の動物の孤児院です。
②動物たちに適切なしつけを行い、愛情をかけて世話することで、動物たちの社会復帰の場とします。
③誰でも自由に訪問することができます。成長期の子供たちがここにいる動物とふれ合うことで、命の尊さや豊かな感受性を育てることが可能です。また、お年寄りにも自由に動物と接してもらい、アニマル・セラピー効果、生きがいの場としてもらえます。
④施設内に動物病院を設けて適切なケアを行います。また、望まれずに生まれてくる動物の数を減らすために不妊手術の実施を奨励します。
⑤保護された迷い動物の治療および保護と、里親探しを行います。

資料

『パオ、元気でね！』それを聞いたパオは、ガリガリと、またドアを必死にかきむしった。そして、叫んだ。『ヤダ！ヤダ！　お姉ちゃん、死なないで』。老犬は、悲しそうな瞳で振り返ったが、コロが追いつくと、また歩き出した。2匹は寄り添うように、ガス室へ入っていった。

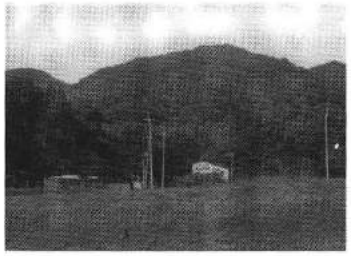
ドアが、ゆっくりと閉まった。ガス室は、リフトで上がっていく。機械の音だけが響く。恐怖から、コロは老犬に寄り添った。老犬も、コロを守るように震える足で立っている。まもなく「シュー」と炭酸ガスが噴出してきた。『少しのガマンだよ』。

2匹はビクンビクンと大きくケイレンした。コロの脳裏に母のネロやトト……そしてパオの顔がよみがえった。コロははげしくノタ打ち回る。『パオ……パオ……パ…オ』。叫んだ口から泡が吹き出した。コロは大きく目を見開いた。そして、ゆっくりと閉じていった。コロの目が涙で濡れていた。老犬は、もう1度、最後の力を振りしぼり、コロのところに這うように向かった。ガクガクと足がケイレンする。口から泡を吹き出し、コロの横に倒れた。老犬も、コロに寄り添うように息絶えた。『最後まで一緒だよ』。老犬の声にならない声が聞こえるようだった。

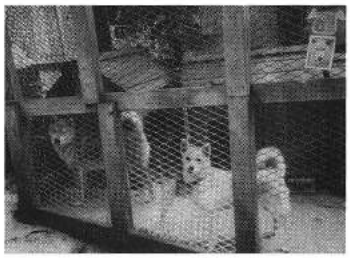
「ガッタン」という音と同時に床が開いた。2匹の死骸は下の焼却炉にゴミのように落とされた。そのまま800度の高温で焼かれ、2匹の死骸は骨となった。

2匹の骨は粉砕機にかけられた。2匹の骨は粉となり混ざり合った。そして、その骨粉はゴミ袋のような袋に入れられた。袋に100匹の骨が入っている。年間21万匹……その犬たちの叫びが聞こえますか？　犬たちは、何のために生まれて、何のために死んでいくのか？　今日もまた、犬たちがもだえ苦しみ、粉になっていく。

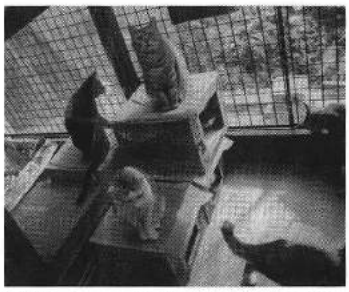
参考文献2)「処分室で…」より引用



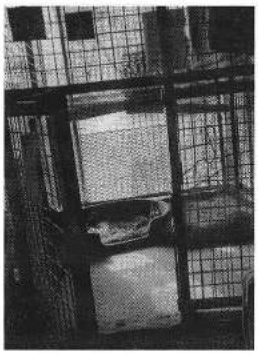
①ARKのある場所――山道を奥に入ると、建物が見えて犬の吠える声が聞こえてきました。



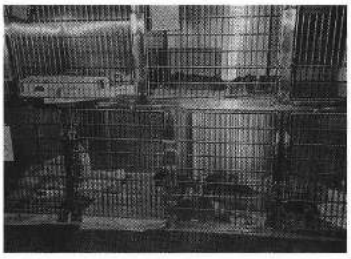
②ARKにいる犬たち――写真は「k－1」の犬たちです。性格がとても優しくて人なつっこいです。こうした犬は里親が見つかりやすいです。ARKを訪れた人たちが、すぐにふれ合える場所にいます。ちなみに「k－1」とは、人によく慣れている犬であることを意味する指標です。「k－2」の犬はやや、人に慣れていません。犬が嫌いで人が好きな犬もいます。「k－3」の犬は、人にまったく慣れていません。恐怖心からほえたりします。近づくと危ないので別の犬舎にいます。



③ARKにいる猫たち――1部屋に5匹ずつ飼われていました。室内は掃除が行き届いています。日当たりもよく清潔でした。



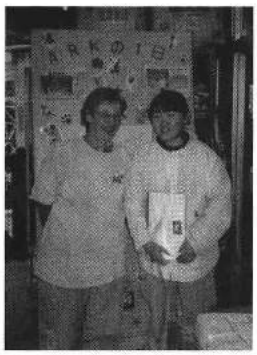
④ARKの犬舎――すべて日当たりがよく清潔で、毛布が敷きつめられたベッドがあります。すべての動物に対して、細かく行き届いた世話が行われていました。



⑤院内の入院施設――けんかでケガをした犬、点滴が必要な老犬、拾われてきたばかりで弱っている動物などが入院しています。動物看護師の方が世話をされていました。

⑥「k－1」の犬を山道で散歩させる――通常は1回の散歩で2～3匹の犬を連れますが、写真の犬は1匹だけ連れられます。理由は、人間は好きですが犬が嫌いだからです。犬舎でも独立したケージに1匹で飼われています。このように犬の個性に合わせた飼育が行われています。散歩では、1回20分程度を目安にして山道を歩きます。山道を犬と歩いていると、あけびが落ちていたり小さな湖があったりしました。自然がいっぱいで、とても楽しく癒されました。

⑦ARKのスタッフ――最右が動物看護師の方、左のお二人がボランティアの方々。



⑧ARKの主催者・エリザベス・オリバーさんと――彼女は英国人で日本での永住者です。「小さな一歩から、日本の動物たちが住む環境を変えられるとよいですね」と話しておられました。動物に対する考えが深くて優しい方でした。(右は筆者)

※アニマルレフュージ関西（ARK）のホームページ
http://www.arkbark.net/

参考文献
1) 児玉小枝（2000）『どうぶつたちへのレクイエム』桜桃書房
2) Yoshi（2003）『Deep Love 特別版－パオの物語－』スターツ出版
3) 平野優佳編（1992）『わん！の本～500匹の犬と本多さんの本当の話』扶桑社
4) アニマルレフュージ関西『A voice for Animals』
5) 三宅島噴火災害動物救援本部（2001）『三宅島被災動物救援活動報告書』
6) 地球生物会議 ALIVE『残された命』（ビデオ）

アニマルセラピー

朝比奈史佳
（日本動物病院看護師学院 第9期生）

知人の家に呼ばれ、緊張して落ち着かないときに犬や猫等のペットが居ると、なんとなく会話も弾み、撫でているだけで緊張が和らぐ、そんな身近なことがこのセラピーには関係しているのではないかと思います。

高齢者や精神的な病気を持つ方々が、動物の存在で安心感を味わいストレスや孤独感を和らげることができる――人間でも薬でもなく、言葉をもたない動物たちだからこそできる治療の効果があると言われています。

また、血圧が下がったり、ストレスが和らいだり、うつ状態がよくなったりすることが臨床的にも証明されています。障害者のための乗馬療法やイルカセラピーなど様々ありますが、今回は特別老人福祉施設（以下、施設）における、犬によるアニマルセラピーを取り上げました。

①目的

近年“元捨て犬”のセラピードッグが増えてきています。一方で、高齢化により身近な場所でも次々にこうした施設が新設されています。どんどん増えていく施設が、どんどんセラピードッグを受け入れるようになれば、ペットブームの裏側で飼われては捨てられていく犬たちも、新しくその存在を必要としてくれる場所を見つけることが出来るのではないかと思いました。この活動を広めるために、私たち動物看護師ができることは何かを考えるために、施設訪問や、盲導犬・介助犬と比べた場合の一般の方のセラピードッグについての考え方やイメージを調査しました。

この先、「施設におけるセラピードッグの普及は可能か」ということも併せて検討したいと思います。

②方法

・セラピードッグを取り入れている施設を訪問し、実際にセラピー活動を体験してみる。
・一般の方70名にアンケート調査を行う――年齢・性別・出身地を問わず。当学院に来てくださっている「わんわんクラブ」の会員のわんちゃんの飼い主さん、犬と散歩中の人などを対象に行いました。
・AAA（Animal Assisted Activity、動物介在活動）に参加しました。

③結果

1)施設への訪問

埼玉県にあるデイサービスを中心に行っている施設を訪問しました。本でしかアニマルセラピーについて読んだことのなかった私には、この効果を肌で感じ、犬の必要性を強く感じることができました。

まず第一に、施設内を自由に動物が歩いているため、とても和やかで温かい雰囲気を感じることができました。以前、アニマルセラピーを取り入れていない普通の施設を訪問する機会がありましたが、廊下には写真が貼ってあったり、様々なイベントが用意されていたりして、施設の方の工夫を沢山見ることができました。しかし、この埼玉県の施設を訪問した後は、以前に訪れた施設の空間に犬や猫などの動物がいれば、もっと明るく楽しい空間が作れるのではないかと思うようになりました。ここでは散歩にも同行させていただき、ご老人の方々の明るい笑顔を間近で感じることができたり、また、初対面のご老人とも「犬はお好きですか？　犬がおやつが欲しいって言っていますよ」など、犬を通じて自然に言葉を交わすことができました。

●アニマルセラピーの効果

この施設における実際の効果を紹介します。

ケース1

元々は、歩いたり座ったりするのも多少介護が必要だった方が、犬のしつけトレーニングなどにも自ら参加し、いまでは散歩のときに自分以外の方の車イスを押すまでになったそうです。

ケース2

初めは寝たきりだった老人も、いまでは引き綱をしっかり握り一緒に散歩に出かけていました。他にも、
・犬の名前を覚えようとすることで、記憶力の低下を防ぐ。
・触りたいと手を動かすことが、運動能力の低下を防ぐ。
・撫でたり抱いたりすることが刺激になり、痴呆の進行を止めたり遅らせたりする。
・犬がそばに居ることで脈拍が安定し、血圧・コレステロール値も安定する。
・気持ちが落ち着き生活に喜びを感じ、うつ病を防止する。
・犬を通じて会話ができたり、コミュニケーションの機会が増える。
など、生理的、心理的、社会的にたくさんのセラピーの効果が認められています。

今回訪問したような特別老人福祉施設でのアニマルセラピーには、これまで述べてきたような、動物の介在によって出てくる効果はもちろんのこと、人間と人間の間に犬と

いう存在が入ることで、その関係をスムーズに行えるという点が最大の長所ではないかと思います。施設で心を閉ざしていたようなご老人も、直接人間が「天気が良いですね」などと話しかけるよりは、「どうですか？　撫でてみますか？」などと話しかける方が、自然で無理のない会話ができるのではないかと思います。

●アニマルセラピーの問題点

しかし、この活動には「健康・衛生面」「犬の肥満対策（飼育型のみ）」「犬のストレス対策」「犬の老化や引退への対処」「動物嫌いな人への対処」などの様々な問題点があります。

これらの問題に対しては、活動が、施設で動物を飼っている「飼育型」（そこで動物を飼っているので、つねにそばに動物たちがいる場合）か、または、ボランティアの人たちと一緒に施設を訪れる「訪問型」（動物やボランティアの方たちが、愛犬などを連れて定期的に訪問する場合）かによって、対処法が変わってきます。

飼育型と訪問型の両方における対処

健康・衛生面

この点は飼育型、訪問型にかかわらず、寄生虫の検査や定期的な健康診断、つねに清潔に保つためのシャンプーを活動前日に行うこと（耳掃除などを含めて）など、施設やボランティアの方々がそれぞれ気をつけています。

飼育型における対処

犬の肥満対策

動物におやつをあげることを楽しみにしている老人の方には、厳しい制限はしませんが、職員から動物へはなるべくあげずに毎日体重測定を行い、その日の給餌量を調整しているようです。

犬のストレス対策

今回訪問した施設は自然の豊かな広々とした敷地があり、犬たちには自由な時間と場所が充分に確保されていたため、特にこの対策はしていませんでした。活動時間は散歩の時くらいで、その他の時間はノーリードで動物が自由に施設内を歩いていました。

犬の老化や引退への対処

この施設ではまだ老齢犬はいないようですが、人と動物が一緒に年老いていくのもよいのではないか、という考え方でした。引退後の動物は職員の方に引き取られるようです。

犬が嫌いな人への対処

犬は一度嫌な事をされるとその人のことを覚えていて、その後あえて、その人に自分から近づくことはないでしょう。また“嫌い”という負の感情表現も、痴呆の方やご老人には刺激になってよいのではないかという考え方でした。いままで問題が起きたことはなかったようです。

訪問型における対処

犬のストレス対策

活動時間は30分から40分程度で、ストレスのサイン（あくび、パンティング、落ち着きがなくなる、など）が見えたら、動物を一度外へ連れ出して、遊んだりして気分転換をさせる。犬の気が乗らないときは無理には参加させない。活動後は、犬を公園に連れて行き思い切り走らせたりして“ごほうび”をあげる。

犬の老化や引退への対処

盲導犬と同じように7歳頃で引退をして、余生はボランティアのもとで過ごすようにします。

犬が嫌いな人への対処

施設内に犬がつねにいるわけではないので、アニマルセラピーの活動日に、参加したい人のみが会場に来ればよく、動物が嫌いな人は接しないように気をつけています。

このように、様々な考え方や長所・短所があると思いますが、働く犬たちが必ず抱くであろうストレス――アニマルセラピーにおいては、動物がこのストレスを持ちながら人間と接していては、まったく意味がありません。動物も犬も人間も心から楽しむことが、いちばん大切な条件になると思います。

2)アンケート調査

この活動を広く認めてもらうためには、セラピードッグとしての活動を終えた後の引退犬を引き取ってくれる里親や、活動のための資金集めが課題となるでしょう。また、さらに多くの老人福祉施設が、セラピードッグを受け入れるようになるためには、一般の方の理解が必要なのではないかと考えました。そこで、盲導犬や介助犬と比較して、それぞれの知名度、アニマルセラピーに関するイメージなどを調査してみました。

●盲導犬・介助犬との比較

盲導犬

- 全国で948頭（2004年7月現在、日本介助犬アカデミー資料より）。
- 1年間に新たに約130頭が盲導犬・介助犬となる。
- 高度な訓練を受けた末に、盲導犬になれる犬の確率は、候補として育成される犬のうちの1/200。

介助犬

- 全国でまだ23頭（2004年12月現在、日本介助犬アカデミー資料より）。
- 高度な訓練を受ける。

セラピードッグ

- 全国での頭数ははっきり分かっていない。
- JAHA（社団法人 日本動物病院福祉協会）所属のボランティア犬（JAHA CAPP セラピー犬）だけで、約800頭。

●アンケート調査の結果

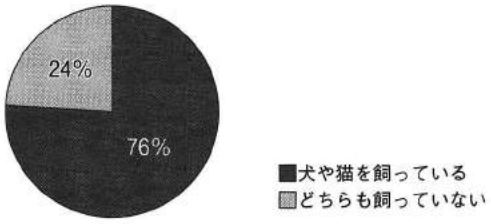


表1　何の動物を飼っていますか

今回の調査対象者（計70名）では犬を飼っている方を中心に行ったため、このような結果になりましたが、対象の地域や対象者の範囲を広げて行うと（ペットを飼ってない人なども含める）、また違う結果になるかもしれません。

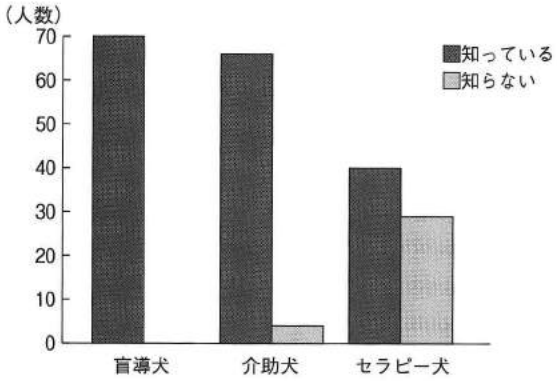


表2　各々を知っているか

表2から分かるように、盲導犬や法律で認められるようになった介助犬（「身体障害者補助犬法」は2003年10月1日より全面施行された）の知名度は高いものでした。これは協会の方達による努力の賜物ではないかと思います。

それに比べてセラピードッグは、知っている人がたった半数しかいませんでした。この結果を盲導犬などと比べると一見少なくも感じます。しかし、徐々に認められつつある活動を行っている現在、約半分の方々がご存知だったということは、これから先の活動を通じて、盲導犬同様にもっと沢山の方々に成果を知ってもらうという意味では、決して少ない数字ではないと考えます。

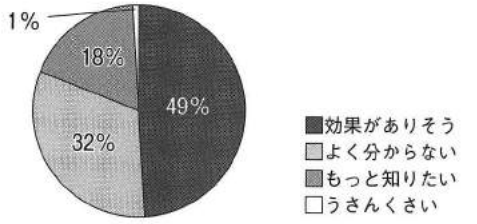


表3　セラピードッグのイメージ

表3からは、一般の方の合計半数以上が「効果がありそう」や「もっと知りたい」など、プラスのイメージを持っていることがわかりました。このことは、これから一般の人に広くセラピードッグを知ってもらい、理解や様々な協力をしてもらうために、なくてはならない信頼感につながっていくのではないかと思います。

また、この先たくさんの施設がアニマルセラピーを取り入れるとしても、利用者にプラスのイメージを持ってもらえるのではないかと思います。

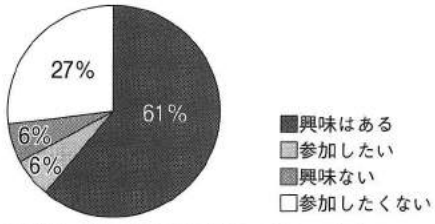


表4　セラピードッグに興味があるか、また、アニマルセラピーに自分も参加したいか

表4からは、セラピードッグやアニマルセラピーに興味はありながらも、実際にボランティアとして参加することについては、「自分の犬は大人しくないから触れ合いに向いてない」「自分の愛犬を連れて行くのは心配」などの理由から、ほとんどの方が、愛犬を連れてのボランティア参加については後ろ向きであることがわかりました。

④動物看護師としてできること

1．動物の健康維持
・糞便検査で寄生虫の検査
・定期的に適切なシャンプーやトリミング
・ノミ・ダニ予防
・動物病院に連れて行き、定期健診
・ストレス解消の為の散歩や遊び相手
2．人と動物の関係への配慮
・犬の行動学を生かし、犬と人間、または犬同士の適切な関係を作る
3．老犬のホスピス施設への協力
・ボランティアの参加
・健康維持
4．セラピードッグを集める事業への協力
・捨て犬をセラピードッグに育てる
・福祉施設に紹介する

⑤考察

たくさんの施設で捨て犬をセラピードッグとして引き取れば、処分されていく動物たちの新たな道が増えるのではないかと思い、いろいろと調査をしてきましたが、施設でセラピードッグなどの動物を飼育することはとても難しいと改めて感じました。

今回見学に伺った埼玉県の施設では、犬のストレス対策などの問題には、うまく対応していたように感じますが、はたしてすべての施設が動物を飼育するのに適している環境かといえば、そうではなく、ほとんどの施設が、動物飼育上起こるであろう問題に対処できる余裕や対策がないのが現状だと思います。

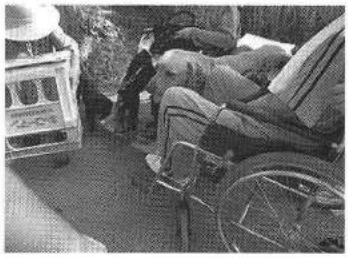
そして、アニマルセラピーの効果は笑顔が増えたなど主観的なものが多いので、より客観性のある判定の仕方が求められています。また、効果が補助的なために限界があるのも事実です。一方、施設は予算にゆとりがないため、獣医師に診せることや動物専任の動物看護師などを雇うことも難しく、まずは、ボランティアによる訪問活動でその効果を知ってもらうことが重要なのかもしれません。

諸外国のようにわが国の保健所も、「動物を処分する場所」ではなく「人と動物との新しい出会いの場所」になるのが理想的ですが、ペットブームが続く中で捨て犬は減ることはないだろうと考えます。

様々な課題が一つずつ解決され、動物たちがこうした施設で新たに生きる道を見つけるまでには、まだまだ時間が必要なのかも知れませんが、少しでも多くの動物たちがそれぞれに気持ちの良い生き方を見つけられるように、私たち動物看護師にできることを、もっともっとたくさん考えていきたいと思いました。

今回の訪問先施設の概観

今回の訪問先施設のセラピードッグ



訪問先施設でのアニマルセラピーの様子

参考文献
1) 大山ひとみ（2003）『ぼくはセラピードッグ－笑顔の輪をひろげる犬たち－』とびら社（発売 新曜社）
2) 渡辺眞子（2000）『捨て犬を救う街』WAVE出版（2002年より角川文庫）
3) 横山章光（1996）『アニマル・セラピーとは何か』NHKブックス／日本放送出版協会
4) スーザン・チェルナーク・マケルロイ（千葉茂樹 訳）（1996）『アニマルヒーリング－動物が病を癒す－』学習研究社
5) JAHA（社団法人 日本動物病院福祉協会）ホームページ http://www.jaha.or.jp/
6) 日本レスキュー協会 ホームページ http://www.japan-rescue.com/
7) 国際セラピードッグ協会 ホームページ http://www.therapydog-a.org/

猫はなぜ涙をながすのか？
—感情表現のひとつとして—

寺﨑裕美
（日本動物病院看護師学院 第9期生）

1．プロローグ

これまで、感情の涙をながす動物はヒト以外はいないと言われてきた。ダーウィンによると、何かのために涙をながすのは、ヒト特有の表現で『人間の特異性』だと言う。しかし、それでいて泣くという行為はヒトの世界でも驚くほど明らかになっていない点が多い。明らかになっている点といえば、生理学的プロセスの一部、解剖学的に涙腺や涙管について少々と、それに伴うホルモン活動や引き金となる主な神経の一部、そしてそれによって刺激を受ける脳のシステムの一部などである。

2．なぜこのテーマなのか

このテーマを取り上げようと思ったきっかけは、私ごとではあるが現在自宅で飼育している愛猫に理由がある。愛猫は、マイロンという名前のロシアンブルーの雄である。性格は、ロシアンの特徴でもある人見知りで甘えん坊だが、大変気が強く、しかし腕力はめっぽう弱い。そして、長年の一対一の生活のせいか飼い主への依存度が非常に高い。そんな愛猫は、数年前から私が疲れてかまってやらなかったり、悪いことをして叱りとばした後、しばらくすると眼に涙を浮かべていたり、下眼瞼の部分が湿っていたりすることがあった（**写真1**）。

顕著な時には、仲直りの声をかけてやると涙の粒を飛ばして走り寄って来たこともある。そんな愛猫を見ていると、猫にも人間のように寂しさや哀しさの感情表現の一つに涙をながす、つまり『泣く』という行為があるに違いないと思えてきた。そこで、今回自分の涙と愛猫の涙を採取、分析し比較しようと思い立ったのである。

写真1　涙をうかべる愛猫
（長時間留守番をさせられたうえに、
戻った飼主がかまってやらなかった時）

3．涙の構造

涙は涙腺から分泌され、涙点→涙嚢→鼻涙管→鼻腔の順でながれる。そして、涙の分泌量が増えた時、目頭から外へこぼれたり鼻水となる。目の表面を覆う薄い涙の層は三層構造をとり、最表層から表在性油層、涙液層、粘液層となっている。

①表在性油層——まぶたのフチにあるマイボーム腺から分泌された脂質
②涙液層——成分は98％が水分、他にナトリウム、カリウム、カルシウム、クロールなどの電解質、蛋白質、免疫蛋白、リゾチウム（酵素）など
③粘液層——結膜から分泌された粘液が角膜表面と粘着し涙液層がながれ落ちるのを防止

4．涙の種類

涙の種類は3種類あると考えられている。3種類の涙は、機能、成分、成分濃度がそれぞれ異なっていると思われる。

①基礎的な涙——眼球を潤すために常に分泌、眼を保護する涙
②反射性の涙——玉ねぎを切ったり、異物を感じた時などに出る涙。別名『刺激の涙』
③心因性の涙——一定の感情状態に起因、その感情を伝える涙。別名『感情の涙』

『心因性の涙』について

現在、涙のコントロールには自律神経系が深く関わっていると考えられている。近年の研究で、涙をコントロールしているのは交感神経系が支配する情動体験のピーク時ではなく、副交感神経系が支配するピークを少し過ぎた時点、正常な状態に戻る過程である、ということが解明されてい

る。つまり、極度の恐怖・緊張感からとかれ、ホッと安堵を感じた瞬間にながれる涙は心因性の涙と考えられており、これまでは、人間のみが様々な感情を伝えるために涙をながすとされてきたのである。

5．材料と方法

1)涙液の採取

涙液採取セットを写真2に示す。

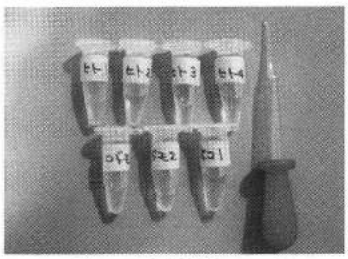


写真2　涙液採取セット

(採取量は各検体とも0.3〜0.5ml)

検体種類

a．ヒト検体

ヒト1（心因性の涙）――哀しみの成人涙液

ヒト2（心因性の涙）――感動の成人涙液

ヒト3（反射性の涙）――あくびの成人涙液

ヒト4（反射性の涙）――玉ねぎをきざんだ際の成人涙液

ヒト5（心因性の涙）――哀しみの成人涙液

※上記のヒト1・2は、映画を10本鑑賞して採取した涙液

※上記のヒト5は、協力者（女性）が映画を鑑賞して採取した涙液

コドモ1・2――生後1歳半以下の女児の涙液

b．動物検体

ネコ1（愛猫）――飼主がかまわなかったり叱った時の涙液

※上記のネコ1（愛猫）は、以下の状況の後に涙を浮かべる

①飼い主が来客中でかまってやらなかった時

②飼い主の膝にのろうとしたのを嫌がってかまってやらなかった時

③長時間留守番をさせた時

④悪いことをしたので叱った時――（叱り方）①大声で叱る②大きな音を立てて驚かせる③叩くふりをする④追いかける

ネコ2（ペルシャネコ）――鼻涙管がつまっている涙液

2)成分検査

各検体を検査センターにて、ナトリウム、カルシウム、クロール、Ig-A抗体の4項目（一部3項目）について検査し数値を比較した。

『Ig-A抗体』について

Ig-A抗体とは、リンパ球の一種であるB細胞系の形質細胞によって合成される免疫グロブリンのひとつである。その働きは病原性微生物を認識し、生体防御機構をつかさどっている。そして、Ig-A抗体には血清に含まれる血清型と、唾液・消化液・痰などに含まれる粘液分泌型とがある。今回の検査項目にIg-A抗体を加えた理由として、

①粘液のひとつである涙液の成分検査である。

②涙液中の免疫グロブリンの中で、主に免疫機構をつかさどっているのがIg-A抗体である。

③人の涙液成分検査においてもIg-A抗体を検査項目に加えている。

などが挙げられる。

6．検査結果

	Na(mEq/l)	Ca(mg/dl)	Cl(mEq/l)	Ig-A(mg/dl)
ヒト正常涙液値	144.4	0.8	144.9	40
ヒト1	149	2.1	141	14
ヒト2	**150**	**2.2**	138	13
ヒト3	144	1.4	**153**	**22**
ヒト4	120	1.7	126	9
ヒト5	**170**		162	9
コドモ1	139		130	8
コドモ2	137		143	9
ネコ正常涙液値	現時点での猫の正常涙液値は入手できなかった			
ネコ1	**161**	**4.2**	**156**	**27**
ネコ2	245	12.6	242	58

表1　ヒト・猫の涙液成分検査結果

(表内最上段のカッコ内は単位）ネコ2は疾患をかかえている猫の涙液であるが、すべての項目においてネコ1の涙液値の1.5〜2.5倍もあり、違いは明らかである。また、ヒトのどの涙液値とも大きく異なっているのが解る。

7．考察

疾患以外の猫の涙液とヒトの涙液の成分検査結果を比較すると以下のことが解った。

①ナトリウム・カルシウム――成人涙液の心因性の涙の数値にやや近い値

②クロール・Ig-A抗体――成人涙液の反射性の涙（あくび）の数値にやや近い値

当初の予想では、疾患以外で涙をながす猫の涙液の数値は、感情と言うより反射的に涙をながす生後1歳半以下の女児の涙液の数値に近いであろうと考えていた。しかし、結果は心因性か反射性かどちらとは言いがたいものとなったが、すべての項目において、女児よりも感情がより明確な成人涙液の数値にやや近い値となっていることが解った。

つまり、今回の検査結果の数値だけから判断すると、疾患以外で涙をながす猫は、やはり感情と全く無関係で涙をながすというわけではないのではと推測される。疾患以外で涙をながす猫は本能的に飼主の異変を感知し、恐怖・緊張感から安堵感へのスイッチの切れ替わり時に、反射的に涙をながしたのではないかと思う。

これは、飼主と愛猫の日頃の密接な関係が、感情？反射？どちらとも決めかねる不思議な現象を起こしたのではないだろうか。ただし、先に触れたとおり、涙とは人間の世界でも明らかになっていない点が多く、これだけの検査

では不十分である。また、検査項目や例数が少ないのも今後検討すべき問題である。さらに、獣医学書や眼科薬メーカーから、猫の正常涙液値について情報が得られなかったことは心残りであった。

8．結語

現在、動物病院では血液検査・尿検査・糞便検査と並び、病理学的判定のために涙液成分検査［文献4）5）6)］が行われる。私は、これをさらに、物が言えない動物の感情を検知する方法のひとつとして、感情が明確な人間の涙液成分値を指標とし、動物の感情を数値化するための手段として発展させる可能性を追求したいと思う。それにはもっと簡易に涙液成分検査ができるようにしなければならない。そして、さらに研究がすすむことで、その結果を動物看護師の立場であれば、個々の動物の感情に合わせたこれまで以上のきめ細やかな看護や保定に生かすことができるであろうと思う。そう願いながら、今回の試みが少しでも今後の獣医療の発展につながるよう期待している。

参考文献／引用文献
1) トム・ルッツ（2003）『人はなぜ泣き、なぜ泣きやむのか？涙の百科全書』（別宮貞徳・藤田美砂子・栗山節子 訳）八坂書房
2) 榛原重人（1998）「涙液構成成分、生理と動態」『月刊 眼科診療プラクティス／41 ドライアイのすべて』（渡辺仁他 編）p20～23，文光堂
3) ロート製薬株式会社ホームページ　http://www.rohto.co.jp/
4) Saito A, Kotani T：Tear production in dog with epiphora and corneal epitheliopathy. *Vet Ophthalmol* 2:173-178, 1999
5) Saito A, Kotani T：Estimation of lacrimal level and testing methods on normal beagles. *Vet.Ophthalmol* 4:7-11, 2001
6) Roberts SR, Erickson OF：Dog tear secretion and tear proteins. *J Small Anim Pract* 3:1, 1962

飼育条件における生体内のPとCaの変化

山口智子
（日本動物病院看護師学院 第9期生）
当学会「動物看護師」資格認定者

はじめに

ミルワームとは大型の貯穀害虫の一種であり、小鳥の餌によく用いられている。成虫では体長約14～18㎜、幼虫は約30㎜になる甲虫のゴミムシダマシ科の幼虫で、鳥類、両生類、爬虫類の動物性たんぱく質として、ペットショップなどで広く販売されている。

ミルワームの生体成分のP（リン）とCa（カルシウム）の比は13：1で、カルシウムとリンの均衡が悪いと言われている。カルシウムの含有量の多い食材を与えれば、カルシウムを多く含んだミルワームができるのではないかと思い、実験を試みた。

1．ミルワームのライフサイクルについて

図1

図1はミルワームの幼虫の写真である。自然状況では1～3回程度脱皮を繰り返し成虫になる。体色は脱皮して間もない時は茶色ではなく真っ白だが、やがて、下の図2のような淡茶色になっている。

図2

図2は蛹で、10日～15日の間に蛹化し一週間から十日ほどで羽化する。左側は側面で背側に側線のようなものが見える。右側が腹面で東部と尾部の間に8つの体節がある。

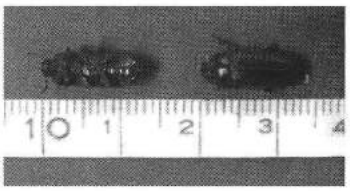


図3

図3は成虫である。左側に腹側と右側に背側を示している。体長は写真のように1.5cm位である。

鳥類におけるリンとカルシウムの適正摂取比率は、非産卵期では1：1.5、産卵期は1：3と言われている。トカゲや蛇などの肉食および雑食の爬虫類に最適なリンとカルシウムの比率は、1：1.2～1：2である。イグアナなどの草食の爬虫類では、1：2～1：6が良いと言われている。これらのバランスが崩れた場合、鳥類では骨軟化症、骨粗鬆症、クル病、尿石症、発育低下などが起こり、爬虫類ではクル病、代謝性骨疾患など様々な弊害が起こる。

2．材料と方法

材料

飼育環境を整えるため、プラスティックの蓋付き容器を10個用意する。空気および湿気取りのため、蓋に適度に穴を開けてある。1パックに200匹のミルワームが入っている。蛹は幼虫または成虫に食べられてしまうため、別容器を用意し入れておく。次に用意した食材を10g入れていく。食材は週に一度、同量を新しく換える。

方法

アッシュ法とすり潰し法がある。アッシュ法とは生体を焼いて灰にし、すり潰し、蒸留水で濾す方法でリンとカルシウムを検出する方法である。すり潰し法は、焼かずにそのまま頭を取り、そこから体液だけを採ってPとCaを検出する方法である.

3．結果

食材	リン	カルシウム
ふすま	56	120
白麦	50	23
強化精麦	82	170
発芽玄米	230	350
食パン	5.5	29
小松菜	8.3	2.9
小魚	30	1
ケシの実	14	250
生アーモンド	14	2
ゴマ	10.3	0.137

表1

表1の数字は、10グラム与えた時の各食材に含まれているリンとカルシウムの数字(mg)である。各検体のPとCaの値を検査センターにて測定した。

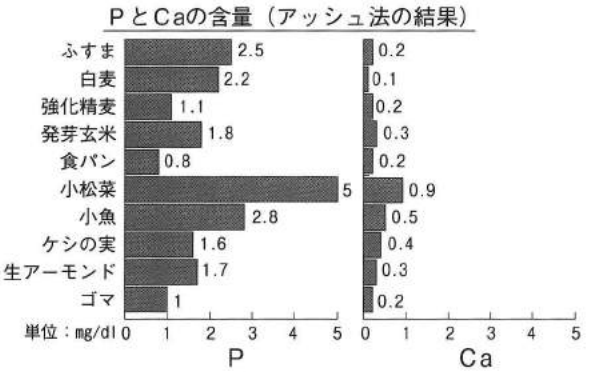


表2

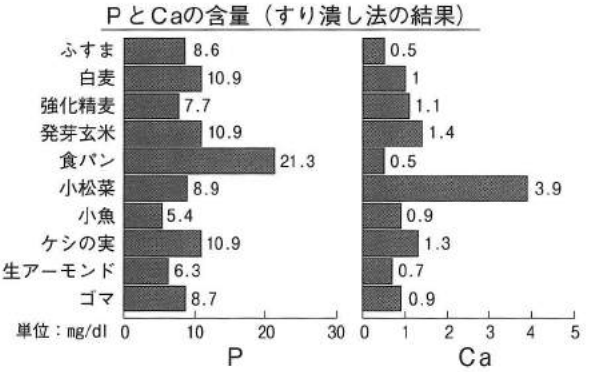


表3

表2のグラフは今回のアッシュ法での結果である。また、表3のグラフはすり潰し法の結果である。すり潰し法においてチーズ、ラクトフェリンを与えていたが、途中でなかなか大きくならず死滅する確率が高かったので、アッシュ法ではそれらを除き、代わりに違ったカルシウムの多いケシの実、生アーモンド、ゴマを与えて行った。

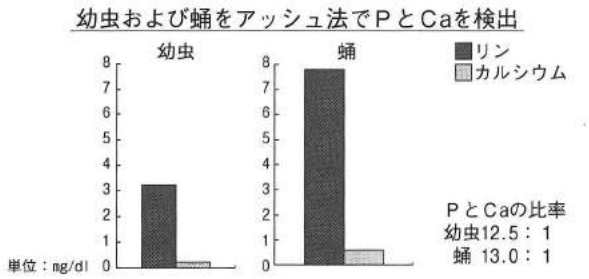


表4

表4は、幼虫および蛹時のリンとカルシウムの含量のグラフである。ミルワームの成長時にいちばん、蛹にリンとカルシウムの差に違いが出るのではと思い、蛹をアッシュ法でリンとカルシウムを検出した。こちらの数字はカルシウムを1とした時のリンの比率である。

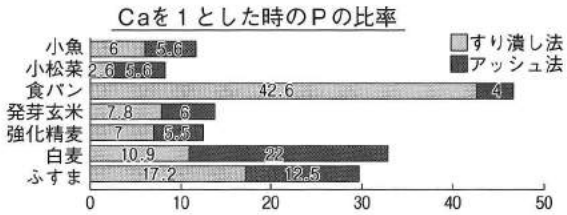


表5

表5は、カルシウムを1とした時のリンの比率を、すり潰し法とアッシュ法のグラフで比較したものである。このグラフでは、双方に関与している食材で違いを検討してみることにした。

4．考察

アッシュ法とすり潰し法におけるリンの測定量の違いを見たところ、今回比べた7品目の食材の中で小松菜と白麦以外は、すり潰し法において多く検出された。これは、食材の成分がリンの検出に変化を及ぼしたのではないかと考えられる。

食パン、白麦、ふすまなどではカルシウムよりもリンが増えてしまった。ふすまは小麦粉の皮で、対照区のフスマで育てた蛹のカルシウムとリン値の比率は、先ほど説明したアッシュ法によると、7.8対0.6とPがＣａの13倍で大差が出ている。

また幼虫でも、フスマで育てるとリンとカルシウムの比率が12.5倍となり、蛹時および幼虫時も大体同じであった。従って、ここに示したようにＣａの比を上昇させるためには、小魚、小松菜、発芽玄米、強化精麦など骨や淡白に富む餌を与えるべきという結果になることが分かった。

いずれにしても、餌によってミルワームという生体の構成成分が変動することが明らかになった。

参考文献
1）『日本大百科全書9』(1986) 小学館
2）市川尚 監修、レディバード編集部 編 (2000)『遊んで学べるホームページ図鑑』芸文社
3）磯崎哲也 (2000)『ザ・インコ＆オウム－コンパニオン・バードとの楽しい暮らし方―』誠文堂新光社
4）菅原明子 監修 (2001)『すぐに役立つ五訂食品成分表―食品の陰陽がひと目でわかる―』池田書店
5）名古屋市衛生研究所 生活環境部 衛生動物室ホームページ http://www.eiken.city.nagoya.jp/
6）財団法人 千葉県福祉ふれあい財団ホームページ http://www.nenrin.or.jp/chiba/
7）科学技術庁資源調査会ホームページ http://www.prcity.co.jp/oichan/shoku/seibun_vg.html

書評

『動物看護学 総論・各論』
日本動物看護学会　編集・発行

乳幼児期に身につける非言語性能力の大切さ——動物から教えられること

森永良子（白百合女子大学 発達臨床センター 顧問）

身近にいる動物を見ていると、人の子ども、とくにことばの表出以前の時期との共通性があり、時間が経つのを忘れてしまう。

人と動物の歴史は長く、コンパニオンアニマルといわれている動物はいつの間にか人との生活の中に入り、近年は家族の一員ともなっている。動物は人との関係の中で多くの職種の人たちとかかわってきた。しかし、その動物についての生理、生態について十分に人側は理解していないといえよう。

*

発達心理学の領域では、人が動物であることを前提にして子どもの研究はされてきたかを、改めて考えさせられてしまう。人はことばを用いて社会生活をしているので、ことばによる生活が始まる時期より、発達心理学研究は報告も多くなっている。認知発達、社会的適応能力についても言語性能力を前提に評価、対応されてきた。

しかし、近年の研究は脳科学の進歩にともない、認知神経学、生理神経学では、言語以前の発達である非言語性能力の重要性が再認識されてきている。

非言語性能力とは、人が動物として生きる上での基本的な能力であり、生存するための状況を理解し適応する能力でもある。この能力も読み書きにいたる言語能力と同様に、乳幼児期の学習によって身につけるものである。

*

『動物看護学 総論・各論』の二冊は、動物看護師が習得すべき標準的な知識・技術を示す教科書として書かれたものであるが、動物飼育に関係する多くの職種の人達ならびに動物心理学、子どもを対象とする発達臨床心理学をはじめ、近年、関心が高くなっているアニマルセラピーを志す人達にも教科書として読まれることをお勧めする。

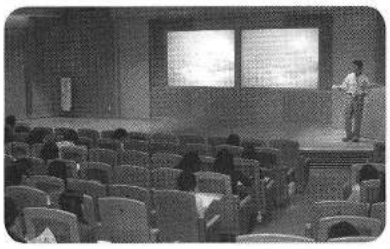
*

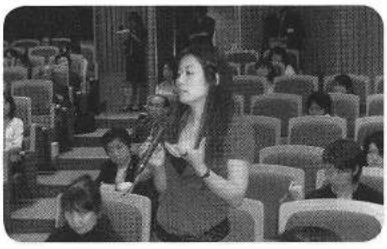
子どもの発達を考える上でも、哺乳類は多くの示唆をあたえてくれる。近年、認知能力の一つと考える対人認知・適応行動の能力である心の理論（Theory of mind）は、発達心理学の課題となっている。人が社会の中で生きていくためには、言語能力だけでなく、他者の立場を理解する能力が必要である。この能力は5～6歳間に発達するが、乳児期にその発達は始まっている。

Premack & Woodruff（1978）による「チンパンジーは心の理論を持つか」の論文はその後の子どもの発達研究を刺激し、乳幼児期の発達の重要性を認識させられた。

動物の非言語性な能力は人にとっても基本的な能力であり、乳幼児期の重要性を動物によって教えられる。しかし、人側はあまりに人間本位に動物に接してきた。動物のそれぞれの生理、生態、発達についての知識が少なく、擬人化した一方的な愛情で飼育している場合も少なくない。コンパニオンアニマルとして飼育する人は動物の生態、発達を理解しなければ、動物も言語の未熟な乳幼児と同様に不適応行動を生じてしまう。その意味で本書は、コンパニオンアニマルの飼育者にとってもよい入門書といえよう。

●第14回 大会●





2005年6月12日（日）
東京・港区　慶應義塾大学 北館ホール

新緑の季節、第14回大会／第11回定時総会が参加者約100名を迎えて開催されました。小林哲也先生（埼玉県・日本小動物がんセンター長、獣医師、米国獣医内科学専門医＜腫瘍学＞、日本獣医畜産大学 非常勤講師）による「小動物のがん看護において、動物看護師に求められるものは何か－各治療法の実際を学ぶ／緩和治療（終末期治療、ターミナル・ケア）における治療と看護のあり方を考える－」では、以下の内容などが話されました。

●小動物腫瘍学のいま、緩和治療とは、がんとの共存とは
●緩和外科治療――犬の四肢に発生した骨肉腫の場合、大型犬に断脚を勧めるのは心配か？
●緩和放射線治療――長所と短所、照射法、犬の骨肉腫に対する疼痛緩和作用、猫の口腔内扁平上皮がんに対する効果
●緩和化学療法――猫の乳腺がんの場合、ピロキシカムの適応と効果とは、使用上の注意点
●疼痛の臨床兆候・判定方法・問題点、疼痛緩和とは
●がん患者における各種栄養素（炭水化物・蛋白質・脂肪）の代謝の変化、がん性悪液質の発生メカニズムと3つのステージ
●がん患者に対する栄養学的アプローチ法（食べさせる工夫＜愛情治療＞、食欲刺激剤の使用、経腸栄養管理法）
●緩和治療の継続中に大切なこと、獣医師と動物看護師の協力体制の必要性

講演後の質疑応答では、動物看護師や動物看護を学ぶ学生からの質問が相次いだため時間が足らなくなり、終了後の「交流の広場（ワインパーティー）」の席上へ持ち越されました。本学会の大会・例会における聴講者からの質問状況は、最近、特に活発になっています。皆さんの急速な熱意の高まりをあらためて感じます。

小林哲也先生

●第20回 例会●

2004年8月21日（日）
東京・新宿区　京王プラザホテル
第2回 日本獣医内科学アカデミー総会と共催

残暑厳しい中、第20回例会が開催されました。動物看護師を中心に獣医師、学生ら、のべ200名を超える来場者を迎えて大変盛況のうちに終了しました。当日の様子をご報告いたします（文中敬称略）。

経過・考察に学ぶ！―― 一般演題発表会

動物看護師のイヌに対する不快感
甲田菜穂子（大阪府・関西福祉科学大学 健康福祉学部 講師）

イヌとの様々な関わりについて、動物看護師と大学生（文系）がどのように快、不快を感じるのかについての調査報告。動物好きから動物看護師を目指す人は多いが、職業人として適応できない人も多い。それは、好きな動物と接することで楽しい毎日を営めるという単純なあこがれだけを持ち、職業人としての感覚が育まれていないからかもしれない、と指摘。

身体障害者補助犬の受け入れ方の業界間比較
発表者同上

各業界における補助犬の受け入れが、未だ充分ではない実情を具体的に報告。補助犬の受け入れにハード面で関係するハートビル法（高齢者、身体障害者等が円滑に利用できる特定建築物の建築の促進に関する法律、03年施行）が浸透していない実情も指摘された。小規模施設でも無理なく受け入れられる必要性にも言及。

重複癌の犬の看護
―手術を終えて、今後の飼い主との関わりを考える―
瀬戸晴代（広島県・西谷獣医科病院 動物看護師）

大切な家族であるペットが病に冒された時、飼主は大きな不安を抱える。その際のよき相談相手となり、精神面での援助をすることは動物看護師の役割の一つと指摘。その上で、飼主の生活背景も踏まえた看護計画の立案などを詳しく報告。飼主家族との信頼関係と適切な看護介入について詳しく述べた。

ともに考えましょう！―― 動物看護報告会

報告を受けて、報告者と会場の皆さんとで感想を述べ合いました。

「私はこう思う」「当院ではこうしている」などの意見交換を行いました。

心肺蘇生した猫の1例―あきらめないことが命を救った―
崎山法子（奈良県・王寺動物病院 動物看護師）

初診の猫が来院し元気消失、痙攣が認められ入院となり、危機的状況が長時間続いた。しかし、適切な心肺蘇生をあきらめずに行ったことにより、命を救うことができた経過を報告。動物看護師も適切な心肺蘇生法を知り、獣医師の直接指導のもと、共に救命救急に取り組むべきと提言。

犬の帝王切開における母犬と新生子の看護
―動物看護師の立場から―
三浦望（新潟県・小島動物病院アニマルウェルネスセンター 動物看護師）

帝王切開手術の成功率を高めるために動物看護師としてできることを、段階ごとに報告。大切なポイントとして「インフォームド・コンセント」「飼主との信頼関係」「人手のある時間帯の手術」「手術決定後の早期準備」「トレーニングとチームワーク」「帝王切開セットのマニュアル化」を挙げて解説、加えて飼主の心のケアを挙げた。

多摩地区における猫の犬糸状虫症抗体保有状況
新垣まどか（山梨県・帝京科学大学アニマルサイエンス学科4年生）

世界各地で近年、犬糸状虫の飼猫への寄生が数多く報告されている。これを受けた本調査結果の途中経過を報告。現段階では陽性は認められていないが、猫に寄生した場合の深刻な症状、猫の屋外飼育の存在、非フィラリア予防犬の存在などから、予防が必要と指摘。

夜間診療体制における動物看護師の働き
―実情紹介と問題解決のための工夫―
片岡静子、祝田しのぶ（神奈川県・王禅寺ペットクリニック 動物看護師）

夜間外来の傾向として、帝王切開、心疾患、異物摂取などの緊急対応よりも、猫の尿閉、咬傷、犬の下痢・嘔吐など、比較的慢性の経過を経たものも多く、従来の診療時間枠にとらわれない来院が増えている実情を報告。そして、夜間診療において動物看護師が特に配慮している点が述べられた。

業務に役立てる！ 動物看護を考える！ ―― 教育講演

動物看護師のための話し方セミナー
―いきいきした話法と正しい敬語の使い方―
杉浦悦子先生（劇団青年座 女優）

動物看護師は、"獣医師～動物～飼主さんの間をつなぐ架け橋（チーム医療における不可欠な一員）"であるため、"十分な認識能力ならびに説明能力"を備える必要がある。これは、医療事故や飼主とのトラブル防止のためにも大切なこと。しかし、"うわべだけのマニュアル的な応対"では逆に誤解を生みかねない。"誠実な気持ちを込めた上で、必要事項を的確に伝えること"が大切。――こうした趣旨の下、『いきいき！はつらつ！元気よく！』の指導方針に沿い、「適切な言葉づかい」と「じょうずなコミュニケーション」について、発声練習を伴った体験レッスンが行われた。

動物看護記録の必要性
―日々の動物看護を記録に残すということ―
西谷孝子先生（西谷獣医科病院 動物看護師、マネージャー）

獣医療の発展とともに、動物看護師という職種が確立されつつある。しかし、その業務内容は「獣医師に対する診療介助」などが多い。動物看護師が今後成長するためには、「動物看護観」すなわち動物看護の本質を考える必要性があると指摘。

動物看護師が、判断・応用・問題解決能力を身につけるための手段として、「動物看護過程の記録（看護の実践の記録）」の必要性と詳細な手法を提示した。看護記録から自らの看護をふりかえり、その結果を発表・報告し合い共有すること――この集積が、動物看護学の確立と動物看護師の地位向上につながると述べた。

小動物の保定―基礎理論から実践対応まで―
村尾信義先生（王禅寺ペットクリニック 動物看護師主任）

以下の各項について、写真を交えての体系的な解説が述べられた――「保定の定義／保定とは、力任せに押さえることではない」「保定の心構え／動物に無理な負担をかけない、飼主に不安・不信感を与えない、診療がやりやすく見やすいように」「保定する前に」「保定前の情報収集」「クリエーティング・トラスト（Creating Trust）―信頼関係の構築―」「実践保定法／立ち方、立つ位置、台の高さ、協力体制を整える、サポーティングパーツ―保定する上で重要な、頸、肩、腰の3か所の総称―」「猫の保定法」「保定のまとめ―安定を保つためのコミュニケーション技術―」など。

今回は、発表は始めてという人が多い例会でした。緊張している方もいたようですが、皆さん、準備された原稿をもとに的確な報告をされていました。発表後は、客席の動物看護師らから多くの質問が出ましたが、これも最近の例会・大会の傾向です。今後もぜひ、各現場における事例や考察したことを、どしどし「例会での報告」「学会誌への投稿」という形で、公に発表していただきたいと思います。

甲田菜穂子先生

瀬戸晴代さん

﨑山法子さん

三浦　望さん

新垣まどかさん
（左：発表補助者 安藤 愛さん）

片岡静子さん（右）、
祝田しのぶさん（左）

今道友則会長
（開会挨拶）

8.21
フォト
スケッチ

西谷孝子先生

村尾信義先生

質疑応答によって、深まる理解

言葉は心のあらわれ
――相手を知る、自分を伝える
（右写真中央：杉浦悦子先生）

座長／村中志朗先生
広尾動物病院 院長、
当学会事務局担当理事、
東京都獣医師会副会長、
帝京科学大学アニマル
サイエンス学科非常勤講師

座長の先生方

座長／杉本恵子先生
南小岩ペットクリニック 院長

アドバイザー／
瀬戸口明日香先生（右）
東京大学動物医療センター内科・獣医師
司会／中俣由紀子さん（左）
かしま動物病院 動物看護師、当学会理事

●当学会「動物看護師」資格認定者 生涯教育
中級教育講座――受講者の声●
第1回（2004年度）

協賛：マスターフーズ リミテッド

動物看護師の公的認定試験制度を確立させるための第一歩として、当学会が行っている「動物看護師資格認定試験」は、2003年以来すでに4回行われ、合格者総数は計618名に達しています。当学会では合格者を、「動物看護師」資格認定者と呼称しています。

「動物看護師」資格認定者とは、一定の知識と技術を認められた、動物看護に関する適格な資質を有する者と言えます。こうした動物看護師が数多く生まれることが、今後のわが国の「動物看護教育の向上ならびに標準化」と「動物看護師の人材育成および職域拡大」に、大きく寄与するものと期待されています。

一方、「動物看護師資格認定試験」が回を重ねて実施され、数多くの合格者が誕生する中で、"動物看護の各領域について、より深く充実した知識を学びたい"という声が多く寄せられるようになりました。

そこで当学会では2004年より、"動物看護師の生涯教育の充実"の一環として、「動物看護師」資格認定者で、実務経験が2年以上の方を対象に、「中級教育講座（講義と通信講座―VTR使用―の2形式）」を開講しました。初年度は講義受講者15名、通信受講者114名でした。現在、第2期を開講中です。

受講者の中から、明日のわが国の動物看護を担い、指導的立場となり得るような動物看護師が誕生することを、当学会としては願っています。

第1回

「動物心理学Ⅰ・Ⅱ－動物行動の基本原理を学ぶ－」
杉山尚子 先生（山脇学園短期大学 助教授）

本講義では動物心理学の立場から、動物看護師が知っておくべき動物の行動、および飼主との対応に関する、以下の諸点を講義します。

①動物の行動の原理について――レスポンデントとオペラント
②動物の行動の観察――記録法
③問題行動の原因をどのように分析するか
④問題行動の修正に関する理論的枠組み

申込書の講義案内文より（以下同）

山本弘子
「動物看護師」資格認定者
埼玉県・セイノ動物病院

7月11日に東京の八重州ホールで行われた、中級教育講座を受講してきました。第1回目は、杉山尚子先生の動物心理学のお話ということで、とても楽しみにしておりました。先生のお話は大変わかりやすく、引き込まれるように聞いていたため、長時間でしたが、あっという間に時間が過ぎてゆきました。

ご講義では、今までよくわからなかった、動物が学習する仕組みと問題行動が起きた時の修正の仕方などを、大変わかりやすくお話ししていただけました。病院での飼主さんとのお話の中では、しつけに関する相談を受けたりします。この日のお話は、飼主さんたちに対する、より詳しいアドバイスへとつなげることのできる内容であったと思います。

当日は、補習教育講座でご一緒だった方もおられたので、お互いの近況報告などもできました。また、昼食時に先生方のお部屋にお邪魔して、お話しながら食事をご一緒させていただくなど、楽しい時間を過ごすこともできました。知識を学ぶ場としてはもちろんですが、なかなか普段は、他院の動物看護師の皆さんと交流を持つ機会も少ないため、こうした時を、情報交換などの場としても活用していけたらと思います。

私は動物看護師になって7年たちますが、まだまだ毎日、動物たちや飼主さんたちから学ぶことがたくさんあります。動物看護師というお仕事は、病院の受付・診療の補助・入院動物の管理など幅の広いものです。正直を言うと体力的にきついと感じ、疲れる時もありますが、飼主さんには明るく笑顔で接するように努めています。

時折、飼主さんが「うちの○○チャン、山本さんのこと好きみたい」と言ってくださることがあります。そういう時は、やはり頑張ってよかったと励みに思います。これからも飼主さんとのコミュニケーションを大切にし、その中で少しずつでも、学んできたことを生かし活用していけたらと思っております。

春から夏にかけて動物病院は忙しい時期にありますが、中級教育講座のためにお休みを下さった院長に感謝すると共に、これからも、このような勉強の場を持てることを願っております。

第2回

「神経疾患の看護」
織間博光 先生（日本獣医畜産大学 獣医放射線学教室 教授）

神経疾患は他の内科疾患と異なり、血液検査から分かることは少なく、病状の把握は、主に動物の状態の観察により行われます。従って、入院中の動物の観察が非常に重要であるので、日頃から入院動物に密に接している動物看護師の役割が非常に大きい疾患と言えるでしょう。

神経疾患の多くは、運動や体位変換がうまく行えないため、種々の合併症が起こりやすくなります。また、脳圧の亢進している動物では、早く異常を発見して処置しないと致命的となります。

講義では、日常の診療で最もよく見られる神経疾患である「椎間板疾患」「発作」「前庭疾患」の看護を中心に話を進めます。まず、神経疾患の理解に必要な解剖と生理の用語を解説し、次いで、各々の疾患で看護上問題となる事項について説明します。

関根さゆり
「動物看護師」資格認定者
埼玉県・新井動物病院

時間とは作らなければ得られないのに、今まで忙しさを理由に、勉強する時間まで手がまわらないでいました。しかし、勉強することによって、観察時の注意点や適切な処置方法、よりよいアドバイスができるようになりたいと思い、中級教育講座を受講することにしました。

編注：講師の杉山尚子先生のご著書が9月に発行されました――『行動分析学入門－ヒトの行動の思いがけない理由－』（集英社新書・693円）。人間や人間以外の動物の行動には、それをさせる原因があります。行動分析学とはその原因を解明し、行動に関する法則を見いだそうとする科学です。動物の行動学やしつけの根本となる考え方です。興味のある方にぜひお薦めいたします。

今回のご講義は動物看護師向けなので、看護におけるポイントを大変分かりやすく教えていただき、とても勉強になりました。これまでは本を見ても、獣医師向けの解説であることが多いために、難しいところを、分からないままにしていることもありました。しかしご講義で、どのような理由からこの症状が出ているのか、出ている症状への対応、飼主さんへのアドバイス、観察するポイントなどが分かったので、今後は適切な対応がとれると思います。

動物看護師にはいろいろな仕事がありますが、私は、診察がスムーズに行える環境をつくることを、まず第一に考えています。そのためには、日頃の仕事の正確さやスピードアップはもちろん大切です。しかし加えて、"動物のことを心配して緊張しながら来院される飼主さんが、話しやすい雰囲気を作ること""先生が診察をしやすいように、先生と飼主さんの間に入って、言葉を分かりやすく伝えること""動物たちの些細な生活の変化に関する、飼主さんの話を聞き逃さず、先生へ伝えること""つねに処置しやすいように動くこと"に気をつけています。

勉強した上で分かる可能な範囲であれば、診察中の先生に手を止めていただかなくとも、自分で飼主さんへのアドバイスも多くできるようになりました。また、余裕がある時は、飼主さんと些細なことでも日常会話を交わし、その中から、普段の動物の様子や飼主さんの気持ちを聞いておき、診察時の異常に気付けるよう努めています。

忙しさに追われる毎日ですが、一日一日をしっかり心にとめて、病気で来院した動物たちが早く治るように、また、先生たちが診察を進めやすいよう動くことに努めたいと思います。勉強を続けながら、よりよい動物看護師として向上していきたいと思います。

「消化器疾患の看護」

瀬戸口明日香 先生（東京大学大学院 農学生命科学研究科附属動物医療センター内科）

消化器疾患は多岐にわたるため、その看護には広範な知識を必要とします。講義では、「消化器の生理機能と疾患」と「臨床徴候からみた消化器疾患とその治療」について概説します。

①消化器の生理機能と疾患――各臓器の機能と主な疾患について説明します。

②臨床徴候からみた消化器疾患――下痢や嘔吐といった症状を起こす疾患について、症状別に説明します。

③臨床検査と治療――消化器疾患に用いられる検査法について説明します。

その他、実際の症例を例にとりながら、どのような病気の時に、どのような治療や看護が必要になるかに関しても、説明する予定です。様々な症状を呈する消化器疾患に対しては、広範な知識のみならず、「動物を詳細に観察する目」や「動物の異常に気づく心遣い」が必要とされます。

R・Y
「動物看護師」資格認定者

「中級教育講座」の2日目である「消化器疾患の看護」では、基本的なことから、治療内容に関する獣医学の分野まで、実際にあった症例をいくつもスライドで映していただきながら、詳しいご講義を聞かせていただきました。

食事療法・内科療法・外科療法など、いろいろと教えていただいた中でも、術後管理としての、飼主さんへの指導を含めた看護ポイントに関する細かなご説明は、すぐに役立つということもあり、とても勉強になりました。ご講義中は、瀬戸口先生から受講者に質問されたりしながら、終始和やかに楽しく進みました。先生のご説明が分かりやすいため、充実した3時間でした。

「中級教育講座」では素晴らしい先生方に、今までになく詳しいレベルまで教えていただいています。「補習教育講座」よりも、さらに高いレベルのご講義ということもあり、時に難しく感じることもありますが、詳しい内容の分だけ理解しやすく、実際にすぐできることも多くあるので、毎回楽しみに受講しています。

また、先生方や学会事務局の方々、受講者の方々とお話をする機会が多く、私にとってはとても良い刺激になっています。この講座に参加する中で、いろいろな方の病院でのお話や考え方、これからの動物看護師のあり方などのお話を伺うと、遅れをとることがないように、日々努力が必要だと感じます。これからも、動物と飼主さんとの良い関係を築くお手伝いをするために、自身を磨いていきたいと思っています。

第3回

「呼吸器疾患の看護」

藤田道郎 先生（日本獣医畜産大学 獣医放射線学教室 助教授）

呼吸器疾患は、臨床で必ず日常的に遭遇するものです。飼主は、「鼻汁排出」「くしゃみ」「咳」「呼吸が速い」といった一般的な呼吸器症状を述べることでしょう。しかし、これはとても重要な情報を私たちに与えてくれているのです。

すなわち、これらの一般的な呼吸器症状も、気をつけて観察することによって、また、飼主への詳しい問診を行うことによって、上記の4つの症状を、さらに細かく分類分けすることができるのです。

実は呼吸器疾患は、これらの症状の観察や問診で、ほとんど診断がついてしまうといっても過言ではありません。「診断がつく」ということはひいては、「どのような看護を行えばよいのか」という答えも自ずと導かれるのです。講義では、この点について解説します。

金澤理江
「動物看護師」資格認定者
東京都・青戸やまだ動物病院

受講を終えて、普段私たち動物看護師が行っている稟告や問診の重要さを、あらためて実感いたしました。呼吸器疾患の看護では、鼻汁一つからだいたいの疾病の判断が出来ることや、呼吸困難時における緊急処置の必要な場合とそうでない場合、などについて学ばせていただきました。

普段仕事をしていて思うことは、まず一番はじめに飼主さんや動物たちに接するのが、受付にいる動物看護師ですし、入院室でも動物たちの一番近くにいるのが私たち動物看護師であることです。いち早く異変に気付き、少しの変化も見逃してはなりません。もちろん動物たちは口をきくことができませんし、飼主さんの中には、先生たちは怒るようなことはしないのに、「この事、先生に言ったら怒られるかも」と言って、本当の事を隠す飼主さんもいらっしゃいます。獣医師が診察室に入ると、急におとなしくなってしまう飼主さんもいらっしゃいます。そのような飼主さんの場合、コミュニケーションを上手にして、情報を聞きだすことが出来るのが動物看護師であると思いました。

今回セミナーに参加して学ばせていただいたことを、病院のスタッフにも伝え実践していきたいと思います。

「循環器疾患の看護」

若尾義人 先生（麻布大学 獣医学科 外科学第一研究室 教授）

獣医臨床領域で循環器疾患の占める割合は、全疾患の約10%であるといわれている。この数値は、症例の高齢化によってさらに上昇する傾向にある。動物看護の面からみれば、生体の機能維持にとって最も重要である心臓に、重度な障害があることになる。さらに高齢化を考慮すれば、人の場合と同様に、そのケアには細心の注意を払う必要がある。講義では、以下の内容

について詳しい解説を行う。
①循環器症例を看護するために必要な基礎的知識
（心不全症例の病態生理、心不全症例の体位と心機能）
②循環器症例の看護に必要な心機能検査
（五感を用いた検査法――視診、触診、聴診、
機器を用いた検査法――心電図、血圧）
③集中管理室（ICU）における循環器症例の看護
（心肺脳蘇生術――基本的事項、ABC 法）

中井江梨子
「動物看護師」資格認定者
東京都・どうぶつ眼科 EyeVet

今回の中級セミナーは、日頃実際に接したり聞いたりしている疾患などについて、基礎や原理を詳しくご講義してくださるので、とても勉強になります。また、知っているようで理解していなかった部分を明確に整理して理解できます。もちろん基礎だけでなく、具体的なことや時には最新の情報なども伺えるので、本当に毎回楽しく受講させていただいています。

「循環器疾患の看護」についての若尾先生のご講義では、日頃難しいイメージのある循環器について、楽しいと言っては変ですが、とても充実した内容を伺いました。今まで何気なく接していた患者さんに対して、自分がいかに自覚や危機感がなかったかを知り、特に命に直結している循環器疾患について「知らない」ということは、本当に恐ろしいことだと思いました。また、術中などに何気なくとっていた血圧や心電図についても、みる目が少し変わりました。

看護をする大部分の相手は健康な動物ではないので、その動物の抱える問題をきちんと理解していないと、きちんとした看護は難しいと思います。疾患や治療についてよく理解した上で、動物看護師としての視点からよりよい仕事を生み出していき、動物看護の分野が更に発展していくように願っています。

第4回

「泌尿器疾患の看護―犬、猫の泌尿器疾患症例に対して―」
多川政弘 先生（日本獣医畜産大学 獣医外科学教室 教授）

泌尿器は、腎臓、尿管、膀胱および尿道から構築され、その機能として体液を調節します。加えて、生体内での代謝産物や老廃物を体外へ排泄するために、尿を産生して体外へ排泄する働きをもちます。生命を維持する上で重要な器官の一つといえます。

泌尿器の中で腎臓は、内分泌器官として赤血球の分化に関与し、カルシウムの腸管からの吸収に必要な活性型ビタミンD新生に関与する、重要な器官です。

泌尿器疾患としては、代謝疾患、感染症、腫瘍、結石など様々な原因で起こる「腎不全」が重要で、これが結果的に動物の生命を脅かすことになります。それらの泌尿器疾患に罹患した動物に対して、内科療法や外科療法によって対応する中で、「急性腎不全」「慢性腎不全」の動物を看護するためには、それら器官の機能や病態について、十分に理解する必要があります。

山口逸子
「動物看護師」資格認定者
山形県・ヒール動物病院

「泌尿器疾患の看護」の講義を受けて、様々な疾患がある中で、安全なものが身体に取り入れられ、老廃物が外へ出て行くこと、その当たり前の繰り返しがスムーズに行われることの大切さを改めて確認しました。その機能が侵されないための何よりの基本は、食事であろうと思います。食の大切さが損なわれないように、その重要性を伝えることも、動物看護師としては必要なのではないかと感じています。

若い方々と共に、先生から講義を受けるという時間は、私にとってとても新鮮で心地よい時間で、その上に大学の先生に質問させていただけるなんて、ちょっと得した気分でした。また、文章を書くことなど、今はとても少なくなってきているので、修了テストの文字数の800字を目にした時には、唖然としてしまいました。いつも切羽詰まらないと向かえずにいて、次回はもっと早めにと毎回思っていました。

会場では、受講者の皆さんと情報交換をする中で、ちょっとしたアイデアや参考になる話などを聞くことができました。現場へ戻れば、皆それぞれの場で頑張っているだろうなと、皆さんの顔を思い浮かべることで励みにしながら、仕事をしている毎日です。

「産科・生殖器疾患の看護ー生殖生理学の観点からー」
金山喜一 先生
（日本大学 生物資源科学部 獣医生理学研究室 教授）

動物が有する生体機能の恒常性に破綻を来した病的状態が、「疾病」です。つまり、正常機能と病態は表裏一体の関係にあり、もちろん「産科・生殖器疾患」も例外ではありません。

日常の臨床では、疾病の診断、治療、予防に主眼が置かれますが、飼主に接する機会が多い動物看護師にとっては、さらに、飼主への教育と啓蒙も重要な職務でしょう。

このような観点から、講義では、動物看護師が「産科・生殖器疾患」を理解するために必要とされる、生殖生理学を講述し、基礎から臨床への橋渡しを果たしたいと考えています。具体的には、排卵、受精、着床、妊娠の維持・継続、分娩発来など、産科・生殖器疾患に直結する事項について、生理学的に説明を加えるとともに、関連の疾患について、動物看護師に必要な知識を教授・解説します。

青木こずえ
「動物看護師」資格認定者
神奈川県・曽屋動物病院

金山先生のご講座を受講させていただいて、産科・生殖器疾患は私が思っていたよりも複雑で奥が深く、そこには神秘的な機能があることを学ばせていただきました。金山先生のご講義は専門的な内容を解りやすく、時折冗談なども取り入れられて、私たち動物看護師に興味を持たせていただける内容でした。

私は働いている病院で、飼主さんから犬、猫の繁殖季節や発情サイクルについての質問や、犬と猫とでの発情の違いについての質問を受けることがありました。受講前は質問にうまく答えることが出来ず、獣医師に説明してもらっていたのですが、受講後は、私自身が飼主さんに解りやすく説明できるようになりました。

また、セミナーに参加したことで知識が身についた上に、他の動物病院の動物看護師の皆さんとお話しすることができ、仕事上での悩みなどを相談できる場も増えました。中級教育講座に参加して本当によかったと思っています。今後もセミナーや学会、例会などに積極的に参加して、たくさんの方々との交流を持ち、動物看護師として頑張っていきたいと思います。

今号への投稿を終えて――発表者（筆頭発表者）の声

帝王切開におけるVTの役割／大矢純子（東京都・Pet Clinic アニホス 動物看護師）

今回、このような執筆の機会をいただきましてありがとうございました。それにより、興味のあったことをより深くまで強調することができ、とてもうれしく思います。この発表を通して、今後、飼主にわかりやすい説明、サポートができるよう、頑張っていきたいと思います。近年は帝王切開が多くなってきていますので、少しでも参考にしていただければうれしく思います。 p19

オーナー向けセミナー開催後の効果と実績／中村ののみ（北海道・前田獣医科医院 動物看護師）

オーナー向けセミナーを実施するという事は、私たちが日々、オーナーへ知っていただきたいと思う事を伝える場というだけでなく、オーナーが考えている事を私たちVTが知る貴重な機会ともなり、私たちVTも毎回多くの事を学ばせていただいています。投稿後も不定期ではありますが、年に数回セミナーを実施し、多くのオーナーに参加していただいています。これからも、オーナーが必要とするセミナーを実施し、VTとしても成長していきたいと思っています。 p26

術前準備における動物看護マニュアルの事故防止に対する効果／深井麗子（埼玉県・フジタ動物病院 動物看護師）

手術室での作業には、些細なミスであっても命にかかわることが多く、細心の注意をはらう必要があります。今回のようなマニュアルを作成することにより、スタッフ間の連絡もスムーズになり、準備を行う時間も短縮できるようになると思います。今後も作業効率の向上をより確実に行えるよう、いっそうの努力をしていきたいと思います。 p22

地方都市における動物看護師勉強会の立ち上げと今後の方向性／鈴木加奈子（山梨県・赤池ペットクリニック 動物看護師・トリマー）

"日々知識を増やすこと"それが私たち動物看護師にとって大切なことの1つだと思います。それぞれの住む場所によっては、学会やセミナー参加が難しく、知識を増やす機会が少ない地域も多いとは思いますが、この論文を通して「機会は与えられるだけではなく、作ることもできる」という事が伝えられたらと思います。これからも多くの病院スタッフが自信を持ち、この職業に携わっている事に誇りを持てるよう、さらにこの「Pride & Confidence」が発展していけるよう頑張りたいです。 p35

報告
農林水産省「小動物獣医療に関する検討会」の「報告書」が発表されました（05年7月29日付）

「News Letter」の本年5・6月号でも、その審議状況をお伝えしてきた、農林水産省「小動物獣医療に関する検討会」（担当：農林水産省 消費・安全局）が、7月29日（金）開催をもって、本年1月以来計6回に及んだ全ての審議を終了し「報告書」が発表されました。

わが国の動物看護師の実情にも触れていますので、この点についてご報告します。

農林水産省は従来、家畜など産業動物の防疫・衛生に関する整備体制を指導することに重きをおいてきました。

しかし、わが国の小動物医療を取り巻く諸状況の急速な変化を受けて、これを分析し各課題への対策を検討するため、獣医療の識者から構成される「小動物獣医療に関する検討会」を、発足させました。

「報告書」ではわが国の動物看護師について、〈卒後臨床研修〉〈獣医核医学〉〈獣医療における専門医〉〈獣医療における広告規制〉に次いで最後に、〈獣医療補助者について〉という項目名で触れています。

従来から農水省は、動物看護師という職種は認知していませんでした。獣医師法にも獣医療法にも、獣医療補助者に関する記述はありません。いまの法律には、「一定の飼育動物の診療は獣医師が行う」旨の表記があるだけです。動物看護師の存在は"国レベルでは認められていなかった"というのが実情です。

しかし今回の「報告書」では、「（獣医療補助者は）小動物獣医療において、重要な役割を果たすようになっている」という旨の表現が入りました。国が初めて"動物看護師を事実上認知した"と言えます。現役の動物看護師の日々の成果が認められたといえます。

ただし「報告書」の本項によく目を通すと、「動物看護師（士）」という言葉は使われていません。「報告書」に1個所だけある動物看護師という語は、諸外国における名称の和訳としての用例です。

「報告書」の〈獣医療補助者について〉では、以下の記述などが記されています（原文のまま抜粋）。

【獣医療補助業務を公的資格とすることが必要ではないかとの意見も出されたが、獣医療補助者の行うことができる業務範囲が明確化されていない現状と上述した状況並びにわが国の経済・社会的情勢が全体として規制緩和の流れにあることも考慮すると現状では困難と考えられる】

【将来に向けて獣医療補助者の社会的身分を確立するためには、獣医療補助者の各団体ならびに獣医師団体等が中心となって、教育と資格認定基準の平準化に向けた取り組みに着手すべきである】

当事者である動物看護師の皆さん自身の、いっそう活発な活動も期待されています。この検討会の最終回を傍聴しましたが、「獣医療補助者すなわち動物看護師自身が行動を起こすべき」という趣旨の発言が委員からありました。

日々の動物看護業務の成果を、当学会の例会や学会誌などの場を活用して、どしどし発表していただきたいと思います。それらを共有し合うことが前進につながります。

そして、動物看護師の意義と必要性を、もっと広く社会全般に知らせてゆくことも大切と思われます。

今後も当学会では、「学問としての動物看護学の確立」「動物看護師の職域拡大と地位確立」「適格な知識と技術をもつ動物看護師を育成するための、教育カリキュラムの策定」「動物看護師資格の公的認定試験制度の確立（国家資格化）」に努力いたします。（上野） p6に関連記載

■この検討会の審議過程において、農林水産省より当学会に対して、わが国の動物看護専門学校の数について資料提供の要請がありました。これに対して当学会では本件の回答に加えて、"動物看護師の重要性の近年の急速な高まり"と"動物看護師資格の国家的認定制度の設立"についても、書面によって、説明ならびに要請を提出しました（2005年6月3日付）。

■この検討会の配布資料、議事録、報告書は、広く一般に向けて公開されており、誰でも全文を読むことができます。農林水産省のホームページ http://www.maff.go.jp/ 冒頭ページの「施策の動き・情報」→「審議会等情報」→「消費」→「小動物獣医療に関する検討会検討会」で読むことができます。

ルポ

心通う対話のために ①
——小動物診療に求められる飼主とのコミュニケーション術

「第1回 大学では学べない獣医学——学生向けセミナー／医療現場における家族とのコミュニケーション」〈主催：日本獣医畜産大学 獣医臨床病理学教室 助教授・鷲巣月美先生、協力：Pet Lovers Meeting http://www.ddtune.com/plm/〉が、8月6日（土）～7日（日）の両日、日本獣医畜産大学にて行われた。

「具合の悪い動物を連れて、初めて病院を訪れた家族から、病状や生活状況をどのように聞き取るか」「がんなど完治が難しい状況を、家族にどう伝えるか？」「動物の命が尽きようとする時、悲しむ家族にどう寄り添えるのか？」——こうした際の飼主とのコミュニケーションは、診療と同じくらい大切なこと。ペットと飼主の高齢化が急速に進む中で、いっそうきめ細かな対応がいま求められている。

初日には、「動物医療におけるインフォームドコンセントとセカンドオピニオン」（鷲巣月美先生）、「日本の動物をとりまく現状と動物福祉」（日本動物福祉協会 獣医師調査員・山口千津子先生）の講義が行われた。これを受けて2日目には、獣医学科生、若手獣医師、動物看護師、臨床心理学を学ぶ学生など40名近くが参加して、具体的な意見交換が行われた。以下2日目の模様を報告する。

●

「ディスカッション／獣医師は病状をどう伝えているか、家族は何を求めているか」では、動物病院での応接事例を題材に、問題点の指摘と改善方法の検討が話し合われた。問題として指摘された行為には以下などが挙げられた。

- 苦しむ動物の目前で、治療選択肢の提案を、飼主に事務的に言い放ってしまう。
- 治療選択の最終判断を、金額提示だけを添えて、飼主の判断に押しつけてしまう。
- 一方的に決めつけた口調での応対。

いっぽう、大切な事としては、以下などが挙げられた。

- 飼主にパニック状態をもたらさないコミュニケーション。まず相手の言葉を受け止める。飼主は"自分の話を聞いてくれているか"が心配なため、"私は話を聞きますよ"という意思を言葉と態度で十分に示す。
- 飼主側の背景（家族の意思や、ときには経済的事情）への配慮。

とりわけ安楽死については、「"売り言葉に買い言葉"のような感情的提案は慎む」「飼主は納得したつもりでも、その後繰り返し悩み、悔やみ、自分を責めることがある。特別な配慮が必要」と強調された。

●

続いての**「講義／僕が考えるペットロスケア、獣医師になって感じたこと」**では、4月から病院勤務を始めた青木茂先生（金重動物病院）が、「新人獣医師として、動物の死の直後に気持ちを切り替えることの大変さ」「現在の獣医師教育では、飼主への心理的対応を学ぶ場がないこと」などを率直に語った。

また、「ペットロスケアは動物の延命が絶望視された時点から始まる。その際に病状を、的確かつ思いやりをもって飼主に伝えることが大切」と訴えていた。

●

最後に、今回のメインとも言える**「ロールプレイとディスカッション」**が行われた。これは最初に、診察室でのやりとりのロールプレイ（寸劇）を見たあと、獣医師と飼主の双方が何を伝えたいのか、その際の問題点は何か、などを話し合うもの。後半は、参加者全員が小グループに分かれて、互いに獣医師と飼主役を演じて問題点を体得していた。

終了後は、「専門用語は的確に伝えなければならない（例えば、筋力を菌力と誤解するなど）」「初診での問診の難しさがやってみて初めてわかった」「飼主に対して思いやりをもつことの大切さを実感した」などの声が上がっていた。

なお、人の医療の教育現場はこの10年ほどで状況が一変している。「医療過誤への反省」と「病院が患者側から選ばれる時代の到来」から、いまでは「患者の快適性を重視した、患者本位の医療」が強調されている。05年度から「共用試験（医師の臨床実習開始前に行われる総合試験）」も始まった。ここには実技試験（医療面接、身体診察）が盛り込まれているので、すでに医学部の講義には、患者とのコミュニケーション・スキルを学ぶための「医療面接技法」というカリキュラムが盛り込まれ始めている。

鷲巣月美先生（右）と梶原葉月氏

診療の応対を演じながら問題点を認識（動物はぬいぐるみ）

しかし、獣医師教育の場ではこうした面の対応が始まる兆しはまだない。高齢ペットとお年寄りの飼主が急増する中、重篤なペットロス回避のための対応を含めて、さらにきめ細かい小動物臨床の提供が早急に求められている。この日の内容はきわめて先駆的な試みと思われた。

●

動物看護師には、「動物は大好きだけれど、人とのコミュニケーション作りは苦手」という人も多いようだ。しかし、動物看護師には"獣医師－動物－飼主間をつなぐ良き架け橋"であることが求められる。もし獣医師が飼主とのコミュニケーションが不得手である時、その大切な役割を担うのはまさに動物看護師であろう。

したがって動物看護師には、職業柄、人とのコミュニケーション能力を高めることが要求されると言える。もっとも、「自分は人とのコミュニケーション作りが得意です！」などと断言できる人は、ちょっと信頼できない気もしてしまう。大切なのはテクニックではなく、「相手を理解したい、相手の役に立ちたい」と思う気持ちであり、それがあれば、よいコミュニケーションは自ずと生まれるのかもしれない。難しい。（上野）

本学会員の方から、コメントをいただきました。

動物病院の心がけによって変わり得る、飼主の気持ち

文教大学大学院 人間科学研究科 臨床心理学専攻 修士課程2年／佐藤 忍

私は、人と動物の絆の関係学に興味を持ち、現在「ペットロス」をテーマに修士論文の研究を進めています。その関係で、今回、獣医学生や動物看護師、学生の皆さんに交じってセミナーに参加させていただきました。

初日は、日本獣医畜産大学の鷲巣月美先生が「インフォームドコンセント」と「セカンドオピニオン」をテーマに講義されました。獣医師が家族とどのように意思疎通を図っていくべきか。家族と共に考え、双方が納得する大切さ、そして充分な説明や情報提供の重要さを、事例を交えながらわかりやすく講義いただきました。

ペットが病気になったとき、飼主は獣医師を頼るしかありません。ペットロスの研究をしていると、病院でいろいろな疑問を感じながらも質問を躊躇してしまって後悔したり、心ないひと言で深く傷つき引きずってしまうケースをよく耳にします。

最近では訴訟に発展するものもあります。病院での対応一つで、獣医師も飼主もとても不幸な状態に発展してしまいます。

私も昨年、愛犬を亡くしました。失意の底からはい上がれたのも、当時の担当獣医師が手術の危険性など、きちんと説明してくれたからだと思います。本当に獣医師の方々のこうした心がけによって、病気や死を受け止める家族の気持ちは大きく変わるのでしょう。そして、私たち心理臨床を目指すものが、家族をサポートできる部分は何であるのだろうかと、あらためて考えさせられた時間でもありました。

2日目はグループミーティングやロールプレイなども行われ、様々な分野の学生と意見交換でき、とても刺激的な時間を過ごせました。

② 社会に強まる“人と動物の共生”
――動物愛護と動物看護が担うべきもの

「日本獣医畜産大学 獣医学部獣医保健看護学科 開設記念公開講演会〈主催：日本獣医畜産大学〉が、8月4日（木）に武蔵野スイングホールで行われた。

同大では2003年度に動物保健学別科（2年制）を開設し、「動物看護師」養成を目的として教育を行っていた。しかし、近年の獣医療における高度化・多様化をふまえ、これをサポートする動物看護や臨床検査などの高度な専門技術者の養成を目的として、教育・研究体制の再編を行った。すなわち2005年度より別科の募集を停止し、新たに4年制による同学科の募集を開始している。今後は獣医学科とも連携して、獣医保健および看護を目的とした教育を行っていくという。

●

この日の講演会は、「動物愛護と動物看護」をテーマに催された。まず、同大学長の池本卯典先生より「動物看護の倫理」と題して、近年の人と動物との共生の潮流、飼主への「インフォームド・コンセント（説明を受けたうえの同意）」から「インフォームド・チョイス（複数の治療選択肢の提示）への流れ、さらに、獣医療従事者への警句として「倫理は人間の本性であり属性ではない」などが紹介された。

続く「獣医療と動物看護」では、同大獣医学科獣医外科学教室・教授の多川政弘先生（当学会理事）より、社会から獣医療に対する要求が急速に高まる中（ニーズからウォンツへ）、例えば入院中の動物のストレス軽減や、飼主への病状や治療方法の説明・説得などの場において、動物看護師の存在が不可欠になっていると語られた。

●

同大獣医保健看護学科・教授の村松梅太郎先生は「動物看護教育の現状と課題」と題して、同学科における教育指針である、「獣医療の補助ならびに動物の保健・出産介助、保健管理」「動物介在療法への貢献ならびに介助動物の生産」「動物愛護の思想・動物福祉の理念」などを示した。また、動物看護学は人の看護学における「看護とは何か（ナイチンゲール看護論）」「看護の働きとは何か」「看護理論の構築方法」などから、多くを学ぶべきと語った。

「動物の性格と遺伝子」では同大獣医保健看護学科・教授の向山明孝先生が、遺伝子診断は今後、性格（行動特性）に関連する多くの遺伝子解析を進めるのに役立つであろうと述べた。また将来、性格遺伝子研究の成果が動物看護教育に反映される可能性にも触れていた。

●

最後は「特別講演／ワンとニャンの悩みごと」と題して、栃木県・臼井犬猫病院長の臼井玲子先生（当学会評議員）の講義。臼井先生は犬猫の問題行動診療について、飼主に平易に教える活動を続けておられる。

この日は、「人と動物が良い関係を結ぶためには、動物の気持ちを考えてみることが大切」という趣旨に基づき、「いい子に育つ条件」として、遺伝、母犬や兄弟との同居（少なくとも50日）、飼主が主導権を持つ（アルファー療法）、体罰の禁止（攻撃性の抑制）、アウト＆フェッチ（かみつきの抑制）などが指摘された。

特に社会化期のしつけについては、犬は生後3週齢～3か月齢、猫は3～9週齢が大切であるが、飼主が多忙なため、その幼い時期に長時間孤独におかれる場合も多く、問題と指摘された。大型スクリーンでVTRを見ながら、臼井先生のお話はユーモアたっぷり。しばしば会場が沸いた。

この日の催しは、ミニコミ誌などで地元（東京・多摩地区）に広く告知されたとのこと。一般の人々にとって動物病院はとても身近であるが、一歩踏み込んで、獣医療や動物看護に興味を持ってもらえる格好の場であった。（上野）

多川政弘先生

臼井玲子先生

会場には地元住民の姿も多かった

報告
「平成16年度 動物看護研究助成金事業（アニコム助成金）」に申請・承認の上、行われた研究会

比較看護学研究会
開催日●平成17年3月13日
開催場所●千葉県四街道市・シロツメクサの会 コミュニケーション・フィールド
参加人数●6名
目的●動物看護を行う上での倫理・論理、技術面での補習・学習・研究を、人の看護学と対比しながら研究し学習する。
内容●動物看護学に関しては、看護倫理をはじめ研究・向上の余地が有るにもかかわず、そのための機会や学習の場が少なく、よりよい看護を行う上で不都合が生じています。その様な現状で、発展途上の動物看護学を学習するにあたり、現役の人医療の看護師2名を講師に迎え、学ぶべきところや応用・改善を必要とする所など、実践に役立つ事柄を学び、動物看護師としてどう生かしていけるかを考える。

VT研究会
開催日●平成17年1月14日、2月17日、3月11日
開催場所●三重県桑名市・桑名犬猫病院
参加人数●9名
目的●VTの大切な仕事の1つであるペットオーナーの接遇。VT1人1人の接遇マナー（技術）の向上を図る。なお、接遇マナーは動物看護知識と一体である。したがって、マナーと共に要望の多かった基礎栄養学と食事療法について、講師を招いて実施した。
内容●マナーセミナー：講師による講義後、実際にロールプレイング形式で学ぶ（好感・安心感を与えるマナーの基本、応対用語の説明、動物病院における電話応対、動物病院における接遇応対、ロールプレイング）。犬猫の食事管理：栄養素（6大栄養素とは、犬と猫の違い）、ライフステージ（成長期の食事管理、大型犬の食事管理）、食事の与え方（エネルギー要求量、食事の切り替え方、おやつの与え方、肥満の原因）

動物看護研究会
開催日●平成17年3月17日
開催場所●山梨県上野原市・帝京科学大学
参加人数●80名
目的●当研究会は、帝京科学大学アニマルサイエンス学科の学生を中心とするサークルであり、日本動物看護学会の動物看護師認定資格の取得を目指す学生の集まり。これまでも学内で、動物看護に関する勉強会や学科で所有する犬の健康管理などを行っている。学外で開催される各学会のシンポジウムや研究会にも積極的に参加してきた。
内容●今回は、野生鳥類の救護について学習する目的で、野生動物救護獣医師会の野村治獣医師を講師としてお招きして、「油汚染鳥類の救護法」に関する講義と実習を受けた。動物看護師として将来、野生動物の保護に携わる機会が生じた場合の、貴重な経験になると思われる。

「新潟県中越地震」現地レポート報告会
開催日●平成17年3月26日
開催場所●東京都新宿区・日本愛玩動物協会
参加人数●20人
目的●当団体（NPO法人アナイス）では、災害時に飼主と動物が同行避難し、人と動物が共に調和して避難生活を送れるようサポートをしている。緊急事態に備えて、日頃から準備して心掛けておくべきことや、災害が起きてから救援が来るまでの「最初の3日間」を自力で生き残るには、どうすればよいかについて、あらかじめ考えておくため、知識と情報の提供を行う活動をしている。今回は、04年10月23日に発災した新潟県中越地震について、一人一人ができることは何か、今後何をするべきかを、現地報告を聞いて考えると共に、災害に対する心構え、飼主の責任や地域とのつながりといった、普段から考慮すべき点についてもあらためて考えを深めて、今後の活動に活かすようにした。
内容●現地のスライド報告の後、自分たちの身に起きた場合にはどうするか、などを考え話し合った。被災動物の救護とは、動物に対してのみ保護支援を行うものではなく、飼主と飼育動物の幸せ（飼主と共に暮らせること）のために行うことが、「動物愛護」に基づく被災動物の救援なのではないかと思われる。仮設住宅や避難所の提供といった被災者への災害時支援を考える際には、動物を飼育している被災者の存在も含めて考えていかなければならないと、改めて感じた。動物行政だけではなく、人の行政とも協力して支援していくことが不可欠だといえるだろう。

下町動物看護師グループ
開催日●平成17年3月5日
開催場所●東京都江戸川区・桜井動物病院
参加人数●10名
目的●動物看護師はつねに、動物看護に関する知識のいっそうの習得に努めなければいけない。必要とされる知識を深めるため、近隣の動物看護師が集まり勉強を行っている。今回は、院内での十分な認識能力と説明能力を備えるために、「言葉づかい」について学びマスターする。
内容●講師：杉浦悦子先生（女優、劇団青年座）。適切な言葉づかい（正しい敬語、受付業務、電話応対、会計の際の受付業務）、上手なコミュニケーションの方法（話し方のポイント、聞き方のポイント）

山梨県動物看護師勉強会「Pride & Confidence」1周年記念大会
開催日●平成17年3月1日
開催場所●山梨県甲府市・ザ・ホテル紫玉苑
参加人数●52名
目的・内容● p39に掲載。

※この他にも申請・承認の上、行われた研究会があります。

今期の申込方法は88ページをご覧ください。
ふるってご応募ください。

BOOKナビ

動物看護学の探究、人と動物の関係を考える…

なぜうつる？ どう防ぐ！！

子どもにうつる動物の病気
ーペットから学校飼育動物、都市型野生動物までー

神山恒夫・高山直秀 著　268ページ　3200円＋税
真興交易株式会社医書出版部（tel.03-3798-3315）

ペットからうつる病気について質問される動物看護師も多いことでしょう。本書は、人獣共通感染症（動物由来感染症）は、いつどのようにうつるのか、どのように防げばよいかをきめ細かく解説しています。人に重い肝機能障害を引き起こすエキノコックスの虫卵が、北海道以外では初めて、埼玉県で5月に捕獲された犬から検出されたと同県が発表しました（05年9月8日 共同通信）。

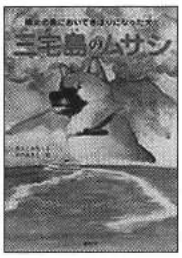
〈主な目次〉
人と動物の共通感染症（子どもとペットと共通感染症）／動物（家庭のペット、学校飼育動物、都市型野生動物ほか）からうつる病気／子どもと動物ー安全な飼い方、接し方ー（犬、猫、小型哺乳類、小鳥）／子どもの感染と動物の感染（犬猫回虫症、エキノコックス症、オウム病、猫ひっかき病）

猫と私の「老い支度」

宇都宮直子 著　198ページ　1400円＋税
講談社（tel.03-5395-3622）

著者は『ペットと日本人』（文春新書）などで知られるノンフィクション作家。本書は、著者とご主人、愛猫シュガーとで過ごす“「おほほ」で「ふふふ」な至福の時間（オビより）”が綴られた、心がぽかぽかと温かくなってくるエッセイです。でも、ペットロスやマンションでの飼育、災害時の動物救援体制、高齢疾患などを案ずる飼主の想いも綴られています。

〈主な目次〉
シュガーと私（心配の行方、老いのきざし、贅沢な時間、ごめんなさい、従順な飼い主、寂しかったよ）、いくつかの憂慮（嫌な予感、隠れ家礼讃、八歳の夏、頻繁な嘔吐）、愛の証し（ペットロス、深夜の大騒動、風変わりな経験、備えあれば）、君といつまでも（愛は勝つ、穏やかな季節、九歳になりました。）



三宅島のムサシ
ー噴火の島においてきぼりになった犬ー

井上こみち 著　さのあきこ 絵　94ページ　1200円＋税
素朴社（tel.03-3407-9688）

2000年8月、三宅島の噴火によって全島民の避難が始まりました。本書は、飼主と乗る予定だった船に乗り遅れ、島に取り残されてしまった犬・ムサシのその後を、事実に基づいて描いています。ムサシは、たくさんの人たちとの出逢いと別れを経験します…　災害時のペット同行避難方法は緊急の課題です。埼玉県は今年7月、避難所の運営指針に、ペットの扱いへの配慮条項を盛り込む方針を固めました。こうした対策が今後、早く広がることを望みます。

〈主な目次〉
緑の豊かな島に異変が／島民全員、避難せよ！／ひとりぼっちのムサシ／犬がいるぞ！／生きていてくれてありがとう／救援センターの仲間たち／島に帰りたかったコロ／新しい家族と　（巻末）災害時の避難に備えて

大好き！ 旭山動物園

多田ヒロミ 著　206ページ　1200円＋税
日本放送出版協会（tel.03-3780-3339）

北海道旭川市の旭山動物園は、入場者数が全国一を達成して注目されています。本書は“同園応援団”の代表が著した、同園復興へ向けての情熱あふれる活動報告記です。“人として柔らかな部分”を身近に伝えてくれるのは動物たち、という言葉に共感させられます。動物園の存在意義についても学べます。同園ではこの夏、大型ネズミのカピバラにかまれてクモザルが死んでしまい、「混合飼育」の難しさが浮かび上がりました。

〈主な目次〉
「好き」という気持ちが第一／求めて学べば喜びに／「くらぶ」スタッフのあり方／同園の展示と「環境エンリッチメント」／人間は動物園で自己認識をする／「動物園＝レジャー施設」という無理解／“動物学の園”から“学”の字が落ちて「動物園」!?／「伝えるのは命」／同園再生の背景／園内の愉快な仲間たち

動物の命は人間より軽いのか
ー世界最先端の動物保護思想ー

マーク・ベコフ 著　藤原英司・辺見 栄 訳　248ページ　1700円＋税
中央公論新社（tel.03-3563-1431）

本書には、人類が動物の存在をどう考えればよいのか、また、人間と動物の関係はどうあるべきかを考えるための手ほどきが書かれています。原著者は米国・コロラド大教授で「有機体論生物学」の研究者。地球と大気圏全体を一つの壮大な「生きているもの」する考え方に基づき、限られた地球を共有する人と動物の関係に哲学的考察を加えています。動物保護の最前線の動きへ誘います。

〈主な目次〉
動物への思いやりの第一歩／人間世界のなかの動物たち／動物は痛みや苦しみ、不安を感じるか／動物には自意識があるか／動物の権利、動物の福祉／功利主義と動物の利用／オオカミの野生復帰問題―個としての動物と種としての動物／動物園、野生動物テーマパーク、水族館／食物としての動物

ペットががんになった時
ー診断・治療から看取りまでー

鷲巣月美 編　328ページ　1600円＋税
三省堂（tel.03-3230-9412）

ペットの高齢化とともに、がんに罹患するペットが増えています。本書は小動物のがんについての最新情報を、詳しくかつ平易にまとめています。緩和医療や在宅時の看取りの体験談も掲載。飼主向けですが動物看護師にも大変有用な書です。このテーマは、当学会の第14回大会でも大きな反響を呼びました（当学会誌 p78）。

〈主な目次〉
がんとは？／がんを早期発見するためには？／異常に気づいて動物病院を受診するとき／診断と治療方針の決定／発生頻度の高い腫瘍／手術によるがん治療／抗がん剤治療って何？／放射線治療って何？／補助的な療法／がん治療の将来展望／ペインコントロール／がんとともに生きる／苦しみからの解放ー静かな旅立ち・安楽死／がんと闘うペットと生きる／動物医療の現状／葬送の実際／愛する動物との別れ

こんな動物のお医者さんにかかりたい！

似内恵子 著　190ページ　1300円＋税
かんき出版（tel.03-3262-8011）

獣医師が飼主向けに、よい動物病院の見つけ方とそのつき合い方を記したものです。どんな病院なら安心して任せられるか、どうやって病院とコミュニケートをすればよいのかが、詳しくかつ使いやすいポイントチェック形式で記されています。これは逆に病院側からすれば、そのまま、自院の充実度測定に用いることができそうです。動物看護師の質もチェック対象になっています。

〈主な目次〉
良心的な病院かチェックする／信頼できる獣医師かチェックする／動物病院との賢いつきあい方／治療費について獣医師と話し合おう／トラブル対処法を知っておこう／これからペットを飼おうとしている人へ／スタッフの資格を確かめる／治療方針や検査項目についてわかりやすく説明できるか？／小動物はこんなふうに病院にかかろう

動物たちが開く心の扉
―グリーン・チムニーズの子どもたち―

大塚敦子 著　128ページ　1400円＋税
岩崎書店（tel.03-3812-9131）

米国ニューヨーク郊外にある施設グリーン・チムニーズでは、心に問題を抱えている子どもたちに動物介在療法を実践している。幸福とはいえない家庭に育ち暴力を振るう問題児だったカールトンは、ここで保護されたハゲタカのヒナを世話するうちに、優しい心を取り戻した。様々な難しさを抱えた6人の子どもたちの心温まる物語と、同施設の取り組みを綴るフォト・エッセイ。

〈主な目次〉
動物とのかかわりから見える心の内側／動物たちの生死に立ち会って／慈しむ心を知る／喪の作業／僕とボンズは似ている／ありのままの存在を認めあう／緑のオアシス／自分の思いをどう表現するか／私の育て方が悪かったの？／心の種まき／手首を切るとストレスがやわらぐ／心の扉を開いた犬

ひとと動物のかかわり

養老孟司 編著　202ページ　1700円＋税
河出書房新社（tel.03-3404-1201）

「人と動物のかかわりは環境問題」「人と動物の関係は、人と人との実験的シミュレーション」「生き物は『理解する』のではなく『共鳴』するもの」と語る養老孟司氏をはじめ、医師、獣医師らが、動物と人とのかかわり、動物の命、人間の心について考える。ペットロス、家族の一員としてのペット、実験動物、食としての動物とは。北里大学大学院医療系研究科の活動記録。

〈主な目次〉
動物医療現場でのソーシャルワーカーの仕事と役割：人間の心とペットロス／精神科医から見た人とペットのかかわり／獣医療の進歩と飼主の苦悩―治療法の選択と年齢の狭間で／動物のいのちをどう考えるか／ペットは間違いなく「家族の一員」／医療と動物：実験用マウスを中心に／食としての動物／「ひとと動物のかかわり」について考える

幼稚園における動物を通した教育のためのガイドブック

谷田　創、木場有紀 編　300ページ　1429円＋税
広島大学動物介在教育研究会（谷田研究室）
（tel./fax.0824-24-7974　E-mail htanida@hiroshima-u.ac.jp）
（ホームページ http://home.hiroshima-u.ac.jp/htanida/hometop.html）

本書は、広島大学大学院生物圏科学研究科の先生方が自ら編集・発行されました。動物介在教育とは？　動物が子供にもたらす効果とは？　幼児教育に動物をどのように取り込めばよいのか？　などが大変分かりやすく解説されています。「カブトムシが動かんよ」「ピッピちゃんが大変！」など、具体的なエピソードとそれに対する解説・指導も豊富に収録されています。

〈主な目次〉
幼稚園における動物介在教育の現状／広島大学附属三原幼稚園における動物飼育に関するエピソード（飼育動物の誕生・死・病気と怪我、飼育動物に対する乱暴な扱い）／教諭の目から見た動物飼育（動物が死んでしまった時どのように対応するか、飼育動物を乱暴に扱っている園児にどのように対処するか）

本書は書店ではご購入になれません。左上の連絡先より直接お求めください。

わが国の古美術に見る、動物たち

「犬」という画題は、その姿のかわいらしさを愛でるというのは勿論であるが、犬の持つ「多産」という特性からイメージされた、「安産」「子孫繁栄」などの意味を持つ吉祥の図柄、いわゆる「吉祥画」としても慶ばれ、江戸期以降現在に至るまで度々描かれ鑑賞されてきた。中でも江戸中期、京都で活躍した円山派の祖である円山応挙は仔犬の姿をこよなく愛し、多くの作品を残している。

写真は天明五年（1785年）の冬、応挙五十三歳の充実期に描かれた作品で、雪原の上で戯れる七匹の仔犬を活き活きと描きだしている。その仔犬たちの表情は皆屈託がなく、鑑賞者に向かって無邪気に微笑み掛けている様である。また、淡彩による毛並みの描写は見事で、その柔らかな毛並みの質感まで伝わってくるようであり、応挙の画技の高さを物語っている。

円山応挙は丹波国穴太村（京都府亀岡市）に生まれ、初め石田幽汀について狩野派を学び、後に、それまでの日本画において重視されなかった『写生』を盛り込んだ作風を確立し、当時の画壇を席捲した。その応挙が確立した『写生』の伝統は、現在にいたるまで脈々と受け継がれており、日本画近代化の先駆けとなった画家であるといえよう。

文・瀬戸　敏（思文閣）
協力：株式会社 思文閣 http://www.shibunkaku.co.jp/

平成17年度 動物看護研究助成金事業（アニコム助成金）実施のお知らせ

日本動物看護学会では、動物看護学についての体系的教科書『動物看護学（総論・各論）』の発行や「動物看護師資格認定試験」の実施など、動物看護師育成のための各種事業を積極的に行って参りました。そして平成16年、動物看護学のいっそうの発展を促すべく「動物看護研究助成金事業」を発足させました。

この助成金は、動物看護師の皆様が自発的に行っておられる研究会や会合などに対して、運営費用などの一部を学会側で負担し、その研究活動を支援することを目的としています。

動物看護師向けのセミナーや講習会は、当学会主催のものをはじめ数多く催されていますが、地方在住のため、または勤務上の都合などの理由からこれらに参加できず、学習の機会を失っている方も多いと思われます。

この助成金事業とは、こうした皆様が、地元の動物看護師の方々同士で自主的に集い、動物看護師としてのスキルアップをするための勉強会・学習会を行うことを、支援するものです。

毎日の看護業務は大変お忙しいことと思いますが、この制度を利用されて資金面での助成を得て、まずは小さな規模からでもよいので、こうした場を作られてはいかがでしょうか。日々学習を続けて、動物看護のエキスパートをめざしましょう。

日本動物看護学会 会長　今道友則

※この事業は、アニコム（動物健保）からの助成金援助協力を得て実現いたしました。当学会の活動全般ならびに、当学会による「動物看護師の生涯学習の推進」の趣旨にご賛同をいただきましたアニコムの小森伸昭理事長に、厚く御礼申し上げます。

《平成17年度 動物看護研究助成金事業（アニコム助成金）募集要項》

1.主旨

この助成金は、動物看護学の発展を図るため、日本動物看護学会（以下「学会」）が必要と認めた研究会に対して交付するものである。

2.募集期間

2005年9月26日（月）～2006年2月28日（火）17時必着

3.助成対象研究会開催期間

研究会の開催は下記の期間内に行うこと。
2005年10月1日（土）～2006年3月31日（金）

4.助成対象研究会内容（分野）

動物看護学全般。その他、学会が認めた内容。

5.助成対象経費

会場費、交通費、謝礼金、機材費、他の経費。

6.助成対象者

代表発起人は当学会「動物看護師」資格認定者で、かつ学会員※であること。参加者は5名以上で、そのうち学会員※が2名以上含まれること。
※学会員とは、会費を滞納していない本学会一般会員。

7.助成金額

1研究会につき20,000円。●平成17年度研究助成金予算枠は200,000円（10研究会）とする。

8.「申請から助成金受理まで」の流れ

①申請書の提出
所定の書式に従う申請書類を下記事務局宛に郵送にて提出してください。　●申請書類は学会事務局より郵送します。

②交付決定の通知
審査の上、書面にて交付決定を代表発起人宛に通知し、30日以内に指定の銀行口座へ振り込みます。　●振り込み手数料は学会で負担します。

③報告書
研究会終了後10日以内に、所定の書式に従う報告書および会計報告書を、学会事務局宛に郵送にて提出。

9.その他

①助成を受けた研究会の実施報告は、当学会の学会誌・ニュースレターおよびホームページなどに掲載されます。またアニコム社の機関誌・ホームページなどに掲載されることがあります。

②この研究会への参加は、当学会の「動物看護師」資格認定者に対する「学習ポイント」の対象になります。

〔お問合せ先・提出先〕
日本動物看護学会　研究助成金係
〒101-0063　東京都千代田区神田淡路町2-23
アクセスお茶の水2F
TEL 03-5298-2850　　FAX 03-5298-2851
E-mail　jsan_info@jsan.org

●前回申請・承認の上、行われた研究会の内容はp85をご覧ください。●

第22回 例会(05年11月　大阪) ―― 開催のお知らせ

日時

2005年11月19日（土）13：30〜15：45　動物臨床医学会（動臨研）年次大会との共催

会場

大阪市・中之島　大阪国際会議場（グランキューブ大阪）

■JR「大阪駅」駅前バスターミナルから大阪市バス「53系統　船津橋行」か「55系統　鶴町四行」で約15分、「堂島大橋」バス停下車すぐ。

■JR大阪環状線「福島駅」、JR東西線「新福島駅」（2番出口）、阪神電鉄「福島駅」、地下鉄「阿波座駅」（中央線1号出口・千日前線9号出口）から、徒歩10分

■シャトルバスが、「リーガロイヤルホテル」（当会議場東隣）と各ターミナル（JR「大阪駅」中央北口、地下鉄・京阪「淀屋橋駅」）の間で運行しています。

発表内容

ともに学びましょう！ ―― 学習発表（動物看護専門学校生による発表）

知識のワクチン2005／動物看護師の社会的貢献として：小学校飼育動物の適正飼育のお手伝いをする試み

①飼育指導書『動物博士になろう2005』の作成まで

②近畿学校保健学会への参加

③小学校訪問活動において判ったこと（特に動物飼育に対する小学校の先生方の関心度や認識について）

大阪コミュニケーションアート専門学校（2年生）のグループ

イヌの耳垢から検出したマラセチア菌の染色と薬効の判定　古市　唯（福岡動物病院看護士学院1年生）

先天性腎不全のイヌに対するクレメジンの投薬と休薬における、血中BUNとクレアニチンの変化

内村はるか（福岡動物病院看護士学院1年生）

ポータブル心電計端末による家庭犬の心電図の遠隔操作　山口友紀恵（福岡動物病院看護士学院1年生）

ラブラドール・レトリーバーの出産・成長記録　河嶋直子、大久保裕美（ともにエコーペットビジネス総合学院2年生）

イヌのグループ別トラブルの発生率　大西由華（エコーペットビジネス総合学院3年生）、大善文美、松平郁美（同2年生）

経過・考察を共有しましょう ―― 一般演題発表（動物看護師による発表）

当院における面会時の対応について　大谷美紀（埼玉県 フジタ動物病院・動物看護師）

犬のしつけに困った飼い主との関わり方―ドッグデイケアを利用して―　小川千加美（広島県 西谷獣医科病院・動物看護師）

起立困難な犬の看護　藤原真希（広島県 西谷獣医科病院・動物看護師）

入場料

■当学会（日本動物看護学会）の受付では入場無料ですが、総合受付（動臨研）にて入場料を払う必要があります。

19日（土）のみ参加する際の入場料は、動物看護師の場合で事前登録7000円・当日登録8000円です。

■動臨研への事前参加登録〆切日は11月7日（月）必着厳守です。

■入場料の詳細、ならびに事前登録振込用紙の請求などは下記までお問合せください。

動物臨床医学会（動臨研）年次大会 事務局

TEL. 0858-26-0851　FAX. 0858-26-2158　E-mail dourinken@apionet.or.jp　URL http://dourinken.com/

日本動物看護学会規約

1995年12月9日制定
1997年11月29日改正、1999年6月6日改正

第Ⅰ章　総則

1．この学会は、日本動物看護学会と称する。
2．この学会は、動物看護に関する研究を中心として、関連する諸領域相互の情報交換の場を設け、この分野における研究の進展を図ることを目的とする。
3．前述の目的を達成するため、次の事業を行う。
　① 動物看護士の諸問題についての事業　② 会員の研究発表、シンポジウム、ワークショップ等の開催
　③ 学会誌などの発行　④ 目的を達成するために必要なその他の事業

第Ⅱ章　会員

1．この学会への参加はこの分野に従事する者および関心を有する者とする。
2．この学会の会員は、正会員および賛助会員とする。
3．正会員は、この学会の主旨に賛同し、会費を納付する個人とする。ただし2ヵ年度分以上滞納の場合は退会とみなす。
4．賛助会員はこの学会の目的事業を賛助し、賛助会費を納付する者とする。
5．会員は学会の主催する研究発表会などに参加し、この学会の発表する出版物などの優先的配布を受けることができる。

第Ⅲ章　役員および会議

1．この学会には次の役員をおく。
　会長（1名）・副会長（3名以内）・監事（2名）・事務局長（1名）・理事（若干名）。
2．理事および監事は、総会において正会員の中から選任される。
3．会長、副会長、事務局長は理事の互選により選出される。
4．会長は、この学会を代表し、会務を総理する。会長に事故ある時は、副会長がその職務を代行する。
5．理事は、総会の承認を受けて決定される。
6．理事は、理事会を組織して会長を補佐し、この学会の運営に当たる。
7．理事は、互選により事務局長を選出し、事務局長は事務局幹事を任命し、運営の実務を司る。
8．役員の任期は2ヵ年とし再任を妨げない。
9．この学会には、評議員若干名をおく。
10．評議員は総会において正会員の中から選任され、第Ⅲ章の規定が準用される。
11．学会活動に功績のあった会員を、顧問とすることができる。顧問は理事会が推薦し、総会において決定される。
12．通常総会は、毎会計年度終了2ヵ月以内に会長が招集する。
13．臨時総会は、会長または理事会が必要と認めたとき、いつでも招集できる。
14．理事会は随時会長が招集する。

第Ⅳ章　会計

1．この学会の経費は、会費その他の収入をもってこれに当てる。
2．この学会の会計年度は4月1日に始まり3月31日に終わる。
3．理事会は、毎会計年度の収支決算を通常総会に報告し、承認を受けなければならない。

付則

1．この学会の会費は、年額理事6,000円、正会員3,000円、賛助会員一口30,000円以上とする。
2．この定款は1995年12月9日より施行する。
3．この定款の変更は総会の議決による。
4．この学会の議決は出席者の過半数の賛成をもってする。
5．この学会の事務局を東京都千代田区猿楽町2－6－3におく。

注）2005年5月より下記に移転
東京都千代田区神田淡路町2－23
アクセス御茶ノ水2階

■日本動物看護学会 役員

会　長
今道友則（日本獣医畜産大学名誉教授）

副会長
桜井富士朗（桜井動物病院 院長）
廣田順子（アリスどうぶつクリニック 院長）
渡辺　茂（慶應義塾大学文学部心理学専攻 教授）

事務局担当理事
村中志朗（広尾動物病院 院長）

理　事
秋葉亮子（あいち動物病院 動物看護師）
上野　純（日本動物看護学会事務局）〈事務局長、編集担当〉
大城朋子（四街道動物病院 動物看護師）
大和田一雄（山形大学医学部附属動物実験施設 助教授）
長田久雄（桜美林大学大学院国際学研究科 教授）
桒野　悟（動物病院モルム 院長）
小杉正太郎（早稲田大学文学部心理学教室 教授）
小松千江（新ゆりがおか動物病院 動物看護師）
酒井健夫（日本大学 獣医衛生学研究室 教授）
高橋英司（帝京科学大学 アニマルサイエンス学科 教授）
高橋和明（日本獣医畜産大学名誉教授）
多川政弘（日本獣医畜産大学 獣医外科学教室 教授）
田中吉春（株式会社アイビーテック）
中俣由紀子（かしま動物病院 動物看護師）
和　秀雄（広島国際大学 社会環境科学部 教授）
西谷孝子（西谷獣医科病院、動物看護師）
幅田慶子（センターヴィル動物病院 獣医師）
牧田登之（福岡動物病院看護士学院 学院長）
若尾義人（麻布大学獣医学部 外科学第一研究室 教授）
渡辺隆之（有限会社エム・ビー・ネットワーク、獣医師）

監　事
竹内吉夫（看護編集者）
高見澤重昭（弁護士）

■日本動物看護学会 評議員

青木香代子（青木動物病院 動物看護師）
青木信夫（㈱エイシス代表）
赤池久恵（赤池ペットクリニック 保健師）
阿部令子（アニマルサポートオフィス・ミーチョ代表、動物看護師）
安藤孝敏（横浜国立大学教育人間科学部 助教授）
池田千佳子（動物看護師）
石橋　晃（日本科学飼料協会 理事長）
石丸昌子（大阪コミュニケーションアート専門学校 講師、獣医師）
伊藤勇夫（千葉大学医学研究院 動物病態学）
植松一良（昭島動物病院）
臼井玲子（臼井犬猫病院 院長）
小方宗次（麻布大学獣医学部附属動物病院 副院長）
岡ノ谷一夫（独立行政法人理化学研究所 脳科学総合研究センター）
加藤清雄（酪農学園大学獣医学部 獣医生理学研究室 教授）
金川里津（入江動物病院 動物看護師）
金山喜一（日本大学生物資源科学部 獣医生理学教室 教授）
金児　恵（東京大学大学院人文社会系研究科 研究員）
草山太一（昭和大学教養部）
甲田菜穂子（関西福祉科学大学 健康福祉学部 講師）
紺野　耕（日本獣医畜産大学名誉教授）
斎藤　徹（日本獣医畜産大学 実験動物学教室 教授）
坂田省吾（広島大学総合科学部行動科学講座 助教授）
佐久間明美（編集者）
佐藤　克（佐藤獣医科 獣医師）
島田真美（獣医師）
清水　誠（まこと動物病院 院長）
杉山尚子（山脇学園短期大学 助教授）
高倉はるか（相川動物医療センター行動治療科 獣医師）
種市康太郎（聖徳大学人文学部臨床心理学科 講師）
辻　弘一（辻動物病院 院長）
椿　志郎（北里大学名誉教授）
戸塚耕二（明和学園短期大学 非常勤講師）
富澤保浩（実験動物技術師）
中井江梨子（どうぶつ眼科 Eye Vet 動物看護師）
信永利馬（東北大学医学部附属動物実験施設 助教授）
三嶋淳子（日本動物看護学会事務局 動物看護師）
森　裕司（東京大学大学院農学生命科学研究科・農学部応用動物科学専攻 教授）
山崎由美子（独立行政法人理化学研究所 脳科学総合研究センター）
谷茂岡良佳（日本動物愛護協会）

■日本動物看護学会 動物看護師認定試験委員会

委員長
桜井富士朗（桜井動物病院 院長）

委　員
小方宗次（麻布大学獣医学部附属動物病院 副院長）
長田久雄（桜美林大学大学院国際学研究科 教授）
加藤清雄（酪農学園大学獣医学部 獣医生理学教室 教授）
桒野　悟（動物病院モルム 院長）
酒井健夫（日本大学生物資源科学部 獣医衛生学研究室 教授）
高橋英司（帝京科学大学アニマルサイエンス学科 教授）
高橋和明（日本獣医畜産大学名誉教授）
椿　志郎（北里大学名誉教授）
廣田順子（アリスどうぶつクリニック 院長）
牧田登之（福岡動物病院看護士学院 学院長）
村中志朗（広尾動物病院 院長）
若尾義人（麻布大学獣医学部 外科学第一研究室 教授）
渡辺　茂（慶応義塾大学文学部心理学専攻 教授）

■日本動物看護学会 編集委員会

編集長
桜井富士朗（桜井動物病院 院長）

副編集長
甲田菜穂子（関西福祉科学大学 健康福祉学部 講師）

編集委員
太田能之（日本獣医畜産大学動物科学科 専任講師）
草山太一（昭和大学教養部 講師）
桒野　悟（動物病院モルム 院長）
小松千江（新ゆりがおか動物病院 動物看護師）
高倉はるか（相川動物医療センター行動治療科 獣医師）
竹内吉夫（看護編集者）
種市康太郎（聖徳大学人文学部臨床心理学科 講師）
中俣由紀子（かしま動物病院 動物看護師）
牧田登之（福岡動物病院看護士学院 学院長）
村中志朗（広尾動物病院 院長）

敬称略・五十音順・2005年10月現在

（1997年11月１日施行）
（2002年９月10日改正）

【投稿規定】

日本動物看護学会 会誌
『Animal Nursing（アニマル・ナーシング）』
（Journal of Japanese Society of Animal Nursing）

1．投稿論文は動物看護領域に関する未発表の英文の Full Paper（原著）、Note（短報）、Review article（総説）、および和文の原著、総説、技術講座、資料、論文紹介、トピック等とする。
2．著者または共著者は会員、非会員を問わない、また投稿料は無料とする。
3．すべての投稿論文は編集委員または編集委員会が委嘱した論文審査員が審査し、編集委員会が採否を決定する。編集委員会は原稿の訂正を求めたり返却したりする場合がある。動物の福祉面に問題のある論文は採択しない。
4．原著論文の構成は各分野の慣習に従うが、要約（Summary）・序文（Introduction）・材料と方法（Material&Method）・結果（Result）・考察（Discussion）・引用文献（Reference）から成ることが望ましい。
5．要約は欧文（または和文）とし、150語前後で内容を簡潔にまとめ、３～５語の Key Word をつける。原著論文以外の報文も、欧文表題を必ず付け、欧文要約があることが望ましい。
6．和文原稿は新仮名遣いとし、なるべく当用漢字を用い、外来語と生物の和名は片仮名とする。原稿はパソコンまたはワープロを用いてＡ４判用紙に作成する。手書きの場合はＡ４判横書き原稿用紙を用いる。欧文原稿は厚手のタイプ用紙にダブルスペースでタイプし、左端2.5cm あける。
7．文献は本文に引用したものに限り、アルファベット順に記載する。個々の文献の記載例を下に掲げる。

〔雑誌〕著者名（発行年次）表題名，掲載誌名，巻数：最初の頁－最後の頁：発行所.

例　1)赤池久恵（2001）糖尿病の犬と飼い主への関わりを通して看護指導の意義を考える，アニマル・ナーシング，７：４－19：日本動物看護学会.

2)Dennis，R（1997）Veterinary Diagnostic Imaging：into a new era，Veterinary Nursing，12：12－13：J. B. V. N. A.

〔書籍〕著者名（発行年次）書名：最初の頁－最後の頁：発行所.

例　1)熊倉正樹ほか（2002）動物看護学各論：50－51：日本動物看護学会.

2)Paul W.Pratt（1994）Medical，Surgical and Anesthetic Nursing for Veterinary Technicians：259－342：American Veterinary Publications, Inc., Goleta.

8．図および表の番号は「Fig.３，Table.２」または「図３、表２」のようにする。図と表は本文原稿とは別にして、挿入希望箇所を本文原稿中に指定する。図が手書きの場合には黒インクを用い、白地用紙あるいは青罫のグラフ用紙を用いる。
9．上記以外で執筆中の詳細は、執筆者に配布される執筆要綱による。
10．著者校正は初校までとする。原則として誤植の訂正に限り、新たな文章やデータを付け加えることはできない。また、原稿、原図などは、著者に返却される。
11．投稿論文については、カラー印刷に要する費用は著者の負担とする。
12．別刷論文は１編につき50部まで無料、それ以上は著者の負担とする。
13．本誌に掲載された論文の著作権は、日本動物看護学会に属する。

※詳しいことは、学会事務局（編集担当）までお問い合わせください。ご相談を承ります。

編集後記

平成17年度の学会誌をようやくお届けできます。前号発行以来、事務局は本年３月の認定試験、事務局の移転、大会・総会の運営などのイベント続きでてんてこ舞いです。うれしい事には、動物看護師の継続教育活動や自主的な勉強会がどんどん生まれ、動物看護師同士の横のつながりも育ってきて、動物看護学の深さと厚みが増してきています（趣旨にご賛同くださり助成いただいているアニコム様に深謝申し上げます）。新しい事務局には、20名くらいまでなら収容できる動物看護師のための会議スペースを用意しました。その分、家賃は高くなりましたが会員の講習会などで積極的に活用していただければと思っています。次号には、さらに活発になった会員活動が満載されることを期待しています。（F.S.）

●「動物看護師（士）」の表記方法に関する、当学会の見解

「動物看護師」「動物看護士」――現在、どちらの表記も広く一般的に使われています。しかし、人の医療領域において、保健婦助産婦看護婦法の一部改正（2001年改正、2002年施行、改正後は保健師助産師看護師法）により「看護師」と統一されたのに伴い、これに準じて「動物看護師」と表記される場合が増えているようです。

今後は順次、当学会においても「動物看護師」の表記にて統一する方向です。なお、当学会主催の「動物看護師資格認定試験」合格者について、当学会では、日本動物看護学会による「動物看護師」資格認定者と呼称しています。　日本動物看護学会

ＤＴＰ：日引さつき、伊原英治、寺尾征枝

※本誌内のイラスト（挿絵）は版権フリーのものを用いています。

学会事務局：上野　純（編集担当）、三嶋淳子、船木生子

日本動物看護学会 会誌
Animal Nursing（アニマル・ナーシング）　Vol.10 No.1（第10巻 第1号）

2005年10月31日　第１刷発行　　定価　2,000円（税込）
本誌の購読料は会費に含めて徴収しています。

編　集　日本動物看護学会編集委員会
発行人　今道友則
発　行　日本動物看護学会（会長　今道友則）
〒101-0063　東京都千代田区神田淡路町２丁目23番
アクセス御茶ノ水２階
TEL　03-5298-2850　　FAX　03-5298-2851
e-mail　jsan_info@jsan.org
ホームページ　http://www.jsan.org
ＤＴＰ制作　株式会社アグレ　　印刷　松澤印刷株式会社

学会の最新情報は、
左記のホームページでも
随時お知らせしております。

本誌の内容を無断で複写・複製・転載することを禁じます。

広告ご出稿 ※掲載ページ順

表2
大日本住友製薬株式会社

目次裏
マスターフーズ リミテッド

巻末
アニコム
日本ペットフード株式会社
イソップ薬品株式会社
アイムス・ジャパン株式会社
森久保薬品株式会社
深大寺動物霊園

巻末・表3
株式会社 インターズー

表4
日本ヒルズ・コルゲート株式会社

誠にありがとうございます。
厚く御礼申し上げます。

嫁に出さずにすむ娘。

大切な家族に安心を。「どうぶつ健保」
anicom
0088-21-8256 www.ani-com.com

愛犬のからだを考えて、
あれもこれもミックスしました。

❶あんしんをミックス。

天然成分「ローズマリー抽出物」の自然の力でドッグフードの酸化を防ぎます。また、国内工場で製造しているので、長期間の輸送を経ずに「できたて品質」をお届け。鮮度、添加物に配慮した安心できるドッグフードづくりをしています。

あんしんへのこだわり Peace of mind

❷健康をミックス。

たんぱく質、鉄分、ビタミン、カルシウム、食物繊維など5つの栄養を、愛犬にとって最適なバランスでブレンド。さらに活性菌とオリゴ糖をプラスして、お腹の中からも健康を守ります。

❸おいしさをミックス。

ビーフ味をはじめとした5つの粒をミックス。ひと粒ひと粒に素材のおいしさが生きていて、愛犬を飽きさせない、抜群の味わいです。

ビーフ味・カルシウム・野菜入り
1.3kg／2.8kg／8kg

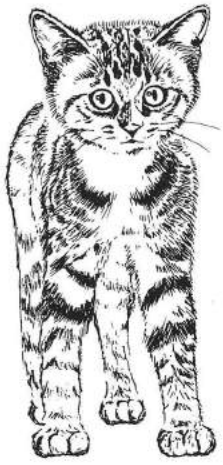
ビーフ味・ササミ・野菜入り
1.3kg／2.8kg

ビタワンミックス

NPF 日本ペットフード
http://www.npf.co.jp/

開業獣医師と共に歩む

Aesop



動物用医薬品の総合商社

イソップ薬品株式会社

〒174-0041 東京都板橋区舟渡2-6-20
電話 東京03(5994)2711番(代) FAX03(5994)2714番
〈フリーダイヤル〉0120-203130番

IAMS COMPANY

犬・猫の栄養学で世界のリーダーを目指すプレミアムペットフード

ユーカヌバ
Eukanuba

ユーカヌバ・ベテリナリーダイエット
Eukanuba
VETERINARY DIETS

IAMS アイムス

毎日の健康管理をサポートするサプリメントです。

病気に負けない体作りや、病中・病後、加齢や疲労による体力低下など、さまざまな時にどうぞ。

ROYAL-POWER

ペットだって疲れてる・・・

30ml×10本

ビタミンC・ビタミンB群・コラーゲン・ローヤルゼリー等を配合した、ペットのための栄養飲料です。ウサギやフェレット・小鳥・ハムスター等にもどうぞ。　ドライフードをふやかす時に使うと嗜好性があがります。

体力回復や栄養補給にそのまま飲むだけでなく、水や食餌に混ぜるなど、毎日あげても安全です。

様々な場面でお使いいただけます。

細胞を構成するアミノ酸が注目されています。天然シルクアミノ酸は、体内への吸収率が95%以上という優れた機能性食品です。

6歳以上の小型犬（5kg以下）に、特にオススメです。

1日1包(体重10kgの場合)を
餌にかけても、
水に溶いても。
元気がでるので、
効果がすぐに分かります。

1g×30包

動物用天然シルクアミノ酸

Ⓜ森久保薬品株式会社

〒243-8531　神奈川県厚木市栄町 1-18-17

TEL　046-222-2333　　FAX　046-222-1266　(営業本部)

三郷：048(948)2112　東京：042(564)2381　埼玉：042(968)0881　ツクバ：0296(43)1661　神奈川：046(221)0620

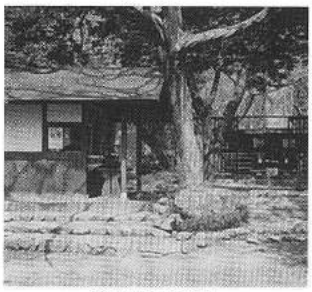
成田：0476(40)5811　茂原：0475(24)1613　群馬：027(230)3322　栃木：028(661)9581　茨城：029(241)3131　山梨：0552(24)5278

彼岸大法要

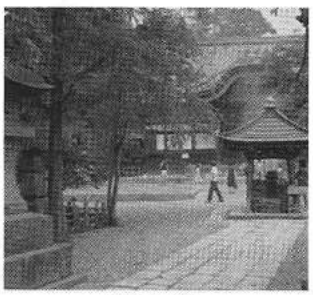
御本尊十二支観音像

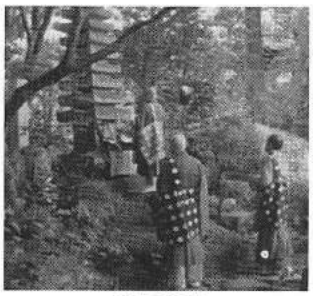
鳥獣観音像

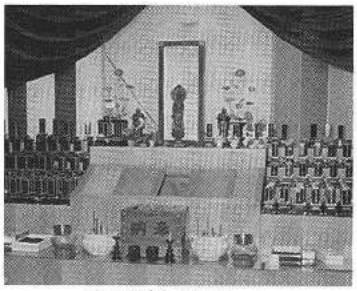
里親さがし

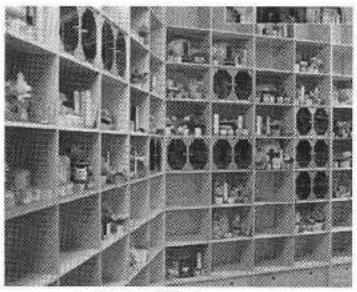

霊園受付

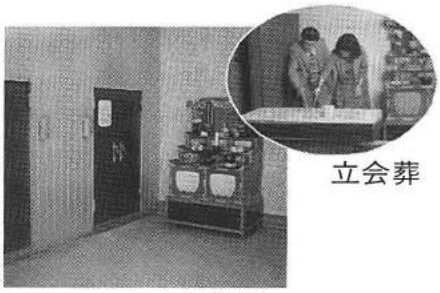
万霊塔納骨堂


深大寺


魚霊祭

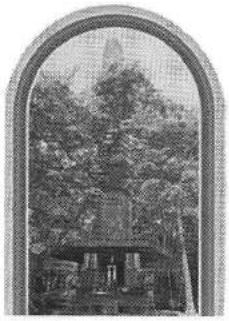

合同納骨所


個別霊座


立会葬

火葬場

43年の歴史と実績　緑に囲まれたペットの霊園


万霊塔

お迎え専用車・火葬場(火葬炉3基)
合同火葬・個別火葬・立合火葬
納骨堂(合同・個別)・(ご返骨も可)
春秋大法要・盂蘭盆会
畜霊大祭　等の年中供養

もしもの時は　まずお電話下さい
《365日無休》
世界動物友の会
深大寺動物霊園

フリーダイヤル **0120-21-5940**（ニャンワン ゴクヨオ）

〒182-0017 東京都調布市深大寺元町5-11-3(深大寺境内)

as animal specialist

アニマルスペシャリストのための
ワークマガジン「月刊　アズ」

現場で役立つ実践的な情報が満載

「飼い主さんのため動物のため、より知識を深めたい」
「一生の仕事として誇りをもって働き続けたい」
「アニマルスペシャリストの横のつながりを広げたい！」
そんな読者の皆さんの要望に「as」がお応えします！

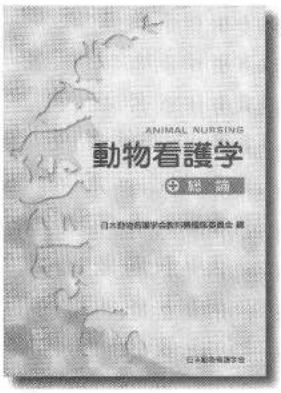
「as」は現役動物看護師の方、動物病院勤務のトリマースタッフ、動物看護師・トリマーを目指して勉強中の学生の方々まで幅広い層に基礎獣医学、動物看護学、関連情報をいちはやくお伝えする国内唯一のアニマルスペシャリスト向け月刊専門誌です。
楽しく学べる雰囲気を大切に、読者の皆さんの声を反映した誌面づくりを行います。

A4判　88頁　毎月10日発行

一冊定価　1,600円
（別途送料¥380かかります）

定期購読（送料サービス）
6カ月（計6冊）　7,000円
★毎号買うより2,600円もおトク！
1年（計12冊）　12,000円
★毎号買うより7,200円もおトク！
2年（計24冊）　22,000円
★毎号買うより16,400円もおトク！

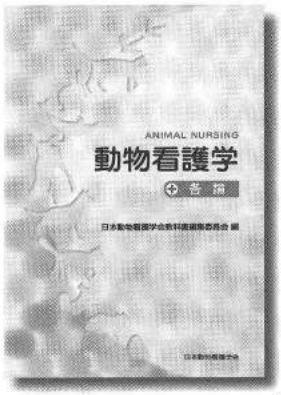
動物看護学【総論・各論】



動物看護学【総論】主要目次

第１章　動物看護概論
第２章　動物看護における業務と技術
カラー写真　看護の対象動物
第３章　看護の対象動物
第４章　動物看護学研究法
第５章　関連法規
資　料

動物看護学【総論】
日本動物看護学会教科書編集委員会 編
B5判並製 326頁　2色刷　定価 **10,290**円



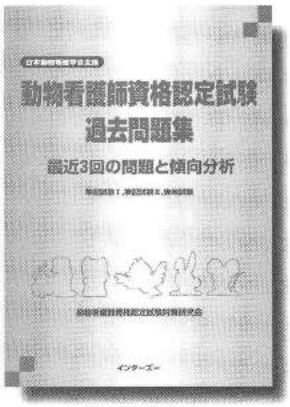
動物看護学【各論】主要目次

第１章 解剖生理学　第２章内科看護学
第３章 外科看護学　第４章薬理学
第５章 感染病学　第６章繁殖と遺伝
第７章 動物心理学・動物行動学
第８章 動物栄養学
第９章 動物看護公衆衛生学
第10章 動物看護士のための輸液
第11章 動物看護士の放射線学

動物看護学【各論】
日本動物看護学会教科書編集委員会 編
B5判並製 318頁 2色刷 定価**10,290**円

発行:日本動物看護学会　　発売:(株)インターズー

動物看護師資格認定試験 過去問題集
最近4回の問題と傾向分析
（筆記試験Ⅰ、筆記試験Ⅱ、実地試験）



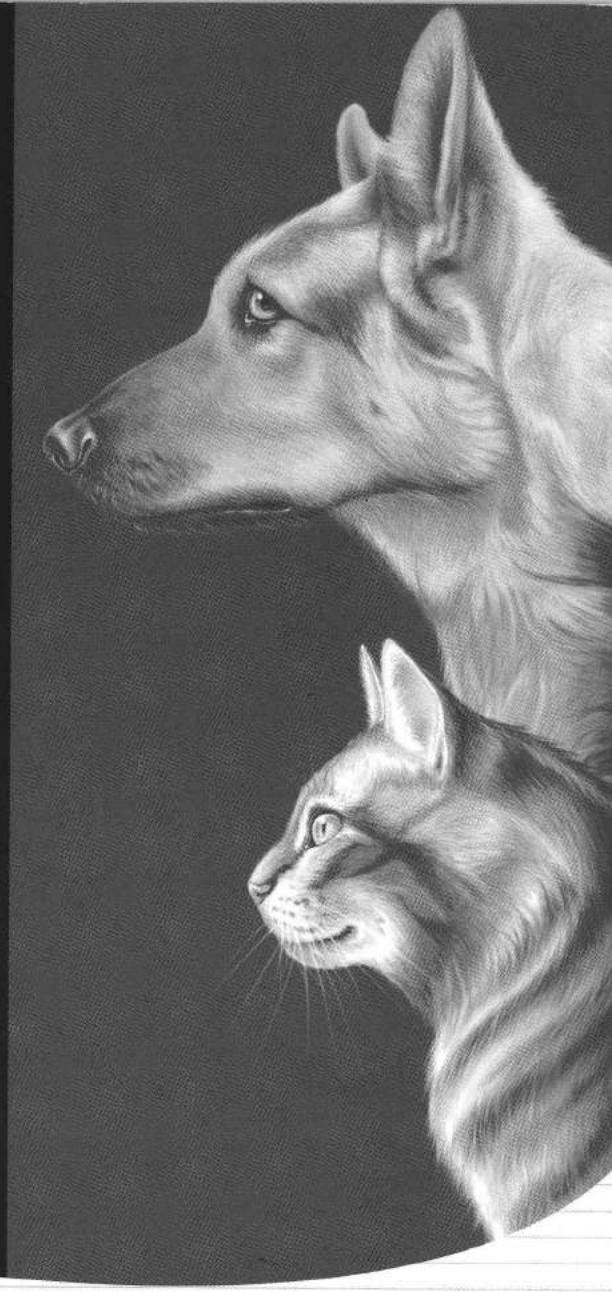
この問題集は日本動物看護学会が主催している動物看護師資格認定試験のあと、受験した人たちからの聞き取り調査をしてまとめたものです。出題傾向は過去4回に出題された問題を分析することで、今後の出題傾向がみえてきます。

編：動物看護師資格認定試験対策研究会
B5判　約180頁　予価 **3,980**円

interzoo
〒107-0061 東京都港区北青山3-5-12 青山クリスタルビル5F
〒530-0004 大阪府大阪市北区堂島浜1-2-6 新ダイビル9F
※発送手数料は一回のご注文につき一律380円いただいております。
受注専用フリーダイヤル TEL 0120-80-1906　FAX 0120-80-1872　ホームページ http://www.interzoo.co.jp/

獣医看護の基礎を学ぶバイブル

小動物 獣医看護学 第3版



■ 動物看護とは何かから、保定、動物に対する基礎的知識（犬、猫はもちろんエキゾチックアニマルなど）、獣医看護師が仕事をおこなうえで必要とする知識を習得できるように構成されています。

■ 本書は学校における獣医看護教育のために必要な基礎的事項が網羅されています。
また、診療現場において獣医看護師のレベルアップのために必要な内容もとりあげられています。

■ 本書で獣医看護の理念を理解して、獣医医療の基礎をしっかり学んでおくことが、拡大と変化の速い獣医医療の進歩に対応できます。
さらに獣医看護師の職域の確立のために重要な位置づけになるテキストとして使えます。

各巻定価 7,350円

D.R.Lane , B.Cooper 著・編　西田 利穂 監

新刊特価
各巻 **6,600**円（税込）
上下巻特別セット価格
13,200円（税込）
※2005年12月末まで

上巻　A4判　並製本　432頁

第 1 章　動物のハンドリングと保定
第 2 章　解剖学と生理学
第 3 章　観察と処置
第 4 章　救急処置
第 5 章　職業上の危険
第 6 章　基礎的な動物管理
第 7 章　経営の計画と管理の基礎
第 8 章　動物看護の法的および倫理的側面
第 9 章　栄養
第 10 章　遺伝と動物育種
第 11 章　エキゾチックのペットたちと野生生物
第 12 章　薬物：薬理と治療、投薬
第 13 章　診断検査機器
第 14 章　微生物と免疫学の基礎
第 15 章　基礎的な真菌学および寄生虫学

下巻　A4判　並製本　368頁

第 16 章　一般看護
第 17 章　疾病と看護
第 18 章　犬および猫の産科と幼獣科における看護
第 19 章　外科看護
第 20 章　集中的な看護
第 21 章　手術室の業務
第 22 章　輸液療法とショック
第 23 章　麻酔と鎮痛
第 24 章　画像診断
第 25 章　問題行動とその管理
第 26 章　動物死の取り扱いについて：ペットロスを通じての動物依頼主への手助け

interzoo
〒107-0061 東京都港区北青山3-5-12 青山クリスタルビル5F
〒530-0004 大阪府大阪市北区堂島浜1-2-6 新ダイビル9F
受注専用フリーダイヤル TEL 0120-80-1906 FAX 0120-80-1872 ホームページ http://www.interzoo.co.jp/

※発送手数料は一回のご注文につき一律380円いただいております。

Hill's PRESCRIPTION DIET®

おいしく食べた、という事実。

80%
犬用 c/d
(n=181)

67%
猫用 c/d
(n=173)

ヒルズのプリスクリプション・ダイエット

犬用では80%、猫用では67%のオーナーの方々が、ふだんのペットフードと「同じくらい」か「それ以上」食べたと答えています。*

療法食は、まず犬や猫が食べてくれることが、栄養管理の第一歩です。ヒルズのプリスクリプション・ダイエットは、信頼性の高いエビデンスに裏付けられた、優れた栄養学的効果に加え、嗜好性でも高い評価を獲得。さらにヒルズは、積極的な研究・改良を続けています。

*(ヒルズ調べ) ヒルズのプリスクリプション・ダイエット c/d と、ふだん与えているペットフードの比較検討試験 [手法:ブラインドラベル・モナディック(単一評価)製品テスト]

サンプルをご希望の際は、担当までお申しつけください。

ヒルズのプリスクリプション・ダイエットは、栄養学的効果の高い第一選択の療法食として安心してお薦めいただけます。

Hill's®

輸入元:
日本ヒルズ・コルゲート株式会社
〒135-0016 東京都江東区東陽3-7-13

販売元:
大日本住友製薬株式会社 アニマルサイエンス部
〒553-0001 大阪市福島区海老江1-5-51

獣医師専用の食事療法情報テレホン
0120-211-317
http://www.hills.co.jp